

齋藤紀一君

衆議院議員 青山腦病院長 ドクトルメチチネ



君は山形縣南村山郡金瓶村の出身にして今や東京青山腦病院長として政友會所屬代議士として刀圭界と政治界とを闊歩しつゝあり、蓋異彩ある人物と謂ふべし文久三年八月一日を

以て羽前國南村山郡金瓶村に生れ、夙に都門に出て成立學舎に英學を修め壬申義塾に獨逸學を鑽き更に去て郷里の山形縣立醫學校に學び、十九年を以て同校を卒業し廿一年を以て醫術開業試験に登第せり、是より君は其志を大にし淺草區三筋町に開業し尋て神田和泉町に東都病院を設け、腦神經及び精神病を専門として名を博し、恁て三十二年其蘊奥を極めんとして獨逸大學に入り、研究四年にして卒業しドクトル、メチチネの學位を得たり、歸朝するや地を現住所なる青山に相して腦病院を創設し、之が院長として獨得の手術を試み名聲益々揚れり、四十一年再び渡歐して足跡全歐に及び各國の病院を歴訪して得る所あり、四十三年歸朝して其規模を擴張し以て層樓傑閣堂々たる大病院と成し、遂に斯界に雄視するに至れり、大正六年四月衆議院議員の總選舉あるや推されて

政友會公認候補者として爲り難なく當選して今や新進代議士として尊敬せられつゝあり、人として爲り精悍にして膽氣あり、是を以て政界に於ける君の活躍は必らずや刮目して觀るべきものあらむ。

石井清八君

土木建築請負業

△出生地 東京府
△現住所 東京北豊島、尾久、一三八〇
△生年月 安政四年十一月

確實なる土木建築請負業者として才智手腕と徳望とを兼備し信用最も高き者を石井清八君とす、安政四年十一月北豊島郡尾久村に生る、幼より俊敏なり、其家郷閭の富豪にして代々農業を營み、薪炭、木材、石材等の商業を兼ね君の代に至つて土木建築請負業を創始す、其事に當るや忠實を旨として材料を精選し、期日を嚴守し工事亦巧妙堅牢にして社會の信用日に厚く業務益々盛大を極め、越後鐵道の一部工事、本所北十間川開鑿工事、王子電氣工事、京濱電氣工事、新吉原建築工事、雉子橋架換工事、猪苗代水力電氣工事、本所區法恩寺橋架換工事、横濱水道工事等の大小工事を竣成して好成績を顯はし、特に王子電氣鐵道會社より賞狀、本所區議員有志より感状を受け、其他吳服橋改築工事等君の手に依りて成れる者擧げて數ふべからず、資性仁俠、志を公益に注ぎ徳望甚だ高く、屢々村會議員、郡會議員に推され又村長として地方自治に貢献する所多大也、實に君の如きは斯業界に於ける鷄群の一鶴なりと謂つべし、東京市本郷區湯島天神町三ノ一及び同日本橋區城邊河岸五ノ六に各出張所を有す。

田中守平君

太靈道主元



△出生地 岐阜縣、一番四二
△現住所 東京、三〇四八
△生年月 明治十七年九月八日

今や地上の人類は其生存の意義を没却し、生命の價値を認識せず、遑々として生活の爲めにのみ奔勞し、遂に將に人生の歸趨を恣らんとす、洵に現代には思想の中心なく、人生に就ての理解なく、絶對に對しての尊信なく、總て依據を失ひて唯だ徒らに昏迷の中に生を營み彷徨極りなく、人々は悉く本能の慾を遂げんことに急に於て、また自ら内に省みて靈威を覺知するものあらず、斯くして人類は其内觀に於て恰も壊滅に向つて進まんとしてあり、此時に方り人類を其前途に横る暗黒裡より救拯して光明界に導かんが爲め、靈命を奉じて現世に生れ普く世界の萬衆に向つて此天寶の靈音を傳へんことを公宣し、敢然として帝都に大獅子吼を發せるを太靈道主元田中守平君とす、君が一度び新思想太靈道の公宣を發するや、靈光を仰ぎ靈澤に浴せんを欲して其門に入り來る者踵を接して滔々宛ら潮の決せるが如く、地域に於て全世界に亘り、階級に於て上下に迫る、蓋し是れ太靈道の主張が現代人、心核の琴線に觸れて昏迷暗黒より離脱せしめ其内觀に

光明を點するの靈威あるに因らずんばならず、宗教の權威地を掃ひ、哲學、道徳、科學も亦た人心を啓導するの内容を具せず、世を擧げて暗黒裡に投入せんとする現代に於て、君の如き救世の靈人の出現を見たるは正に是れ時代の要求の然らしむる所と云はざる可からず、宜なる哉、足一度び太靈道の門に入りて君の溫容靈姿に接せる者、孰れも眞に釋尊、孔子、基督を超越せる偉大性に感動せざるはあらず、況んや其新思想を聴き新學理を討ねたる者に至りては實に驚嘆駭魄せざる莫し、君は明治十七年九月八日岐阜縣惠那郡武並村に生る、世々豪族として近郷を領し其祖先田中兵馬は後醍醐帝建武中興の際忠勤を拔んで多治見國長と共に王業に竭し、遂に京都木屋町に陣歿す、徳川時代に至りて中祖田中與市あり、時の藩公岩村城主丹羽式部少輔誅求甚だしく、百姓の困憊疲弊其極に達し、俄乎途に横はるの慘憺たる光景を現はすに至りしかば、與市即ち領内百八十餘箇村の庄屋を代表して單身江戸に出で將軍に籠訴したり、時に元祿十四年十月なりき、與市は遂に岩村城下に於て斬首の刑に處せらる、而して式部少輔は奥州棚倉に遷され、信州小諸の城主松平能登守之に代り領民漸く塗炭の苦を道れたり、是れ實に田中與市が義死の實にして、後年領民其徳を慕ひ一字を建立して田中大明神として奉祠し、今に至るも年々其祭を廢せず。

義民與市より八代目に與八あり、碩儒の名近郷に高く、尊王之志厚く幕吏の忌憚する處となりき、其子虎之助亦た奇骨を以て人に知らる、虎之助の三男に守平君生る、曾て義民與市の豫言して曰く吾より十代にして天童生るべしと、君の生るゝや觀相家は此子偉相あり、必ず天下の大亂を平げ民を濟

ふべしと、即ち守平の名は平和を守るの意義に出づ、此子正に與市が豫言に違ふて出現せる天童にして三歳書を好くし、五歳詩文を綴り、六七歳にして遠方の事物を透察して百發百中誤つことなし、彼の濃尾大地震に先だつ四五月之を豫言せしは九歳の此靈性兒なりき、由來君が郷國岐阜縣東濃の地は山紫水明、日本アルプスの連山惠那岳は海拔七千二百尺翠冠拭ふが如く、木曾の神流は蜿々長蛇の大地を走るにも似たり山高くして巨獸生れ水深くして大魚住む、守平君が山水秀靈周圍の偉大なる風物に感化せられたるや蓋し尠少にあらざるべし。

案するに田中家は神代天指日命より直系百二十餘代連綿たる名家なりき、然るに與市に至り彼が義舉は一家に累する事甚だしく、家運之より傾き明治初年に至りては幸ふじて家名を維持するに過ぎざりき、されば君が小學時代は赤貧洗ふが如くにして米鹽の資を缺くこと屢々なりしが、斯る貧窶の間に人となりたる君は、胸中燃ゆるが如き奮發心に眼前の苦艱を忘れて學業に熱中し、十六歳の秋東都に出て、獨立獨歩、辛酸骨に徹し髓を嘗むるの苦學を積り、明治三十六年の秋に至りて君の一身上に變動を生ずべき事件起れり、即ち露國が極東に指を染めて著々侵略主義を實現せんとするや、アレキセーフに最高權を與へて滿洲に跳梁せしめ、明に我帝國に對して挑戰的態度に出で、在野の政客舉りて主戰論を主張し遂に七博士の建議となる等國論沸騰其極に達したるも、廟議容易に決せず、時恰も日本大學在學中なりし君は憂國の至誠禁じ難く熱血を罩めて明治大帝に開戦を主張したる上奏文を捧呈したり、時に年十有九歳、日露戰史には國論沸騰の章に

於て「其上奏文の文字何等の割切や、是れ國民の聲を代表せるものといふも不可なき也、一青年の身を以て孤憤措く能はず、進んで當死の大罪を冒す、其心事は世人の皆諒とする所なりき」と、之に依りて爾來君は當局官憲の壓迫干渉を受けること甚しく、遂に故郷に復歸し方一間に過ぎざる草庵を山中に結びて讀書冥想に耽り森林修養を積り、當時亞細亞の啓發の急務なるを先見し、東亞合邦論を草して雜誌「日本人」に載せたるに、益々官憲の壓迫甚しきを加へぬ、然れ共凡俗に超越したる君は區々たる壓迫に苦しむものにあらず、惠那山中に籠居して只管修養を積り、此森林修養時代に於て其少年時既に萌芽を見たる靈能の發達は極めて著しく遂に絶食修行を試みて茲に眞の靈能を發揮するに至れり、而して唯だ單に靈的能力の發現のみならず、具さに人生の眞義を徹觀して宗教、道德、哲學、科學を超越したる新思想太靈道を創發す、君の森林修養は實に前後七年の長きに亘り、明治四十三年九月始めて太靈道眞典成る、其教憲に曰く
太靈を信じ靈勅を奉じ皇上を尊み國家を重んじ親祖を敬ひ一家を理し、衆を愛し分を明にし生類を慈み萬物を育し絶對に座して差別を照觀し、妄りに信せず濫りに疑はず、至公至正常に眞極を體得し總てを超越し大度能く已を持し、言説を慎み作法に関ひ禮を厚くし儀を整へ温情以て人に接し寛大以て他を遇し節序を守り時間を貴み、儉に居り業を勵み一事一物苟もせず、克く致へ克く斷じ心を養ひ身を修め精を蓄へ氣を磨き靈性を顯輝し靈能を啓發し、不撓不屈自強自尊七妄を去り三慾を滅し、全我に歸入して神格を體現し機を察し變に處し進止法に適ひ行動則に違はず、一旦

事に臨みては毀譽を顧みず、身を惜まず進退以て至眞を樹て至全を成するを念とすべし。

明治四十四年秋朝鮮、滿洲、支那を歴遊し蒙古に入るに及んで達爾罕王は禮を厚くし辭を卑くして君を迎へ、神人と尊稱し彼地王侯喇嘛等の間に甚大の勢力を有するに至れり、大正二策せ年歸朝して亞細亞經綸の急務なるを感じ、臺閣に獻し事頗る多し、君未だ年齒壯、其抱負や絶大其能力や絶倫其人格や高邁其識見や卓越、眞に近代的の偉人と稱すべし、嚴父虎之助氏實母よし子令兄倉次郎氏共に郷里に在り、君の令聞澄子は曾我十郎の血統に出で、其間に一子午門君あり、一家和氣藹然たり。

坂内 虎次君

人吉水力電氣株式會社社長

△出生地 新潟縣
△現住所 熊本、飽託、本山村
△生年月 萬延元年六月六日

君は新潟縣士族坂内小藤次氏の長男にして萬延元年六月六日を以て生れ後家督を相續す、明治廿一年東大工科大學電工科を卒業し、直に東京電燈株式會社に入り同年末神戸電燈株式會社技師長に轉じ、明治二十四年九月再度東電技師となり三十二年二月迄在任し、此間福島、青森等の電燈會社の設計監督に當り、東電辭任後田中商店に關係し電氣機械輸入販賣を試み、三十三年十一月電氣事業視察の爲め歐米に航し、歸朝後三十五年九月熊本電燈會社の整理に招聘せられ、幾多の改革新計畫を斷行し、又同縣黒川水電の計畫に全力を傾注し良好なる成果を得、以て今日に於ける盛況の基を開き傍ら

秋山 清君

南滿洲鐵道株式會社經理部用度課長 大連汽船株式會社取締役 正五位 勳五等

△出生地 新潟縣
△現住所 新潟縣、大連、乃木、八
△生年月 明治三年三月九日

熊本高等工業學校の講師として熱心後進を誘掖し、大正元年熊本電燈及高工を辭し、同縣人吉水力電氣株式會社の創設に全力を注ぎ、現今其社長として經營發展に努力し、更に和歌山縣西牟婁郡田邊電燈株式會社の整理を囑託せられ、忽ち頹瀾を既倒に廻らし以て今日の盛運を呈せしめたり、斯くの如く君は技術家に經營家を兼ね、多年電工界に活躍し至る所縦横の快腕を振ひつゝあり。

秋山清君は新潟縣高田市の人明治三年三月九日を以て生る同二十五年東京法學院を卒業し、三十年十一月文官高等試験に合格し三十一年十一月判檢事登用試験に合格す、其傑出せる俊才たるや知るべきなり、三十二年司法官試験となり會計檢査官補に轉じ、三十五年九月衆議院書記官を兼務す、三十八年五月特許局事務官に、同年十二月臺灣總督府鐵道事務官兼參事官に四十一年十二月鐵道院參事に任ぜられ、四十四年二月高等官三等に叙す、同年三月初總督府鐵道局參事より四十五年四月鐵道院參事に轉じ、大正三年二月願に依り本官を辭し滿鐵に入り現職にあり、其人頭腦緻密、有爲の才たるは勿論なり、又大連汽船會社の取締役として重きをなす。母堂すみ子、夫人なを子、長女みさを子、三女勝野子、次男東歸夫氏、三男龍男氏あり、家庭圓滿なり。

大正人名辭典 (今井五介) (岡本芳次郎)

九四八

今井五介君

△出生地 長野縣
△現住所 長野、松本、清水
△生年月 安政六年十一月十五日

君は信州諏訪の産にして南信に於ける一偉物なり、安政六年十一月十五日を以て郷里に生れ、夙に實兄故兼太郎氏を佐けて製絲業を開始し、片倉組を起して今日の隆盛に到らしめたる成功家なり、蓋し片倉組は今を距る四十餘年前は僅々二十二人取りの一製絲家に過ぎざりしが、長兄兼太郎氏の温良恭謙なるに配するに君及び末弟佐一氏を以てし、爾來戮力同心、百難を排し千艱を闘つて直前邁往以て今日の發展を告げ全國製絲界に覇を稱するに至れり、豈驚嘆すべきにあらざるや、君人と爲り卓落個儘にして而も用意周到、就中人物の短長を測りて適材を適所に擧用して曾て疑ふことなし、度量寛裕にして清濁併呑の氣宇なくんば未だ以て斯の如くなるを得んや、是を以て今や片倉組の製絲事業は發祥地たる諏訪湖畔の岡谷驛に限らず、全國十八個所に亘り一萬有餘の釜数を計上するに至りたるのみならず、歳月を逐ふに従て益々無限の發展を見る所以のものに其資本の豊富なるに由るのみに非ずして、即ち之が事業の監督者たり經營者たる最高幹部に於て、今井君其人あるが爲めならずや、世間は君を目して南信の一偉物を以て敬重するもの洵に偶然ならんや。
且夫れ君は片倉組の最高幹部なるのみならず、夙に商業會議所の必要を深志城頭に提唱して之が輿論を作興し、之が認可を見るに同時に推されて會頭と爲り、爾來地方の商工業に

貢献するもの多大なるは何人も知る所なり、尋で先年來信濃鐵道の敷設を企畫し以て之を竣成せしめたる如き、如何に地方發展に腐志傾倒しつゝあるや知るべき也、君己を奉ずるに儉素にして他を待つや寛厚にして又甚だ信誼あり、而も之が爲め未だ曾て厘毛も世間に街ふことなきが如きは、實に人格の高きを見るべからざるや、而も片倉組の松本市に及ぼす勢力の偉大なること幾んど松本の片倉に非ずして即ち片倉の松本市たる實觀あり、豈亦驚くに堪わたるものならずや、君同郡の今井氏に養子と爲り男真平及び二人の愛嬢あり、真平氏亦敏才にして手腕あり、能く嚴父の意を體して事業の經營に銳意努力しつゝあるは、君の爲め將た片倉組の爲に慶ぶべし

岡本芳次郎君

△出生地 岡山縣
△現住所 滿洲、大連、乃木、三
△生年月 明治元年六月四日

南滿洲鐵道株式會社調査課職員 大連市會議員
正五位 勳六等
學問智識群を抜き其事務に當るや最も周密を主とし、判斷明確、以て今日の要地に在る者を岡本芳次郎君とす、君は明治元年六月四日を以て岡山縣に生る、同二十二年獨逸協會學校卒業後獨逸に留學し、學問の蘊奥を極めドクトルユーリスの學位を受け、同二十六年歸朝、同二十九年第一高等學校教授を拜命す、滿鐵會社創立と同時に聘せられて在官の儘同社に入り現在に及び、又大連市會議員として盡くす所多大、信望最も厚し。
夫人よふ子、長男保明氏、二男猛氏、三男祐一氏、四男堪一氏あり、家庭圓滿なり。

下羽寅吉君

△出生地 千葉縣、新堀、一
△現住所 東京、芝、新堀、一
△生年月 明治廿三年九月五日



君は我國電氣工業界に於て眞に驚嘆長敬すべき新人物なり、年未だ有室に到らずして蚤く既に電機工業に關する各種の機械を發明し以て偉大なる成功を告げつゝあるのみならず、

曾て其發明に甘んぜずして層一層、倍一倍、之が研究の歩を進めて奮闘踴躍するを見聞して誰乎其熱心と努力とに感ぜざらむや、君は千葉縣安房郡磯町宇平立の出身にして明治二十三年九月五日を以て生る、幼にして靈才秀敏、齡甫めて十四歳上京して、電氣科を東京府立工藝學校に學び、四十三年を以て卒業するや、直ちに芝區濱松町に工場を設け以て苦心發明して特許を得たる改良ソケット、スウキツチ、挿込ソケット、クウラター其他十三種の細部電氣器具の製作を爲し爾來工運荐りに發展し、下羽電機商會の名は斯界に馳騁するに至れり、尋て大正四年四月深く期する所ありて單身露國に遠征を試み事業の視察調査を爲し、歸朝するや乃ち輸出向製品に對し全力を傾倒し、其結果として大正五年度の如きは露國輸

大正人名辭典 (下羽寅吉)

九四九

出に對し製品の五割を計上するに至れり、同時に商會の製品は益々名聲を博して露國は勿論、支那方面より更に進むで英國等より注文を受けるに至れり、是に至りて大正六年四月二十五日君は從來個人經營の全部を擧げて東京電氣器具製造株式會社に移し以て自から之が技師長と爲り且取締役に兼任するに至れり、是れより先き大正四年十月「第二回國產獎勵會」の東臺山下に開設せらるゝや、辱くも總裁伏見宮殿下には親しく君の陳列場に臨ませられたるより、謹で自家發明の下羽式「ソケット」の説明を申上しに、殿下には殊の外御感に入らせられ御嘉賞の御詞を賜はりたるは、君として豈光榮の大なるものにあらずや。

顧ふに外國より我國の受ける電氣器具の注文に對し從來は其規模微小にして到底一手に引受け、而して一手に製作すること不可能なるより已むなく諸所の工場に分割製造せしめたるより、隨て製品に不揃を來し顧客を満足せしめざりしより君茲に憂慮する所ありて資本一百萬圓の大會社を計畫し、遂に之が成立を見るに至れり、且君は將來に於ける支那の電氣工業に視る所ありて臺灣隨一の富豪にして南方支那に大勢力を有する林本源家の援助を約すると同時に、一族林榮仁氏は厦門方面に於て經營する二三電氣會社に向て同社製品を供給する事とし、其他臺灣の電氣事業に資する所あるべきを聲明して、同島の金満家を會社の株主と爲し尋で臺北に同社の出張所を置き分工場を設けて、今や大に電氣觀念を興へつゝある如きは亦以て君の抱負の大なるを察知すべきにあらずや。
夫人ミツ子との間に長男政博子を擧げ鐘愛至らざるなく、且家庭の圓滿なるは君の成功と相俟て雙美の稱あり。

伊東二郎丸君

△出生地 東京府
△現住所 東京、芝、四二
△生年月 明治十六年八月廿九日

伊東家の遠祖は大織冠藤原鎌足公なり、公の子孫は更に名門名族の祖と爲り、全國に瀟々し繁榮しつゝあるは、敢て叙説の要なかるべきも、祖先是島津家の重臣として代々厚遇せられたるは史實に炳らか也、降りて故從二位勳一等子爵伊東祐磨氏に至り、令弟故元帥伯爵伊東祐孝氏と共に王事に勤め偉績を擧げたるのみならず、故伯爵の如きは日清戦役の際に赫々の武功を樹てたるは何人も知る所なり、斯の如き武將を叔父とし尙斯の如き功臣を嚴父とせる君は、明治十六年八月二十九日の誕生にして夙に才名を以て現はれ、活潑聰明を以て知らる、三十九年二月嚴君の薨去に依り家督を相続して襲爵を仰付られ從五位に叙せられ今從四位を拜す、學習院を卒業するや直ちに東京帝國大學法科大學に入り、葦雪多年、四十二年卒業して始めて活社會の人と爲れり、秀才に兼ねるに學術の富麗を以てす、但世故を閱すること饒からざるを以て履歴として未だ多くを語るもの無しと雖も、前記二會社の取締役として實業に携りつゝあるは、抑も君が現代に活躍する出發點たらずんばあらず、春秋甚だ旺んにして年齒尙に壯なり是を以て君の將來に對し刮目すべき者、豈只同族のみならずんや。

牧山耕藏君

△出生地 長崎縣
△現住所 朝鮮京城、大平通二
△生年月 明治十五年一月廿日

牢固たる反對黨の地盤を粉塵して最大多數の得票を逐鹿場に占有し、歎然月桂冠を戴き爾來新進政治家として當面に雄飛しつゝある牧山耕藏君は、明治十五年一月二十日を以て壹岐國に生る、家は代々平戸藩士にして嚴父を牧山猪七氏と言ひ君は其末男なり、稟性穎悟俊賢、夙に郷黨に學んで東上するや、早稻田大學に於て政治經濟を専攻し、螢火雪光、優良の學績を以て同大學を卒業したるは明治三十九年の交なりき於是乎犬養木堂氏の推挽する所と爲りて、當時統監府の機關新聞「京城日報」創刊に參劃し、爾來筆研に經營に滿腔の熱心を以て之に膺り、居ること四年同社をして其基礎を鞏固ならしむるや、辭して獨力日本電報通信を京城に於て創刊し、半島の統治に貢獻する所あり、後朝鮮公論社を起して之が社長と爲り倍々盡瘁して聲名大に揚る、愆て大正二年に至り京城居留民團議員に擧げられ、尋で大正四年を以て京城學校組合會議員に公選せられたり。

是れより先き君半島の鑛業に考察する所あり、自から八道を跋渉して之が探檢に従事し、竟に忠清南道青陽郡赤谷面に於て「タングステン」礦を發見し(青陽鑛山)又全羅北道長水郡溪内面に於て「モリブテン」輝水鉛鑛を發見せり(長水鑛山)是より君兩鑛山の鑛主となりて之が探掘に従事せるに、兩鑛山とも果して優良の鑛物にして、今や東洋有數の鑛山として世間に歡迎せらるゝに至れり、蓋しタングステン及びモリブテ

出身にして才媛なり、又令姉初子は櫻孝太郎氏に、同美代子は古谷久綱氏に、妹千代子は子爵川上素一氏に、同末子は笹尾源之助氏に嫁し、各々賢淑の名あり。

夏秋龜一君

△出生地 佐賀縣
△現住所 滿洲哈爾濱新市街
△生年月 明治七年一月十一日

運送及日露貿易業 日滿商會主 北滿製粉株式會社取締役 株式會社松花銀行監査役 哈爾濱居留民會副會長

哈爾濱新市街の日滿商會は夏秋龜一君の個人經營に屬する商會なりと雖も、日露貿易界に於ける特殊の地位を有し名聲藉甚たるものあり、夏秋君は佐賀の人明治七年一月十一日の生誕にして幼にして個體大志あり、癡戲衆童を壓する者あり長じて東京に來り明治三十二年東京帝國大學政治科を出で、直に支那各地を歴遊し更に米國に到る、翌年露國に渡航して遂に獨力を以て生糸貿易及日露貿易に従事す、君の大鵬の志を藏するや、彈丸黒子の國に在りて區々たる利得を争ふに耐へず、常に海外に在りて國力の發展に全力を傾倒し、三十九年歸朝せるの外殆ど日本に歸れることなし、四十二年哈爾濱に移り現に日滿商會を經營しつゝあり、曩に君は重望を負ふて哈爾濱居留民會副會長に擧げられたり、而して餘業北滿製粉株式會社の取締役、松花銀行の監査役たり。

夫人を律子といふ、明治十一年の出生にして賢貞の譽高く内助の功頗る多く、君をして後顧の憂なからしむ、君の出で、縦横の才腕を發揮し得るもの故ありといふべし。

の兩鑛は、軍機製作上缺くべからざる貴重鑛物にして、而も世間に稀少なるを以て、君の此鑛山を發見したるは、單り君の慶福のみにあらず、洵に邦家の社幸と謂ふべし、羽翼既に成り身邊頗る順なるものあり、而して君亦小成に甘んずるの常麟にあらず、是に於て乎大正六年四月の總選舉あるや郷黨より推されて政友會の公認候補者と爲り、以て逐鹿場頭に躍出し難なく反對黨を蹂躙して代議士と爲れり、豈亦快ならずや、君が政治的公生涯は蓋し是より大に刮目すべきものあるや必然たり、況や君が朝鮮八道の事情に精通して、更に滿蒙の真相に詳曉するをや君たる者幸に國家の爲め自重する所あるべし。

齋藤茂一郎君

△出生地 茨城縣
△現住所 滿洲大連、數嶺、四九
△生年月 明治十五年二月十日

夫人を伊佐子と言ふ、今や長男圭秀、二男弘及び長女朝子次女京子等の愛子を擧ぐ、又君の長兄牧山熊次郎氏は工學士にして新高製糖株式會社の常務取締役にして、次兄牧山清砂氏は法學士として帝國製糖會社の専務取締役たり、兄弟駢び立て方面に令名を揚ぐ、牧山一門の榮亦誰乎羨望せざらんや

南昌洋行大連支店主任

君は茨城の人、明治十五年二月十日の生誕にして、夙に學に志し、芝三田慶應義塾に學び、俊秀の評高く、學窓を出で、諸種の事業に従事せしが、大正元年八月に至り、南昌洋行大連支店主任に拔擢せられ、大連に渡航し以て現今に及ぶ、同支店が今日の隆盛に達せるは、君の努力に負う處多し。

大正人名辭典 (内山彌左衛門) (矢部又吉)

内山 彌左衛門君

△出生地 東京府
△現住所 東京、赤坂、田七ノ三
△生年月 明治三十四年三月十五日

君は東京の人内山徳三郎氏の四男にして、明治十三年三月十五日を以て本郷區元町二丁目四十一番地に生る、幼にして穎悟明敏俊秀の譽高く、明治三十一年東京府立第一中學校を卒業するや、同年第一高等學校に入り愈々研磨研究を積み、三十四年成績優等を以て同校を卒り、東京帝國大學工科大学に進み、應用化學科を専攻し三十七年卒業して工學士の稱號を受けたり、三十八年に至り日韓瓦斯株式會社に聘せられて技師長となり、蘊蓄を傾倒して敏腕を實地に活用せり、四十二年名古屋瓦斯株式會社技師長に轉任し、愈々手腕の圓熟なるを示して名聲噴然たるものあり、然るに君の志も獨立獨行に存し、長く他人の隨使に甘んずるものにあらず、遂に大正元年を以て獨立して瓦斯會社の設計及び顧問等に應じつ、あり、大正五年巴組工業所々長野澤一郎氏と協同研究の結果米糠より糠油抽出機を發見工夫して專賣特許を得たるが、斯術を廣く世に行ひて以て國富の増進に資する所あらんと欲し化學精油株式會社に讓渡して自ら顧問となりて技術方面を擔任し、以て同社の發展を企圖しつ、あり、而して傍ら日本化學染料株式會社取締役として盡瘁する所あり、瓦斯に關する事務は肩書地に於て一般の依頼に應じつ、ありといふ。
夫人を乙女子といふ。賢徳に富み、三男一女を擧げ、家庭圓滿和氣洋々たり。

九五二

矢部 又吉君

△出生地 神奈川縣
△現住所 東京、豊多摩、千駄ヶ谷
△生年月 明治二十年二月八日

最新の學理と精緻の技工とを以て建築土木電氣工業界に新畫面を開拓しつ、ある者を矢部又吉君となす、君は相州伊豆藩士矢部國太郎氏の長男にして、明治二十年を以て横濱市に生る、始め立教中學及び工藝學校卒業の後、妻木工學博士に就き實地薫陶を受け、三十九年獨逸に航行し皇室建築顧問官ゼーリング氏及びベル氏に就きて建築設計の秘奥を學び、歸朝の途次英、佛、伊、希其他各國を巡視し、四十四年十二月歸朝す、歸來嚴君の業を繼ぎ、東京、大阪、横濱等に事務所を設け、建築土木電氣工業等設計の業に従ひ、新智識と妙手腕を傾倒して嶄然斯界に頭角を現はし、兼ねて販賣部を設け、建築諸材料及電氣諸機械の直輸入及び製造販賣業を營み傍ら株式會社東京電球製作所の監査役たり、君の家は舊家を以て鳴る、天正の頃攝津守源忠信伊豆國松崎町に來りて此に居る、是れ君の祖なり、延暦年間其裔政清初めて造船業を開く、累代其業を繼ぎ君の先代國太郎氏に至りて建築業を創じむ、即ち君の技工は累代の相傳なるが上、之に加ふるに研磨を以てしたり、其非凡なるや偶然にあらず、君業餘音樂、茶道、宗教等の研究に力む、自ら曰く建築の技は性格を表す、宜しく崇高優美の品性を作らざるべからずと、其の志の在る所知るべきなり、眉目清秀、春秋に富む、前途の大成期待すべきなり、母堂は喜代子、令閨富見子と云ふ。

金田 傳兵衛君

貸地業

△出生地 東京府
△現住所 東京、神田、松枝、六
△生年月 嘉永五年二月廿五日



金田傳兵衛君は資産今や一百餘萬圓の巨鎰に達して神田區屈指の金傑なり、否正に東都に於ける富豪の一人者として聲望隆々たる紳士なり、嘉永五年二月廿五日を以て現住所に生る

幼名を芳太郎と言ふ天資活潑俊俏、然れども毫も輕浮ならず即ち先代傳兵衛氏の長男にして其家督を相續したるは、明治十四年にして同時に今の名に改む、家は舊より資産家なり、而して君の相續して家業を經營するに及びて、其富益々増殖して聲望亦年と共に旺んなり、明治二十五年區會議員選舉の事あるや推されて候補と爲り、而して最多の得票の下に當選せり、是れ君が公人として社會に活動せる出發點なりき、次で議長に擧げられ區政に執掌して令名を博し、後市會議員に擧られたり、蓋君端嚴にして其事に當るや公明正大、半點の陰翳なし、是を以て君の提案と意見とは毎に區民の悦ぶ所となりて衆望の歸する處、遂に神田教育會副會頭、神田學務委員、神田區所得稅調查委員及東京市養育院常設委員等の公職を帯び多大の貢獻を爲したるは區市民の齊しく觀る所なり。

大正人名辭典 (金田傳兵衛) (貝瀨謹吾)

又日清戰役當時の如きは實に神田區會議長として軍國の爲めに斡旋盡瘁するもの頗ぶる多し、時に區民は君を推して區民四萬五千餘人の代表者と爲し以て畏くも天機を藝南の大本營に奉伺せしめたるは、君として絶代の光榮なるのみならず又洵に一門一族の名譽と謂つべし、又近く大正三年五月に至り區内小學校兒童の特別教育補助の目的を以て金一萬圓を寄附せる如きは、公共を重んじ奉公の忠忱を満ふるにあらずんば、豈此美舉に出づるを得んや、況や君此一美舉に限らず、貸貸せる家族の冠婚葬祭等に對しては常に同情同慶を以て之が費與を怠らざるをや、是豈克く積むで而して克く散するを識る富紳にあらずや、君又趣味を歌澤清元に有して興來れば妙聲美音を弄して四筵を嘆賞せしむ、尙書畫骨董を愛翫して今や藏する所の珍品は内庫に充滿するに至れりと云ふ。

夫人多喜子は檜崎正兵衛氏の長女にして貞淑の譽高し。

貝瀨 謹吾君

△出生地 東京府
△現住所 滿洲、大連、見玉、八
△生年月 明治十一年三月廿一日

君は東京の人島野氏の二男にして明治十一年三月二十一日下谷區竹町に生れ、後貝瀨氏の養子となる、明治三十四年京都帝國大學理工科機械科を卒業して工學士の稱號を受く、直に鐵道院に入り技手となり、三十七年五月技師に陞任す、日露戰役に際し野戰鐵道提理部運轉班車輛長として渡航し、四十年四月南滿洲鐵道株式會社に入り現今に至る。

九五三

岡田一三君

探鑛冶金專門 從六位

△出生地 石川縣
△現住所 東京、牛込、二丁目、二八
△生年月 嘉永四年九月

君は鑛業界に於ける先輩にして探鑛冶金家として比類なき
専門家なり、嘉永四年九月を以て加賀國金澤城下に生る、即
ち前田藩の士籍にして岡田與一氏の三男なり、夙に俊才の譽
ありて郷黨に學び稍々長するに及び、東上して大學三學部中
の理學部に入學したるは明治二年の事なりき、爾來雪案登窓
孜々として講修に怠らず、優良の學績を以て大學を卒業せる
は同十二年なりとす、於是乎理學士として大阪造幣局に奉職
し、精勤群を抜き大に長上の信頼する所となり、廿三年御料
局佐渡支廳技師として精勤を命せられ、爰に探鑛課及び分析
課に勤務し且課長として執掌する所あり、蓋し佐渡は徳川幕
府時代より直營の金山にして天下に有名なる金鑛山なり、其
規模の雄大にして事務の繁劇なること、固より局外の想像す
るが如きものにあらず、然るに君克く之が劇務に執掌して好
成績を擧ぐ、其忠實精勉なる他をして驚嘆せしむるものあり
然るに宮内省は同二十九年を以て同御料局を拂下げたるを以
て、君之と同時に辭職し爾來民間に於ける事業に關係するこ
と二十餘年の久しき曾て間斷あることなし、尋で大正五年十
二月に至り横濱市なる小泉智海氏と深く謀る所ありて、合資
組織の下に東京分拆所を設立し、而して君之が代表社員と爲
り以て今日に至る、君頭腦明晰にして速く學理に通じ兼て豊
富なる經驗を有するを以て、今や同分拆所の名譽は我鑛業界
に喧傳せられ、隨て分拆事務は日劇月繁の盛況を招徠しつゝ、

ありと云ふ。
夫人多喜子は高等商業學校教授長谷川方文氏の令妹にして
貞淑の譽れ高く、今や令息陽一氏は工學士として九州帝國工
科大學教授として令名あるは、岡田家の爲めに祝すべし。

田實優君

△出生地 鹿兒島縣
△現住所 奉天、新市街四六條、一六
△生年月 明治九年一月五日

旅館業 瀋陽館主 株式會社南滿銀行取締役 南
滿洲鐵道株式會社諮問委員 勳六等 雙龍四等勳
章

瀋陽館は明治三十九年十月の開設にして初め小西門外に於
て開業せしが、四十四年九月新市街に新築移轉し以て今日に
及ぶ、館主田實君の成功や大なりといふべし。
君は鹿兒島の人明治九年一月五日を以て生る、夙に東洋方
面に飛躍せんとするの志あり、明治三十三年東京善隣書院に
支那語を履修し、北清事變に際して陸軍通譯として出征し、
翌年辭職して清國北京警務學堂教習となり三十七年辭職する
や、清國政府は其功勞を賞して雙龍四等勳章を贈る、日露戰
争に際しては高等通譯となり、出征軍に從ひ三十八年十一月
軍政署附を命せられ奉天に赴任す、軍政署の撤廢せらるゝと
共に君亦辭職し、瀋陽館を開く、後功により勳六等旭日單光
章並に一時金四百圓を下賜せらる、君餘業を以て南滿銀行取
締役として其經營に當るの外、曩に滿鐵諮問委員に推される。
夫人をのぶ子といふ、嚴君良左衛門氏古稀を超えて、嬰孺
たること壯者を凌ぐ。

池尻正君

炭坑主 勳八等

△出生地 福岡縣
△現住所 福岡、地行
△生年月 明治七年四月十五日

炭界由來剛健活恬の傑士に富む、蓋し炭坑業たるや最も危
險の性質を有し、時として投機的に邁進するの已むなき場合
も存して、千難萬苦、堅忍力行以て始めて到達し得るが如き
場合亦往々有之、其人にして十二分の覺悟を有するにあらず
んば到底成功を求むべからず、池尻君は生れながらにして炭
坑業者たるの素質を有す、即ち放膽細心の兩面を巧みに活用
して曾て事業の失敗不成功を現來せしめたることなし、案ず
るに君は舊豐津藩士池尻伴藏氏の二男にして、豐津中學校卒
業後兵役に就き、日清戰爭に際しては臺灣に出征して土匪討
伐に従ひ、殊功あり勳八等を授けらる、除隊せらるゝや乃ち
炭坑界に身を投じ先づ田川郡小松ヶ浦炭坑に入り、平岡辰二
郎氏の借區先掘をなす、以て三十四年に至りたるも經驗乏し
く加ふるに世上不況の爲め、容易に成功の曙光をも認むる能
はず、遂に之を廢して石炭商となり、宇の島及門司に賣店を
設け、孜々經營に當ること數年に及ぶ、而して肥前東松浦郡
今福平尾炭坑を宮原茂利と共同經營に當り三年に及びしが、
後田川郡大敷炭坑の近先掘に従事せり、偶日露戰爭起りて召
集せられ出征せり、不幸中途に病を得て除隊せられたるを以
て再び炭坑界に入り、櫃の曲金に於て炭坑の經營に當り、三
年間全力を盡して其發展を圖りたるも、大暴落の影響を受け
て經營困難となりしより、再び石炭商となり、伊豫松山日の
出炭坑に出張所を設けたり、今や之を他に譲渡せりと雖も君

が炭業界に於ける聲望は愈々加はりて、曾て吉田磯吉氏と衆
議院議員の選舉を争ひ、而して山口縣浮石炭坑に關與して株
式會社を創立せしめたる等、君が鬱勃たる才氣の煥發せられ
しを見る、當代得安からざる炭界の飛將軍といふべし。

田沼義三郎君

△出生地 新潟縣
△現住所 新潟、大連、乃木、七ノ二
△生年月 慶應三年一月十五日

南滿洲鐵道株式會社總務部事務局職員 大連汽船
株式會社社長

大連汽船株式會社社長田沼義三郎君は越後の人、慶應三年
一月十五日を以て新潟市に生る、幼にして大志を抱き長じて
諸種の業務に就きしも、未だ以て成功を收むるに至らず、明
治二十七年分家して一家を成し、奮闘努力、漸次産を加へ明
治四十三年に至り大連に渡航し、南滿洲鐵道株式會社に入社
し遂に作業所長兼旅館監督に任せらる、四十四年六月南滿洲
鐵道株式會社を代表して、營口水力電氣株式會社の社長とな
り、大正四年二月辭して大連汽船株式會社社長となり、現に
其職に在り、同社は南滿洲鐵道株式會社の補助の下に、大連
を中心として沿岸航路に従事しつゝ、ありて成績最も良好なり
といふ、是れ一に君が學識蘊奥を極め、經營の手腕超凡なる
に歸せざるべからず。
夫人をたま子といふ、明治十二年の出生にして、賢徳に富
み、富士太郎、弟次郎、峰子、みち子等の數子を擧げて洋々
たる家庭を營む。

林 猶 吉 君

△出生地 靜岡縣 靜岡市
△現住所 東京市橋本區新栄一ノ四
△生年月 明治八年四月廿二日

信託金融興業諸仲立業 合資會社三五商會無限責任社員



信託、金融、興業等の仲立業は一般の事業家にとりて一日も廢すべからざる機關たり、如何なる大企業家も事業を擴大するに從ひ資本の回轉に困窮すべく、或は金利の關係よりして徒に物資を所有するの愚を爲し得ざる場合もあり、又新たな事業を興さんとするに際しては、其性質上危険の分布にとりて資金は彈藥也、之を缺けば即ち破る、此等の諸點を資本家と事業家との間に介在して、よく仲立周旋の目的を爲すもの即ちビルブローカーの目的ならずや、「三五屋商店」の目的とする處亦此點に在り。

三五屋商店主、林猶吉君は大橋勇助君の三男にして明治八年四月二十二日を以て靜岡縣周智郡飯田村に生る、幼にして敏捷智才あり、學を好み閑あれば乃ち獨學自習して倦まず、同輩皆君の精力の旺盛なるに敬服せざる者なしといふ、靜岡第三十五銀行は明治十一年の設立に係り、資本金百八十八萬圓

の縣下第一の銀行たり、君は紹介する者ありて此銀行に入り一微役に就く、而も君の誠心誠意に富むや此小役を輕んじて曠廢することなく孜々として勵む、重役等は君の敏腕輕捷に感じ屢々拔擢して遂に同行橫濱支店の支配人に擧ぐ、茲に於て乎、一層勵精努力、行務の發展を力むるに寢食を廢するに至る、忽にして少壯銀行家として縣下に鳴る而も君に大志あり、且獨立心に富むや徒に他人の願使に甘んずる者にあらず遂に職を辭して上京せり、同輩、重役、皆君の才を惜で留任を勸告して已まざりき、君上京するや東京株式取引所の仲買人となり以て「三五屋商店」を開く、三五屋といふは君が立身の地盤たる三五銀行の三五をとりて屋號とせし也、開店以來數月を出でず忽ち顧客の雲集し來るを見る、之れ君の専心以て顧客の爲めに計り熱心以て店務を執掌せしによる、而して君を助けて此大成功を收めしめたるは今の三五屋店主今井安太郎君なり、偉大なる君に此忠實なる輔佐役あり、三五屋の隆々たるを見るは偶然にあらざる也。

三五屋の基礎堅固にして又後顧の憂ふべきものなきを見るや、創業以來の功勞者たる今井安太郎君に店務一切を擧げて譲り渡し、君は別に三五商會を設け、信託、金融、興業の諸仲立業を開き現に其業を營みつゝあり、君の如きは眞に獨立獨行の心に富む、偉大なる實業家といふべし。内室をやゑ子といふ、東京の人、松島兼助氏の五女なり、

本 莊 壽 巨 君

△出生地 岐阜縣 岐阜市
△現住所 東京市下橋岸
△生年月 安政二年七月七日

正三位 勳四等 子爵

勳四等

關東都督府醫院藥局長として斯界に信望高き高杉要二郎君は岡山縣淺口郡玉島町の人、明治六年一月二十四日に生る、學に志して京都に出で同地の第三高等學校醫學部藥學科に入り、同二十七年に卒業し二十八年十二月一年志願兵となり、三十年一月陸軍三等藥劑官に任せられ、廣島の衛戍病院に勤務し次いで山口、臺南、臺中、姫路、熊本の各衛戍病院に歴任せられ、拔擢せられて三十九年五月第一關東陸軍病院附を命せられ、同時に日本赤十字社關東州病院調劑主幹を囑託せらる、後陸軍衛生部下士候補者教官、關東都督府醫院藥局長囑託を命せられ、四十二年三月關東都督府醫院藥局長に昇任せられて今日に及ぶ。

夫人をじゆん子と呼び明治十四年に生れ、淑德温雅の間わ高く家庭圓滿なり。

小 濱 爲 五 郎 君

△出生地 鹿兒島縣 鹿兒島市
△現住所 安東縣大和橋通二丁目
△生年月 明治元年二月十五日

安東縣居留民團理事 安東官有財産管理會委員長 安東商業會議所特別議員 從七位 勳六等

君は鹿兒島の人明治元年二月十五日を以て生る、夙に東京外國語學校に於て支那語を學び、明治二十年より上海に渡航して日清貿易研究所の語學教師となる、日清役の際には高等通譯として臺灣に赴き、爾來同府の辨務署長其他に任せられ、日露戰役に再び通譯として從軍し三十八年安東縣に來り、翌年安東新報社を創刊して其社長となり、又滿洲運送株式會社を創設して其重役となり大正二年兩社を辭して現職に就けり

君は舊美濃國高富藩主なり、當家の遠祖は本莊六右衛門時家より出で其後裔道芳に至つて徳川將軍綱吉公に仕へ、高富の城主として食祿一萬石を與へらる、數世を経て道愛氏に至り君其後を繼ぐ、實は肥後國宇土藩主從五位下左衛門尉細川行芬氏の第十子にして安政二年七月七日を以て生れ、明治十年先代道愛の女久米子の入夫となりて家督を相續す、十七年七月特旨を以て子爵を授けられ、二十年六月治安裁判所判事に任せられ鹿兒島治安裁判所判事を命せらる、尋で都城治安裁判所長に進み二十三年七月即ち初期の帝國議會に貴族院議員に選出せられ、其年八月檢事に任じ延岡區裁判所檢事兼地方裁判所檢事を命せらる、同二十六年十一月麴町區裁判所檢事となり翌年京橋區裁判所檢事を兼ね、同時に東京地方裁判所檢事を命せられ正四位に昇叙せり、尋で退職となり公證人となりしが後罷めて専ら政治に關與し、爾後選ばれて屢々上院議員となり位階また昇進して正三位に叙せられ、日露戰爭の勳功に依り勳四等に叙し旭日小綬章を授けらる、是より先三十二年株式會社御嶽貯蓄銀行の創立に力を致して頭取に擧げられ次で株式會社愛國銀行取締役、株式會社東華銀行取締役となり専ら經營の事に膺りしが現今辭して閑地に在り。

養子孝之助氏は子爵脇坂壽氏の二男にして、其令閨たる養子喬子は子爵堀秀孝氏の令姉なり、而して子爵の令妹竹子は子爵米倉昌誠氏の母堂に當たれり。

高 杉 要 二 郎 君

△出生地 岡山縣 岡山市
△現住所 關東州原町新市街朝日官舎
△生年月 明治六年一月廿四日

關東都督府醫院藥局長 陸軍一等藥劑官 正六位

大正人名辭典 (高杉要二郎) (小濱爲五郎)

新田長次郎君

△出生地 愛媛縣 大坂、南、雄波、久保吉
△現住所 大阪、西、七、四八
△生年月 安政四年五月二十九日

株式會社伊豫農業銀行專務取締役 合資會社新田製革製造所長

君は伊豫の人安政四年五月廿九日を以て温泉郡味生村字山西に生る、故新田喜惣次氏の次男なり母を歌子といふ、君幼にして父に別れ母の鞠育を受く、君此賢母の薰陶を受け念々忘れず長じて大名を爲さん事を期す、明治十年君二十一年にして大鵬の志を抱き大阪に出て先づ藤田組製革所に入る、運命の奇なるや此偶然なる藤田組に入りし事は、後年君をして製革界の霸王たらしむる因を爲しぬ、君の藤田組に在るや朝は六時より夜に至るまで業務に服し、其繁忙なるや時に徹宵三晝夜に及べる事あり、君の志を成するや寡言沈黙、輕佻浮薄の態なく業餘ハイトケンベル、ルバスケの二外國講師に就き製革術を學ぶ、當時我國の製革業甚だ幼稚にして優等の革皮は皆外國より輸入するより其價格も法外の高價なりき殊に製靴用たる油革に至りては絶対に内地に於て製造する能はざりき、君刻苦精勵發明に苦心せしが其効空しからず、精良無比なる油革を製出するを得たり、所謂新田製油革なるものにして漸次改良せられて今や舶來品を凌駕するに至れり、是我國に於ては最初の事業たり、而して機械動力用帶革の發明亦君の努力による、蓋し工業の發達につれ工場設立せらるゝもの多く、動力用帶革の需要俄に増加せしも我國には其製造を爲し得る者なく、悉く海外より輸入せしが君が苦心の餘に成れる所謂新田製地球印帶革は、品質の外國舶來品に劣

らずして而も價格頗る低廉なりしより、管内内地に於ける需要に應ずるのみならず、海外に輸出せらるゝに至れり、君の功や偉なりといふべし、明治二十六年米國シカゴに大博覽會の開かるゝや、君は歐米製革業の視察を目的とし米國に渡航してシカゴ組育を経て英國に渡り、倫敦、マンチエスター等の工業地を視察し製革機械を數個購入して歸朝せり、明治三十三年佛國巴里大博覽會の開かるゝや再度渡航して原料及新式機械を購入して歸朝せり、君は其得たる智識を以て自家の工場に應用し耐水用帶革を製出し、牛皮裁別法の改善を計り而して精良なる品を低廉なる價格を以て販賣せるより信用忽ち増加し業務益々盛大に赴けり、君の工場は大坂難波に在り組織整頓規模宏大、模範工場の稱あり、君の寛厚なるや職工を遇する事頗る厚く、二十世紀の通弊たる資本家對労働者の軋轢の如きは君の工場に於ては絶対に起ることなしと云ふ。

渡邊修君

△出生地 愛媛縣 平河、六ノ二〇
△現住所 東京、鶴、三、四九
△生年月 安政六年十二月十日

大阪電球株式會社 松山電氣軌道株式會社各社長
日本瓦斯株式會社 小田原瓦斯株式會社各取締役
舞鶴瓦斯株式會社 大阪三品取引所各監査役 正
六位 勳四等

君は愛媛縣の人にして亡渡邊平太氏の二男なり、安政六年十二月十日を以て伊豫國北宇和郡泉村に生る、家世々庄屋にして舊家を以て遠近に顯る、年甫めて十五歳宇和島に出て、南洋學校に英學漢學を修め、明治十一年に中津支校に轉じ、

を揮ひ、日本電氣協會副會頭たり、日露戰役に際しては功により勳四等に叙せられ現に正六位たり。

坂巻福太郎君

△出生地 東京府 東京、本所、林、三ノ一九
△現住所 東京、本所、一、五〇六
△生年月 明治十一年十二月

東京ブリキ印刷製罐株式會社取締役 合資會社坂巻工場代表社員 金屬電鍍業

君は坂巻淺次郎氏の長男を以て明治十一年十二月東京日本區蠣殼町に呱呱の聲を揚ぐ、二十二年斯界専門の大家枝善次郎氏に就き硝子製造型製作を研究す、勵精十年大に技術の秘奥に達す、かくて三十二年に至り深川區仲大工町に地を卜し獨立して工場を開き、菓子瓶、蝸入化粧瓶、靴墨入瓶等の各種金蓋及び硝子壺用鑄型を始とし、其他硝子用たる活羽鐵、吹竿、彫刻鑄型、並びに諸機械製作、印刷製罐業に従事したるに爾來硝子の應用年々に増加し藥瓶、牛乳壺、化粧液壺等の需用月々其額を加へしを以て君の業務は大に繁榮せり、然るに君各種壺類の蓋栓の極めて不完全にして不便尠少なからざるを思ひ、是れが完全なるものを製出せんと思し、潛心工夫を積むこと五年間刻苦堅忍し遂に改良機械壺口、鈞螺旋壺口、三つ螺旋留付壺蓋等を發明し、又菓子容器、女夫盃等を工夫して新案特許を受け之を發賣せしに、江湖は非常なる喝采を以て歡迎し、爲めに君の大成功を爲すを見たり、君金屬電鍍業を創め、事業頗る繁劇なるに拘はらず、同志と胥謀り東京ブリキ印刷製罐株式會社を創設し、其取締役に擧げられ銳意經營の任に膺たる實に我國工業界の高材なりと稱すべし

翌年寔を東都に負ひて慶應義塾に學び、四年成績優等を以て本科を卒業す、當時自由黨改進黨の起るありて民權自由の説盛んに行はるゝや、君大に演說辯論の修養せざるべからざるを唱へ、國志と共に經世社を組織し後交詢社の設立せらるゝや高島小金治、小幡篤次郎氏等と共に北陸信越地方を巡遊し其他同志と各地を遊説せしこと屢なりき、嘗て操觚者となりしが明治十五年擧げられて農商務省御用掛となり、爾來官途に歷任することとなりぬ、十七年外務省御用掛に轉じ十八年外交官の試験を受け參事官に任じ、此年副領事を命せられ出で、元山津に出勤し、二十二年九月歸朝更に特計局審判官となる、二十三年故後藤伯爵の逓信大臣たるに當たり君逓信省書記官となり、大臣官房記録課長に擧げらるゝ、二十四年長崎郵便電信局長を命せられ、在職數年に及び臨時臺灣電信建設部事務官を兼任し、日清戰役の功によつて金五百圓を賞賜せられ尋て札幌郵便電信局長に轉任す、三十年愛媛縣書記官となり、三十三年香川縣書記官に轉じ、翌年休職となるに及び政治上に奔走することとなりぬ、三十五年八月第七回の總選舉に際し郷里なる愛媛縣郡部より選出せられて衆議院議員となり、爾後總選舉毎に當選せり、三十五年八月突然佐世保市長に推舉せられ三十九年四月迄熱誠職を奉せり。

實業界に於ける君は大阪電燈株式會社常務取締役として令名を揚げ、大阪電球株式會社、宇和水電株式會社、松山電氣軌道株式會社に各社長として多年其經營の全責務を負ひて精力を傾注し以て現時に至る、又姫路瓦斯株式會社、新潟瓦斯株式會社及び日本瓦斯株式會社に各取締役として之れが良成績を擧ぐるに努力し、別に大阪三品取引所理事として最も力

小泉 智海君

△出生地 静岡縣 濱田、住吉、二ノ三
△現住所 濱田、住吉、二ノ三
△生年月 明治三十三年二月廿七日

合資東京分拆所代表社員 横濱亞鉛鍍金株式會社
相談役 銅鐵仲立業組合長 銅鐵商

人各々目的志望を有するも爲すある資質を以て二六時中香烟膝々裏に念佛修業を説法し、以て娑婆世界の能事足りりご做すが如きは、寧王法二門の聖誦の藐視するものに非ざるなき歟、吾人は此見地を以て小泉君の經卷を佛龕堂上に奉還して、身を實業界に投じ熱心以て商工業に三昧するを快喜とするものなり、君は静岡縣三島町の眞宗成眞寺職土屋知道師の三男にして明治三十一年一月廿七日を以て生る、資性活潑個體僧侶として物外に超脱するを欲はず、夙に實業界に飛躍せんと志し其中學校に入るや半途にして業を廢し、決然として横濱市の銅鐵商岩崎某の店員と爲る、爾來十有八年の久しき熱心商品の研究に従事すると同時に、商機商略を實修して自から覺る所あり、且主家に仕へて忠實なるより大いに信頼を博し又華客の愛顧する所となる、於是乎明治四十五年主家を辭して現住所に獨立銅鐵商店を開けり。

是より先き明治三十一年主家の媒介を以て小泉藤三郎氏の養嗣子と爲り其姓を冒す、幾許ならずして養父は商機を失して家運頓に衰廢せんとするを見て、機敏なる君は克く此間にありて勇斷果決、以て之れが處分に任せしより、一朝にして家運を回復せるのみならず、其の信用倍々加はりて今や横濱市内に於ける同業者の信望する所となり、銅鐵仲立業組合長に擧げられ、尋で大正五年三月を以て、横濱亞鉛鍍金株式會

社を創立して自から相談役に就席せり、蓋君は當然社長若くは専務たるべき位置なるも重役を避けて黒幕に甘んずるは即ち謙讓の徳を守るが爲めなりと、尙今は斯界の先輩にして採鑛冶金家に其人ありと知られたる岡田一三氏を技師長として新たに合資會社東京分拆所を起し岡田氏と共に之が代表社員として雄飛しつゝあるに徴して、君が手腕の縦横にして斯界罕に觀る所の經營家と謂ふべし。

高橋 貞二君

△出生地 愛媛縣 安東郡市場通五丁目
△現住所 安東郡市場通五丁目
△生年月 明治三十三年十二月五日

貿易業 達摩商會主 株式會社安東銀行取締役
安東居留民會行政委員 安東商業會議所常議員

君は愛媛の人明治三十三年十二月五日の出生たり、郷里の中學校を了るや、直に神戸銀行に就職して勤続すること十數年に及ぶ、明治三十八年に至り大連に渡航し、獨力達摩商會を設立し、銃砲火藥精米自轉車其他の貿易に従ひ、又各保險會社の代理店をも營む、餘業安東名産館の經營に當りつゝ、あること前述の如く、猶安東銀行取締役たるの外、安東居留民會行政委員、安東商業會議所常議員等の樞要の職に就き、令名噴々たり。

鍋島 直大君

△出生地 佐賀縣 東嶺町、永田、二ノ一
△現住所 東京、神田、八重、八二五
△生年月 弘化三年八月二十七日



侯は舊肥前國佐賀藩主にして、弘化三年八月二十七日を以て生まる、佐賀藩は舊高三十五萬七千石にして、鍋島氏は有名なる直茂の後裔なり、直茂は父を茂昌といひ遠祖は大職冠

藤原鎌足公より出で、關ヶ原の役に徳川家康に屬して功あり直茂より十一代にして直正に至る。幕末國歩艱難なる時に際し、公武の間に奔走し大政奉還に盡瘁する所ありたるは人の治ねく知る所なり、侯は直正氏の二男にして文久元年從四位下侍從兼信濃守に任じ、尋いで封を襲ぎて肥前守と改む、初め松平氏を稱せしが明治元年本姓鍋島に復し、此年を以て議定職外國事務局權輔となり、横濱裁判所副總督となり、外國官副知事となり、二年伊斯拉波尼亞國和親貿易條約取結全權を委任せらる、此の年正四位下右近衛權少將に任じ東幸御留守警衛參與職となり、翌年上表して藩籍を奉還し、麝香間出仕

仰付けられ、佐賀藩知事に任ず、四年知事を辭して、英國に留學すること三年、六年一旦歸朝し更に此年を以て再び渡英し、十一年歸朝す、十二年獨逸、伊太利皇族及び米國前大統領來朝に際し、接伴掛を命せられ、特旨を以て從三位に叙し外務省御用掛となり、十三年特命全權公使に任じ、伊國に駐劄し、勳三等旭日中綬章を賜はる、十五年歸朝し、元老院議官兼式部頭に任せられ、十七年侯爵を授けられ、式部長官を兼ね、十九年元老院議官を辭し、勳二等旭日重光章を授けられ、二十年正三位に叙し、海防費一萬圓を献金して金製黃綬褒章を賜はる、二十三年貴族院議員となり、二十五年從二位に進み、三十年、英照皇太后御百日御靈前御代拜を命せられ爾後宮中顧問官となり、正二位勳一等に叙せられ、日本水難救濟會副總裁、日本音樂會々長、伊學協會々長、大日本歌道獎勵會々長、東京地學協會名譽評議員、日本赤十字社常議員等の榮職を帯べり。

夫人を榮子と稱し、伯爵廣橋家より入興し、夙に公共事業に奔走せられ、我國上流社交界の花形たり、曩に勳四等に叙せらる、令嗣正四位直映氏は侯爵黒田長成氏の令妹禎子を娶り、養女篤子は伯爵阿部正桓氏に、長女明子は侯爵前田利爲先代利嗣氏に嫁し、二女伊都子は梨本宮守正王の妃となり、三女茂子は子爵牧野忠篤氏に、四女信子は子爵松平保男氏兄恒雄氏に、俊子は伯爵松平頼壽氏弟海軍大尉胖氏に嫁し、二男直繩氏は子爵鍋島直彬氏の養子となり、女尚子は伯爵柳澤保惠氏の嗣子保承氏に嫁し、外に貞次郎、孝三郎、哲雄の數令息は家にありて猶攻學中なりといふ、嗚呼一門繁榮顯達を極めて祖先の偉業を千載に傳ふ至幸といふべし。

朝吹 英二 君

東京商業會議所特別議員 勳四等

△出生地 大分縣 三津
△現住所 東京 京橋、本境、九ノ三
△生年月 嘉永二年二月二十八日

英才達識の士ありと雖も、用うる者なくんば、即ち空しく草莽の間に朽つるに至る、是を以て後進後輩の士は、必らずや先づ知己を先輩に覓むると同時に、先覺の士亦人材を方面に物色して、以て其人の長所特能を發揮せしむるの盛誼なくんばある可らず、而も同郷の先輩は郷里の俊秀を識拔して即ち之が大を成さしむるは、人生の徳誼にして洵に己むを得ざるべき歟。

朝吹英二君は故中上川彦次郎氏に識られて三井家に推薦せられ、忽にして同吳服店及鑛山會社の専務理事と爲り、尋で同家の主唱になりたる鐘淵紡績會社の専務取締役に進み、旁ら三井家の顧問として重要な地位を占むるに至りたる徑路を探討し來れば、正に以て先進後進相須つにあらずんば、即ち共に地平線上に活躍す可らざるの理を知るべし。

君は嘉永二年二月二十八日を以て大分縣中津に生る、父を泰藏氏と言ひ代々商業を以て地方に知らる、君は實に其次男なり。幼にして奇才縱横、頗る膽略に富み、往々大人を驚倒せしむることありて其將來に繫望せしむ、弱冠にして上京し直に郷先輩たる福澤先生の塾に入りて専ら英學を修む、發才敏活なる君は數年ならずして學業大に進むや、奮然身を實業界に投じ眞商人を以て國家に貢獻する所あらんと志望し、便を求めて横濱に抵り乃ち海外貿易の目的を以て扶桑商會なるものを起し、熱心其業を經營せしも、血氣にして放膽なる君

は、忽ち數十萬圓の大負債を爲し事業端なく頓挫するに至れり、此間君は縦横の手腕を揮つて、在留外人を驚倒せしめたること一再嘗ならざりき、而して一旦事業の失敗するや債鬼門に集まり、督促箭の如く來るも毫も驚く色なく、自から折衝談判に當りて悉く之を解決し了れり、時會々福翁の甥たる故中上川氏は三井家に入り、年所を積むと共に、單り其手腕の縦横を認識せられたるのみならず、衆望大に加はり、今や日比翁助、波多野承五郎氏等と共に、三井家の元老株を贏得たり日露戰役の功により勳四等に叙せられ身の光榮を輝すに至れり。君一とたび相對して談話を交換し來れば、論鋒犀利にして舌端風を生ずるの概あり、然れども敢て無用の言を弄して喋喃、時を移すが如きは君の絶對に避くる所なり、嗚呼君は福翁の門を出で、故中上川氏に知られ而して今や悠然として上層社會に行動す、天資英發の然らしむる所と言ふ雖も、其一半は先輩の賜ならずんばあらず、是に於て乎故中上川氏の郷誼に盛んなる以て傳ふべきを覺ゆ。

夫人すみ子は中上川次郎吉氏の叔母に當り、長男常吉氏は分家して現に三越吳服店の常務取締役に活動しつゝあり

古川 久吉 君

廣島市會議員 鐵道工事合資會社理事 釀造業

△出生地 廣島縣 廣島、堺、四
△現住所 廣島、堺、四
△生年月 弘化三年五月二十日

君は廣島縣の人、先代古川伊三郎氏の長男にして弘化三年五月二十日を以て生れ、後家督を相續す、酒造業を營み、

業務隆盛、取引廣且つ大、店運益々發展して資産は不動産、有價證券、資金等を併せ八十萬圓を算し、信望最も高く、數回市會議員に當選し、現に其職にあり、議員中屈指の有力者なり、又鐵道工事合資會社理事として重きをなせり、實に君の如きは廣島市實業界の明星と謂つべし。

坂本 素魯 哉 君

△出生地 高知縣 高知
△現住所 臺灣、臺中、臺中、大正
△生年月 明治元年九月

株式會社彰化銀行專務取締役 臺灣製麻株式會社
取締役 臺灣煉瓦株式會社 臺灣產業株式會社
打狗土地株式會社 牛罵頭輕便鐵道株式會社 臺灣新聞社各監査役

君は高知縣長岡郡の出身にして、家豊かならざりしを以て少時より獨立生活の道を講じ、然る後其志を行はんと、郷校を卒業するや高知に出で、師範學校に入學して明治十八年卒業し、義務年限間郷里の小學校に奉職、年限了るや大志を抱き大阪に遊び、晝間は自活の爲めに奮闘し、夜間を以て關西法學校に入り、刻苦精勵、法律を研修して二十六年卒業せり後東上して明治法律學校に入學し、幾許ならずして其業を卒へ、而して二十九年に到り同郷の先輩にして、日本銀行の總裁たりし川田小一郎男の知遇を得て、日本銀行に出勤するに至れり。時恰も日清戰爭の後にして政府は、臺灣の新領土に對し、命令を以て日本銀行出張所を設置し、金庫事務を取扱はしむること、なれるより、拔擢せられて臺灣に赴任す。是れ實に明治二十九年十一月にして銀行員として、其行務の爲

め渡臺せるもの、先登第一なりき、爾來二十有二年間銀行業務に従ひて他を顧みざるのみならず、足内地を踏みたること僅か一回に過ぎず、以て其決心の如何に牢固たるものあるかを知るべからずや。是より先臺灣總督府は、元彰化廳管内へ大租權補償公債下附の議を決するや、時の彰化廳長加藤尙志氏は該公債を直接人民に交附したりとせん乎、未だ公債の性質に通せざる臺民は、必ずや棄賣して以て無益に費消するは必然なりとし、若し之を有利事業に投下せんには、之を總督府に交渉し其贊同を得たるより、乃ち公債中より二十八萬五千圓を資本とし、爰に彰化銀行を設定するに至れり。然るに當時同公債の相場は百圓に對し七十七圓内外なりしを以て、銀行資本金としての代用價格を額面二十五圓に就き二十圓と算定し、且保管證書を交附して之が賣買を禁じたりしも無智なる株主等は名を貸借に假りて賣却せるより、相場は額面百圓公債は實に五六十圓に下落せり。然れども加藤氏は萬難を排して之が設立を告げたるも、何人を擧げて支配人たらしむべき乎は當面の難問題たりき、是に於て乎其人物選定を時の柳生臺灣銀行頭取に依頼せしに、柳生氏は同行淡水出張所長たる君を擧げたり。而して君亦快諾して彰化廳より事務引継ぎ、上任せしは三十八年八月なりき。爾來經營十有餘年に過ぎざるも同行の信用は臺灣に高うして、最近即ち大正六年上半期の成績は諸預金三百萬餘圓に對し諸貸出二百七十一萬餘圓を算し、その金銀出納高は二億千萬圓、積立金四十萬餘圓と云ふ状態にて毎季配當は一割三分に上るに至れり。以て君が經營方針の機宜を得ると同時に、手腕の拔群なるを窺知し得べし。

串田 萬藏 君

△出生地 東京府
△現住所 東京府西久保町一丁目
△生年月 慶應三年二月十日

三菱合資會社銀行部專務理事 東京倉庫株式會社
監査役 東京銀行集會所理事



君は東京府の人串田孫三郎氏の長男にして慶應三年二月十日を以て日本橋區本木町に生る。所謂上水を以て初湯をひたる生粹の江戸子なり。小學卒業後簿記學を修め、其の修

得の技能を實地に應用す可く自ら進んで某銀行に入りて給仕の役を勤む、然りと雖も大志を藏するの君は一箇下級の使役人たるに甘んぜず、奮然學徒の群に投じて以て將來の大成を期せんと試み、明治十八年遂に登試に應じて東京大學豫備門に入學したり、後ち周圍の事情に依り方嚮を轉じて同年秋米國に渡航し、ペンシルバニヤ大學に財政經濟の學を修む、二十三年優等の成績を以て同校を卒業し、直ちに同地の銀行に職を求め數年間實地に修練を積み二十七年歸朝したり、同年三菱銀行に入り三十年大阪支店の副支配人となり、三十二年神戸支店に轉じ、三十四年再び本店勤務を命ぜられ、同時に銀行部副部長の要職に進み更に同行深川出張所主任を兼ね、三菱銀行部をして能く今日の盛運を招致せしめたるもの、是

菊池 恭三 君

△出生地 愛媛縣
△現住所 大阪府上本、八ノ二三
△生年月 安政六年十月十五日

尼ヶ崎紡績株式會社社長 攝津紡績株式會社 日本
絹毛紡績株式會社各取締役社長 日本麻糸紡績株式會社社長 株式會社三十四銀行監査役 大日本綿糸商會委員長 工學博士

君は我國に於ける紡績界のオーストリチーなり、専門學術の深淵なるに加ふるに豊富なる經驗を以てす、而も學術以外經濟上の理趣に通じ兼ねて天資寛宏にして清濁併呑の雅量あり是を以て關繫各會社の紡績事業は年と共に進展を來して、社運の隆盛を見るもの蓋し故なきに非ざるべし、出生地は伊豫國にして安政六年十月十五日を以て生る、嚴父を菊池泰成氏と言ひ君は其三男なり、天資英敏にして器局宏量、夙に時運の趨勢に考察する所ありて上京し、學を修めて後工部大學に入り機械工學を専攻して明治十八年卒業するや、尙其研究を繼續して發明する所尠なからざりしも、更に其蘊奥を極め且先進國の實地を目撃せんとして、二十年英國に留學し居ること二年、研鑽怠るなく遂に英國機械學士會員に推薦せられ、茲に畫錦の榮を身にして歸朝するや、技師として平野紡績會社に入り、(此年二十二年)會社は攝津紡績會社に合併して君依然技師たり、二十三年事業の發達を促進せんとして自から尼ヶ崎紡績會社を創立して之が社長と爲る、是れより君の聲望は紡績界に喧傳すると同時に、會社の成績は孰れも成果の優良を告ぐるを以て、君の手腕力量は單り紡績業のみならず今や銀行界に認識せらるゝに至れり、是れ今日前記各會社

れ偏へに元老豊川良平氏銀行部長三村君平氏を援けて敏慧誠實の手腕を揮ひたる君の功勞多きに居ると稱せらるゝは眞に偶然に非らずと謂ふべし、知識と經驗と相待て以て敏腕を其の業務の上に發揮する君が如きは、實に是れ好箇のビジネスマンと稱せざるを得ざるにあらずや、資質謹直方正、加ふるに明敏を以てす、事を探る細心、之を行ふ快速、銀行事務家として實に得難きの人なり。
夫人文子は故今村清之助氏の長女、現今村銀行頭取今村繁三氏の令姉たり、淑徳の譽高く内助の功尠なからずといふ、又以て君の名譽とするに足る。

西村 秀造 君

△出生地 山口縣
△現住所 東京府神戶、下二番、六七
△生年月 元治元年十月二十三日

戸畑鑄物株式會社 日本汽船株式會社 王子製紙株式會社各取締役 日本瓦斯株式會社監査役

君は山口縣の人西村啓藏氏の長男にして、元治元年十月二十三日を以て生れ、明治三十八年十一月令弟祿太氏隱居せるより其跡を繼ぐ。夙に實業界に雄飛せんとするの志あり、明治六年二月、朝吹英二、杉山喬氏等と謀り、資本金六百萬圓を以て平城製紙株式會社を創立し、君は監査役となり、又日本窒素肥料株式會社取締役たりしが、現今戸畑鑄物株式會社日本汽船株式會社、王子製紙株式會社、日本瓦斯株式會社等の重役として經營に參畫し貢獻する所大なり。
夫人喜代子は亡齋藤十郎氏の長女にして、啓一、二郎の二令息を擧ぐ。

に重役として統御の任に當るのみならず、更に三十四銀行に監査役たる所以なる歟、君又公益を重んじ自から進んで義に捐するを以て、當局者は大正二年を以て藍綬褒章を下賜して其功を表彰し、尋で同四年我博士會は工學博士に推薦して君の學識を顯揚し、而して同五年四月を以て大日本綿糸聯合會は君を擧げて委員長に推薦せり、君の聲望や抑も亦大なりと謂ふべし。

夫人すま子は長崎縣向江景由氏の二女にして、今や男女吾女ふみ子及辰雄等數子を擧げ、和氣一堂に霑然たり。

西山 覺治 君

△出生地 高知縣
△現住所 高知、種崎
△生年月 安政五年四月六日

高知縣多額納稅者 株式會社土佐貯蓄銀行 株式會社高知銀行 土佐電氣鐵道株式會社 土佐帆船株式會社各取締役 高知市參事會員 高知商業會議所特別議員 土佐商工聯合會常議員

君は高知縣人西山寅三郎氏の長男にして安政五年四月六日を以て生れ、明治十四年三月分家して一家を創立す、方今株式會社土佐貯蓄銀行、同高知銀行の取締役として參畫の功頗る多く、又地方事業の興起に熱心にして現に土佐電氣鐵道株式會社、土佐帆船株式會社にも亦取締役たり、衆望の歸す所、高知市會議員となり、又市參事會員に擧げられ、市政に盡くす所多大なり、而かも商業會議所特別議員の如きは學識經驗徳望ある者に非らざれば推薦せらるゝ者にあらざるは勿論なるが、君亦推されて同特別議員となり重きを會議所に成し、土佐商工聯合會の常議員に選まれ地方經濟會の重鎮たり

(脇田勇)

脇田 勇 君

△出生地 石川縣
△現住所 東京青山、高樹、一七
△生年月 明治九年九月二十五日

東京商業會議所議員 株式會社馬來護謨公司專務
取締役 東洋遊園地株式會社取締役 株式會社東
京榮銀行專務取締役 東海製網株式會社監査役
王子煉瓦株式會社創立委員長 勳六等



君は石川縣士族脇田祐順氏の長男にして明治九年九月二十五日を以て生る、資性敏慧活潑、郷黨を了るや後出京して中央大學に入學す、講學三年優秀の成績を以て明治三十一年卒

業するや直に身を實業界に投ず、恰も好し此年京釜鐵道創設の事あり君乃ち先輩に推されて創立事務に參加し執掌最も努む、而して一旦會社の成立するや文書課長並に調査課長の重職を兼務し鋭利なる手腕を揮ひ先輩の推稱する所と爲る、幾許もなくして露國との國交斷絶して干戈の間に相見わんとするや、政府は京釜鐵道の速成を企畫し端なく大活動の時期に入り、是に於て乎君感憤激勵君國に報するは正に此秋に在りと爲し、全力を傾注して當面に活躍奮進し其功程を急促し軍國に貢献せるもの多大なり、其功に依り明治三十九年勳六等に叙せらる、既にして京釜鐵道は國有と爲り同僚儼ぶて政

府の辭令を拜せんとするや君獨り吏たるを願はず、將に他の事業に走らんごせしも先輩の依囑に背く能はず、留りて之が清算事務に従事すること、なれり、蓋し京釜鐵道は敷設の當時より内地鐵道と自ら其選を異にするものあり、從て國有に移さるゝに及び其清算事務の如きも内地と其揆を同うせず、極めて錯雜なる事務を措置して幾多の新例を作り、斯界同業者に則せる所あらしめたるは是れ亦君の事歴に没すべからざるものたり、然るに世人も記憶するが如く戰捷の餘光に眩惑せる當時の經濟界たるや、狂瀾先づ企業界に起りて怒濤忽ち金融界に影響し、爲めに宮城屋貯蓄銀行も亦其渦中に吸引せられ、將に破綻の淵に瀕するや濫澤男爵等は之が復活を講せんとして茲に君を推薦するに至れり、君乃ち知遇に酬むんとして紛糾雜綜の衝に當り、傍ら四十二年君等が發起せる株式會社東京榮銀行を實現して、彼此打て一九〇〇做し以て其行務を整理繼承するに至れり、愆て四十二年別に倉庫業を開始し専ら斯業の發展に資しつゝ、あるは銀行業として機宜を得たる企畫と謂ふべし、四十五年に入るや國家の大勢より打算して、儉安に流るべからずと做し奮然躍起して支那及南洋に渡航し、親しく風土人情並びに經濟上の實況を視察調査し、一旦歸朝するや馬來半島に於ける護謨栽培事業の確實有利なるを覺り、株式會社馬來護謨公司を創立し爾來數年將に採收期に達し頗る好成績を挙げつゝあり、其他東洋遊園地株式會社取締役、東海製網株式會社監査役等を兼ねて執れも好績を現來しつゝあり、又大正六年春季東京商業會議所議員の總選舉あるや、君深く歐洲大戰亂勃發以來の趨勢に考察する所あり、且我商工業者の任務や重大なるものあるに想到し、斷然

意を決して立候補の名を宣するや、五十餘名の候補者中第二位の高點を以て月桂冠を戴き現に議員として其任務に貢献しつゝあり、是れより先大正四年十月濫澤男爵に隨行して渡米し汎く米國の商工業を視察し就中同國に於ける銀行並に信託業に關し詳細に調査する所ありたり、是を以て君が従事する諸會社及銀行は孰れも良成績を挙げ、隨て今や手腕家活動家として多大の信望を博し聲名隆然たる實業界の有力者なり。夫人金子は日下義雄氏の令姪にして、凱氏、和氏、孝氏及時子、外子の三男二女あり。

赤星 典 太 君

△出生地 熊本縣
△現住所 長野、長野知事官舎
△生年月 明治元年九月七日

長野縣知事 從四位 勳三等

其風貌堂々、且謹嚴重厚にして深く法理に通じ、行政の手腕に富み到る處令聞善譽に富む、赤星典太君は熊本縣の人赤星晋策氏の長男にして明治元年九月七日を以て生る、同二十九年帝國法科大學を卒業し法學士の稱號を得て大藏省屬となり、後文官高等試験に合格し三十年司稅官に任じ金澤稅務管理局長、札幌稅務管理局長に歴任し三十二年會計檢査官補に任せられ、三十三年司法省參事官兼司法書記官となり、三十五年同書記官、總務局會計課長を命ぜられ、後農商務省書記官、行政裁判所評定官の要職に就き、榮轉して熊本縣知事となり難治を以て稱せらるゝ同縣治に従ふや、非凡の手腕を實現して無事其治を完ふし、大正三年四月山口縣知事に轉じ現今長野縣知事たり、就任未だ久しからず、爲めに治績の特に

大正人名辭典 (赤星典太) (宮本吉右衛門)

現はるゝものなきも縣民の信譽悅服に徴すれば其有終の美を濟すを疑はざるなり。家族は嚴父の外、母堂萬代子あり、同縣士族高岡一太郎氏の長女なり、夫人雪子は同縣士族門上又四郎氏の長女にして淑徳高く、男健氏、女藤子、同紫子あり、家庭圓滿なり。

宮本 吉右衛門 君

△出生地 和歌山縣
△現住所 和歌山、新八百屋
△生年月 嘉永五年十一月二十日

株式會社四十三銀行取締役頭取 和歌山紡織株式會社 和歌山水力電氣株式會社各取締役 株式會社紀陽貯蓄銀行 株式會社和歌山縣農工銀行各監査役

君が和歌山に於ける銀行業者として著名なるは四十三銀行に頭取たるの一事、之を證すべしとなす、而して紀陽貯蓄及和歌山縣農工の二銀行の監査役として、行務監督の衝に當たるの外、和歌山紡織及和歌山水力電氣の二株式會社に取締役として専心經營に任ず、實に縣下實業界の重鎮たり、君は和歌山の人先代吉右衛門氏の長男にして、嘉永五年十一月二十日を以て生る、幼名を芳太郎といふ、明治二十一年推選せられて四十三銀行の頭取となる、而して前掲諸會社の重役たるの外、曾て和歌山市會議員、市參事會員、南海鐵道株式會社監査役たりし事あり。夫人をしよう子と呼ぶ、一女修子あり、岩濠紋左衛門氏の弟春吉氏を迎へて養子とす、其間田鶴子、壽賀子、董の三女を儲く。

尼崎伊三郎君

△出生地 兵庫縣 大阪北下福崎、三
△現住所 電、土、一三三三
△生年月 明治元年三月二十日

貴族院議員 八千代生命保險株式會社 豐國火災
保險株式會社各取締役 大阪曹達株式會社監查役
東洋水道木管株式會社 日本化學精油株式會社相
談役 海運業 勳四等



君は大坂屈指の富
豪にして海運業者の
巨擘たり、本店の外
富島町に尼崎汽船部
を設け、又更に造船
部、耕地部を置き、
而して尼崎本店は之
を統轄し、今や其所
有船舶は數十隻にし
て店員社員合せて千數百人に及ぶ、明治二十八年日韓航路を
開始して以來韓國の開發に努力し、又三十九年度より韓國郵
便物に限り無償運搬を爲し來りて其功勞著しきものあり、是
を以て元韓國皇帝より勳四等大極章を贈らるゝの光榮を荷へ
り、君の出生地は攝津にして兵庫縣松井豐吉氏の長男たり、
幼名を徳太郎と呼びしが三十三年六月尼崎家の養子となり、
三十七年一月を以て家督を相續し、先代伊三郎の名を襲げり
先代は君の伯父にして初め出生地たる兵庫縣川邊郡尼崎町に
於て露商を營みしが、商用を以て屢々淀川汽船に乗り伏見に
往復したるを動機とし、將來海運業者たらんと決意し、明治

十二年初めて汽船を新造し逐次其數を増加し、爾來大阪を基
點として、中國、四國、九州、山陰及北海道の各航路を開通
し、名聲四方に鳴り海上王として謳はるゝに至れり、日清戰
役には軍隊の輸送に其功勞頗る顯著なりしが、惜い哉三十七
年一月病に罹りて白玉樓中の人と爲れり、君は嚴父の業を繼
いで銳意怠らず、熱心航路を改廢して汽船を増加し、是れよ
り尼崎汽船部は海運業者として益々發展擴張し、而して尼崎
造船部に於ては現在所有船舶の半は實に自家の建造に係りた
るものなり、數十隻の船舶は日々當部に於て修繕せられ、又
た他を煩はすの要を見ず、陸に在りては數百町歩の耕地を兵
庫縣下に、又百餘町歩の耕地及數萬坪の宅地を大阪府下に所
有し、海上に雄飛すると同時に陸上に亦活躍しつゝあり、
君曩に選ばれて大阪市會議員及大阪商業會議所特別委員たり
又銀行、保險、製造、工業、鐵道等の諸會社に投資すること
實に三十有八に及び、尙數會社の重役に推され又二十箇の公
共團體の爲に盡瘁して敏腕を揮ひ其任を全ふす、大阪府多額
納稅者より選ばれて現に貴族院議員たり、大正三四年事件に
て被叙勳四等授瑞寶章、直接國稅二萬有餘圓を納め、資産無
慮一千萬圓を算す。夫人ウタ子は大阪府故中島善左衛門氏の
三女にして、迪子、君子、花子の三令嬢あり。

山本傳兵衛君

△出生地 福井縣
△現住所 福井、敦賀、大金
△生年月 明治八年九月二十三日

君は舊名良吉といひ後先代の名を襲ぐ、資産は七十萬圓を
算じ、直接國稅約二千圓を納む、現に敦賀銀行の取締役たり

羽生順吉君

△出生地 東京府
△現住所 東京、西多摩、大久野
△生年月 明治二十四年八月六日

農は天下の大本也。黄金珠玉も、餓へては食ふべからず、
凍へては衣るべからず。故を以て我が國は、古來より農業立
國を國是となす。然るに輕燥の青年、動もすれば一攫千金を
夢み、郷土を捨て都會に走らんとす。而も其末路の概ね悲惨
を極めざるなきに至りては、經世家の益痛心して已まざるの
事に屬す。羽生家の累代農を業とし、曾て餘業を試みず、南
畝に稻梁を收め、東郊に桑麻を刈るを以て、天職となし、君
に至りて正に十數代に及び、資産百萬に近からんとす。寔に
慶賀すべきにあらずや。君は先代亡傳藏氏の長男にして、明
治二十四年八月六日を以て生る。明治三十一年七月家督を繼
ぐ。祖先の遺業を繼ぎて、現代の努力を加へ、之を子孫に遺
すは、君が信條にして、又羽生家の家訓たり。
夫人を璋子といふ。明治二十五年の出生にして、吉野郡次
氏の二女なり。謙一郎の一子あり。外に令弟孝吉、令姉いく
子、同のぶ子等あり。いく子は羽生平作氏の長男平治氏に、
のぶ子は森田儀右衛門氏令孫昌一氏に嫁せり。

川島純幹君

△現住所 福井縣知事官舎

方今宇内の大勢は益々帝國々運の發展と富力の充實を圖る
福井縣知事
大正人名辭典 (羽生順吉) (川島純幹) (山中太兵衛)

山中太兵衛君

△出生地 奈良縣
△現住所 奈良、添上、明治
△生年月 明治三年十一月五日

君は奈良の人山中樞三郎氏の長男にして、明治三年十一月
五日を以て生る、幼にして機敏を以て稱せらる。明治十一年
十一月迎へられて山中太平氏の養子となり、十八年九月家督
を繼ぐ。代々縣下の大地主にして、直接國稅三千餘圓を納む
る多額納稅者たり。
夫人をゑみ子と呼ぶ、大阪人谷要氏の令妹也。

山中隣之助君

△出生地 埼玉縣 埼玉市、中六番、四七
△現住所 東京、神田、中六番、四七
△生年月 天保十一年七月七日

東京板紙株式會社 東京毛織物株式會社 東京瓦斯株式會社 帝國製糖株式會社 富士身延鐵道株式會社 豊川鐵道株式會社 上武鐵道株式會社 藝備鐵道株式會社 東海紙料株式會社 株式會社 浪速銀行 株式會社 紅葉館各取締役 東洋汽船株式會社 臺北製糖株式會社 武藏水電株式會社 各取締役 東京商業會議所議員 株式會社 東京山中銀行監督

君は頭書の如く諸種の公職を帯びて公事に盡瘁する事多年今當に東京山中銀行を監督して、斯業の爲に渾身の努力を捧げつゝあり、又事業界の敬重す可き一人物也。埼玉縣の八山中忠次郎氏の長男にして天保十一年七月七日を以て生る。少時敏慧身を實業界に立てんと欲し、東都に出で日夕實業界の事に關與す、明治二十三年埼玉縣より選まれて代議士と爲り衆議院に入り實業派を代表して參政機關に貢獻する事尠ならず、又嘗て東京府會議員及同市會議員に選まれ、共に府市政に關與して、以て公職の任を全ふす、後多く實業界の事に與り、第三十二國立銀行取締役、日本鐵道會社理事たりし事あり、今現に東京板紙、富士製紙、豊川鐵道、東海紙料、浪速銀行、石狩石炭、東京毛織物、東洋汽船等各株式會社の監査役にして東京鑄鋼合資會社の理事、東京商業會議所議員として東都實業界の宿將たり、資性謹厚、政界及び實業界の兩方面に於ても共に重望を負ふ事君の如きは稀れなり。

々札差を以て業とす。現に東京板紙株式會社監査役たり。

志村保一君

△出生地 東京府 東京市、神田、一七
△現住所 東京、神田、二六九
△生年月 慶應二年九月十三日

株式會社 壽榮銀行 株式會社 中外貯金銀行 西武軌道株式會社 各取締役 八卷志村合名會社 代表社員 池上電氣鐵道株式會社 監査役 質業

君は實業界の手腕家にして横濱市に於ける模範的紳士なり其手腕の敏活にして更に鮮かなるは、夙に世間に定評の在るあり、今に於て一字を加ふるの要なきも實業以外、精神界及學術界に對し熱誠を以て貢獻せられたる事績に至りては、實に驚嘆すべきものあり、固と名古屋の人にして志村保和氏の長男なり、慶應二年九月十三日を以て東京麹町三丁目に生る夙に修文館に入り英漢學を學び又簿記經濟學等を修め、後出て工部省會計局及鐵道局會計課に出仕す、頭腦明晰にして複雑なる庶務を調攝するに於て、尋常人の到底企及すべからざる材能を有して、同僚間に推賞せらる、明治二十四年横濱銀行創立の際に聘せられて計算主任となり、尋で同行監査役に選舉せらる後横濱共同電燈株式會社の紛擾を釀すに當りては君乃ち之が會計整理を委囑せられて大に敏腕を揮ふ、後選ばれて同社の監査役となり、是れより東京扇橋製藥株式會社 監査役、横濱魚油株式會社 會計事務顧問、北海道炭鐵道株式會社 會計調査役、倉庫検査役、横濱蠶絲銀行取締役等を經て、合資會社 富山商會を廓清し、又日本殖民株式會社 理事として事務整理を完うせり、後平沼延次郎氏と共に朝日商會

夫人をくら子といふ、男爵船越光之丞氏の叔母に當る。長男勇、三男勇三郎の兩氏あり、何れも乃父の衣鉢を繼承するの俊髦にして、勇氏は子爵愛宕通經氏の令妹利子を娶り、繁美子の二子を儲く。

瀨尾幸太郎君

△出生地 香川縣 香川縣
△現住所 香川、綾歌、端岡
△生年月 文久元年九月十七日

香川縣多額納稅者 讃岐紡績株式會社 取締役 株式會社 高松銀行 監査役 農業

君は先代瀨尾景嚴氏の長男にして、瀨尾等氏の令兄なり嚴父景嚴氏は同縣の鏘々たる縣會議員として令聞ありき、而して君は文久元年九月十七日を以て生れ、明治三十一年六月家督を相續す、家業を業とし、資産日に増殖す、曾つて村長として村治に盡くせる所少からず、地方の信望に富み、現に株式會社 高松銀行の監査役たる外讃岐紡績會社等の重役たり資産八十萬圓を算す。母堂をつ子、令聞ひさ子、養子庸七氏(令聞しげり子)あり家庭圓滿なり、令弟辰之助氏は分家せり。

青地幾次郎君

△出生地 東京府 東京市、神田、片三
△現住所 東京、淺草、藏前、片三
△生年月 嘉永二年五月二十三日

東京板紙株式會社 監査役 地主

青地幾次郎君は先代青地幾次郎氏の長男にして、嘉永二年五月二十三日を以て生る、有名なる資産家にして、家を代を起し輸出入業に従事せしが、同氏の死去と共に之れを解散し、同三十九年八月八卷志村合名會社を創立して代表社員となり、尋で更に日本増殖株式會社、横須賀瓦斯電燈株式會社各監査役を兼ねるに至れり、目下壽榮銀行、中外貯金銀行、西部軌道株式會社 取締役として孰れも豫期以上の好成绩を擧げ、關繫株主をして満足せしめつゝあるは、世間の周知する事實なり、且夫れ會社關繫以外の事歴を略叙せん乎、明治二十七八年日清戰役の際に横濱市太田村々會議員として又三十七八年日露戰役當時に於ては、同市南太田町霞谷會長として兵事に映掌し、奉公の誠を捧げたるより神奈川縣知事より木杯及賞状を授けられ、或は鎌倉圓覺寺派管長釋宗演禪師に就き禪學を修め、蓬洲居士の雅號を與へらるゝと同時に、横濱青年佛教會を起して同師及釋雲照律師加藤咄堂氏等と共に佛教の傳道に熱中し同市に佛教の法雨を降らし護法の花を咲かしむること十數年の久しきに亘り、時に或は故外務大臣林董伯を會頭とせる日本エスベラント協會の理事に選舉せられ文學博士黒板勝美、理學博士中村精男の諸氏と共に世界語の普及に従事すること十數年、又或は宮城屋貯蓄銀行の破綻の際に之が整理委員に推薦せられ、同行の整理を完了して東京榮銀行の創立を援助し、又東海生命保險相互會社の評議員に選舉せられて同社の發展に盡瘁せる等、公私大小の美事偉績を擧ぐれば實に枚擧に遑まらず、要するに君は其人品、其手腕に於て世間罕に觀る所の紳士なり。夫人は不幸にして早逝し、後伊勢磯子を娶る、保政、保忠保直、保道、俊子、繁子の四男二女を有し、家庭の圓滿を以て羨望せらる。

森下博君

仁丹毒滅本舖 藥種商

△出生地 廣島縣
△現住所 大阪府天王寺、南河堀
△現住所 東京、東區、北久太郎、一
△第一製 東京、東區、北久太郎、一
△第二製 同、東區、北久太郎、一
△支店 支那、天津、漢口、印度、孟
△出張所 支那、上海、東京、錦町



仁丹本舖主たる森下博君の名聲は、其遠近に轟き、都鄙貴賤を問はず、仁丹の効驗を解せざる者なし、清涼劑の覇者たる仁丹の販路は全國各地より支那朝鮮臺灣西比利亞及南洋印度各地に及び、殊に支那に輸出すること最も夥多にして仁丹の文字は支那人の風韻に適せると云ふ、君は森下佐野右衛門氏の長子にして明治二十一年十一月三日を以て備後國鞆の津に生れ、十三歳にして父君易簣し、明治十五年五月其家督を相續して、重責を負ふの止むなきに至るや、蹶然起て決する所あり、十五歳大阪に出て心齋橋通の唐物店に入る豪宕不羈の性格は人の下風に立つを快とせざるのみならず、唐物商に従事することを好まず、自ら一小店を淡路町に

開始し賣藥を業とす、日清日露の兩戰役は君が成功の階梯と稱すべく、君は機に投じて金鶏麝香を發賣して聲價を博し、時で毒滅を發賣して市場を賑はし、更に清涼劑仁丹を發賣するに及び、需用目醒しき計りに擴大し日本藥業史上類例なき發展を示し天津、漢口、孟買、スマランに支店を設置し六十名の出張員をして常に擴張せしめつゝあり、而して君の廣告術は迅速機敏、破天荒を以て鳴り、人心を攪るに秘訣を發揮し、旭日昇天の勢を以て業務を充張し、今や賣上高一ヶ年五百萬圓に達し、直接國稅六千有餘圓を納む、資性潤達にして細事に拘泥せず、機略縱橫商務を指導し以て益々有望なる前途に邁進しつゝあり。

家族は令閨はな子、女婿長藏氏、一女次子なり。

菅野安次郎君

△出生地 兵庫縣
△現住所 兵庫、神戸、川崎
△生年月 安政二年三月九日

君は兵庫縣飾磨郡青山村の人喜多喜人氏の二男にて安政二年三月を以て生れ、幼名を吉次郎といふ、先代安平氏の養子となり、明治二十年五月を以て家督を相續し安次郎と改名す菅野氏の酒造業を始めたるは、明治十年に屬し、其製造する所の清酒は品質の佳良なるを以て一般酒客の歡迎する所となり、今や直接國稅七千圓を納むるの盛況に達せり。君は家務の外、淡川土地建物會社等取締役として、堅固なる地盤を有す。君又曾て神戸商業會議所の議員たりしが後之を辭せり。

清野長太郎君

兵庫縣知事 正五位 勳三等

△出生地 香川縣
△現住所 東京、麹町、富士見、五ノ
△生年月 明治二年四月一日

君素と香川縣の士族にして明治二年四月一日を以て高松市新瓦町に生る、郷里にありて小中學を修め二十五年七月帝國大學英法科に入る、其成績の優良なる群鷄中の一鶴たり、明治二十八年卒業す、現日本銀行理事土方久徵氏前内務次官久保田政周氏、下岡忠治氏、濱口雄幸氏等君の同窓生たり、同年君は出で、内務屬となり警保局に出仕し翌年富山縣參事官に轉じ、三十年二月神奈川縣參事官に歴任し、同年八月内務省事務官に任せられ、縣治局市町村課長として専ら地方自治政を掌る、後官制改正の爲めに内務省書記官たりしが、三十九年一月出で、秋田縣に知事となり親しく牧民の政に與りて良二千石の稱あり、是より先日露兩國は滿洲問題に國交破裂し、互に干戈の間に相見ゆるの不幸に陥りしが、帝國の陸海軍は連戰連捷の勢を以て益々突進し、露軍の勇を以てするも是れを防ぐ能はず、遂に和を講ずるに至り、長春以南に於ける露國の既得權は悉く我が手に掌握せしを以て、政府は嘗て東清鐵道會社の經營にかゝる全部を擧げ、價值一億萬圓として之れを民間に貸下げ、茲に南滿洲鐵道會社の創立を見るに至れり、此時に當り君は在官のまま、同社の理事に任せられ、東京支社詰となり、四十三年任期滿了後再任せられ、大正五年寺内閣成るや抜かれて兵庫縣知事となる、兵庫は關西の雄縣にして、農商工業の賑盛を極め、生野銀山、但馬の畜産川崎及三菱造船所、燐寸業其他擧げ來れば枚擧に遑なからん

大正人名辭典 (清野長太郎) (岩瀬彌助)

とす、此縣に長官たるは實に容易の業にあらざるなり、清野君の拔擢せられて服部一三君の後を襲ふ、必ずや其所に大なる理由なくんばあらず、或はいふ清野君は俊敏明達、縱橫激濁たる才人なりと、君一たび口を開けば滔々たる雄辯四邊に徹し、而も險巖の態なく敵をして心服せしむるの魅力ありと君が後藤系の人なりと言ふに拘らず、反對黨の人にさへ好感を有するは此所に因する處なるべし、實に前途ある良二千石といふべし。

夫人をくに子といふ、暢一郎、誠二郎、孝三郎、恭四郎、順五郎、謙六郎、てい子、美津子、正子、雪子等の數子あり

岩瀬彌助君

△出生地 愛知縣
△現住所 愛知、幡豆、西尾
△生年月 慶應三年十月六日

君は愛知縣人岩瀬彌藏氏の長男にして慶應三年十月六日を以て生れ、明治二十年先代亡猪代治氏の養子となり家督を繼ぐ、岩瀬家は數十代連綿として繁榮せる豪家にして、代々肥料を業とし、現に北海道根室地方に漁場を有し、盛に其擴張に從事しつゝあり、君曾て町長、町會議員、又は學務委員たりし事あり、目下西尾軌道株式會社の社長として其經營を統督す、精力の絶倫を以てするにあらざれば到底爲し能はざる事に屬す、自から奉ずる所薄く、疎衣粗食を耻ぢず而して屢々餘財を投じて地方文教上に貢献する所尠からず、明治四十年獨力を以て圖書館を設け、岩瀬文庫と稱し地方讀書子の爲に利便を興ゆる所、甚だ大なるを以て郷黨の徳となす所也。

(猪俣泰作)

猪俣泰作君

△出生地 大分縣 東四谷、東信濃、一〇
△現住所 東京、四谷三丁目
△生年月 明治四年五月二十二日

合資會社二葉屋商店代表者

利用の方面より見るも需用の方面より見るも、今日となりては殆ど一日も廢すべからざる重要品は護謨也、然り護謨の需用は時代の進歩と共に眞に測知すべからざる盛況に達しつゝあり、殊に紐育のゴム世界社が多額の費用を投じて之が販路の擴張に努めてより一層盛んになり今や微少の物品と雖もゴムを應用するの利便を知らざる者なきに至れり、殊に其需用の激甚なるはタイヤ也、自轉車、自動車、傳等皆使用せざることをなすは世間の周知する所也、「二葉屋」は實に此氣運に乗じて起れる商會也、近時自轉車、自動車の流行盛になり行くにつれ、益々タイヤの需要は激増しつゝあり、是に於て乎二葉屋商店の盛運に赴く事殆ど底止する所なからんとす、而して此機運を促進せしめたるは猪俣君の努力與かりて多きに居らずんばあらず、案するに君は大分縣人南一郎平氏の三男にして明治四年五月二十二日を以て宇佐郡に生る、夙に穎才敏捷の譽あり、明治十八年神田共立學校に入りて二十二年卒業するや、直に京都に至り同志社に入り孜々攻學して二十年畢業し、再び東上して早稻田大學の前身たる東京專門學校に入り政治經濟を專攻し、二十八年優等を以て卒業し學窓を出づるや二十九猪俣吉平氏の懇請に依り婿養子となり、而して三十三年を以て北米合衆國及び加奈太に渡航し商業の視察を爲し、専ら外國貿易の實地研究を遂げ然る後輸出の取引を開始し尋で翌三十四年歸朝するや、直に養父吉平氏の創立に

繋る二葉屋に入り實地に就き研究する所あり、三十六年に至り從來の組織を改め合資會社二葉屋商店と變更せしより、君乃ち之が代表社員に推薦され主として經營の衝に當れり、三十八年七月店務擴張の爲め英米獨佛各國を歴遊し三十九年好成绩を齎して歸朝す、四十二年復歐洲各國に渡航し種々計畫する所あり、四十三年歸朝して專念業務に従事し、大正二年九月三度商業擴張各般の視察を兼ね歐洲各國を漫遊して同十二月歸朝す、爾來新智識と豊富なる實見の下に、商店の開發發展に傾倒しつゝあり、迨に歐米人に交遊多き君の事とて宛ながら英國的紳士の型を有す、二葉屋の取扱ふゴム製品中英國パーマータイヤ會社の自轉車を首め、自轉車のタイヤ其他英米獨の自轉車専門の各會社より材料を直輸入して尤も着實に販賣するを特色とす、且養父吉平氏の創立する東京自轉車製作所の製品一切をも販賣して斯界に飛躍しつゝあり、顧ふに我實業家中多少の抱負を以て業を海外に計畫し、進んで羅亞亞米利加方面に遠征し、以て商事を經營し農作に熱心する奮闘家其人敢て尠しとせざるも、斯の如きは未だ以て吾人の意を強ふするに足らざる所也、何となれば壯心ありと雖も其驥足は異國官憲の壓迫に會して大に伸すこと能はず、周到なりとするも他の嫉視を速がざる者幾んど罕なり、此時に當り曾て渠等の羈絆を受けざるのみならず、寧渠等白人種をして我に親ましめ、以て渠等に畏敬を拂はしめつゝ、自己の勢力を扶植すること君の如き旺んるもの未だ曾て之れあるを見聞せざれば也、且君は單に輸入のみを以て満足せず、養父吉平氏の周密精緻なる研究の下に、彼の長所を採りて斯界に於ける製造上に貢獻する如きは、我邦工業上より觀察して誰乎

其識見の卓絶せるに感せざらんや、蓋し君の一家は基督敎信者として眞面目なる基礎の上に立ち、敢て智を銜はず又才に誇らずして其務むる所に忠なるが爲めならん歟、是れ吾人の茲に特筆する所也、況んや時代は護謨の需用をして倍々大ならしめ、無限の用途を開らきつゝあるをや、炯眼一閃蓋くも今日の趨勢を洞察して斯業に傾倒す、嗚呼達識活慧の士に非ずんば、豈斯の如くなるを望むべけんや。

令聞を政子といふ、先妻操子は四十一年に永眠せるより其令妹たる政子を以て後聞とす、政子は御茶水高等女學校出身の才媛にして賢良なる主婦として推稱せらる、長男秀一君は目下麻布中學校に、長女満子は御茶水高等女學校を卒業し、目下尙勉強中にして家政を助けつゝあり、次女綾子は英和女學校に在學中にして、外に三女百合子は二葉高等女學校に、四女恭子、五女章子、二男讓二及六女縁子あり、一家團樂、和氣藹々たりといふ。

彌富寛一君

△出生地 佐賀縣
△現住所 佐賀、中川副
△生年月 明治十七年七月十日

佐賀信託株式會社 株式會社肥前銀行各取締役

酒造業

君は佐賀縣士族久米富助氏の長男にして明治十七年七月十日を以て生れ、前に長崎高等商業學校を卒業し、明治四十四年先代彌富元太郎氏の長女と子の入夫となり、酒造業に従事し益々其盛況を示しつゝあり、而して其家は十餘代連續せる素封家にして資産は有價證券、現金、貸金、田畑を併せ四百萬圓以上を擁す、君が重大なる信託を完ふする底の人格に

(彌富寛一) (大藪房次郎) (村田平左衛門)

あらずんば曷んぞ今日あるを得んや、君勤勉力行、孜々として其業務に奮勵し富んで而して驕らず、而かも人に施して惜しむ所なく、地方の富豪として又徳望家として社會の敬重する所たり、君春秋に富む、前途の運命洋々たるは勿論なり。

大藪房次郎君

△出生地 福岡縣
△現住所 福岡、久留米、草振川
△生年月 嘉永五年一月二十日

筑後水力電氣株式會社 大川鐵道株式會社各顧問

久留米市參事會員 久留米市會議員

君は福岡の人大藪萬藏氏の長男にして嘉永五年一月二十日を以て生れ、明治三十三年八月分家して一家を創立す、現今筑後水力電氣及大川鐵道の二株式會社の顧問たり、外に久留米市會議員、久留米市參事會員、久留米市營瓦斯總務委員を兼ね、久留米市に於ける濫澤男たり。

夫人をつた子といふ、男守治氏は現今筑後水力電氣株式會社の社長たり、長女たき子は耳鼻咽喉科の大家醫學博士金杉英五郎氏の夫人たり。

村田平左衛門君

△出生地 兵庫縣
△現住所 兵庫、神戶、平野
△生年月 嘉永元年八月五日

農業

君は大融氏の長男にして嘉永元年八月五日を以て生れ、明治十一年家督を相續す、幼名を良三郎と呼び後平左衛門と改む、明治十六年縣會議員に舉げられ、爾後諸種の公職に推舉せられしが後驕然として悟る所あり、復此等の職務をさけて專心一意、農事の改良に盡力して他念なしといふ。

三輪信太郎君

延壽堂病院院長 兼院主 從五位 勳五等 醫學博士



君は石川縣の人三輪正氏の長男なり、明治二年九月三日を以て金澤市白菊町に生る、母堂くに子は君が十二歳の時に病を以て逝く、前代議士三輪信次郎氏は正氏の令弟、即ち君の

叔父なり家世々同地の名門にして聲名一郷に普し、明治十五年上京、醫學豫備校より更に獨逸協會學校に轉じ、後大學豫備門に入る、幾もなく高等學校と改稱、次で第一高等中學校を経て東京帝國大學醫學科大學に進み、二十七年十二月優等の成績を以て卒業醫學士と成る、直ちに弘田博士の下に小兒科の助手と爲り研鑽に勉む、二十八年十一月私費を以て獨逸へ留學、有名なる小兒科學の大家ポイゾネル氏に就て攻學する事滿三ヶ年、三十一年十一月歸朝直ちに醫科大學講師を囑託せられ三十三年十二月論文を提出して醫學博士の學位を授與せらる、年齒而立左右にして如斯最高の名譽を得るは蓋し異數なり三十四年五月同大學教授に任せられ、大正二年十月二十一日休職、現今神田裏猿樂町二、三、四番地及猿樂町二丁目

薩摩治兵衛君

織糸金巾商 勳五等

△出生地 東京府 東京市 神田、駿河台、本町
△現住所 東京府 東京市 本町、八七〇
△生年月 明治十四年十二月四日

東都駿臺の勝地に宏大壯麗侯伯を凌ぐ邸宅を構へ、富豪廣集せる神田に於て殷富第一を以て數へらるゝもの是れを薩摩治兵衛君とす、君は先代治兵衛氏の嫡男にして、明治十四年十二月四日を以て生まる、幼名を治郎八と呼び、明治三十三年二月家督を相續して先代の名に改む、家は先代の時より木綿糸織物商を營み、夙に富豪を以て目せらる、蓋し先代は人と爲り英敏篤實にして非常なる勤儉の美德を有し、よく家人を戒めて躬行實踐、以て多額の餘財を積むに至れりと雖も其致富の主なる原因は商機に長じ、企劃する所悉く巨利を博したるに因るは言ふまでもなきことなり、先代が機に投じ略を連らして、常に巨額の利を占めし一例として傳稱せらるゝことあり、即ち明治維新の際都下の争擾は言語に絶し、幕軍の殘黨將に事を構へんとする有様なりしかば、滿都の商賈悉く戸を閉じ多くは老幼を援けて避難に急にして、敢て家業を營まんとするもの無かりき、先代は早く之れを看取し即ち商家に就て非常なる廉價を以て貨物の買収に着手し、自家の有する所の金銭は囊底を叩いて悉皆支出し以て商品に代へたり亂幾干も經ずして鎮まり、秩序回復して商價舊の如く業に就くに及び先代の獲得したる利益は多大を極めたり、其機を捉ふるに妙を得たること概ね此の如し、されば商運益々振ひ遂に巨大の富をなすに至りぬ、君之れを繼いで業を承け勤務怠らず日夜孜々として止むことなく、家憲を遵守して節儉自ら

十一番地に於て小兒科専門の延壽堂病院を開き之が院長たり而して其設備の完成、規模の宏壯東洋無比と稱せらる、業績數十枚舉に遑あらず、最近の一大著述たる「小兒科學」は斯界の優秀なる、熱誠の攻學、摯實の治術と相俟て杏界稀に見る曰く清静以養其心、強毅以篤其志、是れ即ち君の全人格に對する不可侵の告白辭たらざる莫しとせんや。
夫人八三子は久米良作氏の令妹にして才媛の譽高く、喜一郎、信作、信三郎の三男、貞子、元子、義子、智子、文子、榮子の六女あり、洋々たる家庭の間に於て、歡聲不斷なりといふ。

前谷久太郎君

愛媛縣多額納稅者 大地主

△出生地 愛媛縣 宇摩、三島
△現住所 愛媛縣 宇摩、三島
△生年月 萬延元年二月十日

愛媛縣の一大地主にして富豪の名遠近に隱なき者を前谷久太郎君とす、君の嚴父を長平氏と謂ふ、君は即ち其長男たり、萬延元年二月十日を以て生れ、明治二十年七月家督を相續す、資性堅實にして温厚なり、社會の信望太だ厚し、資産は田地大部分を占め六十萬圓を超ゆ、令聞きしの子は同縣井川徳太郎氏の長女、男貞太郎氏、養子武一氏、女はつ子、同艶子あり、女またよ子は廣島縣小西庄兵衛氏の孫準三氏に、同うた子は愛媛縣阿部音五郎氏の長男恵一氏に嫁し、姉あき子は其夫竹造氏に従ひ、弟豐藏氏は妻もか子と共に分家せり

奉じ、よく父君の志業を紹述して夙に令名内外に揚がり、富家に育ちたる人の稍々もすれば驕侈にして放縱度無きに反し、君は身を持すること謹嚴にして毫も財を以て人に誇るの姿態無く、殊に平素公共事業に盡力し彼の日露戰役に當りては、率先義金を獻じて奉公の誠を表し功によつて勳五等に叙せられ瑞寶章を賜はりたり、宜なり、君を知るもの、みな君の人と爲りを推尊して措かざるや、資産は三百萬圓以上にして直接國稅約一萬五千圓を納む。
令室をまき子と呼び、東京府杉村甚兵衛氏の長女にして、治郎八、つた子の一男一女あり、令姉はる子は分家して夫徳三郎氏と入夫婚姻せり。

中井半三郎君

洋酒問屋

△出生地 東京府 東京市 富橋、富橋、三
△現住所 東京府 東京市 富橋、三
△生年月 明治三十五年四月廿一日

君は明治三十五年四月二十一日の出生にして先代菊太郎氏の長男なり、幼少にして嚴君の永眠せらるゝの不幸に會し、明治三十八年二月齡僅に三歳にして祖父半三郎氏の後を享けて家督を繼ぐ、洋酒問屋として四境比ぶべきものなく、方今直接國稅二千數百圓を納むるの盛大を致しつゝあり、是れ君が祖先の遺徳の餘恵にして、支配人其人を得たるの所以ならんばあらず。
母堂つね子は千葉縣多額納稅者たる高梨兵左衛門氏の伯母に當り、君を補佐して家政の攝理に任じつゝあり、而して祖母屋壽子猶健在すといふ。

一條實輝君

貴族院議員 宮中顧問官 海軍大佐 從二位 勳三等 功五級 公爵



身華胄の出にして新時代の教育を受け職を軍事に奉じ二朝に歴仕し以て貴公子の範を垂るを一條公と爲す、君の祖先は藤原鎌足に出づ、鎌足の後胤從一位攝政太政大臣道家の三男

實經始めて一條を稱す、實經の後裔内基に至り嗣無きを以て後陽成院の第九子を請ひて嗣子と爲す、公は即ち其後を繼ぎたるなり、慶應二年八月二十四日京都市に生る、故侯爵四條隆歌氏の第七子、幼名孝慶、明治十六年八月一條實良卿の養嗣子と爲る、家督を相續し翌九月今の名に改む、幾もなく元服して從五位に叙し天盃を賜ふ、明治十七年七月公爵を授けらる、是れ舊五攝家の出たる名門を以ての故也、公夙に身を軍職に委ねて國家の干城たらんとするの志あり、即ち素志を貫徹せんとして同年海軍兵學校に入る、精勵研鑽を極む、十八年四月從四位に叙せらる、二十年卒業海軍少尉候補生と爲り筑波及扶桑艦に轉乘し實地に練習す、二十二年佛國に留學を命ぜられ幾もなく少尉に任ず、任學三年佛國製造の軍艦松

鳥號分隊士に補し其の廻航事務委員と爲り之を廻航して歸朝す、時に明治二十五年なり、次で水雷術練習の爲め迅鯨艦乗組と爲る、二十四年七月貴族院議員と爲り二十六年大尉に進む、後赤城、吉野、和泉諸艦の分隊長となる、二十七年八月日清戦役の勳功に依り功五級金鵄勳章及勳六等瑞寶章を賜はる爾來横須賀水雷團第一水雷團副官等に歴任し、北米桑港及隣邦航海を命ぜられ尋で海軍少佐に進み、龍田水雷長に補し從三位に陞授す、後横須賀鎮守府兵事官、佛國公使館附武官に歴補し、從二位勳三等に累進し海軍大佐に進み貴族院議員たり、資性寛厚、身を持する嚴正、華胄の出にして國家の干城を以て任ずる所、是れ公の意氣精神を窺知せらるゝに非ずや、夫人悦子は故侯爵細川護成氏の令妹にして三男三女あり、長女經子は侯爵大炊御門義廣氏の令甥實孝氏を迎へて養子となす、現に正五位勳四等功五級海軍少佐たり、朝子、直子、圭子、實光、實英等あり。

八馬兼介君

株式會社西宮銀行頭取 西宮酒造株式會社監査役 回酒業

君は天保十年七月廿三日を以て生る、八馬勝藏氏の長男也回酒業を營み、汽船數隻を有し資産六百萬圓以上に達す、方今家督を養子永藏氏に譲り、君は隱居して悠々たる餘生を樂しむと雖も、當年實業界を馳驅して、縦横に其手腕を發揮し元氣未だ衰へず、動もすれば廉頗將軍の勇を示さんとする。

武富時敏君

衆議院議員 從三位 勳一等

△出生地 佐賀縣 佐賀市
△現住所 東京、牛込、市谷加賀二
△生年月 安政二年十二月九日

萬卒は得易く一將は得難し、星辰管ならざる如今黨人中眞に君國の大事に盡すべき異材を物色すれば、轉た寂寥の感なくんばあらず、於是乎政黨派の如何を問はず、國家を調理する大器を覓むるに急なるものあり、君は政黨出身の國務大臣として其財政經濟に卓識ありしは夙に萬目の熟知する所、而も其人穩健周應にして頭腦の明晰なる、將其眼光の爛なるは能く事物の眞相に徹底して秋毫の遺算なし、豈一世の偉器ならずや、舊佐賀藩士武富良橋氏の長男にして安政二年十二月九日を以て同藩に生る、夙に漢籍を武富北南氏に學び、後上京して洋學を修め、大に習熟を加へて後専ら原書に就き財政經濟の學を專攻す、將に一家のを見を樹て世に雄飛せんとするに當り、明治七年佐賀の亂あり、君之に坐して後容さる、十一年同志と謀り私學校成寅義塾を起して郷黨の子弟を薫陶す、十四年改進黨の組織せらるゝや、卒先加盟し擧げられて九州改進黨肥前支部幹事となり、尋で佐賀縣會議員に當選し常置委員、副議長、議長に選ばれ、二十年佐賀郡長に任せらる、曩に肥筑日報を發刊し自ら其主筆と爲り自家の主張を公表す、初期議會の劈頭衆議院議員と爲り、第二回の總選舉に際し強壓なる政府の干渉に遇ひ落選したる外、爾來毎回當選し以て今日に至る、二十九年松隈内閣の下に農商務省商工局長、商務局長に任せられ、後三十一年憲政黨内閣の下に内閣書記官長に任せらる、爾來憲政本黨、國民黨、同志會等の最

高幹部として總務委員、政務調査會長等の要職に就き、大正三年の政變に於て大隈内閣に列し逡信大臣に親任せられ後大藏大臣となる、大正五年冠を掛けて野に下り立憲憲政會の總務となれり、爲人、器局遠大、快腕縱橫、論理整然、一絲紊れず實に模範的政治家といふべきなり。
夫人ぬい子は才藻卓絶にして内助の功多し、二男一女あり令嗣敏彦氏は法學士にして外交官たり、其夫人功子は白耳義公使法學博士安達峰一郎氏の長女なり。

國分勤兵衛君

洋酒雜詰醬油商 大國屋主

△出生地 三重縣 桑名市
△現住所 東京、日本橋通、一ノ丁
△生年月 嘉永四年二月二十九日

國分勤兵衛君は三重縣先代亡國分標有氏の長男にして嘉永四年二月二十九日を以て生れ、明治十二年一月家督を相續す洋酒、雜詰、醬油商を營み屋號を「大國屋」と稱す、洋酒、雜詰は文明の進歩と生活程度の向上に伴ひ其需用を増進す、之に加へて君の店舗は信用最も高きものあり、醬油と共に其取引の盛大にして、顧客亦常に君の店舗に蟬集すること偶然にあらざるなり、超凡なる經營の才幹を有するにあらざるば安んぞ之を能くせんや、實に君の如きは有力なる屈指の實業家と謂つべきなり、其信望の厚きも亦宜なりとす、資産は百二十萬圓を算し直接國稅約七千圓を納さむ。
令嗣はいつ子、養子秀次郎氏は東京高等商業學校出身の俊才にして令女ちか子に配せらる、其他令女温子及び孫兒數名あり、家庭圓滿なり。

高橋 是清君

貴族院議員 正四位 勳一等 男爵

△出生地 東京府
△現住所 東京、赤坂表、三ノ一〇
△生年月 安政元年七月二十七日



君は舊仙臺藩士高橋是忠氏の長男安政元年七月二十七日を以て江戸に生る、幼名和久次と言ひ後今の名に改む、慶應三年藩命を以て横濱に出で英學を研究す、明治二年上京開城學

校に入り爾來累進して大學少教授に累進す、四年唐津藩立耐恒寮英語教師に聘せられ六年文部省十等出仕に任じ、後大阪英語學校長に轉ず、爾來教育上に盡瘁する事多年、十四年十二月農商務省御用掛と爲り、以來調査課長、商標登錄所長、專賣特許所長、東京農林學校長等に歴任し二十三年職を退き當時秘露銀山事業に關し當該出資者の囑托を受け、全權委員として秘露に航し以て其任を果して二十四年春歸朝す、翌年日本銀行に入り建築事務主任と爲り、幾もなく西部支部長と爲る、二十八年更に横濱正金銀行支配人に轉じ二十九年同行取締役に推され、三十年副頭取に進み次で頭取に擧げらる、三十二年二月日本銀行副總裁に勅任せられ、爾來山本、松尾兩總裁を補佐して功あり、四十四年六月松尾氏の後を襲ふて日本銀行總裁に陞任せらる、先是三十七八年戰役に際しては

財務官として歐來諸國に差遣せられ、外債募集の大任を全ふして偉功を建つ、更に平和克復後外債處分の爲め再度海外に航し良結果を收めたるに依り、四十年特旨を以て華族に列せられ、男爵を授けられ勳一等に昇叙せらる、幾もなく貴族院議員と爲れり、大正二年春山本内閣成立の際入りて大藏大臣と爲る、資質恬淡宏量、頭腦の明晰なる政治家として中外の推稱を博す、現今政友會に屬す。
夫人をしな子と呼び六男一女あり、令嗣是賢氏は臺東拓殖製糖株式會社取締役たり、家庭頗る平和圓滿なりといふ。

芝川 榮助君

日本原毛株式會社 日本毛絲紡績株式會社各取締
役 芝川商店合名會社代表社員

△出生地 京都府
△現住所 大阪、西、江戸堀北通一ノ
△生年月 廿八、電、土佐堀一五二一三
慶應元年六月十四日

芝川榮助君は京都府下の富豪にして有力なる實業家なり、君は京都府横田清兵衛氏の二男にして慶應元年六月十四日を以て生れ、明治二十四年四月當家の養子となり、同年十月家督を相續す、其人、人格手腕凡を抜き、勤厚にして誠實、精力絶倫なり、内外織物及雜貨の販賣を業とし、店舗を合名會社に改め其代表社員として經營の衝に當り、業務盛大にして社運發展の一方あるのみ、而して君は又日本原毛及日本毛絲紡績の重役として統理指導の任に當り業績益優秀なり、又日本毛絲紡績株式會社取締役として重きをなせり、君が傑出の人たるを知るべきなり、資産は二百萬圓を算す、養母こと子令聞きみ子、令息榮一氏、同榮三氏、令女ひさ子、同樂子、同八重子あり。

佐々木 勇之助君

株式會社第一銀行頭取 株式會社東京貯蓄銀行取締
役 澁澤倉庫株式會社取締役會長 東京銀行集
會所副會長 東京交換所委員 東京興信所評議員
從五位 勳四等

△出生地 東京府
△現住所 東京、本郷、三ノ一九
△生年月 安政元年八月八日

君は株式會社第一銀行頭取として縦横の手腕を揮ふのみならず、株式會社東京貯蓄銀行取締役に於て將た又澁澤倉庫會社社長、東京銀行集會所副會長、東京交換所委員、東京興信所委員として、中央財界に重きを爲しつゝあり、佐々木直右衛門氏の次男にして安政元年八月八日を以て深川區西六間堀町に生る、幼にして和漢の學を修め長じて第一銀行に入り簿記掛と爲る、時に明治六年の事なりき、爾來精勵以て業務に従事し十年一日の如く、是より信用日に加はり地位年と共に進みて明治二十九年九月取締役兼支配人たる要職に上り後遂に其頭取となる、恣して同行の基礎をして泰山の重きを爲すと同時に、其信用を今日の域に進ましむるに至れり、蓋君は一些事と雖も決して輕んぜず、慎重周到の用意態度を以て之に臨むが故に、曾て齟齬杆格を來すことなく常に豫期以上の成功を實現するを以て、君の關繫する銀行は財界の覇者勇者を以て指目せらるゝに至れり、今日世間は君を稱して銀行界の典型的人物と做すもの洵に故なきにあらざる也、日露戰役の功に依り勳四等に叙し瑞寶章を賜はる。
令室房子は東京府士族野村光徳氏の長女なり、嫡子謙一郎を筆頭に修次郎、和三郎、政子、佐和子、若子、恒吉、重雄

安河内 麻吉君

静岡縣知事 正五位 勳四等

△出生地 福岡縣
△現住所 静岡市知事官舎
△生年月 明治六年四月十五日

累進亦累進、官界の諸階級を経て遂に静岡縣知事に榮進し信望最も高く令聞噴々たる安河内麻吉君は、安河内甚平氏の二男にして明治六年四月十五日を以て支海洋邊九州の一角福岡縣下に生る、剛健なる風氣裡に人となり、有爲の資性を承けて才氣衆に拔で、夙に郷校を卒業して後帝國大學法科大学に入り、嶄然として同人の間に頭角を現はし、優秀の成績を以て三十年七月帝國大學法科大学を卒業し法學士の稱號を得初め内務省となり同三十一年六月熊本縣參事官に任じ、爾來和歌山縣、大阪府の各參事官、鳥取、静岡各縣警部長、愛知佐賀各縣事務官、日本大博覽會事務官等に歴任し、四十二年三月農商務省書記官に任じ四十二年十二月内務事務官に轉じ同省參事官を兼ね、後製鐵所次長に轉じ、大正三年内務省警保局長に任じ、今や榮轉して静岡縣知事たり、能く吏僚を統率し其畫策を立つるや周到緻密、庶政舉らざるなく特に同縣の實業界は君の適切なる施政に依り着々として發展しつゝあり、地方行政官中錚々たる傑士たり。
夫人ゆき子は東京府士族亡矢田操氏の長女にして、貞良の徳に富む。

黒田長成君

貴族院副議長 貴族院議員 麿香間祇候 宗秩寮 審議官 從二位 勳一等 侯爵



△出生地 福岡縣 黒田
△現住所 東京、赤坂、福吉、二丁目
△生年月 慶應三年五月五日

皇室の藩屏、貴族院の重望家として世の推重を博するもの

國黒田に居住せしを以て爾來黒田を姓とす、後數代を経て官兵衛孝高に至る、孝高は智勇絶倫にして豊臣秀吉に仕へ、其子長政亦英傑を以て鳴る、後徳川氏に仕へて福岡藩主と爲り封五十二萬石を食む、後十一代を経て長知氏に至る、長知氏は夫の七郷の都落に際し五卿を擁護して畫策縱横、以て維新の大業に偉勳を樹つ、朝廷特効を嘉賞して一萬石を賜ふ、侯は即ち其長子にして慶應三年五月五日を以て生る、幼名を桃次郎又幸千代と稱す、明治十一年家督を相続して今の名に改む、翌年從五位に叙せられ十七年侯爵を授けらる、此年英國に留學しケンブリッジ大學に入り、二十一年卒業歸朝して式部官に任じ皇室制度取調掛を命ぜらる、二十三年官を辭し二十五年貴族議員に列し、二十七年副議長に擧げられ爾來繼續

今日に及ぶ、累功によつて勳一等に叙せられ現に位階は從二位たり。

夫人きよ子は公爵島津忠重氏の令姉にして、長禮、幸子、良子の三子あり、長禮氏は大正三年天々たる春桃の候を以て閑院宮殿下第二王女勳二等茂子と婚を擧げらる。

黒川幸七君

大阪株式取引所仲買人

△出生地 大阪府 大坂
△現住所 大阪、東、北久太郎、三丁目
△生年月 明治四年十二月九日

君は大阪の人先代黒川孝七氏の長男にして明治四年十二月を以て大阪に生れ、十六年三月家督を相続して先代の名を襲ぐ、株式仲買を業とし懇切誠實を以て名聲高く、業務益發展し斯界一面の雄將たり、直接國稅四千有餘圓を納め、今や資産三百萬を以て稱せらるゝに至れり。
母堂りう子、令閨こう子は石崎喜兵衛氏の五女にして、未だ嗣子を得ず。

淺吉和久里子君

吳服商

△出生地 埼玉縣 埼玉
△現住所 埼玉、北足立、草加
△生年月 明治三十三年

埼玉縣下第一の資産家たる淺吉家は代々吳服商を營み、先代半兵衛氏に至りて正に二百萬圓の巨富に達せり、君は其一人娘にして曩に同町の小學校在學中、嚴君病歿せしを以て乃ち家督を繼ぎて家庭の人となる、然れども未だ成年に達せざるを以て店務は擧げて支配人に委ね家務は母堂の攝理に待つ

中澤彦吉君

株式會社八十四銀行 株式會社興業貯蓄銀行各頭 取 臺灣拓殖株式會社 基隆地所建物株式會社 東洋化學工業株式會社 臺灣地所建物株式會社各 取締役 東海商事株式會社 東京砂利鐵道株式會社 社各監査役 合名會社中澤土地保全會社代表社員 酒醬油商

△出生地 福岡縣 中津
△現住所 東京、京橋、南新堀、一丁目
△生年月 明治十年十一月十六日

君は東北實業界の老将白井遠平氏の四男にして白井博之氏の令弟に當り、明治十年十一月を以て福島縣に生れ幼名を時三郎といへり。夙に東上して苦學數年に及ぶ。偶々先代中澤彦吉氏の知る所となり遂に其養子となる。大正元年養父彦吉氏の歿するに及び乃ち家督を繼ぎ彦吉を襲名す、資性溫雅にして事業經營の才幹ある君は、即ち先代の關係せる銀行及會社の重役を繼承するのみならず、先年博濟生命保險會社の創立に努力し、遂に之が社長と爲りしを思へば何人乎君の才物異器たるを推斷するに躊躇せんや、遠平翁の血統を直傳せる君は、徒らに養父の遺業を繼承するのみにて止むものならんや。惟ふに先代は剛毅不屈にして學識亦卓絶せるは、和漢英の學を修め慶應義塾に入りて經濟學を研究し、後竟に衆議院議員と爲りて、政界及實業界に飛躍せる事蹟に徴して知るべし、而も先代は常に安田家を代表して東京市の事業に貢獻せるは、世人の記憶に新たなる所なり、吾人は今先代の事績を擧て君の長短を較するにあらず、唯君は斯の如き實業界の老勇を養父として、而して渠が如き東北の傲骨的快漢の血統を

直系す、活躍して驍名を實業界に博取し來らざらんとするも得べけんや、是れ吾人が君の現當に對し刮目せんとする所以なり。

令閨錦子は先代彦吉氏の愛嬢にして、賢婦の令譽あり、今や警次郎、玉子、禮子等數兒ありて、教養維日足らざるの觀ありと云ふ。

近藤陸三郎君

足尾鐵道株式會社社長 旭電化工業株式會社取締役 役 横濱電線製造株式會社取締役兼營業部長 日 光電氣株式會社相談役 古河合名會社理事長兼營業部長

△出生地 東京府 東京
△現住所 東京、荏原、中目黒、八丁目
△生年月 安政四年正月三日

君は古河系に屬する實業家なり夙に鑛業に志し古河鑛業會社に入り漸次其活手腕を認められ累進して理事となり、現に古河合名會社に理事長兼營業部長として快腕を揮ひつゝ、あり又日光電氣鐵道株式會社に相談役、足尾鐵道株式會社に社長として其經營の事に銳意し、又横濱電線製造株式會社に取締役兼營業部長となり勤勉其任に膺たり、而して近者旭電化工業株式會社に取締役となり、東京の人近藤陸三郎氏の三男を以て安政四年正月三日に生誕し、明治二十六年四月分れて別に一家を創立せり。近藤慎氏は其令兄に當ると云ふ。

令室ひろ子は静岡縣平民近藤周民氏の二女なり。令息眞一氏、長女さわ子、二女よね子あり、さわ子は宮城縣士族船橋了助氏に、よね子は福岡縣士族木部守一氏に嫁せり。

岡部長職君

樞密顧問官 正三位 勳二等 子爵



君は超過の識見と該博の學殖とを有して國家の重きに任じて一身を國家に捧ぐる丹誠を有する貴族の典型なり、維新以降文物制度悉く範を泰西に求めんとするの機運に際し、之れが

長短取捨を謬らん歟、三千年來の光輝ある國體を汚損し、民族をして浮萍の根蒂なきに至らしめんことを嘆じ、夙に社會風教を根柢より改鑄せざる可らざるを識り、多年歐米を漫遊し歸朝後精神教育の緊切を唱導し、東京府教育會長として遠大なる識見を扶植せるは、華胄の出として實に異彩ある行動と謂ふべし、惟ふに君は泉州岸和田の藩主にして、從五位下美濃守岡部長發氏の嫡男なり、安政三年六月伯父正五位岡部長寛氏の養子となる、幼にして穎悟學を好み、和漢の諸書を涉獵す、明治元年十二月泉州岸和田五萬三千石を襲封して其藩主となり、二年正月從五位下美濃守に任ぜらる、同年藩籍を奉還するや岸和田知事となり、四年職を罷めて東京府に貫屬す、八年經國の雄志を抱きて米國に遊學し居ること七年、同國「マサチューセツト」州「コンオクチカット」州等に遊學し、

「ニューヘウンエール」大學に入り、後更らに諸州を漫遊し、十五年英國に渡航し「ケムブリッヂ」大學に學び、更に各國を歴遊して十六年大なる抱負を懐いて歸朝す、十七年子爵を授けられ、十九年三月公使館參事官となり専ら條約改正の調査に任ず、尋で英國公使館在勤を命ぜらる、翌年正五位に榮進し、廿二年十二月外務次官に任ぜられ翌年從四位に叙せらる、廿三年貴族院議員に當選し研究會中領袖の位置に居る、翌年六月特命全權公使(無任所)に任ぜらる、此間鐵道會議々員等となり次で正四位に陞進す、卅年東京府知事に任ぜられ、教育行政の刷新に熱中し、顯著なる治績を擧ぐ、三十四年六月從三位に叙せらる、四十一年彼の第二次桂内閣の成るに及んで上院の有力者を以て入て司法大臣となり、功績甚だ見るべきものあり、後解任するに及んで又上院に歸り研究會の牛耳を執ること舊の如し、四十三年七月正三位に進み、大正五年四月樞密顧問官に任ぜらる、君資質溫健聲音朗々として一見君子の風あり、財利に恬澹にして一身一家を顧みざる崇高なる大精神は、皇室の藩屏として將た名門の出として愧色なき偉器ならずや、

黒川新三郎君

株式會社東京美術俱樂部社長 古物商

△出生地 埼玉縣 埼玉郡、北紺屋、六
△現住所 東京、東京二一〇
△生年月 嘉永二年四月二十五日

君は埼玉縣の富豪小泉平兵衛氏の三男にして嘉永二年四月浦和町に生れ明治六年四月東京神田質商黒川常徳氏の養子と爲る實父平兵衛氏は吳服商を營み豪商を以て名あり、養父常徳氏は古樵と號し茶事を好み、日常書畫茶器を愛玩す、君又養父の意に副はんことを欲し業務經營の傍ら書畫の鑑識に努めて大に得る所あり、小樵と號す、後年古物商條例の發布せらる、や、直に古物商の免許を受け、専心斯業に従ひ遂に岩崎家の信用を得て同家に入出入するに至る、蓋し君が誠實と豊富なる鑑識力を證するの好事例なり、同家所藏の書畫名器にして君の鑑識に依るもの妙からず、黽勉の効果益々業務發展を見るに至れり、君資性濃厚篤實にして同業者間に信望厚く株式會社東京美術俱樂部設立せらる、や推されて社長となり創業の難局に立て能く萬難を排して好結果を擧げ、以て今日の隆盛を見るに至りしは、寔に君が温良なる資性を發揮し大局を調節したる功績を稱せざるを得ず、君又夙に世に處するに宗教の必要なるを感じ、厚く神道金光教に歸依す、君が公私各般の事に當るに皆其信仰する所の教則に基き、至誠至明の精神を以てす、人の推して棟梁の器となすも蓋し所以なきに非ざるなり。

横濱七十四銀行取締役兼支配人 株式會社横濱貯蓄銀行取締役兼支配人 横濱商業會議所議員

君は固と肥前大村の人森領右衛門氏の長男なり、嘉永五年十一月を以て生れ慶應元年四月を以て家督を相續す、年齒二十にして郷を辭し官海に出づ、明治十二年始めて沖繩府を置かる、や擢でられて會計課長となる、時に年二十有七歳なりき、君此要職にありて敏腕忽ち當路者の認識する所となり、後官を辭して當時行務紊亂收拾すべからざる七十四銀行に聘せられて之が整理の任に當り、時の頭取茂木惣兵衛氏の信任を博し、同行の衰運を挽回して大に穎才を稱せられ、爾來現頭取大谷氏を助け同行をして今日の發展を見るに至らしめたり、君の用意周到なるや一些事と雖も輕々看過せざるは勿論行員を使備するに於て恩威並び行はるは即ち君の聲望の籍甚たる所以なる歟。

鹽田忠左衛門君

香川縣多額納稅者 商業

△出生地 香川縣 三豊、仁尾
△現住所 香川、三豊、仁尾
△生年月 天保十四年一月二十九日

君は鹽田忠左衛門氏の長男にして天保十四年一月二十九日を以て生る、明治六年十二月亡從弟廣太郎氏の後を承け、家督を相續し、父の名を襲ぐ、曾つて代議士として議政壇上に立ち、國士の面目を發揮し、又村長の職にありて大に村治に盡くし、村民敬重して令名噴々たり、最近村及び郡に多額の寄附をなし、金盃を下賜せられたり、其光榮大なりと謂つべし、資産百萬圓を算し、直接國稅約八千圓を納さむ。

森謙吾君

大正人名辭典

△出生地 長崎縣 長崎、老松、三
△現住所 神奈川、横濱、老松、三
△生年月 嘉永五年十一月二十三日

渡邊 福三郎君

△出生地 東京府
△現住所 横濱元濱、二ノ一
△生年月 安政二年一月十八日

横濱商業會議所議員 株式會社渡邊銀行頭取 横濱鐵道株式會社取締役社長 東洋モスリン株式會社 横濱電氣株式會社 東京瓦斯株式會社各取締役 株式會社横濱正金銀行 成田鐵道株式會社 八千代生命保險株式會社各監査役 旭日生命保險株式會社 二十七銀行各相談役 渡邊合名會社代表社員 海產物商

天の時は地の利に若かず、地の利は人の和に若かず、事業界に活躍し、偉大の功果を収めんとすれば、時勢の進退を洞察すると同時に地利的關係の適所を得ざるべからず、京濱實業界の驍將渡邊福三郎君は安政二年一月十八日を以て、日本橋區本木町に生る、渡邊治右衛門氏の二男にして現代治右衛門氏の叔父に當る、家は九代に亘れる素封家にして首都屈指の豪商なり、慶應元年十二月分家して一家を創設し、獨立商業を營む、幼より聰慧にして學を好み、才識卓然として群を抜くものあり、君熟ら横濱港の將來大に矚目すべきを達觀し、明治の實業家として天下の商權を掌握せんと思はば須らく横濱港を利用せざるべからずとなし、早くも時勢の推移に着目して商店を横濱に新設し、石福商店と稱して、海產物貿易商を營む、籌算一として機宜に適せざるなく、業務年と共に隆運を導き、數年ならずして、横濱貿易商中嶄然として頭角を顯はし、聲名隆々たり、君専心事業經營に勵心すると共に國家公益の事に意を注ぎ、曾て東京府會議員に選ばれ、盡瘁

明氏に配し、何れも伉儷の契濃かなり、一門の清福節望に任じ家庭の和樂駘蕩たる春風に似たり。

日下部 辨二郎君

△出生地 滋賀縣
△現住所 東京、赤坂、青山、南、五ノ
△生年月 文久元年二月二十八日

東京鐵筋コンクリート株式會社專務取締役 大正砂利株式會社取締役 正四位 勳三等 工學博士

君は滋賀縣甲賀郡水口町巖谷修氏の二男にして文久元年二月二十八日を以て生る、嚴君修氏は一六居士と號し書道の大家を以て鳴る、實兄は巖谷季雄氏にして小波山人と號し文學界に名あり、君は明治元年嚴君に從ひ富岡鐵齋氏及び神田風陽氏の塾に學び漢籍を修む、二年出京して英語を學ぶ、七年東京府士族日下部東作氏の養嗣子となる、同年帝國大學に入り、理學部土木科を專修し、十三年卒業して理學士の稱を得、内務省土木局に奉職し、翌年宮城縣に派せられ北上川改修工事を督し、十七年大阪府に轉じ淀川改修工事を督す、翌年徳島縣に轉じ、吉野川改修工事を督す、十九年内務省技師に任せられ、二十四年内務省第四區土木監督署大阪勤務より第五區土木監督署長に轉じ、日清戰役後臨時廣島軍用水道部事務官を兼ね、二十九年第七區監督署長に任じ、三十一年東京第一區土木監督署長となり、勅任技師の榮職を受く、官制改正の都合に依り東京土木出張所長を命ぜらる、三十三年官命を奉じ歐洲各國を視察し翌年歸朝す、同年工學博士の學位を授けらる、三十九年十一月辭職して、十二月東京市技師長となる。此間日本博覽會設計調査委員、臨時治水調査會委

貢獻する所少からず、明治二十年政府國防費を民間富豪に求むるや、君卒先して巨額の海防費を献納し、特旨を以て從六位に叙し、金製黃綬褒章を賜はり、二十三年貴族院議員に擧げらる、君現今益々家業の發展を期し、全國各要地に支店を設置し、製品の精良を以て特色とし、販路年を逐ふて擴大せらる、海產物貿易商の發展と共に、實業界に於ける君の勢力も亦益加はり、前記銀行、會社及其他の事業會社に關與し、老熟の手腕を發揮し、業務の發展に力を致しつゝあり、他方横濱商業會議所議員、横濱市會議員、横濱五品取引所理事等の職に在りて指導啓發に努め、實業界の進歩に貢獻する所枚舉に遑あらず、君が實業界に在りて樞要の諸職を兼ね、更に公共の事業に盡瘁すること斯の如し、其精力の常凡を絶するにあらざるよりは、何爲んぞ能く斯の如くなるを得んや、獨り精力の絶倫を稱するのみならず、京濱實業界に於ける君が信望の尋常にあらざるを想ふべし、曾て或人京濱實業家を品評す、曰く兩渡邊の勢力に加ふるに平沼の手腕を合すれば、優に三菱に對抗し得べし、亦以て君が京濱實業界に於て、如何に重きを置かる、かを推すべく家運大に振張したるもの、決して偶然にあらず、而して事業の擴大に伴ひ、石福商店の組織を變更して、渡邊合資會社となし、經營施設の上改善進歩を加ふるあり、商運益々隆興の域に進まんとす。

夫人たま子貞淑の譽高く、四男五女を鞠育し、内助の功多し、長男和太郎氏俊才の稱あり、現に株式會社二十七銀行取締役の要職に在りて快腕を揮ひ、二女増子は横濱の巨商大谷嘉兵衛氏養嗣子幸之助氏に嫁し、四女康子は帝國火災保險會社社長、八千代生命保險會社專務取締役として名ある小原達員に擧げらる、内務省在職中鐵道國有調査委員、鑛毒調査委員、市區改正臨時委員を命ぜらる、君土木技師として斯界の巨壁を以て稱せられ前後三十餘年國家に貢獻する處渺からず後進を誘掖指導し其名を成さしめたるものまた渺からず。現今東京鐵筋コンクリート株式會社專務取締役、大正砂利株式會社取締役たり。

令聞まを子は養父日下部東作氏の二女なり、養父東作氏は書號を鳴鶴と呼び、實父一六居士と並稱せられ現代に於ける臨池界の泰斗を以て稱せらる。

坪井 速水君

△出生地 岐阜縣
△現住所 大阪、東、豊後、六七
△生年月 文久二年二月十一日

坪井内科醫院院長 正六位 醫學博士

君は岐阜縣坪井伊之助氏の長男にして、文久二年二月十一日を以て生れ、後分家して一家をなす、幼より學を好み、俊敏の才あり、夙に醫學に志を立て、豫備的教育を受けたる後東京帝國大學醫科大學に入り、明治二十三年同大學を卒業して醫學士の稱號を得、當時ベルツ博士の助手となりしが、後拔擢せられて韓國釜山病院に赴任し、尋で岐阜縣立病院に入り、三十年大阪府立高等醫學校教諭に任せられ、初め小兒科に在り、令名噴々、推されて内科醫長となり、三十八年職を辭し、醫院を大阪に開設し、診療に従事す、四方君の靈腕を慕ひ、診を請ふ者常に雲集す、故ありと謂ふべきなり、四十一年一月論文を提出し、醫學博士の學位を授けらる、曾て醫術開業試驗委員として令名ありき、資産七十萬圓を算す。

牧田 清左衛門君

伊勢清吳服店主

△出生地 茨城縣
△現住所 東京日本橋、堀江、三ノ
△生年月 弘化二年一月十五日



江戸文明の最後の
盛観を極めし化政度
の頃、贅澤屋なるも
のありて、珍柄新型
の製作に力め、流行
の先驅を成しけるが
就中二子織古渡唐棧
に新趣向を施して、
草織なるものを發明

し、能く時好に投じて忽ち流行を極めたる事あり、是れ即ち
牧田家の祖先たる牧田清助氏の文政元年岐阜より出で、江戸
八丁堀に吳服店を開き、始めて試みたる事業なりき。爾來着
々成功を収め後堀江の現住所に移り盛に販賣するに至れり、
其子業を繼ぎて清左衛門と稱しけるが、不幸夭折せしを以て
養子を迎へて三代目清左衛門を繼がしむ、當時水野越前守の
非政をうけて殆んど没落に瀕せし家運を廻して益々家業の發
達を計り、一方區會議員となり、區の繁榮の爲めに盡瘁する
所頗る厚く、後東京商業會議所議員たりき、第二回内國博覽
會の開かるゝや、率先して出品し有功賞を賜はりき、二十五
年紋織御召に定紋を織出す事を發明し、第四回内國博覽會に
出品し、亦有功賞を得たり、斯の如く先代が織物に對する工
夫は殆ど天才的にして同業皆範を君に取らざるなかりしとい

ふ、晩年業を養嗣子にゆづりてより天性の嗜好たる政治問題
に意を注ぎて寧日なく、殊に故男爵楠本正隆氏と深く契る所
あり、東奔西走曾て席温かならず、政治問題にて苟も區内に
關係あるものは皆與らざることなし、而も自ら表面に立つこ
とを好まず、常に裏面に計をめぐらし、些も私心なく、爲に
人望の隆々たるは驚くばかりなりき、明治二十八年の春、不
幸病を以て逝きぬ、逝去の報傳るや濫澤男特に訪れて「深く
信せし君を會議所に得て而も忽ち易質す、失望に堪はず」と
弔せられしといふ。君は茨城の産、高橋彌兵衛君の長男にし
て弘化二年一月十五日を以て生る、幼より實業に志し、十一
歳の時江戸に出で、丸屋吳服店に實習する所あり、明治十四
年四月先代清左衛門君の知遇を得て、遂に懇請せられて養子
となり、二十八年三月家督を繼ぎ先代の名を襲ふ君や守成の
才厚く、爾來熱心以て家業に従ひ、今や堀江の一廓に、伊勢
清吳服店の屹立するを知らざるものなし、堀江は老舖軒を比
べて嚴存するの所、其中に在りて洋風の大夏巍然として聳ゆ
るは即ち君が店舖なり、扉を排して花壇の如き陳列棚を一瞥
すれば、所謂伊勢清が主義とする薄利多賣主義を以て、優良
なる純日本趣味の新柄を提供するを得ざるべし、徒ら
に店頭を美装して顧客を瞞着せんとするが如き現代の奸商は
もし一度君が店前に立たば、耻汗面を掩はざるを得ざるべき
也、今や國稅五千餘圓を納むるの盛況に在る故なきにあらざ
る也、君や業務の傍時世を透察して諸事業に投資し着々功を
收め一方都下有數の大地主たり。今や業なり名遂げ餘生を山
水に悠遊して、店務は之を長子清之助君に見せしむ、清之助
君は明治二十年三月の出生にして、夫人をみつ子と呼ぶ。

池原 鹿之助君

△出生地 愛媛縣
△現住所 大阪、北、網島、三三
△生年月 明治四年八月十三日

大阪商業會議所特別議員 宇治川電氣株式會社取
締役 堺セルロイド株式會社監査役 株式會社藤
田組理事兼庶務課長

君は藤田組理事中の敏腕家として令名噴々たる新進人物な
り、理事と爲りて未だ多くの年所を経ざるも、他の理事は藤
田組の元老として優待せらるゝを以て、實地に手腕を揮ふは
君に於て獨り之を見るのみ、聲望を博するもの偶然にあらざ
る也、案するに君は明治四年八月十三日を以て愛媛縣周桑郡
小松町大字新屋敷に生る、家固より豊かならずと雖も君に穎
脱の才あり、是に於て平夙に苦學勉強して高等文官試験に應
じ、合格して奈良縣參事官に任ず、幾許もなく鶴原定吉氏
の大阪市長と爲るや、拔擢せられて大阪市助役となり、當
時の高級助役は即ち大阪電燈の菅沼達治氏なりき、君隱忍し
て其職に在り、拮据精勵を以て聞わたりしが鶴原市長の辭職
と共に市吏員を辭し、聘せられて藤田組に入り理事に上任せ
しは明治三十七年三月の交なりき、爾來専心一意、業務に執
掌して以て今日に到る、君己に官界の苦味を嘗め而して現職
に就けり、君として眞に其時を得たりと謂ふべし、現今餘力
を以て宇治川電氣、堺セルロイド等の重役となり、又曩に推
されて大阪商業會議所議員たり。

君は滋賀縣人田附甚五郎氏の養弟にして文久三年十二月十
五日を以て生る、明治二十二年五月分家して一家を創立す、
君幼少の頃大阪に出で明治二十二年獨力を以て綿布商を開業
し、着々成功の域に進むや傍紡績及棉花業を始め、又綿絲間
屋を創業する等寸秒と雖も發展向上を策して怠る所なし、而
かも行く所として可ならざるなき君が才腕は、何事に當りて
成功せざるなく遂に百萬以上の富を成すに至れり、君曾て提
唱して三品取引所の創立に力め現に其監査役たり、君現今山
陽紡績の専務取締役にして外に東成土地建物、大阪紡績、京
都電氣、和泉紡績等の各會社に重役たり、今や直接國稅四千
六百圓を納むといふ、一綿業者の徒弟より身を起し鉅萬の富
に足るべしといふ。

夫人をこも子と呼ぶ、塚本治右衛門氏の三女なり、三女定
子健在するの外、皆夭折せるを以て同縣人田附太郎兵衛氏の
令弟竹治郎氏を迎へて養子とし、同塚本外次郎氏の令妹ゆき
子を以て娶はせ、又田附太兵衛氏の五男繁次郎氏を養子とな
す、令孫左一、欽二、收三、安子の數子あり、皆竹次郎氏の
子なり。

田附 政次郎君

△出生地 滋賀縣
△現住所 大阪、東、備後、二ノ五八
△生年月 文久三年十二月十五日

山陽紡績株式會社専務取締役 東成土地建物株式
會社 大阪紡績株式會社各取締役 株式會社大阪
三品取引所 京都電氣株式會社 和泉紡績株式會
社各監査役 綿糸商

池田 仲博君

△出生地 靜岡縣
△現住所 東京、豊多摩、千駄ヶ谷原
宿二六六、電話二八二
△生年月 明治十年八月二十八日

貴族院議員 陸軍歩兵中尉 從三位 勳三等 侯



君は舊鳥取藩主に
して清和天皇の孫、
六孫王經基五世の孫
池田紀伊守信輝の後
裔也、信輝始め織田
信秀に仕へ後豊臣秀
吉に屬す、其子輝政
に至り徳川家康に屬
して關ヶ原に殊勳あ

り、播州五十二萬石を食み、姫路在城。輝政の第二子忠繼に
備前二十八萬石を賜り別に一家を爲す、是當池田家の祖たり
寛永年間、光仲因伯二州に移封三十二萬石を領し、鳥取在城
數代の孫輝知氏に至り侯爵を授けらる、君は徳川慶喜公の五
男にして公爵徳川家達公の令弟に當り明治十年八月二十八日
を以て駿府に生る、二十三年輝知氏の養嗣子となり家督を繼
げり、君夙に軍籍に入り三十一年陸軍士官學校を卒業す、歩
兵少尉に任じ歩兵第二聯隊附に補せらる、後病の爲に休職さ
なり歩兵中尉從三位勳三等たり、四十一年歐米に漫遊し大に
得る所あり、翌年四月歸朝す、目下貴族院議員たり。
夫人亨子は養父輝知氏の二女にして、疎理、徳眞、博久、
博正、幹子、謙子、靜子、溫主等の令息令嬢あり。

茂木 鋼之君

△出生地 靜岡縣
△現住所 東京、小石川、原、三
電、小石川、一三三四
△生年月 安政五年六月

港灣調査會委員 日本郵船株式會社航海課長 東
京サルウエージ株式會社取締役 勳五等

君は靜岡藩士茂木茂氏の長男にして安政五年六月を以て生
る、明治五年攻玉社に入り數學及航海術を修め、同十一年一
等運轉士として三菱會社に入る、同十二年會社の琉球航路を
開始するや、君はキャプテン、トーマスと共に同航路の港灣
を測量し寄港地選定の事に當る、同十六年十一月船長に進む
時に年僅かに二十有五、同十八年十月三菱會社共同運輸會社
と合併して日本郵船會社となるや同社に入りて船長たり、曾
て高知縣浦戸港を測量して海圖を作り、海軍省水路部に提出
して賞品、賞狀を授けらる、明治二十七八年の戰役に於て君
は初め陸軍輸送船に船長となり、後海軍病院船神戶丸の船長
に轉じ功に依り勳六等に叙し旭日章を授けらる、同三十年八
月監督助役に轉じ本店勤務となり、主として航海及海技者監
督の任に當たり、三十二年及三十四年の前後二回支那朝鮮に
出張し、東洋近海航路及支那内地の河川航路を調査す、彼の
湖南汽船株式會社の設立せられたるは實に君の調査に基きた
るものなりと、三十八年戰役に際し御用船事務を監督し、功
に依り勳五等に叙せられ旭日章を授けらる、同三十九年監督
に進み四十四年十二月五日航海課長に擧げられて今日其職に
あり、君平素意を港灣の研究に用ひ蘊蓄極めて多く、若松、
三池の築港の如き君の設計に基くものにして斯道に關し聲名
ある功勞者なり、明治三十九年大藏省臨時建築部の顧問を囑

託せられ、横濱、神戸築港の議に參し、四十年内務省に港灣
調査會の設置せらる、や、君擧げられて臨時委員となり、四
十四年其正委員を命ぜらる、君の最も意を注げるは海技者の
養成と海難事故の絶滅とあり、三十年來之が研究と實現と
に盡くしつゝあり、郵船が最大多數の船舶を有するに拘はら
ず、他に比し坐礁衝突等の海難事故の少きは君に負ふ所實に
大なりと言ふべし。
令閨をまさき子と呼び、長男省一、長女敏子の一男一女あり

八木 久兵衛君

△出生地 宮城縣
△現住所 宮城、仙臺、大町
△生年月 嘉永二年三月二十九日

宮城縣多額納稅者 仙臺商業會議所會頭 東華生
命保險株式會社社長 株式會社宮城貯蓄銀行 株
式會社七十七銀行各頭取 仙臺瓦斯株式會社社長
株式會社白石銀行相談役 八木合名會社仙臺味噌
醸造所代表社員

君は仙臺味噌醸造所の代表社員なり、而して仙臺味噌は其
風味に於て他府縣醸造の其れに比して優逸なるのみならず、
其價格の廉なるに於て世間一般の歡迎する所となり、就中
央帝都の味界に於て仙臺味噌の需用多きは吾人の言を俟たざ
る所也、今を距る二百六七十十年前即ち二代將軍徳川秀忠卿の
治世當時、奥州六十萬石の大々名伊達陸奥守は江戸の藩邸に
於て家族三千餘人に供給する目的を以て、其品川邸内に自國
の味噌醸造所を設置せり、然るに其風味の佳美にして且變味
なきより、知らず識らずの間に世上に喧傳し之が分與を乞ふ

もの年と共に盛んなり、是れ仙臺味噌の江戸に嚮賣するに至
れる濫觴なりとす、而して君の家は之が醸造に多大の經驗を
有するより曾て藩主の特種事業たりし味噌の利權を讓渡し且
之を獎勵するや君感奮して起ち、爾來其原料を精選し價格を
低廉にして以て倍々之が發展に銳意せる結果は、今や陸海軍
兩省を通じて仙臺味噌のみを需要するに至れり、以て事業の
盛んなるを知るべし、而も其需用の範圍は單り内地に止まら
ず、遠く海外に輸出し其額亦年と共に増加するをや、仙臺味
噌の聲譽夫れ豈偉ならずや、人と爲り豪快にして果斷に富み
周密にして事に違算なきは衆の服する所にして醸造業以外、
各種の銀行會社に重役たる所以なり、郷土の商工業者は君を
推して商業會議所會頭と做すもの寔に故なきにあらざる也、
君東北の發展を策し遂に東華生命保險株式會社を起し、自ら
其社長として經營に當りつゝあり。

森 宗作君

△出生地 栃木縣
△現住所 群馬、山田、桐生
△生年月 文久三年三月十三日

株式會社四十銀行 株式會社館林貯蓄銀行各頭取
模範工場桐生燃絲株式會社 兩毛整織株式會社各
取締役 勳六等

君は篠田由兵衛氏の次男にして文久三年三月十三日を以て
下野國に生る、明治十六年四月先代森宗五郎氏の養子となり
其家督を相續す、株式會社館林貯蓄銀行を設立して其頭取に
推選せられ、更に株式會社四十銀行の頭取となり、兩毛整織
株式會社、模範工場桐生燃絲株式會社取締役として其經營に
與り縣下事業界の重鎮を以て稱せらる。

野村龍太郎君

正三位 勳二等 工學博士



△出生地 岐阜縣
△現住所 東京赤坂、新坂、三五
△生年月 安政六年正月二十五日

本邦に於ける鐵道學者として有名なるを松本、古市、平井野村の四氏と爲す、而して野村君は岐阜縣大垣の藩士にして安政六年正月二十五日を以て生れ、明治十四年七月東京大學理學部を卒業し専ら土木工學に通ず、卒業後直に東京府に聘用せられ御用係と爲り、十八年八月東京府技師に任せられ府下に於ける土木の業を管掌せり、當時東京府に於ける橋梁道路等にして君の計畫ならざるものなし、同年九月鐵道局に轉じ鐵道一等技手と爲り、廿三年官制改正の爲めに鐵道廳技師に任せられ、廿九年十二月鐵道視察の爲めに歐米漫遊を命ぜられ、深く先進國の鐵道に就き調査を爲し得る所頗る多かりき、三十一年三月逓信技監に累進し監理課長心得を命ぜられ、翌三十二年工學博士の稱號を受け四十一年十二月逓信省作業局廢せられ、鐵道院を新設せらるゝに及び、建設部長に任せられ總務部長を兼攝し、翌四十二年鐵道院技監に昇進せり、四十四年國際旅客交通會議參列の爲めに英京倫敦に赴き大正二年五月運輸部長に任せられしが當時鐵道院總裁たりし

平井晴次郎氏、中華民國鐵道顧問として招聘せらるゝに至り氏は其後を襲ぎて副總裁たり、後舉げられて滿洲鐵道株式會社總裁の榮職に就きしか幾くならずして大正三年大隈内閣の成立後冠を掛けて去りぬ、氏資性温良勤恪にして人と争はず院の内外を問はず德望隆くして敬服せざるものなし、殊に氏は大學卒業後暫らく東京府技師として土木の業を管掌せしのみにて、爾後三十餘年の間常に鐵道の業にのみ従事したるを以て、斯業界の大家を以て推稱せられ苟も本邦の鐵道に關する事、一として知らずと云ふことなく、全國に亘れる線路の建築橋梁の架設等にして氏の計畫にかゝるもの殆ど枚舉に遑あらず。

夫人てつ子は男爵小原駈吉氏の令姉にして、龍吉、駿吉、信夫、陸雄、美恵子、壽恵子等あり。

龜田利三郎君

製藥業

△出生地 京都府
△現住所 京都下京、五條室、四入
△生年月 明治八年九月五日

六神丸、仙丹の名が賣藥中最も廣く人口に膾炙し、尙且つ其効能を認めらるゝ如く、龜田家は其本舖として廣く知らるゝ所なり、君は先代利兵衛氏の長男にて、明治二十四年此由緒ある家名を繼ぎ家督を相續す、君幼少より斯業に對する深き經驗を有せるを以て、爾來一意家業の進展を圖り營々として捷ます、前記の外多くの名ある賣藥を製造し、今や資産約七十萬圓、直接國稅千數百圓を收め、本邦有數の製藥業者となるに至れり。

高松豊吉君

工業試驗所々長 東京帝國大學名譽教授 正四位 勳三等 工學博士



△出生地 東京府
△現住所 東京本郷、西片、三
△生年月 嘉永五年九月十一日

嘉永五年九月十一日を以て東京淺草阿部川町に生る、先考は喜兵衛氏にして君は其長男なり、家世々名主役を勤め近隣の推稱する所たり、幼時群兒と嬉戯するを好まず、垂髫夙く已に百家を涉獵して儕輩を壓したりといふ、長じて天文臺主中西金吾氏に就て數漢二學を修む、明治四年大學南校に入り尋で開成學校に移り、豫科課程を修了して東京大學理學部に入り専ら化學を修む、十一年全科卒業理學士の稱號を受く、次で東京師範學校教師と爲り、十二年官選を以て歐洲へ遊學マンチエスターのオエンス大學に入り理化並に製造化學を修む、十四年倫敦化學會員に擧げられ、尋で同大學製造化學の定期大試験に應じて最高點を得賞品を受く、幾もなく獨國柏林大學に轉じ更に製造化學の蘊奥を極む、十五年獨國化學會員並に英國工業化學會員と爲り錦上花を添へて歸朝、直ちに文部省御用掛兼東京大學理學部及び同豫備門講師と爲る、十七年理科大學教授に任じ正七位に叙し更に職工學校應用化

吉本重光君

大阪府會議員

△出生地 大阪府
△現住所 大阪北、梅田、三三六
△生年月 明治元年十月十七日

君は大阪の人山上重一氏の叔父に當り、明治元年十月十七日を以て府下平野郷町に生る、山本清右衛門氏五男なり、明治二十三年先代吉本五郎右衛門氏の養子となり、後分家して一家を創立す、資産百萬に近く、多數の家屋と地所とを所有するを以て近郷に名高き舊家たり、現今推されて大阪府會議員に選出せらる。

山田 又七君

△出生地 新潟縣
△現住所 新潟縣長岡、長六三
△生年月 安政二年八月十五日

長岡商業會議所議員 大阪點燈株式會社取締役
日之出生命保險株式會社 株式會社北越新報社
北越製紙株式會社 株式會社中越銀行各監査役



君は安政二年八月十五日を以て越後國三島郡の一寒村に生る、嚴父彦右衛門氏の七男にして家は世々里正たり、夙に獨立して事業を經營せんと志望し、明治十二年水力を利用し綿糸を製造する工場を設立し、後親しく紡績事業を視察せんとして關西地方に出張し、實況を目撃するに及むで自己の事業に怍怍たるものあり、斷然初志を離れて石油採掘の業を企畫するに至れり、然るに當時人智未だ幼稚にして石油事業の如き一概に惡性的投機事業と見做し、比隣舉て擯斥し又一人の省みる者なかりき、此秋に方り君毅然として起ち而も群疑を排し、悍然として當面に猛進し百折撓まず千挫屈せず、而も慘澹たる經營の下に一萬五千圓の資本を投じて資田石油會社を創立せるは正に明治二十六年の交なりとす、箭已に弦頭を離れたり、留まる所に止まらずして進むべけんや、爾來滿幅の熱心を傾注して拮据忘たらざるより、歩一步、進一進、

着々として漸次順境に進みたるを以て、其翌年末には古志石油會社を首め數社を合同して其基礎を鞏固にし其事業を擴張し、同三十二年には更に資本を増加して百五十萬と爲し、茲に始めて北陸實業界の大會社たるに至れり、惟ふに北越地方は帝國にありて石油の礦脈を地層とするは、ライマン氏の調査に依りて明らかなると同時に、日清、日露の大戦を経由し歐洲の戦争に遭遇せる帝國は俄然事業熱の勃興を來して、而も石油事業は帝國にありて一大有利事業なることを唱道するに至るや一躍一千百六十五萬圓の大資本を計上し斯界の泰山北斗を以て任ずるに至れり、蓋資田會社をして今日の盛況に達せしめたるもの、時勢の駢連に依ると言ふ雖も君にして堂々たる成案を提げ、事業を計畫して成竹の算なくんば、豈此境に到達するを望むべけんや、君亦第十回の總選舉に際し推されて郡部の候補者と爲り難なく反對黨を征服して月桂冠を戴き、日比谷原頭の人と爲りたる如き甚麼に君の聲望は新潟關縣に旺んにして、而も德望の尤なるを察すべきにあらずや今や政治的功名心なしと雖も、必らずしも國家的問題を閉却するものに非ず、機會一到せば結束して再起すべきは吾人の深く信する所也、君の前途豈啻石油業界のみならんや。

小栗 三郎君

△出生地 愛知縣
△現住所 愛知、豊多、牛田
△生年月 安政五年

半田倉庫株式會社取締役 醬油醸造業

醬油醸造を以て愛知縣下著名の舊家たる小栗氏は營業方針の堅實にして、信用を重んじ薄利多賣主義の實行者として著

名なり、現今半田倉庫株式會社の取締役として同地唯一の倉庫會社の經營に當り、成績の良好なるを以て頗る噴々たるものありといふ、君齡既に六十經驗に富み聲望を有するを以て同地方實業界の重鎮を以て目せらるゝ固より其所たり。

金杉 英五郎君

△出生地 千葉縣
△現住所 東京、神田、駿河、南甲賀
△生年月 慶應元年七月十三日
△生年月 慶應元年七月十三日

衆議院議員 慈惠醫院醫學專門學校教授 大日本
耳鼻咽喉科學會名譽會頭 東京耳鼻咽喉科醫院長
金杉療養館長 中央衛生會委員 醫學博士 ドク
トル メヂチーネ

君は千葉縣の人金杉與右衛門氏の三男にして慶應元年七月十三日を以て生る、後ち同姓にして叔父なる故内務書記官金杉恒氏に養はれ入て其後を繼ぐ、幼にして麒麟兒の稱を博す弱冠夙く己に頭角を儕輩に抜く、初め大志を抱き大に天下に雄飛せんごせしも故ありて果さず、轉じて志を濟世救民に傾く、明治二十年歳二十三にして東京大學醫學部の別課卒業、翌二十一年行程萬里遠く獨國諸大學に遊學、研鑽精勵毎に群を排し業績を作る事無數、儕輩等しく君の精力絶倫に驚嘆せりといふもの故なきにあらず、始め内科に志し後耳鼻咽喉科學を修む、幾もなく研究論文を提出してドクトル、メヂチーネの學位を得、二十五錦衣絢爛芽出度歸朝したり、歸朝後直ちに東京病院の耳鼻咽喉科長として靈妙の手腕を揮ふ、四十二年論文提出醫學博士の學位を受く、次で駿河臺の現處に東京耳鼻咽喉科醫院を開設し、以て一般同患者の診療に従事

したり、而して最近に至り聲音科を創設し、又金杉療養館を開きて一般内科患者の治療を初め、醫學博士佐伯矩氏を以て之が主任と爲す、君亦慈惠醫院醫學專門學校教授として令名噴々たり、先是、中央衛生會委員に選まる、蓋し民間の一開業醫にして帝國醫事衛生行政の最高諮詢機關たる同會委員たるは君を以て嚆矢とす、以て君が尋常長袖者流に非らざるを立證せらるゝにあらずや、資質沈毅、頭腦明晰にして才學兼備す、任侠よく後進を卒ひて情誼を盡す、以茲恩恵に浴するの後輩君を見る事慈父の如く然り、君毎に曰く「吾は是れ一箇の町醫者金杉英五郎にて足れり」と何んぞ夫れ意氣の雄大なるや、滔々たる官府の末流に列せん事を希ふ者天下比々として然らざるなきの時に際し、昂然一開業醫を以て任ずる所眞に敬服す可し、若し夫れ君が日本に於ける耳鼻咽喉科の開祖として斯學の爲に一光明を投じたるは、其の偉勳功績蓋し不朽なりと稱す可からずや、嘗て維納市に開かれたる萬國咽喉科學會に臨席して名譽會頭に推さる、世界に於ける斯學の大家オノデー氏、常に人に語て曰く「東洋只一の金杉あり以て斯學の爲に慶福す可し」と是れ實に君一人の爲のみならんや洵に帝國學界の爲に萬丈の氣焰を吐くものと謂ふ可し、大正六年衆議院議員の總選舉あるや、君東京市より推されて同議員に當選す、以て衆望の厚きを知るべく、日比谷原頭更に一異彩を添へたるものと謂つべし、號は極到、美術の好尚あり而して詩書共に可、就中書は空海道風の筆致を會得し、雲煙漂渺の妙を有す。

令聞をたま子と呼び、貞淑の譽高く、四男二女あり、何れも明珠鳳雛の稱を博す。

岩田作兵衛君

△出生地 岐阜縣
△現住所 東京日本橋、本、一ノ一
△生年月 天保十三年十二月廿五日

桂川電力株式會社 川越鐵道株式會社各專務取締役
水産製革株式會社取締役 青梅鐵道株式會社
監査役



君の實業界に身を投ずるや豊備なる材能と絶倫の精力とは至る所に奏功を收め今や覇を方面に稱するに至れり、亦是れ斯界の老雄と云ふべし。君固と岐阜縣人天保十三年十二月二十五日を以て郷里に生る、嚴君を岩田新七と稱し君は其長子なり、家代々縣下の大地主として聲望あり、君幼にして穎悟夙に大局に着眼し、父祖の遺業に一着色を加へんと志し、横濱に出で、廣く諸事業に驥足を伸ばし、行く所として可ならざるはなく、着々効果を收めて倍々智見と經驗とを得、是れより中央實業界は漸く君の雄名を知悉するに至れり、斯くて東京商業會議所議員に推選せられ、次いで川越鐵道株式會社取締役となる、明治三十五年青梅鐵道株式會社監査役となり今尙其の任にあり、方今は桂川電力株式會社、川越鐵道株式會社の各專務取締役、其他水産製革株式會社取締役等の重責に膺りつゝあり、君器局遠大寛宏にして胸中計る可らざる智

君は明治七年八月二十五日を以て生れ、幼名を武吉と稱し少時より穎敏なりき、曾て史を讀み大丈夫生きて封侯を得ずんば、死して當に閻羅王となるべしの章に至り、慨然として自ら決する所あり、後入りて湯村氏を繼ぐに及び、先代の名を襲ひ、明治三十八年元之と改名し、父祖の資産數十萬圓を繼承するや、爲すあるの士の薄資にして苦しめる者を援助して、活躍せしむるを任となすといふ、而して自ら奉ずる所薄く、衣は寒を防ぐに足れば必ずしも綺麗を盡さず、食は命を繋ぐに足れば必ずしも甘美を盡さず、唯其志の大成を期するといふに至りては、誰か歎美せざらんや、方今直接國稅約四千圓を納むるを以て、縣多額納稅者の一人たりといふ。

湯村元之君

福岡縣多額納稅者

△出生地 福岡縣
△現住所 福岡、三池、三池
△生年月 明治七年八月二十五日

君は舊宇和島藩士西園寺公成氏の二男にして明治二年九月を以て愛媛縣に生る、商業素修學校を経て高等商業學校に入り、卒業後第一銀行に入り、銀行事務視察の爲め歐米各國を巡遊し、歸朝後累進して大阪支店支配人の職に就き、後横濱支店支配人となり、現に其任に在り、資性温厚篤實にして能く人を容れ、泰西先進國の銀行事務に精通し、有數なる銀行家を以て關西地方に名聲あり。

田邊五兵衛君

大日本製藥株式會社監査役 廣業合資會社代表社員 藥種商

△出生地 大阪府
△現住所 大阪東、道修、三ノ六三
△生年月 嘉永二年六月六日

君は大阪の人、田邊五郎兵衛氏の長男にして、嘉永二年六月六日を以て生る。明治四年四月、家督を繼ぐ。家代々藥種を業とし、素封家を以て聞ゆ。曩に歐洲大亂の唐突として起るあり、輸入杜絶して、之を海外より仰げる商品は、俄然として暴騰しけるが、就中獨逸より供給せられ居たる藥品に至りては、其影響を受ける事甚だしく、忽ちにして十倍百倍の暴騰を示し、而も猶供給の不足を訴へるの有様なりき。平生蓄積して、以て不時の用を待つ遠見達識の士は、皆此間に處して巨利を收めざるなし。君巧に處して誤たず、忽ち巨萬の富を積み、今や百數十萬の資産家たるに至れり。而して家業の傍、大日本製藥株式會社の重役たり。

夫人既に歿して、長男五三郎氏は其夫人ごめ子と共に、家政の攝理に任じ、其間治太郎の一子あり、二男元三郎氏は先代田邊元三郎氏の養子となりて、今や其後を嗣ぎ、三男林川郎氏及び四女しま子は共に分家し、長女せい子は西尾宗七氏に、二女たけ子は柴田藤兵衛氏に、何れも嫁して和樂に富むの家庭を作り、四男武四郎及七男五郎氏は共に君の家に在りて研學中なり。

西園寺龜次郎君

△出生地 愛媛縣
△現住所 東京赤坂、青山、南、六ノ
△生年月 明治二年九月二十一日

大正人名辭典 (田邊五兵衛(西園寺龜次郎)(福岡藤八)

福岡藤八君

△出生地 千葉縣
△現住所 千葉、東葛飾、松戸
△生年月 弘化二年十一月十二日

福岡藤八君は千葉縣の人、清宮三右衛門氏の二男にして、弘化二年十一月十二日を以て生れ、後先代藤八氏の養子となり家督を相續す、其人謹厚堅實、巨多の不動産、公債株券、貸金を有し、家屋什器等を併せて資産七十萬圓を算し、信望最も高く、現に株式會社松戸商業銀行頭取の重任にあり、經營最も宜しきに適ひ、銀行の信用隆々として業績優秀、社礎堅きこと磐石の如し、又株式會社千葉農工銀行監査役として重きをなせり、千葉縣財界の有力者を以て目せらる。令息卯之助氏、其令間まさ子及び孫兒數名あり、令女はな子及び養子熊吉氏は共に分家せり。

野元 驍君

△出生地 鹿兒島縣
△現住所 東京、住京、大崎、下大崎、二三四、電話、二六一
△生年月 嘉永六年八月二十三日

株式會社川崎造船所取締役 大阪商船株式會社
東洋木材防腐株式會社各監査役 島津公爵家々令



公爵島津忠重氏の家令たる野元驍君は有名なる實業家にして、數多の銀行會社の創設經營に盡瘁し、從來大阪にありて關西に巨手を揮ひしが、近來東京に移轉し、東都と阪地との各會社に重役として令名あり。君は鹿兒島縣人にして同縣士族山本五郎左衛門氏の二男、嘉永六年八月二十三日の生誕なり。明治七年五月先代野元源五氏の養嗣子となり、後家督を相續せり。幼にして聰明穎悟、夙に大志あり、明治三十一年に、三十二國立、第五國立の兩銀行合併して浪速銀行の創立せらるゝや、第五國立銀行より入りて、常務取締役となり、熱心其發展の爲めに力を盡し、其効績頗る擧がり、三十三年三月同行頭取外山修造氏の後を繼いで頭取の椅子に凭り、全責任を負ひて其擴張の策を講じ、一方には若干の小銀行を併吞すると共に、他方には、西ノ宮、鹿兒島縣限の城、大島等に支店を設け、大に行務の隆盛を謀れり。後職を辭して、日本火山灰株式會社、其他數會社の重役たりしが、現今、東京に住

し、前掲數社の重役たり。曩に日露戰役の功により勳四等に叙せらる。

木村 匡君

△出生地 宮城縣
△現住所 臺北大加納堡驛西門外
△生年月 萬延元年二月十九日

株式會社臺灣商工銀行頭取 臺灣印刷株式會社取締役

君は舊仙臺藩士木村景直氏の二男にして萬延元年二月十九日を以て青葉城頭に生る、年僅に九歳にして經史を家嚴に學び、長じて小學教師と爲れり、但多大の志望を前途に有する君、焉んぞ兒童の教養を以て満足すべけんや、東上して三菱商業學校に入り、學成りて故郷に歸るや一旦師範學校の教員と爲りしも、期する所ありて再び都門に遊ぶや、心機一轉して新聞雜誌に寄稿し、其資を以て英學を學び、明治十八年高等商業學校教授に任ぜらる、是に至りて君の前途は更に光明の輝々たるものありにき。明治二十二年男爵久保田讓氏に従ひ周ねく歐米を巡遊して大に智見を擴め、端なく官僚に認めらるゝや二十八樺山臺灣總督の秘書官として渡臺し、爾來桂、乃木二總督に仕へて治臺に貢獻するもの多し、三十四年挂冠して三十四銀行に入り、同銀行の臺灣支店長より總支配人と爲り、三十八年京都支店長に轉じ傍ら銀行集會所、手形交換所委員と爲り、又銀行集會所所屬徒弟講習所の學監として盡力する所あり、同四十三年十月三十四銀行を辭し、四十四年八月商工銀行監査役、貯蓄銀行取締役として渡臺し、四十五年六月兩行合併成るや商工銀行頭取と爲り今日に迫る。

波多野 友江君

△出生地 東京府
△現住所 東京、四谷、南伊賀九
△生年月 明治八年十月廿一日

大日本電球株式會社常務取締役 從七位 勳六等

君は明治八年十月廿一日を以て東京市に生る、君の嚴父尹政氏は島根縣の人にして、幼より大志を懷き、夙く東京に出て大に爲す所あらんとし、一度官海に身を投せしも、故ありて之れを辭し、野に下り初めて府下豊多摩郡に農場を開設し歐米各國より野菜果物及其他農産品の種苗を輸入し、之れが普及發達を圖りしに、大に時好に投じて好成績を得たり、而して當時外國より煉乳の輸入せらるゝもの頗る多かりしかば之れを防止せんとして牧牛場を開き、市内小石川區に煉乳製造所を設け、熟練なる技師を聘して製造に着手し、卅四年更に自ら首唱して四谷銀行を設立し、其頭取に推されて經營の任に當れり、斯くの如く氏は各種事業の經營に忙殺せられながら、餘暇を以て四谷區内に於ける公共事業の爲めに奔走し殆ど席の暖まるに暇なかりしが故に、區内に於ける德望頗る高きものありき、而して友江氏も嚴父の資質を享け温良にして圭角なく、而かも果斷に富み、苟も事に當りて毫も躊躇することなく、曩に東京市電氣局に在るや能く鋭敏脱兎の如き安藤部長を助けて毫も違算なからしめたるもの所以なきにあらず、今氏の經歷を見るに、氏は夙に東京府立中學校を卒業し、尋いで第一高等學校に入り、卒業後更に東京帝國大學に學び、刻苦黽勉螢雪の功を積み、明治三十四年工科大学を卒業し、工學士の學位を得、後大阪砲兵工廠に奉職し、茲に甫めて平素鍛鍊研究せる學術を實地に應用するの機を得たりし

楠本利八君

△出生地 兵庫縣
△現住所 兵庫、神戸、切戸

土地家屋貸付業

君は先代利八氏の養子となりて、數十萬の財産を繼承してより、唯一念家産の増殖を圖るを祈念し、或は移民會社を創立して、多數の移民を海外に送り、或は金銭の貸付を爲して薄資本家の爲めに、金融の調節を圖る等、諸種の計畫を實行して、何れも多大の成功を收め、現今は主として土地家屋の貸付を業とし、其現に所有する不動産のみにても百萬圓を越ゆるに至れり。

小池 國三 君

△出生地 山梨縣
△現住所 東京日本橋、兜、二
△生年月 慶應三年四月十日

東京商業會議所議員 株式會社小池銀行頭取



君は淺川友八氏の五男にして慶應二年四月十日を以て山梨縣甲府市柳町に生る年甫めて十三一郷の豪商若尾逸平氏の店舖に入り勤勉精勵、寒暑十六星霜を重ね、君嘗て甲武京濱の間に往來して商業の機を察し私に機の到るを待つ。偶々明治二十七年戰役後經濟界俄に膨脹し、新事業の勃興するもの擧げて數ふ可からず、君其手腕を斯の間に誠み多年の雄志を伸ぶるの機到來せりと爲し、蹶起凜然として帝都に入り先づ居を兜町二番地に卜して仲買店を開き徐に風雲を看望したり時に三十年四月なり、斯くて君は誠實勤勉及秘密の三箇條を旗幟として斯界に縦横の手腕を揮ひ、明晰なる頭腦を以て時運を達觀し、寛宏を以て店員を指揮し懇切を以て來客に接せしが故に、嚴正なる仲買人として幾もなく聲名を四方に馳するに至れり、四十年四月組織を更めて小池合資會社と稱し、有價證券買賣業の外、金融信託の二業を兼營し自ら社長と爲る、四十三年八月本邦實業界中仲買業者の代表者として渡米實業團に加はり大に彼我の親交に資せり、四十五年五月株式

宮崎 彌三 郎 君

△出生地 大阪府
△現住所 大阪、東、唐物、一ノ七
△生年月 明治五年四月十三日

日本煉瓦株式會社社長 大坂市會議員 鍋釜諸鑄物 法郎諸器販賣商

大坂市の富屋と言へば鍋釜諸鑄物商として其名遠近に高し實に同家は享保年代より同業を營む舊家なり、其世上に著名なるも亦偶然にあらざるなり、而して同家の當主を宮崎彌三郎君とす、君は先代彌三郎氏の長男にして明治五年四月十三日を以て生る、小中學校を卒へて後曾つて第三高等學校及び慶應義塾に學び、學問の造詣深く文質に富める紳士なり、明治三十九年家督を相續して祖業を繼ぎ、經營是れ専らにして業務日々發展し家運益々隆昌なり、現今日本煉瓦株式會社社長として經營の衝に當り、社業盛大にして基礎愈々鞏固なり、君が超凡の手腕を有するにあらずんば安んぞ斯くの如くなるを得んや、君亦推されて大坂金物同業組合評議員、鑄物部長大坂市會議員たり、公共の爲め盡くす所甚だ多く、社會の信望甚だ厚し。

家族としては母堂と子、令閨ゆき子、男彌之助氏、同武男氏、女康子、同貞子、同須榮子あり、女れん子は大阪府岡田松之助氏に嫁し、弟彌七郎氏は其婦ふく子と共に分家せり

長瀬 傳三 郎 君

△出生地 京都府
△現住所 京都、上京、一條千本西入
△生年月 慶應三年二月十八日

染料 商 君は京都の人長瀬小兵衛氏の長男にして慶應三年二月十八

大正人名辭典 (宮崎彌三郎) (長瀬傳三郎) (榎山半三郎)

會社商業銀行を買収して之が頭取と爲る、大正六年君感ずる所あり、斷然仲買店を廢止して、商業銀行を小池銀行と改め専ら其經營に當りつゝあり。夫人てる子との間に厚之助、謙三、善四郎、領五郎、義郎と生子、もこ子の七子あり、家庭平和にして團圓嬉々たり。

奥村 英夫 君

△出生地 岡山縣
△現住所 兵庫、武庫、蘆屋
△生年月 明治七年九月

明治生命保險株式會社大阪支店長

君は備前國岡山市の人、明治三十一年七月東京帝國大學理科大學を卒業するや、直に明治生命保險會社に入り、翌年十一月會社の命に依り獨逸、佛蘭西、英國に三箇年間の留學を命せられたり、是に於て乎保險に關する一切の學理を研究し且實務の練習を爲すと同時に、尙歐洲に於ける保險界の實地調査を完うし歸朝するや、乃ち本社の事務に對し献策するもの頗ぶる多く、釐革を施したるもの亦敢て鮮からざりき、蓋數理に精しきは君の先天的才能にして、計算に曉らかなるは諸同人の敬服して措かざる所なり、是を以て君の歐洲に在るや、斯界の新科學とも稱すべきアクチュアリーを研鑽し、之が蘊奥を極めたりしを以て、我アクチュアリー會は君の歸朝を歓迎し、爾來多大の敬意を拂ふて以て今日に至る、且夫れ君は頗ぶる文學に富み、文章に老熟せるを以て、君が歐洲に於て獲たりし斯界の新智識を筆端に煥發し來りて、斯業に關する著書亦數種あり、孰れも好著作好參考書として歓迎せられる、以て君の智識該博、研究深甚なるを知るべし。

日を以て生れ、明治十一年三月家督を相續す、代々染料を業とし方今直接國稅約一千圓を納むるの盛業に達せり、殊に歐洲動亂の結果輸入の杜絶してより、染料の暴騰甚だしく爲めに斯業に従事する者は、皆巨利を占めざるはなく所謂成金なる者の簇生を見たるが、君亦其一人に屬し今や百萬の巨富を贏得するに至れり、亦旺なりといふべし。夫人をたか子といふ、羽田勇助氏の二女なり、長女つる子は長野の人太池都雄氏の令弟千尋氏を迎へて婿養子となす、二女てる子の外、令妹へん子は分れて一家を爲せり。

榎山 半三 郎 君

△出生地 東京府
△現住所 東京日本橋小舟、二ノ
△生年月 嘉永元年四月十四日

辨天倉庫株式會社取締役 海產物仲買業

君は東京榎山半右衛門氏の長男にして、嘉永元年四月十四日を以て生れ、先代範平氏の養子となり、明治十三年七月家督を相續し、前名竹藏を今の名に改む、其人勤儉力行堅實にして而かも商才に富む、海產仲買業を營み業務盛大、其店名三浦屋の名は遠近に知らる、信望頗る多く、曩に株式會社日本恒信社監査役、内國通運株式會社評議員たりしが、現に辨天倉庫株式會社の取締役として重きをなせり、資産は二百萬圓を算し、巋然として頭角を同業者間に現はす。

令閨登美子、令息竹藏氏、夫人みわ子、養子仁三郎氏は令女せん子に配せられ、令妹りう子は其夫豊次郎氏に従ひ分家し、令女たま子は東京稻延新太郎氏に嫁し、此外數名の孫兒ありといふ。

園田安賢君

△出生地 鹿兒島縣
△現住所 東京、赤坂、三三
△生年月 嘉永三年九月一日
貴族院議員 日本製炭株式會社 東京國債株式會社
北海漁撈株式會社各取締役 陸軍歩兵中尉
正三位 勳一等 男爵



君は舊鹿兒島藩士園田良左衛門氏の長男嘉永三年九月一日を以て生る、幼名與八郎後安賢と改む、少壯大志を抱き國事に奔走する所あり、明治元年藩兵伍長として越後國に出張、翌年藩の常備兵小頭たり、爾來權區長、區長、選卒、權檢官を経て明治五年大警部に任せられ、七年辭職、此年徵集隊小隊隊長として臺灣征討に従ふ、八年再び警視廳十四等出仕と爲り、更に陸軍中尉に任じ、更に權中警部となり、累進して一等警視補と爲り從七位に叙す、後四等警視、一等警察吏、内務少書記官、石川縣警察部長、同大書記官、二等警視兼内務省書記官等に歴任し、其間明治十七年四月八日歐米に派遣仰付られ、同十九年四月歸朝せり、此年勳四等旭日小綬章を賜ふ、幾何もなく滋賀縣書記官に任じ二十二年一等警視に轉ず、爾後警視副總監心得として書記局長、統計主任、第三局長等に歴任、二十四年警視總監に任せられたり、俊敏明

察吏中の能吏と稱せらる、二十九年勳功に依り華族に列せられ男爵を授けらる、退官後貴族院議員と爲り、再び出で、北海道長官に任せられ在職數年、治績大に上る、挂冠後東京に歸り貴族院議員に擧げらる、君の名譽亦大なりと謂ふ可からずや、君巨腕を實業界に試みんとして朝鮮棉花株式會社創立委員長と爲り、更に主唱して日本製炭株式會社を創立し、更に又東京國債株式會社に社長として名を博しつゝあり、君今即ち下つて野に在るも、之を其の前半生に對比して遜色莫きは争ふ可からず、君の如きは推稱す可き國士の典型と謂ふべきなり。

夫人早世、實、進、たつ子、ゆき子の五子あり、長男實氏は海軍大尉にして、東郷元帥の二女八千代子を娶り、長女たつ子は金子元三郎氏に嫁せり。

佐渡島伊兵衛君

金物商

△出生地 大阪府
△現住所 大阪南、安堂寺、二ノ九
△生年月 安政元年七月六日

君は大阪府小笠原伊兵衛氏の長男にして安政元年七月六日を以て生れ、明治十一年十二月先代つる子の養子となり家督を相続す、君夙に實業に志あり、初め安堂寺橋通り某金物店の店員となり、粉骨碎身、主命維れ奉じて未だ曾つて怠る所なく其行路を他の店員と異にせり、蓋し其志の小ならざるものありしに因る、居ること多年斯業に關する精密なる知識經驗は其間に養はれ、明治九年獨立して開店す、絶倫の精力を以て奮勵活動し遂に巨産を成し、近年特に銅商に依りて巨利を得つゝあり、君の如き立志傳中の人として敬稱するに足る

高木益太郎君

△出生地 東京府
△現住所 東京日本橋、本銀、四ノ九
△生年月 明治二年一月二十五日
衆議院議員 尾西鐵道株式會社社長 法律新聞社長 辯護士



君は東京の人、高木益喜氏の長男にして明治二年一月二十五日を以て生る、少時中學を経て和佛法律學校に入り、法律を學び研學大に勉む幾もなく判檢事及辯護士試験に及第し、

直に辯護士と爲る、君一度法廷に立て人權の伸張擁護を叫ぶや、滿廷均しく傾聽肯肯君が辯論の雄、立言の精に驚かざるはなしといふ、若し夫れ刑事上告事件の上訴に至ては、是れ君が得意の獨占壇上にして微に入り細を穿つ、摘示、摘發必ず以て之を覆へさずんば止まず、機略縱橫真に在野法曹界の巨腕なりと稱せらる、先是法律新聞を發刊して法理及實例の寶庫を開き斯界に寄與する所尠ならず、更に明快の手腕を實業界に揮ひ、株式會社尾張屋銀行の監査役となり、四十年歐米漫遊の途に上り四十一年歸朝、直に日本橋區より推されて逐鹿界に突進、競争の結果東京市第一位を以て當選したり、手腕に兼ぬるに徳望を有する洵に畏敬す可し、君多年志を社會政策に注ぎ議院に入るや法律案として提出する所多

祭原伊太郎君

洋酒雜詰商

△出生地 奈良縣
△現住所 大阪東、安土四ノ二二三
△生年月 嘉永六年五月十日

大阪府の富豪にして有名なる洋酒雜詰商を祭原伊太郎君とす、君は大和谷熊吉氏の長男にして、嘉永六年五月十日を以て奈良縣磯城郡今里村に生れ、明治七年九月先代元助氏の養子となり、同十一年十月分家して一家を創立す、初め雜貨及び西洋小間物商を營み、後洋酒雜詰食糧品を專業とす、其人活動力に富み、商業經營に長じ、業務着々として隆昌となり、特に日清、日露兩戰役に際して多大の發展を爲したり、目下大阪洋酒雜詰同業組合長として勢力名望甚だ大なり、資産は土地六十萬圓、公債社債三十萬圓、營業資金二十萬圓等を併せて百二十萬圓を超へ、直接國稅三千圓を納さむ。

高谷恒太郎君

辯護士

△出生地 大分縣、今橋、二ノ一
△現住所 大分縣、今橋、二ノ一
△生年月 嘉永四年八月二十五日

君は大分の人、高谷龍洲翁の長男にして、嘉永四年八月二十五日を以て舊府内藩邸に生る、夙に法律學を研修し、明治九年始めて租稅寮出仕を命ぜられ、明治十四年大藏省銀行局審理課長に任じ、後司法官に轉じ、檢事又は判事として、東京及び大阪の控訴院に勤務し、頗る令名あり。明治二十六年辭して野に下り、大阪市に於て辯護士の業務を執る。君の辯護に當るや、熱誠懇切なるを以て、辯護を君に乞ふ者常に君の門に蟄集すといふ、而して君は幾多の銀行會社の顧問たり。君は多忙にして乾燥なる法律に従ふと雖も、趣味とする所は頗る深く茶道に趣味を有し、遠州流に盡す處、勢からず。夫人をてう子といふ。菊地孝哉氏の令妹なり、振作、三平辰雄、靜江、浪江、雪江等數子の外、長女唯鳩子は中西萬藏氏に、二女玉枝子は平岡專治氏に、三女千鳥子は河原改榮門氏に嫁せり。

石田音吉君

京都市會議員 度量衡器製造業

△出生地 京都府、聖護院、片木
△現住所 京都府、聖護院、片木
△生年月 文久元年十二月十一日

曾て越前屋敷の用達を勤め、後京都に出で著々地歩を作りて、遂に今日の成業の基礎を置ける先代石田音造氏は、實に勤儉力行を以て聞わたる人なりき。君は其長男として文久元

山崎幹君

金澤醫學專門學校教授 石川縣立金澤病院長 從四位 勳三等

△出生地 愛知縣、金澤、三ノ一六
△現住所 金澤、三ノ一六
△生年月 文久元年一月七日



君は愛知縣士族山崎直方氏の長男にして、文久元年一月七日を以て尾州名古屋城東田町二丁目に生る、其閱歷を略叙せんに郷校を卒業するや志を醫界に立て、夙に東上して帝國大

學醫科に學び、研鑽多年にして明治二十年三月を以て卒業するや、其翌四月雲州松江の病院長を拜命し同年五月驅徽院長を兼ね、二十三年十月更に監獄醫兼務を命ぜられ廿四年一月獨逸樞密府醫官ロベルド、コッポ氏の發明に繋る結核病療法を、帝國大學に於て研究を命ぜらる、廿五年八月島根縣監獄醫務長に任命、廿八年四月實布埜里亞新療法及び一般傳染病に關する視察研究の爲め上京を命ぜられ、尋で同年八月島根縣檢疫官を拜命す、二十九年五月病院長を辭任し直ちに石川縣金澤なる第四高等學校教授に任命せられ、三十二年七月同校醫學部主任と爲る、此月石川縣金澤病院院長兼第一部長を囑託せらる、三十四年四月金澤醫學專門學校々長心得を命ぜられ、次で其十月病理學研究の爲め滿二ヶ年獨逸に留學を命ぜ

大正人名辭典 (山崎幹) (小島長兵衛)

年十二月一日を以て生れ、明治十四年十一月家督を相續せり君の其家を繼ぐや、先づ土地の買占を行ひしに、計畫悉く圖に當り、巨利を占め、俄に發展を遂げ得たり。曾て市參事會員に擧げられ、現今市會議員たり。

佐藤助九郎君

△出生地 富山縣、富山、東横濱、柳瀬
△現住所 富山、東横濱、柳瀬
△生年月 明治三年八月二十七日

富山縣多額納稅者 富山電氣軌道株式會社 株式會社 富山縣農工銀行 立山酒造株式會社 株式會社 富山縣織物模範工場 株式會社中越銀行 富山鐵道株式會社各取締役 株式會社高岡共立銀行監査役 鐵道工業會社各社員 所得稅調查委員 柳瀬村長 土木請負業 農業

君は明治三年八月二十七日を以て生れ、明治二十四年二月先代助九郎氏の養子となり、明治三十七年十月家督を相續し舊名奏春を助九郎と改稱し、農業及び土木請負を業とし、其人を用ゆるや誠實、之を以て衆君に推服して献身的に勵精し其業を執るや周到緻密、是を以て業務を君に委嘱するもの信認して満足せざるはなし、事業爲めに着々として發展し、以て今日の盛大を致し、其資産は不動産三十萬圓、有價證券二十萬圓、營業資本、貸金二十萬圓等を併せて百萬圓を超へ、多額納稅者として直接國稅一萬圓以上に及ぶ、現に富山縣農工銀行、立山酒造、富山電氣軌道會社、中越銀行、富山鐵道會社等の取締役、高岡共立銀行監査役、鐵道工業會社社員所得稅調查委員、柳瀬村長等を兼ね、君が地方の重鎮たること知るべきなり。

られたり、三十六年七月歸朝して翌年七月金澤病院醫長を囑託せられ尋で三十八年同病院長を囑託さる、幾許もなくして日露戰役の功に依り勳五等瑞寶章を拜受し四十二年四月石川縣立金澤病院長と爲り、四十三年十月正五位に昇り四十五年六月勳四等に叙せられ、大正五年十一月從四位勳三等に叙せられ以て今日に及ぶ、惟ふに君は着實温厚の紳士にして醫界の明星なり、多年蘊蓄せる學理と手術とは北陸の杏壇に發揮せられて、聲望又君の右に出づる國手罕なり、君松江の病院長に拜命して以來、功勞功績を以て賞狀賞金を受くるもの枚舉に遑あらず、眞に醫界の代表的人物と謂ふべし。令閨を可壽子と曰ふ而して令弟芳太郎、同重雄及令甥長、愛姪美根子、外數人ありて、家庭亦圓滿多祥なりと云ふ。

小島長兵衛君

△出生地 東京府、日本橋、大馬場、一丁目、二七〇九
△現住所 東京府、日本橋、大馬場、一丁目、二七〇九
△生年月 明治十三年十月二十九日

尾張屋信託株式會社常務取締役 株式會社尾張屋銀行取締役 質商 尾張屋主
小島長兵衛君は東京府先代小島長右衛門氏の二男にして明治十三年十月二十九日を以て生れ、同二十六年八月家督を相續し、舊名善次郎を今の名に改む、質屋を業とし、最も資産に富み、業務經營の手腕群を抜き、現に尾張屋信託株式會社常務取締役となり、其樞機を握り、社連益々隆盛なり、又株式會社尾張屋銀行取締役として重きを成し、社會上有力なる地歩を占む、資産は約八十萬圓を算し、直接國稅約二千圓を納む。家族として母堂てい子、令閨伊知子、令女はる子あり家庭圓滿なり。

都築馨六君

△出生地 東京府
△現住所 東京市、飯倉狸穴、二
△生年月 文久元年二月十七日

樞密顧問官 正三位 勳一等 法學博士 男爵



君は東京府士族都築忠氏の長男にして文久元年二月十七日を以て生る、幼にして聰明敏捷群童を壓し、明治五年歳十歳にして横濱修文館に入り、又築地立教學校に入て英語を

學び、明治八年開成學校に入り、更に東京大學に進み、政治理財を修め、十四年卒業して文學士の稱號を得、翌年文部省留學生として獨逸に赴き柏林大學に入り政治學を研究すること三年、歸朝後直に外務省に入り、公使館書記官兼外務省參事官、外務大臣秘書官等に歴任し、更に内務書記官に轉せり二十三年三月時の内務大臣たりし山縣公が歐洲に渡航するに際し、君之が隨行員たり、公の歸朝して内閣總理大臣となるに及び、秘書官として内務省參事官を兼ね、更に法制局參事官、行政裁判所評定官を帯びて行政各部の刷新を遂成せり、廿七年内務省土木局長に任じ勅任に進められ、正五位に叙せらる、廿九年に至り、君が多年の研究を以て編成せる東京都制法案を衆議院に提出せしが不幸にして否決の運に遇ひ、次いで内務大臣の更迭あるや、君斷然職を辭して民間に下れり

然れども幾何もなくして、宮内省に入り圖書頭に任じ、全權大使山縣大將の隨行員として露國皇帝戴冠式に臨み、歸來勳四等に叙し、旭日小綬章を賜ひ、且つ露國帝室の勳章を拜受す、三十年文部次官に任せられ、圖書局長を兼ね、久しからずして外務次官に轉じ、外交界に一新面目を開きしと雖、對外硬の議を持して當時の大臣青木子と意協はず、遂に冠を挂けて去り、三十二年貴族院議員に勅選せらる、故伊藤公が立憲政友會を組織するや、君之が總務委員に擧げられ、深遠なる學理と高邁なる識見とを以て黨務を改進し、黨人を指導せしこと尠ならず、後伊藤公の樞府に入るに當り、君擧げられ、樞密院書記官長となり在職多年に及び、四十年萬國平和會議參列の爲め特命全權大使として差遣せられ、同年特旨を以て華族に列し男爵を授けらる、是より先法學博士の學位を授與せられ、現に樞密顧問官にして、正三位勳一等たり、男の如きは實に我が官海に於ける龍運兒中の最たるものと稱すべき歟。

山形武助君

△出生地 大阪府
△現住所 大阪、南、順慶、三
△生年月 安政六年十一月二十五日

大阪府多額納稅者 質商

君は大阪の人先代山形武助氏の長男にして、安政六年十一月二十五日に生る。明治三十九年十一月、家督を繼ぐ。代々質商を營み、方今直接國稅六千五百圓を納むるを以て、大阪府多額納稅者の一人たり。傍ら金銀の貸付をも業とすといふ。資産三百萬圓を越ゆる豪家たり。

前田兼七君

△出生地 東京府
△現住所 東京、日本橋、高澤、二八
△生年月 慶應二年九月九日

東洋モスリン株式會社取締役 帝國鑛泉株式會社 株式會社有恒社各監査役 太物商 大野屋主

君は東京の人先代兼七氏の長男にして慶應二年九月九日を以て生る、「大野屋」と通稱し吳服太物商を業とす、明治二十六年九月家督を相續す、三十九年株式組織の有恒社創立に與り其監査役となる、四十年同志と謀り東洋モスリン株式會社を創立し其取締役となり、經營頗る困難に陥りしも、能く其艱難を排し現時の盛況を見るに至れり、君幼にして學を好み夙に共立學校に入り成績最も良好にして、卒業の後家業繁多の故を以て學事を中絶せしが、常に讀書を廢せず後進誘掖に力を致し、有爲の青年を補助し資を投するを以て唯一の娛樂とし、其庇護に依て社會に相當の地位に在るもの尠しとせず現時君が出資の下に就學しつゝあるもの甚だ多し、公共事業に志を傾け篤行甚だ見るべきものあり、嘗て區會議員、東京商業會議所議員、専修大學評議員として大に盡瘁し陰徳を施せること最も多し。

令聞きく子は芳賀吉之助氏の令姉にして、道太郎、三郎、四郎、晋一、平八郎、あゐ子、千代子、等の五男二女あり。

山本嘉兵衛君

△出生地 東京府
△現住所 東京、日本橋通、二ノ十
△生年月 嘉永六年九月十九日

茶商

茶商山本の名は天下に喧し、嘗に現今に於て然るのみならず

大正人名辭典 (前田兼七) (山本嘉兵衛)

すして過去に於て然り江戸時代に於て然り、元祿年間より明治大正に至るまで通じて然るなり、其間武州秩山の茶業を復興して關東茶界の勢力を挽回せしが如き、舊來の碾茶に代ふるに煎茶を以てし、所謂宇治煎茶發明の鼻祖となりしが如き現今煎茶界にあつて最良品と稱せらる、彼の玉露製煎茶の起原を劃したりしが如き、皆當家歴代の斯界に擧げたる名譽の記念にして、喫茶家の恩人として仰ぐべきなり、初代より現代まで九世を経、みな嘉兵衛と稱す、初代嘉兵衛、山城國宇治郡山本村より出で、且江戸に來たり元祿年間始めて茶舖を開き五世の時秩山の復興を爲し且つ煎茶の嚆矢と爲す、文久三年に山城國綴喜郡湯谷村の人永谷宗七郎なる者、一種美色の煎茶を新製し、江戸に來りて山本氏に授く、山本氏之を世に弘布し、一世の喝采を博し山本茶の名は天下に鳴る、之を宇治製煎茶の起原となし、天保年間に山本氏は宇治綴喜二郡に十有八ヶ所の茶園を有するに至りぬ、六世嘉兵衛徳翁と號し、天保中城江二州の茶場に遊び、偶然一種の奇煎茶を焙出し、之を玉露製煎茶の起原と名け、江戸に發賣し頗る愛賞せらる、之を玉露製煎茶の起原とす、現代の嘉兵衛君は七世にして、明治初年以來皇城及び赤阪青山三御所の御用命を蒙り、茶商中の巨擘を以て稱せらる、君は嘉永六年九月十九日の生誕にして、先代嘉兵衛即ち山本三四郎氏の二男、慶應二年家督を相續して、徳川家及び諸侯の御用達を勤む、十八年宇治の自園を視察して改良を加へ、此年始めて東京茶業組合取締所を設くるや君擧げられて其取締となり、又日本橋區茶業組合委員となり盡力する所あり、而して其製茶は博覽會及び共進會等にて常に優等賞を受け、大正博覽會にても金牌を受く

王 双君

△出生地 支那福建省
△現住所 臺灣嘉義縣北港街
△現住所 電話三〇三〇
△生年月 文久三年十月十日

吳服販賣業



君は福建省泉州南門外に生れ、幼にして漢學を修め、性明敏なり、年十三の時泉州より臺灣に來り住す、其後吳服販賣業に従事し、熱心勤勉十年一日の如く、歩は一步を進め、漸

次其業務を擴張し、不斷の努力活動の結果は數萬金を蓄積するに至り、家運益々隆昌を來し、遂に地方第一流の商店となり、南部一帯を販路として盛に大卸を行ひ、屢々對岸支那に往返して大に取引を行ひ、王双君の名は今や普ねく同業者間に知られ、其信用する所となる、君は又地方金融の不便なるを遺憾とし金融機關を設けて、以て地方經濟界の發展に資せんことを志し、同地の名望家曾席珍氏、蔡然標氏等數十名と共に協議を凝らし、信用組合を發起し最も其成立に斡旋する所あり、終に之が組織を完うして金融の便を圖り、關係者の喜ぶ所となる、世上富を成す者多しと雖も、動もすれば私利私慾に偏し、公益を忘るゝもの比々として然らざるなきも、君は即ち全く之に反し其富を成すこと益々大にして、公共の爲めに盡くす所益々多く、苟くも事の公益に係るものには衆

に率先して資金を抛ちて惜まず、其心事の公明なること實に推服に堪へず、所謂能く集めて又能く散するものと謂ふべきなり、地方に於ては長老先輩として推立せられ、其名聲と共に信用層一層高きを致し、家門目を追ふて振興し、慶福を占むるに至るも亦宜なりと言ふべし、天は自ら助くる者を助く王双君に於て之を見る、地方後進の模範として以て學ぶべき所なり。

夫人は蔡氏賢良の譽あり、君が内事を助けて其功頗ぶる多し、男子四名、孫兒六人あり、男子中二名は既に娶りて子あり、家庭和樂にして親愛の情に満つ。

堀内 鶴雄君

△出生地 三重縣
△現住所 三重、飯南、宮村
△生年月 明治五年十月一日

合名會社堀内井上銀行代表社員 林業

君は三重縣人堀内理一郎氏の長男にして、明治五年十月一日を以て生る、八歳にして先代利右衛門氏の養子となる、明治二十六年一月家督を相續す、堀内家は代々林業を營み、縣下著名の素封家たり、君の家督を繼ぐや、先づ祖先傳來の業に従ふの外、曾て井上太兵衛氏と共に、合名會社組織を以て堀内井上銀行を創立し現に營業しつゝあり。

夫人をなみる子と呼ぶ、亡養父利右衛門氏の長女にして、温良貞淑を以て聞ゆ、利道、恭次郎、とし子、すま子、さとし子、つゆ子、ちづ子等の數子あり、三重の人田中彦左衛門氏の三男逸三氏を迎へて養子となし、二女すま子の入夫となす長女とし子は萩田悦造氏に、三女さとし子は世古泰氏に嫁せり

入江 貫一君

△出生地 神奈川縣
△現住所 東京、豊町、永田、一ノ二
△生年月 明治十二年三月六日

樞密院書記官兼秘書官 正六位

君は貴族院議員子爵野村益三氏の令弟にして即ち故子爵野村靖氏の次男なり、明治十二年三月六日を以て生る、後伯父贈正四位入江九一氏の跡を襲ぎ其姓を冒す、帝國大學に入り法科を専攻して明治三十九年を以て卒業するや法學士の稱號を得たり、嚴君靖子は長州萩の勤王家にして夙に王事に奔走し且廢藩論を首唱して木戸孝允諸氏と共に之を實行果斷せしは、更めて叙するを要せざるも献替の偉績を以て明治の盛世に入るや、或は内務大臣と爲り或は逓信大臣となりて廟議に參畫し、特に後年内親王御養育掛を拜命して輔導養育し奉りたる如きは、亦以て府君の謹嚴誠忠なるを窺知すべし、君は斯の如き光榮ある家にと爲りたるを以て、少壯より其家庭は君をして忠君報國の精神を涵養せしめ、其大學を卒業する當時の如きも優等の成績を以てす、其精神の凜乎たるに依るや勿論なり、後高等文官試験を受けて合格するや、直ちに内務省に出仕し山梨縣事務官となり、更に轉じて今日の官職を拜するに至れり、高等官四等正六位の位階を有す、前途益々有爲なる偉材を以て目せらる。

鈴木 三郎 助君

△出生地 神奈川縣
△現住所 東京、京橋、南馬場、一ノ二
△生年月 慶應三年十二月二十七日

「味之素」製造發賣元 日本商事株式會社監査役
製藥輸出入業 陸海軍用達

大正人名辭典 (入江貫一) (鈴木三郎助)

君は先代鈴木三郎助氏の長男にして慶應三年十二月を以て相模國三浦郡葉山村に生る、幼名を泰助と呼び、明治八年父君の易養するに及び家督を相續して先代を襲名す、普通教育修了の後、小笠原東陽氏の耕餘塾に入り國語漢籍を修む、十二年浦賀の加藤小兵衛の商店に入り商務を實習し、十五年郷里に歸りて米穀及酒類販賣業を開始す、然るに少壯氣鋭成功を急ぎ忽ち失敗の止むなきに至る、君挺身出京して善後策を講ず、母堂なか子は此の失敗に對するも毫も尋常婦人の悲しみをなさず、赤手失敗を挽回せんと決意せり、此の時村田春齡なる人より海草より沃度を製造せらるゝを聞き爾來沃度の製造に苦心する事一年にして其の製造を案出せり、二十三年君家に歸り沃度製造に全力を傾け、苦心慘澹十年一日の如く刻苦精勵遂に之を大成し、葉山の地に一千坪の大工場を建設するに至る、三十三年五月京橋區瀨左衛門町に店舗を開き販賣の道を講じ陸軍用達として大いに活動せり、其れより沃度製造の事業は遺憾なく發展せられ各地に分工場を設け、全國需用の大半を製するに至る、尋で日本化學工業會社を創立して専務取締役となり、其經營に従事し基礎確立するに及び専務を辭して取締役となる、更に特筆すべきは君の「味の素」製造發賣なりとす、四十一年池田理學博士によりて發見せらるゝや、君是れが製造販賣を引受け熱心販賣に従事し其の奮闘人目を聳ゆしめ、二年にして其需用は全國各地より滿洲歐米各都市にまで歡迎せらるゝに至れり、川崎、六郷川の畔に二萬餘坪の土地を得て一大工場を建築し、激増する需用に應じつゝあり、今や致富巨萬有數の資産家として名聲頗る高く資性英邁性格崇高にして風丰侵すべからざるものあり。

石黒 忠 憲 君

△出生地 福島縣
△現住所 東京市達橋、一七
△生年月 弘化二年二月十一日

貴族院議員 日本赤十字社長 中央衛生會長
保健衛生調査會委員 大倉商業學校理事 大橋圖書館理事 陸軍々醫總監 正三位 勳一等 功三級 男爵



君は越後の人平野順作氏の長男にして弘化二年二月十一日父の住所奥州梁川町に生る、幼名を庸太郎といふ、少にして父母に別れ四方に流寓して備に辛苦を嘗む、然れども君大

志あり、貧困の故を以て屈するものにあらず、歳十四水戸の巨儒會澤伯郷の「新論」を読み感奮する所あり、爾來國史を涉獵し傍ら武藝を磨き、天下を歴遊して頻に尊王攘夷を唱へ且つ文武の名士に親交す、文久二年信州松代に於て佐久間象山先生を尋ね、論議すること二晝夜にして大に啓發する所あり嗚呼君少壯にして既に此氣概あり、後年名聲の天下に籍甚たるもの偶然にあらざる也、後父の郷里越後國三島郡片貝村に歸りて祖父の家を繼ぎ、石黒氏を冒し恒太郎と改名し生徒を集め學を授け又和漢の醫書を研究す、而も其迂にして實業に適せざるを覺り、遂に江戸に出で柳見仙の塾に入りて西洋

醫學を修め、後幕府の醫學所に入りて醫學を研究す、明治二年大學醫學校の寮長兼助教に擧げられ大舎長に進む、明治四年松本順の推薦によりて兵部省に出仕し八等出仕に補せらる、翌年一等軍醫兼軍醫權助となり六年二等軍醫正に進む、七年佐賀の亂起るや久留米病院に在りて傷病兵を收容せる諸病院を督し、八年臺灣征討の事あるや君長崎にありて醫務を督せり、九年米國ヒラデルヒヤ博覽會に差遣せらる、十年西南の亂あるや君大阪臨時病院の設立を建議して其許可を得るや大阪臨時病院長となり、帯を解かざること殆ど七十餘日、患者を救療すること六千餘人に及べり、功を以て勳四等旭日小綬章を賜ひ且つ軍醫監に任ず、君固辭して受けず十二年東京大學醫學部副總理を兼任し文部省御用掛となり脚氣病院設置委員を命ぜらる、翌年軍醫部次長に補し從五位に叙せらる十七年東京大學御用掛を兼務し次で恩給局御用掛、内務省四等出仕を兼ね十八年勳三等に叙せらる、十九年内務省衛生局長を兼務す、二十一年軍醫學會長、軍醫學校長、陸軍衛生會議々長等を兼務す、二十三年軍醫總監に榮進し從四位に叙せらる、二十七年日清戰役の起るや野戰衛生隊長官として大本營に在り、屢戰地に往來して野戰衛生に關する凡百の事務を統裁す、亦陸軍衛生制度の完備は歐米諸國の驚嘆する處たり、戰後李鴻章の馬關に於て兇漢の爲めに狙撃せらるゝや、君勳を奉じて佐藤軍醫監と共に治療に盡力す、清國皇帝陛下は功を録して第二等双龍寶章を贈與せらる、二十八年正四位勳二等に叙せられ、後特旨を以て華族に列し男爵を授けられ功三級金鷄勳章を賜はる、二十九年後進の爲めに途を開くとなし、所謂圓滿辭職を爲す、現今は貴族院議員、中央衛生局

長、保健衛生調査會會長、大倉商業學校理事、大橋圖書館理事 日本赤十字社長等公共の事業に干係し、其著作亦頗る多し其人温厚篤實の長者たり、齡既に古稀を過ぎ矍鑠壯者を凌ぐの概あり、邦家の爲め切に自愛を祈る。
夫人を久賀子といふ、一男一女あり、令息忠篤君は正五位法學士にして、農商務省農務局書記官たり、其夫人光子は法學博士穂積陳重氏の次女也、息女孝子は法學博士小野塚喜平次氏の夫人たり、令孫忠久氏、しげ子、もと子、孝四郎の四人あり。

名倉 謙 藏 君

△出生地 東京府
△現住所 東京市南足立、千住、五ノ
△生年月 慶應三年七月一日

接骨師 醫師

君は東京の人名倉彌一氏の長男にして慶應二年七月一日を以て生れ、明治十六年十二月家督を繼ぐ、名倉家は代々接骨醫を業とし都下に其名を知らる、君曾て東京帝國大學醫科大學別科に入り外科學を専攻す、君の業を繼ぐや祖先傳來の秘法に君の獨創を案へ、而して懇切丁寧を旨として治療に従ふを以て、治を君に乞ふ者常に門前に蟬集して旺盛極まりなしといふ。

夫人をあい子と呼ぶ、横山佐助氏の二女なり、長男重雄氏は目下第一高等學校在學中にして、長女道子は女子商業學校に通學しつゝあり、外に二男英二氏、四男讓氏、六男厚氏、四女たま子等家あり、猶長女けい子は中野武營氏の二男武二氏に、二女りつ子は野口秀氏に、令妹てう子は藤波磯吉氏

大正人名辭典 (名倉謙藏 (羽田彦四郎))

に何れも嫁して讒々たる家庭を作り、令弟市藏氏は分家し三男順三氏は松原家を、五男正氏は大村家を繼ぎて既に其一家を成せりといふ。

羽田 彦 四 郎 君

△出生地 大分縣
△現住所 東京市神田、木挽、二ノ一
△生年月 明治二年七月四日

中央鐵道株式會社取締役 辯護士

君は豊後舊白杵藩士羽田角彌氏の次男にして明治二年七月を以て郷里に生れ、明治二十九年四月家督を繼ぐ、不幸幼時家道衰頹して學資を享くる能はず、小吏となりて家計を援くるの傍ら孜々として勉學し、明治二十年奮然東都に出で某辯護士事務所の事務員となり、傍ら東京法學院に通學して法律を學ぶ、同二十五年優等の成績を以て卒業し、同時に辯護士試験に合格す、爾來一意専心法律事務に従事し、機敏なる才器は直ちに朝野の推重を博し、明治三十七年東京辯護士會副會長となる、且つ此間前後數回常議員に擧げられたり、君在野法曹として名聲騰るや更らに曠足を實業界に伸ばし、曩に帝國酒悅福神漬株式會社專務取締役、東京競馬株式會社取締役、恵比壽銀行、佐渡物産株式會社各監査役等に擧げられ、又農具合資會社を設立して其社員となり名聲方面に噴々たりしが、現今は向島に製綱所を設けて之が經營の任に當り、傍ら專賣特許電球線の製造に従事しつゝあり、明治四十四年十一月擧げられて中央鐵道株式會社取締役となり現に其任にある等君が實業界に於ける聲譽愈々甚大なり。
夫人を幸子と呼び、容姿優雅貞節を以て聞ゆ。

益田 孝君

△出生地 東京府 東京、住原、品川、北品川
△現住所 東京、三田、二丁目、二三五六
△生年月 弘化四年十一月十七日
臺灣製糖株式會社相談役 三井合名會社 小田原
織布株式會社各顧問 勳三等



君は佐渡國相川郷の人なり弘化四年十一月十七日を以て生る、嚴父は益田風氏と呼び佐渡金山奉行の配下にして令名あり、元來佐渡金山の役人は終身にして島地を出づることを許されざる規定なりしも、天運茲に循環して幕府は當時北海道に對し、拓地殖民の意ありて新たに之が役人を任するや、嚴君は連好くも其選に當りたるを以て乃ち佐渡國を出づるを得たりき、而して孝君の江戸に生る、や少時故矢野次郎等と交り熱心英語を學ぶ、尋で幕府の佛國に對し使節を派遣せんとするや、嚴君復た之が勘定方として一行に加はりたるより、君此時年齒僅かに二十五六歳なりしも強て乞ふて佛國に遊ぶ歸朝後風雲急にして勤王攘夷の議朝野に熾んたり、於是乎深く大勢に考察する所あり、身を商賣に委ね横濱に出で商店を開きしも、時運非にして遂に蹉跎の不幸を見るに至れり、次いで井上侯に知られ官途に就き造幣權頭と爲る、但君の志は固より實業にあるを以て幾くも官を辭し、明治三年井上

馨氏の先收會社に入り推されて其副社長となり、初めて非凡の商才を現はし名聲端なく實業界に喧傳するに至れり、明治八年井上侯再び就官せるを以て同會社を解散す、明治九年三井物産會社を組織し、二十六年に至り物産會社の組織を改正するや君之が専務理事たり、又上海紡績及東京モスリン紡績兩會社の取締役、東京商業會議所評議員の職に在ること多年其他商工業界に貢献せるもの擧て數ふべからず、三十七八年の戰役には能く軍國に於ける實業家の義務を完ふし、或は巨額の軍資を獻納し、或は國力の充實に努力する等偉大の功ありしを以て勳三等に叙し旭日中綬章を授けらる、今や三井合名會社、小田原織布株式會社の顧問等として幾かに閑職に居るも、而も大事件重要問題に逢着する毎に君の裁斷解決を煩はざるもの幾ぞ罕れ也、前に同志と協力商法講習所を開設し後進を養成す、本邦商業教育の嚆矢たり、又故榎本武揚氏幕軍を率いて官軍に拮抗するや君其勸誘する所となるも、世界の趨勢を説き其暴舉を戒め果して榎本氏が五稜廓に破るや之を慰撫説伏せる如き明鑑を有し、情誼に厚きにあらずんば安んぞ之を能くせんや、君の如きは夫の實業界の棟梁たる溘澤男と雁行する老紳士として實に現代實業界の重鎮を以て景仰せらる、所以のもの寔に故なきにあらざる也、且夫吾人の老紳士に敬服するは儉素を以て家憲と做し、謙遜を以て自ら居り曾て倨傲鮮腆の風なきのみならず、其後進を率ゆるや肺腑を披瀝して訓誨指導毫も倦まざるに於て當代得難き老紳士にあらずや、宜なり現代財界の霸王にして榮衛富貴兩つながら一門に萃まれる三井男爵家は敬して以て元勳元老と爲し更に高師として禮しつゝあるを、資産六百萬圓以上を算す

令聞永子は東京府士族富永冬樹氏の令妹なり、而して太郎氏は君の長男として出廬の譽れあるのみならず、次男信世氏亦才名あり、又令妹繁子は男爵瓜生外吉氏に嫁し才媛の名風に高し。

山脇 春樹君

△出生地 東京府 山梨、甲府、石屋町官舎
△現住所 山梨、甲府、石屋町官舎
△生年月 明治四年五月二十四日

山梨縣は四周山岳重疊し而かも河流に舟楫の便なく交通の發達著しく後れ、文化の進歩從て他に相讓るものあるは自然の結果にして又己むを得ざる所なりと雖も、此地に縣知事として其治に精勵し庶政大に舉り、文化の發展殖産の振興に最も力を盡くし治績顯著、令聞聲譽隆然たるを山脇春樹君とす、君は京都府畑田清平氏の四男にして明治四年五月二十四日を以て生れ、三十年四月東京府士族山脇玄氏の家を繼ぐ、少壯より俊秀有爲の資性を抱き帝國大學法科大學に入り、爾來勉勵研鑽の功を積み三十二年同大學を卒業し法學士の稱號を得、同年文官高等試験に合格し三十三年司稅官に任じ三十四年農商務大臣秘書官となり、大藏省參事官を兼ね爾來農商務省書記官、商工局商事課長兼商品陳列館長、日本大博覽會事務官、臺灣總督府專賣局長等を経て大正三年五月臨時博覽會事務官長に任せられ、曾つて伊太利、獨逸、白耳義へ差遣せられ、今や山梨縣知事の榮位に轉じて其任に當り傑出の偉材たるや勿論なり。

夫人は春子、淑徳に富み、長女絢子、二女文子あり、家庭大正人名辭典 (山脇春樹) (早川清吉)

和氣霽々たり。

早川 清吉君

△出生地 東京府 東京、四谷、東筒、六六
△現住所 東京、四谷、東筒、八七八
△生年月 文久三年六月四日

君は四谷區屈指の酒問屋たる升屋總本店の主人にして文久三年六月四日南多摩郡境村に生る、齋藤啓助氏の次男也家代々庄屋を勤め郷土の豪農なり、君は幼にして農業を厭ひ未だ弱冠ならずして單身東京に出で、織物業に従事せんと或大問屋に奉公せり、織物業を志願せしは其出生地の關係に胚胎せるは勿論なるも其業に通曉するに至りて前途の有望ならざるを悟り、明治二十一年斷然織物業を廢し折から賣物になり居たる升屋を買收して酒醬油類の小賣業を開始せり、爾來二十有餘年、刻苦精勵、日夜奮闘の結果、今や店員二十有餘人を使役する大商店となり、市内に四ヶ所の支店分店を有する盛運に達したり、長男啓太郎君は既に壯齡に達したるを以て小賣部一切を擧げて之に當らしめ、君は専ら卸賣を主宰し八王子、甲府方面より埼玉の一部を勢力範圍とす、其賣上高は小賣四萬乃至五萬圓にして卸賣は其三四倍ありと傳ふ、君の理想とする處は良品を安く賣り、而も大に儲けて一家の繁榮を計ること共に、市、區の爲めに大にしては一國の爲めに大に利益せんとするにあるを以て、動もすれば隱匿し虚偽を行ひ以て納税を遁れんとする者多き時、君は約千圓の納税を負擔し曾て怨色なし、寔に商賈道德の體現といふべし。

(福嶋浪藏) (藪田岩松)

福嶋浪藏君

△出生地 神奈川県 東京日本橋青物、二四
△現住所 東京日本橋青物、二四
△生年月 萬延元年四月六日

旭日生命保險株式會社監査役 合資會社福嶋商會
代表社員



一氣千を争ひ寸刻
萬を弄するの輪廻界
は其の變轉旦夕を測
り難く、從て之に没
頭せるもの多くは是
れ浮萍の徒、未だ嘗
て厘を積み錢を重ね
て勞苦の積集より將
來する堅實の風氣を

有せざるなり、然るに君獨り這の間に在りて嚴然他を顧盼し
漠として測り難く茫として知り難き轉變止まざる市場裡の人
と爲らず、深く自ら持し高く自ら行ひ人を待つ懇篤、業を執
る誠實、些の輕佻を認めざる所斯界の如きは眞に稀なり、
渠の器々千萬を争ふの場裡に於いて君の如き敦厚の君子人を
見るは實に是れ鷄群の孤鶴たる感なき能はず、又景仰す可き
の人物と謂ふ可し、君は相州戸塚の人萬延元年四月六日を以
て生る、嚴君を松原留三郎氏と云ひ君は實に其の三男なり、
後先代しげ子の養子となりて家督を相續す、幼時郷間の間に
俊才を以て聞ゆ、少壯志を四方に馳す、先大志を遂げんと欲
して東京に出で株式取引所仲買人甲田宇三郎氏の雇人となり
艱難備に嘗む、温順敦厚の氣性資質は君を累する事多く事志

と違ふもの數年、如斯して辛苦力行の歲月を経過し高才煥發
し、遂に明治二十四年を以て株式仲買人と爲る事を得たり、
零丁孤苦の間に一箇獨立の事業を開始し得たる君の精力又非
凡ならずや、爾來盛衰浮沈の間に奮闘を試み毅然として其業
務に従ひ、明敏察智の機を過たずして誠實に之を遂行したる
を以て、聲名頓に上り株式市場君の名を知らざるものなきの
みならず、聲譽實に市場を壓するに至れり、後斷然株式仲買
人を廢業し、新に合資組織を以て福嶋商會を創設し、有價證
券、現物賣買、金融仲介、信託事業等に一大雄飛を試みたり
君亦事業經營には廣く、海外の事情を洞察するの必要あるを
看取し、腹心の店員を歐米に派遣し、以て海外に於ける金融
事情及其他の關係業務を視察せしめたり、而して其齎らせる
所の調査報告を基礎として茲に海外直接取引を開始し、以て
日本の經濟事情を歐米に知らしむるに至れり、君が明察の頭
腦は其誠實なる活動と相俟て底止するを知らずと謂ふ可く、
眞に其の精力の偉大なるは三嘆に價ひするものあり、今や資
産三百萬圓を算す、資性温厚、輪廻界裡稀に見るの人、仁俠
と誠實とは茲に高潔なる人格と相對して福嶋商會の高名は世
間に響く、其海外取引の開始の如き實に是れ日本實業史中
特筆すべきの件也。

藪田岩松君

△出生地 三重縣 三重縣
△現住所 東京下谷、谷中坂、六二
△生年月 安政三年正月十一日

東京建物株式會社常務取締役 滿洲興業株式會社
取締役 安田銀行協議役 百三十銀行監査役

島根縣多額納稅者 農業

島根縣下屈指の大富豪にして大地主たる山崎重樹君は山崎
重人氏の長男にして嘉永二年十月廿二日を以て生れ、後家督
を繼ぎ祖父の業を繼承せり、君頗る經濟思想に富み且經營の
才に長せるを以て、忽ちにして父祖の遺産を數倍するの盛大
を招徠し得て、今や直接國稅約五千圓を納め資産は土地及動
産を主として百萬圓を超ゆ、而して君の博愛慈善の志に富む
や屢々郷間の爲めに喜捨して救恤に従ひ德望愈々なりといふ
夫人既に白玉樓中に化し、男榮一、易一の二子あり、而し
て令妹ちか子は島根多助氏に嫁せり。

白石直治君

△出生地 高知縣
△現住所 東京、麻布、飯倉、四ノ二
△生年月 安政四年十月二十九日

衆議院議員 若松築港株式會社取締役社長 猪苗
代水力電氣株式會社專務取締役 京城電氣株式會
社、日本窒素肥料株式會社各取締役 正七位 工
學博士

君は舊土州藩士久家種平氏の長男にして安政四年十月を以
て高知縣に生れ、明治七年白石榮の養子となり家督を相續す
同十四年東京大學理學部土木工學科を卒業して理學士の稱號
を得、後文部省海外留學生を命せられ米國に留學す、歸朝後
農商務省御用掛、東京府御用係、東京帝國大學工科大学教授
に歴任す、後實業界に身を投じ東奔西走三十年老實なる事業
家として名聲あり、曩に若松築港株式會社を創設し其社長と
なり、九州の富源たる九州炭を輸出すべき門戸として若松を
して主腦たらしめんとして盡す所あり。

君は三重縣の人藪田金六氏の三男にして安政三年一月十八
日を以て生る、明治七年九月藪田家の一門先代喜三郎氏の養
子となり三十五年家督を相續す、幼にして學を好み龜山藩の
浪士岡本賢三氏の塾に入り螢雪の苦を積み學業大に進む、明
治元年龜山藩主の創設に係る物産會社に入り其業に従事する
こと七年忠實を以て聞ゆ、八年三重縣地租改正係に出仕し十
年出京して安田商店に入る、店主安田善次郎氏君の職務に誠
實なるを見て深く之を信任し、十三年同商店の安田銀行と改
稱し各地方に支店を設置するに當り、君を拔擢して栃木支店
支配人と爲し十七年東京本店詰となり、二十一年本店支配人
に擧げられ尋いで同行顧問役協議役に歴任す、尙君は夙に丸
釘製造業の有利なるを認め、二十八年安田家の事業として之
を企劃する等同家の事業經營に參畫する所少からず、今日同
行が銀行界の霸王を以て稱せらるゝに至りたるは、固より安
田善次郎氏の人格手腕の偉大なるに依るものなりと雖も、而
も其股肱たる君が奮勵畫策の功多きに居ると言はざるべから
ざるなり、三十六年東京建物株式會社常務取締役となり現に
其任に在り。

令聞ひやう子淑徳の名あり、一男四女を産む、長女靜子は
工學士小林源松氏に、次女豐子は實業家小倉繁次氏に、三女
ます子は法學士恒松勤一氏に、四女鶴子は工學士森川三省氏
に嫁ぎ、長男勤吾氏は目下東京高等師範學校附屬中學校に在
學中にして家門の清福世の美望する所となる。

山崎重樹君

△出生地 島根縣
△現住所 島根、邑智、日實
△生年月 嘉永二年十月二十二日

(山崎重樹) (白石直治)

日高壯之丞君

海軍大將 從二位 勳一等 功二級 男爵



君は舊鹿兒島藩士宮内清之進氏の三男にして嘉永元年三月四日を以て鹿兒島に生る、後故ありて元治元年同藩士日高藤左衛門氏に養はれて嗣子となり、夙に英才勇膽を以て稱せらる、明治二年舊藩より擢撰せられて海軍兵學校寮に入り八年卒業す、曾て英艦の我九州沿岸を犯すことあるや、君遊軍として鹿兒島祇園臺場に於て英艦と奮戦し、著大なる功績を樹てたり時に年齒僅に十六歳なり、而して時運漸く推移し討幕の軍起るや、君鳥羽伏見の戦争より征東軍に従ひ會津藩城に至る迄各地に轉戦して拔群の功あり故を以て藩公より特に加封せらる、明治十年西南戦争の起るや軍艦日進に乗込み海上の軍務に服し、此際少尉に任せられ爾來専ら海軍に奉仕して國防の献策に努め、國威を發揚せしめたる偉績は海軍史上抹殺す可からざるものあり、今其官歴を案するに君は參謀本部海軍部第二局第一課長、第二課長、金剛、武藏、龍驤、橋立松島等の各艦長、海軍兵學校々々長、常備艦隊司令官、竹敷要港司令官、常備艦隊司令官、舞鶴鎮守府司令官等々の要職

に歷任し、廿三年十月土耳其軍艦エルトクロイ號の遭難者を軍艦比叡、金剛二艦に分乗せしめて彼等の故國に送還するや君金剛艦に長たり、土耳其皇帝及政府は深厚なる感謝を以て君等を擯ふ、翌廿四年五月を以て歸朝す、二十七八年の日清戦役の功に依り功四級金鷄勳章を賜はり、後日露戦役の殊功に依り勳一等旭日大綬章功二級金鷄勳章を賜はり、四十年九月華族に列し男爵を授けられ從二位に陞叙せらる、四十一年八月に至り多年の偉績に依り海軍大將に昇進し、四十二年八月豫備役仰付けらる。夫人をフク子と呼び子なきを以て松江藩士渡邊慈氏の男剣君を養ふて其嗣となす、現今從五位海軍大將にして夫人を房子と呼び鹿兒島藩士岩山直方の三女なり。

山口勝藏君

諸機械自動車商

△出生地 神奈川県 神奈川縣
△現住所 東京市橋本區、銀座、二ノ一五、東京、八八八、八八八、二三五〇
△生年月 明治十七年十一月七日

君は神奈川縣の人先代山口勝藏氏の長男にして明治十七年十一月七日を以て生る幼名を森光といふ、明治四十三年三月家督を相続し先代の名を襲ふ、先代勝藏氏は士魂商才を以て稱せられたる燭眼達識の實業家にして、夙に西洋機械鐵物問屋を營み名聲斯界を歴せり、君の家督を繼ぎ家業を經營するに及んで益々擴張に力め、殊に自動車部の發展目覺ましきものあり、今や直接國稅二千五百餘圓を納むるの盛況に達せり夫人兼子は男爵肝付兼行氏の二女にして、快雄の一男を擧ぐ、母堂むめ子猶健なり。

中川小十郎君

株式會社臺灣銀行副頭取 從四位 勳四等

△出生地 京都府 京都府
△現住所 臺灣臺北城南街四丁目
△生年月 慶應二年正月四日

臺灣銀行は明治三十年三月發布の臺灣銀行法に據り設立せる株式組織の銀行にして、種々の特權を有する特種銀行なり本店を臺北に置き、支店及出張所を基隆、臺中、嘉義、臺南打狗、宜蘭、淡水、新竹、阿緞、花蓮港、臺東、澎湖島の各所に置き、内地には東京、大阪、神戸に、而して支那及香港廣東並びに新嘉坡に設け、尙大正三年十月より英京倫敦に支店を開設して、爲替決済の便を開始せり、斯の如きは柳生櫻井等歴代頭取の攝理鹽梅に由るは勿論なれども、又中川君其人の參畫多きに依らずんばあらず、以て君の手腕の非凡なるを推知すべし、君は京都府の士族中川祿左衛門氏の長男にして慶應二年正月四日を以て京都府下南桑田郡馬路村に生る、明治四年一月中川武平太氏の養子となる、夙に東上して帝國大學に入り、明治二十六年政治科を卒業するや、二十八年八月文部大臣西園寺公望侯の秘書官と爲り、越えて三十年一月同省の參事官と爲り、尋で同年六月を以て、京都帝國大學の書記官を拜命せしが、幾くならずして辭職し、三十一年七月加島銀行の理事と爲る、これ君が實業界に入りたる第一歩にして、その翌年朝日生命保險會社の副社長より、更に轉じて堂島米穀取引所の監査役と爲りしが、明治三十九年西園寺内閣の成立するや、再び官界に入りて之が秘書官と爲り、後内閣書記官に進み、四十一年七月樺太事務官に轉じ、又財團法人立命館長と爲りて理事を兼ね、恣くして大正元年九月、推

千早正次郎君

九州田川炭礦株式會社總支配人

△出生地 岐阜縣 岐阜縣
△現住所 東京市牛込區、中二二三
△生年月 安政三年七月十二日

君は岐阜縣の人千早正理君の長男にして、安政三年七月十日を以て、美濃國惠那郡苗木村に生る。君の家は累代苗木藩の重臣にして、君は幼時を藩校に學び、秀才の名あり、藩選留學生として江戸に出で、芝三田薩藩の道場に入りて劍法を學ぶ、王政維新となるや、君志を海軍に寄せ、海軍主計學校に入り、卒業の後、海軍省に出仕し、勳功少からず、明治十九年供給課長となり、海軍大主計に進む。然るに省内に二派の軋轢あり、遂に意見の衝突を生じ、君は憤然として職を辭し野に下れり。偶大倉、藤田等の富豪が發起となり、内外用達會社を創立したるが、君は招かれて其支配人となり、後九州田川炭礦株式會社を起し、總支配人となり、筑豊炭礦界の牛耳を取り、大に九州炭界の爲めに盡力する所あり。後豊州鐵道を創立して、石炭輸送を敏活ならしめたり。

村上隆吉君

農商務省特許局長 正五位 勳六等

△出生地 廣島縣
△現住所 東京小石川、若荷谷五七
△生年月 明治十年三月



君は恬澹快潤の士にして而も官場罕に觀る所の新進的英物なり。特に保險業の智識に至りては富贍にして而して造詣深し矣、是を以て從來著述せる數種の書籍は、保險業者の參考

書として珍重せられつゝあるは多言を要せざるべし、嚴父村上敬次郎男は海軍主計總監として聲名あるのみならず、貴族院議員として一方の勢力家なり、日露戰役の勳功に依り特に華族に列し男爵を授けらる、君は即ち其嫡子にして明治十年三月を以て廣島縣に生る、資性輕快眞摯にして學力亦優秀、其郷校を卒業するや東上して帝國大學に入り、法科を専攻して卒業し法學士の稱號を得たり、幾許ならずして農商務省に入り保險課長として令名あり、君又保險の趣味を有し、爾來熱心之が研究に従事し、竟に數種の著述を公にして世間の稱賛する所となれり、後參事官に榮進し、今や農商務特許局長として其職務に心力を注ぎ、識徳共に高く、官場に令名噴々たり。
令聞うめ子は貞淑にして又才名あり。

川崎芳太郎君

合名會社神戸川崎銀行業務執行社員 株式會社川崎造船所專務取締役副社長 福徳生命保險株式會社社長 嵐山電氣軌道株式會社 千代田火災保險株式會社各取締役 勳四等

△出生地 鹿兒島縣
△現住所 神戸、加納、一
△生年月 明治二年一月七日

君は三菱造船所と顔顔して我帝國の造船界に雄視する川崎造船所の副社長たるのみならず、一面には銀行の經營に、生命保險事業に、將又電氣軌道會社に重役として、縦横の手腕を揮ひ、特絶の才能を擅にして、大正の新世紀を色彩する偉物の一人なり、明治二年一月七日を以て鹿兒島縣に生れ、三十九年出で、以て神戸の富豪川崎正藏氏の養嗣子と爲り大正元年十二月家督を相續す、實は鬼塚善兵衛氏の長男なり、幼時貧寒に人と爲り具さに辛酸を嘗む、二十三年紐育總領事高平小五郎氏に拉せられて米國に航し、紐育商船學校に入學して卒業後歸朝するや、川崎造船所に入り之が社員と爲り、幾許ならずして先代正藏氏の識る所となり、乃ち其次女智嘉子と婚し、遂に副社長として東洋有數の大造船業の經營者たるに至れり、眞に時代の寵兒と謂ふべし、否、人と爲り溫良にして而も胸中窺知すべからざる智力を蓄へ、且國勢の發展する機微に察して、造船の事業に傾注するに於て、其識見、其云爲亦先代の後へに落つるものならんや、是れ今日の地位に榮任して、其聲名を擅まゝにする所以なる乎、況んや前記銀行及生命保險會社等に重役と爲りて巔然頭角を擡げつゝあるをや、特に福徳生命は君の經營の下に近時業績着々として

阿部正直君

從五位 伯爵

△出生地 廣島縣
△現住所 東京、本郷、駒込、四片、一
△生年月 明治二十四年一月九日

阿部家は伊豫守阿部正勝氏の後なり、正勝氏徳川家康に仕ふ、子重次氏其後を繼ぎ、慶安四年家光に殉死し、令弟正春氏其後を享け、十世を経て正桓氏に至る、正桓氏は侯爵淺野長勳氏の令弟にして男爵淺野養長氏の令兄なり、明治元年七月福山十一萬石の封を襲ぎ、同二年六月福山藩知事に任せられ、同十七年伯爵を授けらる、大正三年八月薨去す、君は即ち其長男にして明治二十四年一月九日を以て生れ、大正三年八月家督を相續し、襲爵仰付けらる、名門に人となり、父祖の血脈を受け、識徳共に高く、實に皇室の藩屏たるに負かず華胄界の人傑なり、資産は二百萬圓を算す、令姉貞子は伯爵小笠原長幹氏に、大々叔母淑子は東京府松平親徳氏に嫁し、令弟元彦氏は伯爵酒井忠興氏の養子となれり。

岩崎利兵衛君

大阪糖業株式會社取締役 日本グリセリン工業會 社監査役

△出生地 大阪府
△現住所 大阪、南、彌生、二
△生年月 明治十三年十月十三日

君は先代利兵衛氏の長子にして明治十三年十月を以て生れ三十一年一月家督を相續す、先代砂糖商を以て名あり、二十二年一族放資して大阪糖業株式會社を創立す更に米穀肥料棉花棉絲取引を兼營す、君其社長たりしが同族貞三郎氏をして之に代らしむ。令聞きぬ子、二女あり。

大森治郎兵衛君

株式會社藏經書院取締役 和洋紙商 柏屋店主

△出生地 京都府
△現住所 京都、下谷、五條通東洞院
△生年月 弘化二年七月二十二日

京都に經書出版を業とする者、甚だ多し、就中藏經書院は其尤なる者とす。而して之れが經營者たる大森治郎兵衛氏は京都の人にして、杉原治郎兵衛氏の長男を以て、弘化二年七月二十二日の生誕たり。明治六年六月、先代大森はな子の養子となり、同十年七月家督を相續す。大森氏は柏屋と稱し和洋紙類の販賣を業とす、君の之を繼承するに及び、餘業藏經書院の經營に従ひ、方今直接國稅五百圓を納め、資産五十萬圓を超ゆるの盛況に達せり。

西田嘉兵衛君

東京絲物合資社代表社員 糸物商 樹田屋主

△出生地 東京府
△現住所 東京、下谷、上野、二ノ一
△生年月 慶應三年六月十八日

君は東京の人中村金次郎氏の四男にして、慶應三年六月十八日を以て生る、幼名を徳五郎と稱す、明治三十一年三月先代嘉兵衛氏の養子となり、嘉兵衛と改稱す、養家は都下に於ける著名の糸物商にして、樹田屋は其屋號なり、君獨力家業の進展を期すとも、到底限りあるを知り、東京絲物合資會社を起して其代表社員となり斯業の改良と擴張に盡す所あり。

清水文之輔君

△出生地 福井縣 越前郡 下道谷八〇
△現住所 東京、豊多摩、下道谷八〇
△生年月 明治元年一月六日

太陽生命保險株式會社專務取締役



君は太陽生命保險の中心的人物なり、福井縣出身にして明治元年一月六日を以て其郷に生る、清水九十郎氏の長男なり、夙に秀才の譽れを博して郷里の中學校に學び、東京第一高等

中學校を経て帝國大學法科大學を卒業し法學士の稱號を得明治二十七年米國カリフォルニアに渡航し、一躍大富豪たらんと企畫せしも、機に乗すべきなきより轉じて布哇ホノル、に來り、辯護士事務を開始し、誠實熱心を以て從事せるより、忽ち内外人より多大の信用を博し、事毎に君を煩はして之が解決を告ぐるに至れり、願ふに布哇は一小島嶼なりと雖も、邦人の在住する者數萬に達し、年と共に移住民の増殖するに拘らず、未だ邦字新聞の發刊せられざるは、邦民として一大不便なるのみならず、又正に在留者の恥辱なりと做し、殆んど獨力を以て母國より活字を仕入れ、同時に文撰植字の職工を招徠して、苦心慘澹、漸やくにして發刊せるは、即ち今日偉大の勢力を以て愛讀されつゝある布哇新報是れなり、而して本紙一出して次で桑港に邦字新聞の開刊を見るに至りたるを

以て、在外邦人として邦文日刊新聞を發行せるは、君を以て之が鼻祖とせざる可らず、然るに好事魔多く君は病を獲て明治三十一年歸朝して後、宮城縣仙臺の第二高等中學校に教鞭を執りて、同僚及生徒の敬信を受くること頗る旺なりしも、更に觀る所ありて同校を辭職し、長崎市の商業會議所理事として同港の自由港設定の調査に従事し、多大の成績を現はし次で三十五年同市の十八銀行に入り、更に朝鮮に赴き、京城を首め釜山、仁川、元山、木浦、群山等各地の支店總支配人として京城に在住す、三十九年に至り露國は外國人の法人團體を認めずと云ふ理由の下に、松田某の經營に繋る銀行に對し故障の發生するや、君奮然として同地に出張し、非常の危険を冒して官憲の反對を排し、進むで露國大藏大臣に公文書を提出し、且直接談判を開き渠を屈服せしめて、遂に同地に十八銀行の支店を開設するに至れり、是れ實に浦鹽に外國人銀行を創立せる嚆矢にして、君の聲名は是れより益々揚る、而して四十三年歸朝するや、其翌年十一月を以て現在の保險會社に入り、直ちに專務と爲りて専心一意業務に執掌しつゝあり。

令閨榮子は鹿兒島士族渡瀬正造氏の五女にして今や秋子、次女宮子長男公一の數子を擧げて家庭頗る圓滿なりと云ふ。

野澤源次郎君

△出生地 東京府 東區、本郷、駒込林、一三
△現住所 四、小石川八六〇
△生年月 明治元年五月六日

株式會社社長日銀行監査役 貿易商 野澤組主
貿易商として野澤組は、聲名斯界を壓し、旭日隆々たる者

池田屋主

佐藤茂兵衛君は先代茂兵衛氏の長男にして、明治二十年十月十五日を以て生れ、同四十三年四月家督を相續し、幼名榮太郎を改めて先代茂兵衛の名を襲ぐ、質商を營み、屋號を池田屋と稱す、其人となり堅實にして業務に勵精し、質商として金融の便を圖り、懇切を極む、資財日に月に増加して今日の資産は六十萬圓を超へ、富豪を以て知らる。母堂はゑい子令閨はゆき子、令妹きみ子は府立高等女學校を出で、同美津子は女子美術學校に學び、共に才女の譽れあり、尙ほ令妹すゑ子あり、同じね子は東京府増澤棟造氏に嫁せり。

岩堂保平君

△出生地 岡山縣 岡山
△現住所 岡山、小原
△生年月 安政元年十月三日

君は岡山の人、堀野圓藏氏の令弟にして、安政元年十月三日を以て生る。明治五年先代雄五郎氏の養子となり、家督を相續す、幼より實業界に入り、具さに艱難を嘗め、實地に經驗を積む、君が天來の器才は、到る處に實現せられて、漸次地歩を作り、纏て岡山實業界に缺くべからざる一人となれり嗚呼貧兒一朝、養はれて岩堂氏を繼ぎ、遂に今日の成功を得誰か君の幸運を羨まざるものぞ、而も君の今日あるは唯運命の導きのみにあらざる也。須らく君が歩み踏み來れる足跡に顧みる所あらざるべからず。果報は眠れる者に來らざるを思ふべし。曩に岡山米穀取引所理事長、岡山製紙株式會社專務取締役として、其蘊蓄する處の經驗を實地に行ひて民望を博せり。

あり、案するに野澤組は君の嚴君卯之吉氏の明治二年創設せし所に係り、三十三年君の繼承するに及んで大成せられたるものなり。卯之吉氏は豊橋藩士山内茂兵衛氏の二男にして、天保九年六月の生誕なるを以て、將に八十歳を超たる高壽者たり。幼にして個體大志あり、後先代野澤氏の養子となり京橋區南傳馬町に野澤組を設け、直輸出入商を營むや、審に世界の大勢を見、商海の氣運を察し、大勢の赴く處に従ひ、氣運に順應せしかば、忽ちにして斯界を測歩するに至れり。君の慶應義塾理財科を出づるや、先づ店務に従事せしめ、其圓熟するに及んで海外を遊歴して、徐に商海に棹さすの準備を爲さしむ、君の歐米に在ること二年に及び、歸朝するや、先づ横濱市山下町に野澤組を新設して、絹織物經木真田の輸出を試み、神戸及英京倫敦に支店を設け、時代の要求に後れずして、海外取引の信用を高むるに苦心し、機略縱横我が貿易界の爲めに貢献する所多し。野澤組が今日の盛況を呈せる嚴君卯之吉氏が創業の功、元より大なりといへども、君が大成せし偉勳に至りては、筆舌のよく盡す所にあらず。曩に東京商業會議所評議員に列し、現今同業組合の委員として、盡瘁しつゝあり、君頭腦明晰、よく人の説を容るゝの度量あり故を以て店員皆君に心服しつゝありといふ。店運の隆々たる故なきにあらずといふべし。

夫人なか子は桑原爲十郎氏の長女にして、三喜三、喜四郎喜五郎、喜八郎、こう子、六子、よし子の數子あり。

佐藤茂兵衛君

△出生地 東京府 東區、北豊島、南千住、千代田、二丁目、下五八六
△現住所 同上
△生年月 明治二十年十月十五日

大正人名辭典 (野澤源次郎) (佐藤茂兵衛) (岩堂保平)

飯田 新七君

△出生地 京都府 京都市下京、烏丸高辻下ル
 △現住所 同上、二九六
 △生年月 安政六年十月二十八日

京都府多額納税者 京都商業會議所特別議員 高島屋飯田合名會社々長 勳六等



君は京都府の人先代飯田新七氏の二男にして安政六年十月二十八日を以て生れ幼名を鐵次郎と言ふ明治二十一年三月を以て家督を相續して先代の名跡を繼ぐ。

飯田家の祖は江洲高島の寒村より出で吳服を家業とし、代々新七を名乗りて屋號を「高島屋」と稱す、君は實に飯田家四代の相續者として祖業を繼ぎ且克く時代の進歩に準照して其業務を擴張し、而も着實の營業振りを以て大に世間の信用を博し、今や京都を總本店として支店を東京、大阪、横濱、神戸は勿論海外にありては天津並びに英國倫敦等に設け吳服商として大飛躍を爲しつゝあり、加ふるに博覽會共進會等の舉行せらるるや内外を論せず、優秀絢爛なる吳服を出品して、世間の眼目を驚かし多大の歡迎を受くると同時に其都度賞牌褒狀を授與せられたること眞に枚擧に遑あらず、就中刺繍に至りては「たかしまや」として其名聲を世界に煥發し、三越、白木と相駢んで斯界に覇を稱するが如きは單り飯田家の名譽のみならず寔に以て帝

國の譽れと謂ふべし且夫れ君の事業は吳服販賣のみならず宮内省、陸海軍其他諸官衙の用途を兼ね、畏くも 兩陛下の御料御召羽二重及び御用織物の御下命を蒙るのみならず、各皇族方の御用をも承り、而して賞勳局に於ては綬條の製造を命じ、陸海軍にては使用の織物、鐵道用椅子張輪奈織等の用命を辨するより、其名聲は隆々として斯界に喧傳するに至れり。君に兄弟五人あり長兄新兵衛氏は不幸にして物故せし以來君は高島屋の總理となる、而して舍弟政之助氏は京都に三弟藤次郎氏は東京に末弟太三郎氏は横濱に在りて各々獨得の手腕を揮ひつゝあり、君亦公共事業に志あり明治二十一年以來海防費は勿論日清、日露の大戦役に際し、金品を献納すること鮮なからざるより、政府は其功を嘉みして黃綬褒章及綠綬褒章を賜ひ更に勳六等瑞寶章を授けらる、是れより先き京都府商業會議所議員に擧げられ、爾後引續き其椅子に凭り以て今日に及ぶ。

相馬 順胤君

△出生地 福島縣 東京、下谷合、三七八
 △現住所 同上、五〇二
 △生年月 文久三年九月二十九日

君は舊磐城國相馬中村の藩主にして世々六萬石の城主たり先々代胤胤氏の三男にして幼名を龜五郎といひ、先代胤胤の後を繼げり。元來、當家は平高望の二男平親王將門より出でたる舊家にして、將門より三十七代を経て胤胤に至り、明治

十七年子爵を賜はり、明治二十五年三月襲爵を仰付られたり夫人を領子と呼び、子爵有馬純文氏の妹にして、故子爵秋元興朝氏の養妹たり。孟胤、廣胤、正胤の三男あり、長女元子は子爵青山忠精先代忠允氏の未亡人たり、二女澤子あり。而して令兄義理氏は子爵佐竹家を相續し、甥秀胤氏は子爵織田信敏の氏養子となりて名を信恒と改め、織田家を襲ぎ、又令妹花子は子爵有馬純文氏に嫁したり。

金澤 仁作君

△出生地 大阪府 西、京町堀四ノ二
 △現住所 同上、二〇六
 △生年月 文久元年十一月七日

衆議院議員 大阪府會議員 攝津紡績株式會社 帝國製紙株式會社各取締役 平野大豆工業株式會社 社監査役

君は大阪の人、金澤卯右衛門氏の二男を以て文久元年十一月七日大阪市西區朝北通四丁目に生る。父君夙に公共事業に盡し令名あり、明治十一年の頃、宗家先代金澤仁兵衛氏が田中市兵衛氏等と圖り第四十二銀行を創立するや、君直に東京に赴き大藏省銀行簿記傳習所に入り銀行事務を研究し、大阪に歸り同銀行員となりしが、家兄の逝去に遇ひ止む無く職を辭し家業に従事せり。後二十二年、平野紡績株式會社の創設せられ仁兵衛氏が其社長となるや、君入つて社長を輔け銳意經營に盡す、模範的工場と稱せらるゝに至り、仁兵衛氏の歿後、君社長となり益々事業の發展に努力し、傍ら紡績界の種々の問題に就いて奔走盡力せしこと少なからず、三十五年平野攝津兩紡績會社の合同を成就せしめ、尋いで取締役に擧

大正人名辭典 (金澤仁作) (長谷川鏡次)

げられ、大正二年三月帝國製紙株式會社の創立總會に於て擧げられて其取締役に社長となり爾來其發達を圖るに銳意せり、君また常に公共事業に意を注ぎ、四十二年大阪市政の紊亂其極に達するや、奮然起つて同志と相謀り市民會を起し、輿論を喚起し其刷新に盡し、四十三年四月府會議員補缺選舉に市民會より推され無競争を以て當選し、四十四年九月の同總選舉には最高點を以て再選し、其他西區土佐堀外十七ヶ町聯合區區副議長、西區土佐堀以南三ヶ町聯合協和會長、西區江戸堀教育會長、西區第二聯合會幹事及び西區公正會幹事等の公職を帯びたり、現に攝津紡績帝國製紙兩株式會社に各取締役に、平野大豆工業株式會社に監査役の任にあり。大正四年衆議院議員選舉に際し、大阪市より選出せられ、爾來累選せられて、現に其職に在り。

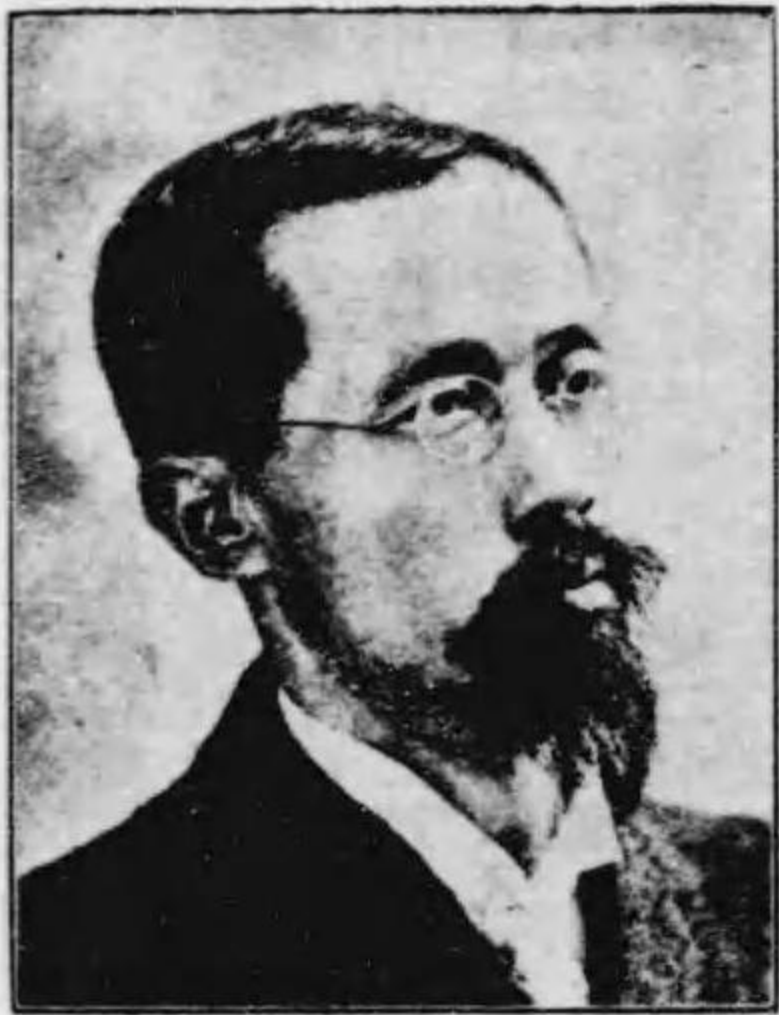
長谷川 鏡次君

△出生地 岐阜縣 東京、深川、吉永、四
 △現住所 同上、七四四
 △生年月 明治五年十月九日

君は岐阜の人長谷川金左衛門君の令弟にして、明治五年十月九日を以て生れ、明治三十五年六月分家して一家を創立す家世々材木商として名あり。君現今繁忙なる業務の餘暇を以て、大湊木材株式會社專務取締役に、東京材木問屋組合幹事、東京木材倉庫代表社員等の樞機に當りつゝあり。夫人を慰子といふ、甫子、壽美子、壽惠子等の數子を擁して琴瑟相和し家庭鬪々たり。

井上敬次郎君

東京市電氣局理事 電車部長



△出生地 熊本縣 熊本市
△現住所 東京市 赤坂、青山北、四六
△生年月 文久元年八月

君は肥後熊本藩士井上彌三郎氏の男なり、七歳父に別れ少年にして既に自活せざるべからざる窮境にありき、而も君が不屈の精神は窮して益々現はれ縣廳の給仕となり漸く生活

しき。時に郷閭の徳望家に横田大尉なる者あり。深く君の人物を奇とし懇切に薫育す。偶西南の亂起るや横田氏は西郷隆盛と私交あるを以て其亂に加はる。君も志士が憂國慨世の談論を聴き、深く其説に服し遂に横田氏に隨ふ。亂平ぎて後間もなく横田氏病死せしかば、君決然として上京し近事評論社に入り盛に時事を談論す。明治十三年政府外債募集の説あり是非の論頗る盛なりき。君は其非募債主義にして過激なる反對運動をなし遂に獄に投せらる。獄中廣澤參議を暗殺せる中村六藏あり和漢英の學に通ず。君就いて學びしが間もなく赦免せられしも、十七年赤井景昭が脱獄事件に關し再び獄裡に投せられて在獄二年、而して出獄するや二十年條約改正に對する井上案なるものあり。君極力其非を唱へ新聞紙條例違反としてまた入獄す。實に獄に投せらるゝ事前後三回八年の長

きに及ぶ。偶獄中にて故星亨と相知り忽ち意氣投合して是より星の僚友となる。廿二年二月帝國憲法發布の際、特赦せられて星氏等と出獄す。同年五月星氏に隨ふて米國に航し、滯留二年具に彼地の文物を研究し歸朝するや、關東新聞、めざまし新聞を經營し傍ら政界に馳驅す。明治廿九年山口熊野、田中賢道氏等と計り熊本移民合資會社を設立し國力の伸張を計る。蓋し國內に於ける人口と生産との平均を計り且海外發展に資せんとする也。布哇、墨西哥等に續々移民を送りて着々成功せり。東京市街の交通は尤も進歩遅く、馬車鐵道の時代長かりしが兩宮敬二郎氏は市街鐵道會社を設立し電車運轉を規畫するや、君招かれて入社し、兩宮氏を助けて頗る功あり。貸錢問題に於ては均一論を主張し遂に其説を實行せしむ。市民は均一貸錢に於ける君の功を頌す。是より株主の信頼厚く君は一躍して専務取締役となる。市街鐵道は東京電車株式會社と併合せられて東京鐵道株式會社成るや、君又専務取締役に推選せらるゝ、電車市有後、君は電氣局電車部長として部下の信頼を受くる事頗る厚しといふ。

辰馬悅藏君

酒造業

△出生地 兵庫縣 兵庫
△現住所 兵庫、武庫、西宮
△生年月 元治元年八月

辰馬家は其一族皆西宮の豪商を以て鳴る。君は辰馬酒造株式會社取締役たる辰馬半左衛門氏の令弟にして、先代辰馬市左衛門氏の二男を以て元治元年八月に生る、長尾ゆき先代よし子の養子となり、ゆき子の入夫たり。而して酒造を業とし家産に増殖するの盛況を呈しつゝあり。

白杵才化君

白杵小兒科醫院長 從六位 醫學博士



△出生地 三重縣 三重
△現住所 東京、豊、東大久保、二
△生年月 明治九年二月三十一日

君は伊勢の人明治九年一月三十一日を以て三重縣一志郡柳原に生る、先考は玄貞氏、小兒科醫として聲名郷黨に高く、家世々同地の名門たり、君は其の長男、幼にして敏慧聰明、

夙く己に麒麟兒の稱を博す、少時津市に赴き、養正小學校に入り業を了へ進んで三重縣中學校に入り、明治二十八年四月卒業、同年九月金澤第四高等學校に入學、三十一年同校第三部卒業、同年九月東京帝國大學醫學科大學に進み、三十五年十二月成績優等を以て卒業醫學士と爲る、翌三十六年一月より同大學附屬醫院小兒科に於いて教授弘田博士指導の下に小兒科を研究する事殆んど三年に及ぶ、三十八年十二月臺灣總督府醫院醫長兼臺灣總督府醫學校教授に任せられ、臺北醫院勤務と爲る、而して同院に於いては新たに小兒科を創設し、診療の傍ら専ら研究に従事す、同醫院小兒科の今日ある、是れ實に君が努力創設の結果たらざるばあらず、四十年八月休職と爲り、直ちに官費留學を命ぜられて同月渡歐、泰西小兒科醫の巨擘たる獨國グレスラウ大學チエールニ教授の許に研究

及臨床的實驗に従事、數多の業績を携へて四十三年芽出度歸朝、再び臺灣總督府に勤務、曩きに心血を注ぎたる同府醫院の小兒科をして益々隆盛ならしめたり、即ち功を以て從六位に叙せらる、後ち官を辭して上京、小兒科醫院を神田區淡路町一の一に開設し、其の修得の妙技と天成の學才とを以て痛苦に疾む小兒の診察に従事せんとしつゝあり、而して曩きに提出せる自著の論文「生理的並に病的關係に於ける哺乳乳腸内に於ける脂肪の運命」(正論文)「胃腸中に於ける脂肪及レチチンの及ぼす影響」(副論文)及び弘田博士と共著の赤痢様疾患を起す大腸菌屬筋菌に就きて(添論文)並に「志賀菌に類する赤痢様疾患を誘起する大腸菌に就きて」(同上)に依りて醫學博士の學位を授與せられたり。

淺田甚右衛門君

麥酒釀造業 蕎麥粉製造業

△出生地 東京府 東京
△現住所 東京、豊多摩、中野、四一
△生年月 明治二十二年六月四日

府下中野の一大富豪にして且つ有力なる實業家を淺田甚右衛門君となす、君は先代淺田甚右衛門氏の二男にして淺田吉太郎氏、三枝代三郎氏の甥なり、明治二十二年六月四日を以て生れ、同四十一年二月家督を相續し、先代の名を襲ぐ、屋號を淺田屋と號し其名遠近に聞ゆ、麥酒釀造業及び蕎麥粉製造業を營み、營業の基礎磐石の如く業務益々發展に向ひ、資産は二百萬圓を算す、家族としては母堂しづ子、令閨みち子令弟勇吉氏あり、一家圓滿なり、姉齊子は分縣士族鈴木恒三郎氏に嫁せり。

園田 孝吉 君

△出生地 鹿兒島縣
△現住所 東京芝白金三光、四九八
△生年月 嘉永元年一月十九日

株式會社川崎銀行 東京海上保險株式會社 株式會社十五銀行 株式會社丁酉銀行 株式會社橫濱正金銀行 日英水電株式會社各取締役 株式會社信州銀行相談役 正五位 勳二等

君は舊鹿兒島藩士宮内健吉氏の長男たり嘉永元年一月十九日を以て薩摩國薩摩郡に生れ、後故ありて同藩士園田澤右衛門氏の養子と爲る、夙に藩儒某に就き漢學を修む、文久三年英艦の鹿兒島灣砲撃の事あり、君時に年漸く十五歳なり其實狀を目撃して大に感ずる所あり、爾來洋學を修めんと志し藩立英學校に入り學々として英學を研究して深く外國の事情を探る、慶應三年長崎に遊學して明治二年大學南校に轉學し、後藩の選抜を受けて貢進生と爲り、業を卒へて同四年外務省に出仕し書記生領事等に歴任し、英京に滞在すること前後十有五年の久しきに亘り、深く歐洲商業の實勢に通曉し歸朝するや横濱正金銀行頭取に擧げらる、時に明治二十三年の交なり、於是乎從來の行務を釐革し且適材を適所に擧用せる結果として業務大に面目を改め信用倍々強大と爲れり、悉くして日清戰役後政府の爲に英京に出張し、清國償金收容の事務を全うし功を以て勳四等に叙し、旭日小綬章を賜はり更に特旨を以て正五位に叙せらる、顧ふに君の正金頭取に就職せしより爾來三十年まで七箇年間勤績せり、其間政府の財政を翼賛せること枚擧に遑あらず、是に於て乎功成り名遂げて同行を辭し、翌年株式會社十五銀行頭取に推さる、蓋十五銀行

は都下三大銀行の一にして、之に頭取たるは澁澤、安田兩氏と鼎立する者、即ち斯界の大手腕家にあざれば不可とする所、然るに君之が頭取と爲る、知るべし君の聲望と力量の披群なることを、君嘗て勤儉貯蓄を説き至誠奉公を論じ、時代の頹廢を慨し以て國民の奮起を激ます、而も日清戰爭の始めに方り自から所有の貴金屬を國庫に捧げ率先して範を天下に示せり、而して其平生にありては廉潔己を持し恬淡自から守り、躬を公務に委ねて毫も私なきに至りては實に斯界罕觀の老紳士と謂ふべし、今や如上數會社に重役と爲りて偉大なる盛名を博するのみならず、日露事件の功を以て勳二等を忝うし瑞寶章を佩ふるに至りたるは、抑亦一門の光榮と謂ふべし資産百萬圓を算す。

令聞銓子は千葉縣人富永發叔氏の三女なり、而して今や武彦、忠雄、米子等あり、米子は滋賀縣人兒玉一造氏に、養妹由幾子は鹿兒島縣人村尾重一氏に嫁す。

田中 常德 君

△出生地 東京府
△現住所 東京、麹町、中六番、二二
△生年月 萬延元年一月八日

麒麟麥酒株式會社 福德生命保險株式會社 帝國劇場株式會社各取締役 日本セルロイド人造絹糸株式會社 株式會社川崎造船所各監査役

君は實業家中一方の雄將を以て目せらる、當初日本郵船株式會社に入り勵精業を勵み、累進して調度課長に陞る、尋で三菱系の重なる人々胥謀り麒麟麥酒株式會社を設立するに當り、重望を負ふて取締役の要位に就き創業開始の事務に執筆

し、次第に良好なる成績を擧げ現時に及ぶ、又帝國劇場株式會社福德生命保險株式會社等に取締役となり、専心經營の任に膺り、又川崎造船所監査役となり、嚴正直實を以て任務を完うし現に其職に在り、而して君は日本セルロイド株式會社の創設者たり、蓋しセルロイドは近來に至つて普く流行を來たし高尚なる珍品なれども、其原料は悉く之を外國よりの輸入に仰ぎたり、君之を慨し同志者と議し上記日本セルロイド株式會社を興し推されて専務取締役となり、方今日本セルロイド人造絹糸株式會社に監査役たり、君は原來東京府士族田中常則氏の二男を以て萬延元年正月八日に生れ、夙に三菱商業學校を卒業し擧られて同校に教師となり、育英の事に従ひ良教師とし令名一枝を掩ひしが、遂に實業家たらんと欲し日本郵船株式會社に入り後諸種の事業に關與し、現今頭書の諸會社に重役たり。

令室をきん子と呼びて、家庭和樂し六男三女あり。

神谷 忠雄 君

△出生地 愛知縣
△現住所 東京、豊多摩、渋谷、青山
△生年月 明治十三年十二月

東洋移民合資會社 日本貿易合資會社各代表社員 伯刺西爾拓殖株式會社取締役

移民界のオノンリチーにして米國の内情に精通するを以て開ゆる神谷君は明治十三年十二月を以て愛知縣丹羽郡犬山町の舊藩邸に生る、幼時父母を喪ひ祖母の手に依り鞠育せらる幼より慧敏にして頗る膽氣あり、明治二十九年歐然起て米國に渡航し、自活自辨以て語學を研修し熟達して歸朝するや、

大正人名辭典 (神谷忠雄) (今津惣助)

今津 惣助 君

△出生地 大阪府
△現住所 大阪、西、南通、三
△生年月 明治元年三月

椎茸輸出業

君は大阪に於ける椎茸業者にして君の家に傳承せられたる主業なりしが、君の代に至り宇内の大勢を察し海外に廣く販路を求めざる可らざるを思ひ、爲めに百方之れが品質風味の不變貯藏の方法に苦心し、新式乾燥室を設けて該茸を複製し模造紙を以て包装となし、其他種々の外部包装の奇抜なる發明を案出して、遠近の商取引を便にして以て海外輸出の方法に便し、業連の刷新を圖るに至れり。

平田 初熊 君

△出生地 山口縣
△現住所 東京、住原、入新井、新井
△生年月 慶應三年十月

大日本人造肥料株式會社常務取締役兼總支配人
清田炭礦株式會社 東京礦業株式會社 臺灣肥料株式會社 千代田炭礦株式會社 猪野礦業株式會社 各取締役 常總鐵道株式會社 霞浦砂利株式會社 蓬萊生命保險株式會社各監査役



君は萩藩士林貫伍氏の長男にして慶應三年十月を以て長州美禰郡に生る、出で平田與一郎氏の養嗣子となり其姓を襲ぐ、幼にして聰明群に超へ小學を卒へ更に進んで漢學を修め

二十一年上京して數學簿記學を學び、後三井物産會社に入り勘定掛となり、後古宇嶺山小樽支店長崎支店等に歴任し、二十九年本店石炭掛主任となり、茲に大に手腕を發揮し業績を擧げ從來の面目を一新する所あり、三十二年擢でられて北海道漁業部長となり函館に在勤し、精勵以て同部の整理を卒へ四十一年營口支店長として任に滿洲に赴き、畫策機宜に適して頗る令名あり、一面大連所在株式會社三泰油房社長となり名聲噴々たるものありしが、四十二年病の爲めに東京に歸り姑らく三井物産會社の參事となり、畫策する所ありしが四十

三年四月招致せられて大日本人造肥料株式會社に入り其總支配人となり、經營宜しきを得て社連日に盛んに社中の重んずる所となり、同年七月更に推されて常務取締役となり、社運を双肩に荷ひ社務に執掌して聲名隆々たり、尙現今頭書數會社の重役として敏腕を發揮し亦人望を博しつゝあり、資質沈毅にして果斷力に富み事業界の各方面に亘りて深き經驗を有し、銳意精勵諸事功を收めざるはなし、君の如き洵に得易からざる偉器なりと謂ふべし。

令閨をマヌ子と呼び、此間與一、ヒサ子、富子の三子あり

金原 明德 君

△出生地 靜岡縣
△現住所 靜岡、濱名、和田
△生年月 安政三年七月二十日

株式會社西遠銀行 濱松形染株式會社 天龍木材株式會社 天龍運輸株式會社 名古屋無盡株式會社 社各取締役

君は我實業界の偉勳者として又其典型として社會の崇敬を受け、明治の二宮尊徳を以て稱せられつゝある金原明善氏の長男なり、安政三年七月二十日を以て生れ、明治二十八年三月家督を相續す、君嚴君の血を受けて熱誠謹嚴、公共の精神に富み之に加ふるに實業上の智識手腕卓絶し、絶倫の精力を以て事に當り風格亦欽すべきものあり、父明善氏隱退の後を襲ぎ主として山林の經營に力め、且つ株式會社西遠銀行、濱松形染株式會社、天龍木材株式會社、天龍運輸株式會社、名古屋無盡株式會社等の各取締役を兼ね、専ら其力を實業界の爲めに傾注しつゝあり、明善氏實に其後ありと謂つべし。

山口 吉郎兵衛 君

△出生地 大阪府
△現住所 大阪、南、上本、七
△生年月 明治十六年四月二十五日

株式會社山口銀行 株式會社大阪貯蓄銀行各頭取 正七位

資本金に三倍するの積立金を有し、兵庫、岡山、京都其他樞要なる都市十一個所に支店又は出張所を有し、堅實なる營業を爲すを以て、一般信用程度の最も確實なるを以て有名なる山口銀行は、先代山口吉郎兵衛氏が明治三十一年創立せし個人經營の銀行にして、當主山口吉郎兵衛氏は、先代吉郎兵衛氏の二男にして、明治十六年四月二十五日を以て生れ、二十年七月家督を繼ぐ。夙に慶應義塾に入り、理財の學を研修すること多年、方今山口銀行主として、大阪の財界に噴々たる盛名を有するのみならず、曩に外山修造氏の逝去せしを以て、其後を襲ふて大阪貯蓄銀行の頭取となる。實に關西實業界の頭目たり。今や財を積むこと一十萬圓を超へ、聲望愈々隆なり。功を以て正七位を授けらる。

夫人をちか子といふ。明治二十三年の誕生にして、西尾與右衛門氏の三女なり。長女くに子あり、掬育至らざるなし、令弟謙四郎氏は明治十九年の生誕にして、夫人みよ子は菊地忠篤氏の三女なり。外に伯母りく子は芝川又右衛門氏に、叔母ごめ子は山口仁兵衛氏と鴛鴦契成りて琴瑟和樂を極む。

下村 忠兵衛 君

△出生地 京都府
△現住所 京都、下京、烏丸通錦小路
△生年月 明治二十五年六月三日

吳服商 大正人名辭典 (山口吉郎兵衛) (下村忠兵衛) (高木鐵男)

君は先代忠兵衛氏の二男にして、明治二十五年六月六日を以て生れ、同四十年五月家督を相續し、舊名忠藏を今の名に改む、幼より學を好み、俊敏の譽あり、京都府立第一中學を経て早稻田大學に入り、經濟學を學び、學殖豐富統理の才に富み、事を執る緻密、父祖の遺業を承けて益々家業を大成しつゝあり、君春秋に富む、前途多望なるは勿論なり、資産百五十萬圓を算す。家族としては祖母さとし子、母堂ゑい子、令妹悦子、同浅子あり、養叔母てい子は同府下村忠三郎氏に、同つ子は同府樋口芳太郎氏に嫁し、叔母ちる子は其夫新井謙三郎氏と共に分家せり。

高木 鐵男 君

△出生地 岡山縣
△現住所 備前、津守、庄、徳島、明治製糖社宅

明治製糖株式會社專務取締役

明治製糖の專務取締役たる高木君は岡山縣人にして、父君を正美といひ君は其嗣子たり、幼少既に群童を凌ぐの智巧あり長じて益々明敏也、夙に郷里の中學校に學び後東京に出で帝國大學法科に入る、既にして業を了るや他の朋輩と方途を異にし、實業界に志ありしも機を得ず、明治三十七年臨時臺灣糖務局に奉職し、後舊慣調査會を兼務し、明治三十九年明治製糖の組織せらるゝや、君入りて其主事となり能く創立の事務を全うし漸次信用を加へ、遂に明治四十五年に至り取締役に選ばれ、次で專務取締役として同社經營の衝に膺り製糖事業の指揮監督を爲すに至る、君の同社に在るや殆ど我家の如し、同社の發展の急激なるは君に負ふ所大なり。

金子政吉君

△出生地 群馬縣 群馬郡 太田一ノ九
△現住所 群馬縣 太田一ノ九
△生年月 安政元年十月三十日

横濱商業會議所特別議員 株式會社横濱貿易銀行
頭取 横濱電氣鐵道株式會社 株式會社第二銀行
横濱貿易倉庫株式會社各監查役 株式會社横濱鐵
絲外四品取引所理事 生絲商 阿波屋主



蠶糸貿易界の重鎮
として將海外貿易の
指導者として、金門
灣頭に多大の信用と
尊敬を拂はれつゝ、
ある金子政吉君は群
馬縣の人鈴木宇右衛
門氏の長男なり、安
政元年十月三十日を

以て上野國勢多郡花輪村に生まる、家は世々蠶糸業者として
聞ゆ。君は故ありて金子五兵衛氏の養子と爲り、明治十四年
を以て家督を相續せり、是より先き君は郷里を出で横濱に來
り、質商として其業務に鋭意たりしが、幾許もなく時勢に鑑
みる所あり、斷然質店を鎖して生糸貿易に轉業し、屋號を阿
波屋と改め其組織を堅實にし、誠意以て事に當るや、顧客の
信用する所と爲り、星霜を経るに從て其基礎倍々鞏固に、今
や貿易商として抜く可らざるの勢力を有するに至れり、愼く
して明治二十九年横濱商業銀行の創立に盡力して之を取締役
に擧げられ、尋で三十年横濱火災運送信用株式會社設立の計

畫あるや、君亦其間に斡旋努力して後重役に推され、著大の
成績を擧げたりしは、當該會社として没す可らざる事たり、
現今は如上擧示せる諸會社に關聯し、且蠶糸外四品取引所理
事として、得意の手腕を揮ひ同所の發展を實現しつゝあるは
國家貿易の見地よりして、吾人は君の熱心を多とせざる可ら
ず、君嘗て市會議員に擧げられ、市會議長たりき。又商業會
議所員に選まれ市政及商工業に貢献せるもの鮮なからざるは
金港發展史に逸す可らざる史實なり。人と爲り快調にして而
も事理を處理し裁斷するに當りて、毫も逡巡すること無きは
即ち重鎮として今日の聲望ある所以なる歟。惟ふに上州男兒
は天真流露にして其舉止の活潑々地たるに於て自から關八州
の首位に居る者、而して君の快調にして天真爛漫たる所、全
く上州氣質を發揮し來りて、些の遺憾あるなし嗚呼君の如き
は上州男兒として實業界に飛躍しつゝある先輩先進と謂ふべ
し、豈唯金門灣頭に於ける重鎮のみならんや。
夫人てつ子は養父五兵衛氏の養子にして、金子丹五郎氏の
令妹に當り、常太郎、泰次郎、榮三郎、健藏、きわ子の數子
あり。

田艇吉君

△出生地 兵庫縣 兵庫郡 北橋谷二六
△現住所 大阪府 南區 三軒松
△生年月 嘉永五年九月六日

帝國電燈株式會社 千日土地建物株式會社 柏原
電燈株式會社各取締役 從六位 勳五等

君は田文平氏の長男にして嘉永五年九月を以て丹波國水上
郡柏原町に生る、其家系最も古く世々柏原に住し名族を以て

松村金兵衛君

△出生地 埼玉縣 埼玉郡 佐久間、二ノ
△現住所 東京、神田、佐久間、二ノ
△生年月 萬延元年正月三十日

東京精米株式會社取締役 米穀商

著る、田村將軍の出にして田村の姓を稱せしが、元龜天正の
交織田上野介に仕へ村の字を省き田と改め、上野介の柏原に
封せらるゝに及び徒て之に住し、田忠助の代に至り致仕して
庶民に列し、苗字帶刀を許され柏原藩の郷士たり。忠助より
十二代を経て嚴君に至る、嚴君二男三女あり。長は即ち君に
して次は遞信大臣男爵田健治郎氏なり、君少時小島省齋氏の
門に入り柏原藩營に漢籍を修む、明治二年父君易簣するに及
び家督を相續して里正たり、廢藩置縣後豐岡縣の郷長、區長
屬官に歴任して明治九年千葉縣に轉じ學務及警察事務を執り
十年辭して歸郷す、十二年縣會議員に推選せられ同年十月水
上郡長となる、在職十年郡治に盡瘁し其功績著しきものあり
二十三年官を辭して同年衆議院議員に當選し爾來再選八回に
及ぶ、後住友家の聘に應じ同家本店に入り住友銀行副支配人
住友本店支配人、住友倉庫支配人等に從事し三十六年を以て
之を辭す、在職中の功勞に依り今尚住友家より別家格の待遇
を受く、三十七年阪鶴鐵道株式會社社長となり、四十年八月
國有に歸するに至り罷む、同社在職中日清日露戰役に功あり
菊花御紋章銀盃一組を賜ひ勳五等に叙せらる、四十三年大阪
市會議員に當選して大正二年五月改選に際し、再選せられ市
會議員の職に在りて市政壇上の重鎮たり、現今は以上數會社に
關聯して、關西實業界に在りて一面の雄將たり。
夫人ち世子、長男昌氏は法學士にして大藏書記官の任に在
り、次男哲氏は出て親族小谷氏を冒し、法學士にして南海鐵
道株式會社員たり、三男實氏は法學士にして文部省參事官た
り、出でて園田氏を冒す、女こしづ子、貞子、修子、和子の
四女あり。

藤田 昆直君

△出生地 東京府 東京市、深川、常盤、二ノ七
△現住所 東京市、深川、常盤、二ノ七
△生年月 安政元年正月八日

株式會社土浦五十銀行取締役 京成電氣軌道株式會社 株式會社農工貯蓄銀行各監査役



君は舊幕臣黒川近江守昆貞氏の次男にして安政元年正月八日を以て江戸に生れ資性輕快真摯にして如何なる難問題に出會するも、毫も屈托することなく、快然として迎へ、而して

之を斷するに左右を顧念することなく、一決裁斷、曾て悔ひざるに至りて君の力量手腕の鮮やかなるを見ずんばあらず、蓋所謂江戸ッ兒氣質なるもの歟、但君の漸く長するや維新兵革の後にして幕運竟に競はざりしを以て、斷然意を決して實業界の人と爲り、而も非常の辛酸を嘗め盡して今や前記の諸會社に重役と爲り、多大の信望を博しつゝ、あるは眞に君の爲めに快とせざる可らず、是れより明治十四年同じ幕臣たる藤田家に嗣子なきを以て、之が養子と爲り竟に其姓氏を冒す、君公共の思念に敦く又區民の爲めに努力するや、常に肺腑より出づるを以て信望の歸する處、每期區會議員に擧げられりて今日に及ぶ、人々爲り硬直正義にして私曲を惡むこと蛇蝎當ならざる也、是れ衆望の歸する所なる歟。

町田 忠治君

△出生地 秋田縣 秋田、牛込、南橋、七三
△現住所 東京市、牛込、南橋、七三
△生年月 文久三年三月三十日

衆議院議員 正五位 勳三等

君は機智湧くが如く手腕亦敏捷にして最も運算の妙に長けたる實業家の一人なり、君今や郷里秋田縣より選出せられて代議士と爲り、且憲政會に所屬して黨勢の擴張に熱心し、大隈侯の信任を博しつゝ、ある議政家なり。君は文久三年三月三十日、舊佐竹藩士町田長秀氏の實弟として生る、少より敏慧活潑、郷中學を卒業するや縣費生として大學豫備門に入りしも病を獲て半途退學す、會々犬養毅氏の知遇を獲て再び大學選科に入り専ら政治經濟を研鑽し、卒業して後更に大隈侯に識られ東洋經濟新報を發刊し始めて時事問題を論評す、明治二十三年の交、尾崎行雄、犬養毅の兩氏は藤田茂吉の主幹たる郵便報知新聞を去り、朝野新聞に筆を執るや君亦入りて之が記者と爲り心血を傾倒せり、夫れより民報、報知等の新聞に執筆して名聲漸く世間に揚る、幾許ならず大隈侯に倚り歐洲に見學し周遊年餘にして歸朝するや、日本銀行に入り總裁岩崎男の秘書役と爲り更に同行上海支店に勤務して實務を練修し敏腕家の令聲を博せり、幾許ならずして大阪府山口銀行の聘する所となり、之が總務の要職に就くや從來の業務方針を釐革し、行員の淘汰を斷行し献身的に執務せる結果、果然行運隆盛に赴き信用日に増し實に今日の盛況に達せしめたり、這般一事に見るも君の運算凡庸の企及し得べからざるを知るべし、後同行を辭して株式會社第百十銀行、猪苗代水力電氣株式會社取締役、東洋木材防腐株式會社監査役となり、

大正人名辭典 (町田忠治) (金澤巖)

令閨千代子は福原豊七氏の長女にして、此間男重直及波子の一男一女を擧げ、家庭亦圓滿なり。

濱口 擔君

△出生地 和歌山縣 和歌山、平河、五ノ七
△現住所 東京市、神田、平河、五ノ七
△生年月 明治五年六月二日

猪苗代水力電氣株式會社營業部長 株式會社豐國銀行取締役 勳四等 巴チエラー オブ アーツ

君は和歌山の人濱口儀兵衛氏の長男にして明治五年六月二日を以て生る。幼にして聰明を以て聞ゆ。上京して慶應義塾に學び明治二十四年優等の成績を以て業を卒へ、尋で早稻田専門學校英語政治科に入り、二十七年卒業するや直に英國に航しケンブリッヂ大學に入り、孜孜として學を勵み、三十五年最優等の成績を以て業を卒へバチエラー、オブ、アーツの學位を得三十七年歸朝す、君の聲名嚇々一郷に高揚し、直に擧げられて衆議院議員となり、侃々諤々を以て全院の重んずる所となる、君永く歐米にあり其狀況を視、文明富強の由る所を鑑み、國本を培養するの道一に實業に在るを察し、武總銀行に入りて取締役となり、其經營に任じ成績顯著行運愈々隆盛となり、而して今や豐國銀行に入り、文書課長となり累進して取締役たり。曩に三十七八年戰役の功により勳四等に叙せられ旭日小綬章を賜はる、君猶春秋に富む、該博なる學識は縦横の手腕と相俟つて前途益多望なり。
夫人を八重子といふ。男爵近藤廉平氏の次女なり。康、篤子、美恵子の一男二女あり。令姪小六子は男爵東久世秀雄氏の夫人たり。

又共同火災保險會社に入りて取締役として企畫する所最も多し、恣して第十回の總選舉あるや君は郷里の同志と大隈侯の推薦とに由り、逐鹿場頭に現はるゝや最大得票を以て難なく日比谷政壇の人と爲りたるは、甚麼に君が郷里に於ける信望の大なるを知るべきに非ずや、大正三年大隈内閣成るや君は入りて農商務省參政官となり、大正五年大隈侯に從ふて職を辭せり、君嘗て大阪商業會議所特別議員、大阪銀行集會所委員と爲りて關西の實業界に貢獻するもの多大なり其名聲の今尙旺なるもの故なきにあらず。
令閨香子、今や男義夫、女常乃子等を擧げ和樂しつゝあり

金澤 巖君

△出生地 岡山縣 岡山、下谷、上根岸、三
△現住所 東京市、下谷、上根岸、三
△生年月 明治八年六月

東洋藥劑合資會社代表社員

君は固く岡山縣川上郡成羽村の人金澤芳藏氏の三男にして明治八年六月を以て同郷に生る、夙に郷校を卒へて藥物學の研究に志を抱き、第三高等學校に入りて藥學を専攻し、同二十七年業を卒へて藥學得業士となる、尋で東京帝國大學選科に入り衛生化學を研究し、出で、陸軍藥劑官、警視廳檢疫官等に歷任す、幾何もなく職を罷めて藥業月報主筆となり斯學の爲めに盡す所多かりしが、明治三十年辭して下谷根岸に藥舖を開始し、其自家の發明に係る肺病新藥キニトールを發賣したるに需要者輻輳して營業頓みに發展す、君更に藥業の擴張を圖らんと期し、同四十年二月資本金二萬圓を投じ、東洋藥劑合資會社を設立して之れが代表社員たり。

西川甚五郎君

△出生地 滋賀縣
△現住所 滋賀縣八幡、
電、八幡、五〇
△生年月 明治三年六月十三日

貴族院議員 滋賀縣多額納稅者 八幡製糸株式會社 日本麻織物株式會社各社長 株式會社八幡銀行頭取 近江帆布株式會社取締役 日本ビロッド株式會社監査役 勳四等 勳章表章 勳章 近江屋店主



君は滋賀の人西川重威氏の長男にして明治三年六月十三日を以て生る、江戸幕府の開かれし時より開業して今に至る三百餘年、連綿として近江八幡町に住し、蚊帳製表問屋を営み

日本第一の稱あり、本店を近江八幡町に、支店を京都、大阪大分縣大分町、同縣杵築町等各樞要の地に置き、東京にても日本橋通一丁目同四丁目同堀留の三ヶ所にあり、家運の隆盛に赴く故なきにあらざる也、而して日本橋一丁目支店は實に江戸開府天正年間の開設たり、君曾て大阪商業學校に學びしが先代の病歿せしより學校を廢して家督を襲ひ家業を繼ぎ熱心に發展を計りつゝあり、君、業餘、八幡銀行頭取、八幡製糸株式會社長、近江帆布株式會社取締役、日本麻織物株式會社社長、日本ビロッド株式會社監査役等の職にありて滋賀縣金融界並に商工業界の爲に盡瘁する所頗る多し、君は近江商

吉井友兄君

日本銀行理事 正六位 勳五等

△出生地 鹿兒島縣
△現住所 東京、四谷、北伊賀、二二
電、三、一六六五
△生年月 文久三年六月二十六日

日本銀行は帝國財界の首腦なり而して之が首腦をして健全ならしむると否とは、總裁其人の企畫按排に俟たざる可らざるは勿論なるも、總裁を輔翼して其企畫按排を諫まらざらざるは、一に理事として其職に居る人の能不能に基因せずんばならず、此時に方り吉井友兄君の經驗あり手腕ありて、而も濫良宏度の君子を理事に見るは寔に以て人意を強うするに足るべし、君は鹿兒島藩士吉井友平氏の長男にして文久三年六月二十六日を以て同縣鹿兒島郡谷田村に生る、其郷覺に學ぶや蚤く既に穎才多智の稱あり、長じて東京に出で先づ大學豫備門に入り進んで帝國大學法科に入り専心一意、政治學を治め明治二十三年を以て卒業し法學士の稱號を受く、幾もななく大藏省に奉職して主税官と爲り手腕の敏なるを認められ、三十二年東京稅務監督局長に昇進せしも、後日本銀行に入りて大阪支店長と爲り關西の金融界に貢獻する所あり、久しく官界にありたる者一朝民間に下りて會社銀行の事務を執る、往々にして方圓柄撃の觀あるは世間の知る所なり、然るに君の大阪に支店長と爲るや其手腕の縱橫なるのみならず何等吏臭を帶ぶることなし、次で日露大戰の起るや特に命せられて歐米に出張し、刻苦精勵居ること三年にして歸朝するや理事に擧げられ今現に其職に在り、明治四十三年君再び行命を帯び歐米に渡航し、親しく調査視察を遂げ一年有餘にして歸るや、新來の氣鋭を以て行務に傾注し光輝ある効果を擧げつゝ、

人の典型にして實に代表的商業家也、曩に多額納稅者の互選により貴族院議員に選ばれ現に其職に在り、昨春二月大正三四年事件の功により勳四等に叙せられ瑞寶章を下賜せらる。令閨をため子といふ、清二郎、道夫、五郎、秀夫、しげ子保子の四男二女あり、しげ子は醫學士吉田一毅氏に嫁せり。

山室宗文君

△出生地 熊本縣
△現住所 東京、本郷、森川、一、新坂
電、下、七、二六三
△生年月 明治十三年十月二十一日

年十數億の出入を掌る三菱銀行が岩崎小彌太男を社長に串田萬藏君を部長に迎ふるに及び、舊來の面目一新して倫敦に支店勘定を開き、更に支那方面に新發展を試むる等大に新空氣の注入せられたるを見る、此時に當り營業課支配役の重要な地位に山室君を見出したるは、同行の爲め又君の前途の爲に慶賀せんばならず、君は熊本縣士族山室宗意氏の長男にして明治十三年十月二十一日の出生なり、郷校を了て後進んで大學に入り明治四十年東京帝國大學法科を卒業せり、同窓の首席は小村侯にして二席長谷川久一君、三席は實に君なり、當時の三菱の幹部は深く君の才幹を喜び、拔擢して米國に留學せしめ、紐育を中心として銀行制度の調査に従はしむ君の最も研究に苦心せしは國際金融なりといふ、後歐洲に轉じ先進文明國の銀行業を視察し、歸朝するに及んで三菱銀行部の部長となり、支配役に躍進して今や同行の重要な地位を占むるに至れり、蓋し將來大名を成すべきを疑はざる也。夫人しづ子は故野田裕通男の令嬢にして、貞淑の聞あり

あるは、日本銀行の爲め慶せせんばならず、而も今や同縣人にして斯界の巨星たる三島彌太郎子を總裁とせるに於て、君の手腕力量は倍々發揮の便を得せんばならず、龍、雲を得て其靈を顯はす乎、敢て問ふ所にあらざるも日本銀行理事としての君は更に刮目して見るものあるや必然たり。夫人嘉子は田中深次郎氏の二女なり、友文、友武、友道、田鶴子等の數子あり。

小布施新三郎君

△出生地 長野縣
△現住所 東京、日本橋、堀留、二ノ
電、六、電、六〇四四
△生年月 弘化二年二月二十四日

君は東京の人の小布施民藏氏の二男にして弘化二年二月二十四日を以て長野に生れ、明治二十二年五月家督を繼ぐ、夙に實業に志あり、維新の前後江戸に來り先づ弗相場を試み兩替店を創む、元より鋭敏なるを以て着々として成功を收め、明治十六年に至り日本橋堀留に公債仲買店を開き、更に兜町に移り神算鬼謀自ら適中し、漸次勃興して「エニ商店」の名は斯界に噴然たるに至れり、曩に三十四年間勤続せしを以て取引所より名譽を頒せらる、實に斯界最古參者たり、今や令嗣福太郎氏に店務一切を擧げて委託し、君は城西目白臺に宏壯なる邸宅を構へ徐に老を養ひつゝあり、而も君の目白に住するや屢々舞踊其他の公演を試み、同町の發展に盡しつゝあり、令嗣福太郎氏の外、かつ子、なを子、春子の數子ありかつ子は竹内一郎氏に嫁し、なを子は養子順次郎氏に配し、子女を伴ひて分家せり。

山岸初太郎君

實業家 勳七等

△出生地 石川縣 津島郡 北港
△現住所 東京 麹町 區 北港
△生年月 明治十一年一月十七日



帝國の臣民として 邦家に盡すの途は一に ならず、軍人可なり 實業可なり、其他 如何なる事業に就く も、邦家に盡すは同 様なり、即ち義勇奉 公の念を移して他の 事業に従ひ、其發展

を圖らば其効果は彼此必らずしも異なるなし、山岸初太郎君は 明治十一年一月十七日を以て石川縣津島市袋町に生る、人と なり公共の心に富み、英氣風爽、快潤にして能く人に接する を好み、才氣溢るゝが如く適くとして可ならざるはなし、幼 にして性質活潑、而かも伶俐にして群童と同じからざるもの あり、少時相當の教育を受けたる後身を軍籍に置き、明治三 十年六月陸軍要塞砲兵射擊學校に入り、熱心勤勉、其研究に 心を潜め大に得る所あり、同三十一年十一月優秀なる成績を 以て首尾よく同校を卒業し、在職數年に及び寸時も其職を曠 うせず、能く規律節制を重んじ恪勤を以て名あり、長上之を 信認し同僚之を敬愛し、陸軍省其他に於ては要部の位置にあ りて資益する所多く、特に日露戰役中において君の功績頗 る著しきものあり、能く義勇奉公の實を擧げしも、中途已む

を得ざるの事情に依り退役せり、最も長上の惜むところとな り、僚友又其退職を遺憾とせり、然れども君が忠誠事に盡く すの精神は尙ほ其軍職にありたる時と異らず、君は此精神を 移して以て志を實業に立て、其後爲さんと欲する所の地を臺 灣に撰び、同地に君は最も意を北港地方の發展に留め、公事 に奔走努力する所を惜まず、有力なる地方の有志者として敬 重せられ、官民の協定を要する事件を始め、大小の事一に君 の賛同を待たざるはなく、君も亦喜んで助勢を取り、幾多の 事私費を抛つて其遂行を期せずんば止まらず、實業家として 公共の問題に熱心なること、蓋し君の如きは實に稀なりとな す、要するに君は其従事せる事業以外、今日において此港發 展の中心的人物として、又計畫の樞軸として内地人並に島民 間に敬重せられつゝあり、而も今後と雖も君の斡旋を要する の問題亦決して少からず、君も亦一層奮勵し以て有終の美を 濟さんと欲するの志堅きこと推想を待たざるなり、父君は今 尙ほ健在、君最も孝養に力む。
夫人トクノ子、淑良にして貞實、温順和合、未だ曾つて風 波なし、兒三人を有す。

宇治庄兵衛君

實業家

△出生地 大阪府 大正南、久右衛門、三六
△現住所 大阪府 南區 五丁目
△生年月 安政五年十二月十四日

君は大阪の人、大島利三郎氏の三男にして明治六年先代伊兵 衛氏の養子となり、明治二十四年一月家督を襲ぐ、資産總額 約百六十餘萬圓、直接國稅四千圓餘を納め大阪に於ける百萬

長者の一人たり、君資性頗温和、加ふるに謙讓の人にして、 堅忍不拔能く此の大家の現主として家業に精勵を致す。

夫人むめ子は同市の人萩原四郎兵衛氏の二女にて、夫君に 見ゆるに貞節始に事ふるに温順にして、家内絶てて風波を見 し事なし、養母もつ子亦所謂大阪式内儀の典型とも謂つべく 老齡尙ほ家業に對する興味を失はず、家運の隆昌に樂しき餘 生を送りつゝあり。

野田卯太郎君

衆議院議員 勳四等

△出生地 福岡縣 糟屋郡 材木、二九
△現住所 東京 麹町 區 北港
△生年月 嘉永六年十一月十一日

我が政治界にあつて代議士として議政の府に立つこと十有 餘年、其得意とする所の財政經濟に關する抱負を以て國家の 政治に寄與すること多く、傀儡たる天性は同人の大に推重す る所となり、横溢せる奇才は最も黨人を操縦するに適し、殊 に多年波瀾洶湧せる政界に立つて凜乎たる操守を持ち、居常 立憲有終の美を濟さんと期するに至りては、次第に地方人士 及び部下の信望を厚うし、遂に立憲政友會にあつて其役員に 擧げられ、銳意黨勢の擴張に努めて大に天下の同情を博し、 同黨をして尨大優勢ならしめ同黨領袖の一人として名聲宇内 に布くもの、これを大塊野田卯太郎君とす、君は政界の大 立物にして實に立憲政友會に於ける九州派の代表的人物なり 君の政界に於ける基礎は頗る鞏固にして、選挙區に於ける地 盤も亦牢乎たるものなり、而して從來實業界に對する關係も 甚だ廣きものありて其勢力の及ぶ所極めて深厚なり、即ち嘗

て三池土木株式會社、三池海面埋築株式會社、九州製油株式 會社、福岡縣農工銀行に各取締役たりしが如き其實例にして 而かも是等の會社銀行の創立には皆君が與つて力ありし所、 其經營上にも刻苦せしこと勿論なり、而して三池紡績株式會 社も君の精力を傾注せしこと少からず、多年重役に擧げられ 専務取締役たりしことあり、是等は孰れも地方に於ける會社 銀行なれども、中央に於ける諸種の事業に關係したること亦 亦決して尠ならず、東洋拓殖株式會社の創立に際しては創 立委員の一人として盡瘁し、尋いで理事に擧げられ大正三年 春宇佐川同社總裁、職を辭して副總裁吉原氏昇はりて總裁の 職に就くや、君これが副總裁に任せられしが今之を罷む、君 軀幹肥大にして度量寛宏能く人を容る、また俳句を善くし目 に觸れ耳に聞く所、時事に關する諸問題も悉く君の爲めに詩 化せられ、口を銜いで出づるの句玉振の聲に富めり、原來、 君は福岡縣の人にして同縣平民野田伊七氏の長男、嘉永六年 十一月十一日を以て筑後國三池郡岩田村に生まれ、慶應三年 一月先代森右衛門氏の養子となり家督を相續す、夙に漢籍を 修めて造詣する所あり、初め身を實業に志し各種の事業を計 劃し、貨殖の途を講じ次第に良好なる効果を收むると共に、 地方公共の事業に盡力し、明治三十一年第五回の總選挙ある に當たり、福岡縣第五區より選出せられて衆議院議員となり 次いで第六回の總選挙には第四區より、第七回には縣下郡部 より選出せられ、爾後、毎回當選して現今に及び、實に七回 を數ふるに至りぬ。
令息俊作、四郎太、秀助、令嬢タキノ子、ムメノ子、トメ 子等あり。

梅原 龜七君

△出生地 大阪府
△現住所 大阪府北濱、三ノ三
△生年月 明治三年十一月廿三日

株式會社大阪株式取引所理事 伊勢電氣鐵道株式會社 株式會社近松座 臺北製糖株式會社各取締役 瓦斯マントル製造株式會社監査役



先代龜七氏の長男として明治三年十一月廿三日を以て生れ十六年八月家督を相続す、家は先代より書籍商として有名な老舗なりしも少時より投機界に興味を有する君は、家業を

類族に任せ、自身は東上して村上仲買商店に入り、鐵橋、蠟街の投機界に出入して投機的呼吸を會得するや、去て大阪に歸り北濱に仲買店を開始し、君獨得の手腕を揮ふて大なる成功を告げたりき、後三重縣より代議士に當選したりしも反對黨の陥る所を爲りて辭職し、爾來政界を斷念し専ら實業に熱心し、頭書數會社の重役として今日に至る。

太田 治兵衛君

△出生地 東京府
△現住所 横濱、一見、二ノ五六
△生年月 弘化四年二月二十三日

横濱市會議員 横濱商業會議所議員 質商 太田治兵衛氏は横濱市の富豪にして質商なり、君は東京府

植松 新十郎君

△出生地 和歌山縣
△現住所 和歌山、東半葉、新宮
△生年月 明治三年十一月二十五日

株式會社新宮銀行專務取締役 新宮鐵道株式會社 取締役 合資會社新清商會代表社員 和歌山縣森林會議員 所得稅調査委員 相續稅審査委員 帝國水難救濟會新宮救難所長 新宮商業組合事務所長 新宮海運業同盟會長 新宮臺灣輸出業同盟會長 新宮養老會々長 新宮至誠教育會長 新宮曳船組長 官幣大社熊野速玉神社氏子惣代 林業木材製材業 無烟石炭探掘販賣業

良材に富むを以て稱せらる、和歌山は古來林業に依て財を成せる者頗る多く君亦其一人たり、當に良材を出すのみならず熊野浦其他は海産物に富み就中捕鯨事業の如き、本邦に於ける最古たるの歴史を有し國産増進の一たり、而して君の居住する處の新宮は熊野川の吐口に在りて縣下東部の一名邑にして、熊野三社の一たる熊野神社の在る所たり、君の現に關與しつゝある所は新宮のあらゆる事業界を網羅しつゝありて殆ど君の勢力の下に皆經營しつゝあるの觀あり、現に新宮銀行は君を專務取締役とし良礦社は業務擔當社員とするの外、熊野漁業株式會社の取締役たり、而して新宮鐵道會社は君の指導を受けて經營しつゝあるものとす、君が重んぜらるゝ所以知るべきなり。

抑々植松家は三百年來木材業を營み舊家を以て稱せられしも、祖父新右衛門氏に至りて家業甚だ振はず一時衰退を極めしが、君の嚴君先代新十郎氏(後改めて康高といふ)が中森家

太田仁兵衛氏の長男にして弘化四年一月二十三日を以て生れ文久元年家督を相続す、其業務を取扱ふ懇切鄭重にして家産は増進の一方あるのみ、現に横濱市會議員、横濱商業會議所議員たり、其信望の大なるや知るべきなり、資産は有價證券現金、不動産を併せて約七十七萬圓を算じ、直接國稅約二千五百圓を納さむ。

陸田 金次郎君

△出生地 大阪府
△現住所 大阪、南、松屋
△生年月 明治十五年

令聞を子に眞操清節を以て聞ゆ、三男二女を生む。令息謹司氏、其令聞や子、令息直吉氏、同朝吉氏等あり、令女いご子は東京府指田幸三郎氏に嫁し、同たま子は同縣太田平輔氏の養子となれり。

曾て天王寺銀行の頭取として、金融界に噴々たる名聲を有し陸田金次郎君は、先代金次郎氏の長男にして、明治十五年を以て大阪に生る、明治三十二年、嚴君病歿せしを以て君家督を繼ぎ、金次郎を襲名す、陸田氏は商號を倍金と稱し、代々倍の製造販賣を業とし、直接國稅數百圓を納め、關西に於て著名なるは勿論、遠く海外に迄取引を有するの盛業を極め、同業者間の敬重する所となるといふ、君が理財の術に明きは、曾て天王寺銀行の頭取として經營に當り、令名ありしを以て證とすべく、今や積富百萬に垂なんとて、聲望愈加はるは、君が公德公共の事に、貢獻するの厚きも亦一因たらんばあらず。

小松 楠彌君

△出生地 高知縣
△現住所 臺北大加納堡臺北府前街
△生年月 安政五年正月十四日

臺灣電氣工業株式會社社長 東洋製糖株式會社 臺灣建物株式會社 臺灣劇場株式會社 臺灣鳳梨罐詰株式會社 臺灣商工銀行各取締役 臺灣製腦合名會社業務擔當社員

君は高知縣平民小松作平氏の次男にして安政五年正月十四日を以て高知縣に生れ、幼にして慧敏活才、群童と異なるものあり、夙に東上して高等普通學を研修し且實業を以て當世に立たんと期し、然して明治十四年五月家督を相続するや、京阪の地に跨りて事業を經營し其名を上流に隆せ信用日に倍々旺んたり、是れより先き臺島の我領有と爲るや、挺身蹶起渡臺して親しく全島の地理風俗を探究し、然る後官民の間に斡旋し先づ資本金三百萬圓を以て、北港製糖株式會社を起し北港及月眉の二箇所に分蜜糖工場を設けて經營大いに努め、其他前記諸會社の創立に努力せり、就中製糖事業の如き宜蘭電氣會社の如き、君の最も盡力する所にして其成績の優良なるは敢て多辯を要せざるべし、慙して建物會社及劇場會社等の計畫に預かり、孰も成立して以て衆庶の利便を圖れり。

磯部 尚君

衆議院議員 辯護士



△出生地 福井縣
△現住所 東京、橋、橋八
△生年月 明治八年十一月

法曹界の元勳磯部

博士の後繼者たる君は福井縣士族日比登氏の二男にして明治八年十一月を以て福井に生れ、郷里に在りて小中學校を了りて後東京に來り、明治三十二年東京帝國大學法科を卒業して法學士となるや、直に法律事務所を桶町に設け辯護事務を執る、岳父四郎博士はルツン、ホルテオの流を酌める佛蘭西學者として、自由民權の熱心なる提唱者なりき、然るに君は正反對に極端なる獨逸崇拜家にして軍國主義の主張者なり、君常に人に語りて曰く歐洲大戰の狀態より見るも、獨逸の偉大なる軍隊、即ち軍事的訓練に敬服せざるべからず、日本國民を整然たる軍事的組織の下に養成せよ即ち小中大學を通じて軍隊教育の必要を説くこと急なり、説の是非は暫く措き君は徹頭徹尾戰國的なり、君の法律事務所を開くや獨立獨行會で岳父の助力を乞はず、大正六年東京市より衆議院議員選舉を争ひ、能く中原の鹿を射たりと雖も岳父博士の後援を受くること多からずといふ、氣美々々として宛から戦士の如し。

夫人つや子は養父四郎氏の長女にして、太郎を擧ぐ。

田中善助君

△出生地 神奈川縣
△現住所 横濱、宮崎
△生年月 弘化三年五月五日

横濱商業會議所議員 株式會社横濱商業銀行 横濱電氣鐵道株式會社 共同運輸株式會社 日本臺灣茶株式會社 相模紡績株式會社各取締役 帝國製糖株式會社 日本芳釀株式會社 大安生命保險株式會社各監査役 株式會社横濱取引所理事
商才に長じ商機を見るに敏に又能く業務統理の任にありて手腕老熟せる者を田中善助君となす、富山縣木下善右衛門氏の長男にして弘化三年五月五日を以て生れ、明治四年二月先代田中市五郎氏の養子となり家督を相続す、明治六七年の交横濱に於て蠶絲其他の貿易に従事し、勵精奮闘深く經驗を積み信用最も厚く、同九年サミエール商會に入り益々其手腕を發揮し、累進して遂に支配人に進み同館の事務を總攬して一絲紊るゝ所なく、勤績三十四年一日の如く倍々同館の事業を盛大ならしめたり、明治四十年同館を辭して以來は企業界に入り、横濱商業會議所議員たる外各方面に羽翼を伸ばし、現に前記諸會社の重役を兼ね、信望高き超凡の人にあらずんば曷んぞ之を能くせんや、資産六十萬圓を超ゆ、年齢七十を超ゆるも饒豐として壯者を凌ぐの概あり、横濱實業界の重鎮を以て稱せらる。
令聞はらく子、男孝太郎氏、善三郎氏、女ちか子、わか子等あり。

上原勇作君

△出生地 宮崎縣
△現住所 東京、赤坂、第一
△生年月 安政三年十一月九日



君は多年彈丸硝煙の中に立ちて攻城野戰を事とし、攻むれば取り戰へば勝ち勇の名、海の内外に振ひ武功赫々として一世を蓋ふ、由來陸軍部内は積弊久しくして陋習容易に改め

難きものあり、君獨り毅然として情實の外に立ち常に清廉職を奉じ、勇敢事を決し直往邁進奮習を打破す、故に識者多くは君の將來に嚮望するもの多々あり、然り我が陸軍の廓清を以て君の双肩に擔はしむるものあるに至る故なきにあらず、嗚呼君の如きは實に所謂蘭菊の芳香と、松柏の節操とを兼有する好尚武將と稱すべきなり、君は舊都城藩士龍岡棧山氏の二男にして安政三年十一月九日の誕生なり、明治八年出で、上厚家に入て養嗣子となり先代尚實氏の後を襲へり、十二年十二月陸軍工兵少尉に任じ、十四年二月東京鎮臺工兵第一大隊小隊長仰付けられ、同年四月佛國に留學し十八年二月歸朝せり、十九年二月陸軍士官學校教官に任せられ、二十二年三月臨時砲臺建築部長小澤中將に隨行して歐洲に出張す、二十

大正人名辭典 (上原勇作)

今西林三郎君

△出生地 愛媛縣 大正西本田二番、一三
△現住所 大阪西本田二番、一三
△生年月 嘉永五年二月五日

大阪三品取引所理事長 大阪商業會議所副會頭
阪神電氣鐵道株式會社專務取締役 大阪港土地株式會社取締役社長 明治製煉株式會社 和歌山水力電氣株式會社 大日本鑛業株式會社 東洋トロール株式會社 中央セメント株式會社 東洋木材防腐株式會社 宇和島輕便鐵道株式會社各取締役 松浦炭礦合資會社業務執行社員 大阪瓦斯株式會社 堺瓦斯株式會社 日本フランネル株式會社 株式會社宇和島銀行各監查役 大阪市會議員 洋鐵地金石灰商



君は前衆議院議員今西幹一郎氏の令弟にして嘉永五年二月を以て伊豫國北宇和郡好藤村に生る、世々農耕を業とするも君獨り龍敵に老ふるを冀はず、明治十三年齡二十有九にして

驟然郷關を辭し東上、中年をも意とせず三菱商業學校に入り速成科に學び、業卒ふるや更に商業學を專攻すること數閱月偶三菱會社の招聘する所と爲りて之が社員たること一箇年、事務の經驗庶境に入りて重役の信用大に加はらんとせしも、

に接するや、寛容溫柔にして而も城壁を築かず、且懇到親切にして曾て倨傲の風なく、而して其事を處し物を理するや用意周到にして曾て疎雜あることなしと、是れ其成功の今日ある所以なる歟。

令聞たね子は婦徳亦盛んにして今や六人の女子を擧げ家庭の圓滿なる人をして羨望に堪ざらしむと云ふ。

鈴木驛次君

寺野銅山鑛主 鑛業家

△出生地 愛知縣 大坂東備後、二ノ六〇
△現住所 大坂東備後、一七〇八
△生年月 嘉永四年八月二十八日

君は三河の人舊豊橋藩士杉本百樹氏の次男にして齡十五の時、出で、鈴木家の養嗣子と爲り先代直之進氏の後を繼ぐ、明治九年國立銀行條例の改正に際し福島第六國立銀行創立に干與して大に盡瘁する所あり、三年同行東京支店詰と爲りしも、十五年故ありて其職を辭すると同時に將來鑛業を以て飛躍を試みんと決心し、十七年同志と相圖り秋田縣鹿角郡小眞木鑛山を經營し採鑛に従事す、次で同地方に於て金銀採取の目的を以て諸鑛山採鑛に着手し、尙十八年岡山縣勝田郡國盛鑛山の採銅に着手し、其他各地方に於て斯業を創始せしも、小眞木、國盛の二鑛山を除くの外は悉く失敗に終り多大の損失を招き、二十二年遂に唯一の財源たりし小眞木鑛山賣却の悲運に陥りしも毫も屈せず、進むで宮城縣栗原郡細倉鑛山を買收して其經營に腐心せしが、不幸にも不成功にして復た悉く資本を失ふに至る、於是乎明治二十三年家族を纏めて大阪に移住し、從來經營せる國盛鑛山に全力を注ぐ、會々明治二十七八年日清戰役に際し銅價暴騰せしより事業漸く恢復の緒

固より獨立の思念太だ旺んる君は永く人後に靦靦たるを好まざるを以て、強て同社を辭し直ちに大阪に歸り獨力以て回漕問屋を創む、蓋君の惟思たるや夙に運輸交通の將來を以て、國運の進歩と共に斯業の發展向上すべきを豫期せるを以てなり、斯くして其翌年には大阪同盟汽船取扱會社を創立し繼て發起人より推されて社長と爲り、極力之が經營に任じたり、後大阪商船會社創設の計あるや、時機到れりて做し發起人中に加はり幹旋努力大いに事績を擧げ、後同盟汽船會社の合併するや君又相互に周旋する所あり、爲めに成立を告ぐるや乃ち入りて回漕部長に擧げられ、盛んに企畫する所あり、是を以て翌十八年には昇進して同社の支配人と爲り名聲籍々たり、明治二十二年一旦辭任して家に在り、從來の回漕問屋以外更に石灰問屋及内外綿絲問屋を開業せり、是れより君は運輸兼交通界に於ける手腕家として、潛勢力を有するに至りたるを以て、二十五年には山陽鐵道株式會社の支配人と爲り後國有鐵道として買收せらるゝに際し動止を誤たず、以て君の信用と其手腕とを斯界に實現せるものと謂ふべし、是れより先き君は其郷里なる宇和島銀行の取締役に上任、次で大阪毛糸、伊豫物産兩會社の發起人と爲り、又朝日紡績會社の設立に盡力する所あり、又大阪商業會議所の創立に際し之が發起人となり、後之が功勞者として議員となり、爾來二十餘年の久しき曾て其議席を離れざるを見て、又以て其德望と勢力とを窺知し得べきにあらずや、君今や資産百萬圓を算し大阪市屈指の資産家と成るのみならず、標記諸會社及銀行の重役として將た統率者代表者として斯界に雄飛しつゝあるを見ては何人乎畏敬せざらんや、聞く君は資性卓落なりと雖も其客

に就き爰に曙光を見るに至れり、而して三十二年大阪府西成郡千船村大和田日本硫酸會社と特約し、硫酸原料に國盛鑛石を供給し、更に其燐滓を以て製銅事業を企圖し、同社内に製煉所を設け斯業に従ひしに、銅價の暴騰に伴ひ國盛鑛山と併せて好成绩を收め製煉事業の基礎を確立せり、然るに同工場の煙害は附近村落の農作物に及ぼし苦情百出するを以て、斷然意を決して同所を閉鎖し備中玉島沖水島に製煉工場を移し以て斯業の發展に傾倒せり、三十七八年の日露戰役に際し原鑛の輸送力意の如くならず一時頓挫を來せしも、戰役後は銅價大に暴騰し次で四十一二年前後に於て未曾有の盛況を呈せり、其後工場を擴張し製煉に努力せしが、不幸國盛鑛山の採鑛漸次不振に陥りしも、其後古河合名會社所有に係る久根鑛山の産出鑛を主要鑛とし一ヶ月四十萬斤の産銅をなすに至れり、大正五年九月一日古河合名會社と協議の上水島製煉所を賣渡せり、尙愛媛縣伊豫郡寺野鑛山採銅事業を起し、漸次好況に向ひつゝあり、人と爲り豪邁瀟灑、且公共の志に篤く從來各府縣下水火震災に際し、常に資を出し賑恤せること枚擧に遑まらず、又曾て濟生會に一萬圓を寄附せるは世間の見以て美譽とする所なり、書畫骨董に興味を有し謠曲を好み和歌に巧みなり。

令室を秀子と呼び同藩士富田若水氏の長女なり、次男仁十郎、長女土佐子、次女駒子等あり、仁十郎は慶應義塾理財科出身にして、今や嚴父の家業を佐け經濟界の好景況なるに乗じ新に歐米諸器械の直輸入業を輸入部なる名稱の下に創設し又内地電器具販賣の目的を以て電氣部を設け、専心之れが發展に努力す。

村田 俊彦 君

△出生地 廣島縣 豊多摩郡 青山南、六
△現住所 東京、芝、三田四國、五
△生年月 明治四年八月二日

東洋拓殖株式會社理事



君は東京府士族村田良穂氏の長男にして四年八月を以て廣島に生る、家頗る貧賤にして學費を給する能はざりしも、萬難を排して大成せんことを決意し、單身東京に出で或時は顯

官先達の書生となり、又或時は寫字筆耕をも厭はず、只管ら學費を得て勉學せんことを志願せり、精神一到何事か成らざらん、君は富家讀書子さへ入るを難んずる第一高等學校に易々と入學するを得たり、是れ實に君が成功の基礎を爲したるものにして、遂に明治三十年を以て東京帝國大學法科大學を卒業し法學士の稱號を得たり、當年の一貧窮兒今や端なく月桂冠を受く君が喜び果して如何、進んで大學院に入り貨幣銀行其他信用制度の専攻を爲せり、三十年大藏省に出仕し金融の調査と銀行の事務とを擔當す、此年十二月高等文官試験を受け合格して大藏試補となる、官に在る事二年辭して野に下り、大阪なる貿易商廣岡商店の助役となりて外國貿易に従ふ三十五年日本興業銀行の設立せられんとするや、君は招聘せられて創立事業に關與し、其成立と共に秘書役となり、後營

業第二部員に轉じ信託事務を管掌し、傍ら滿韓關係事業の副主任となり、屢々清國及び朝鮮各地を巡視して實益に資せり四十年總裁の歐米を巡遊するに隨行して、獨佛各國に代理店の設置を策せり、更に四十三年英國に渡航しロンドン駐在員として彼地に在る事年餘、我が國家財政の海外に於ける信用を高め利する處甚だ多く、日本の理財家として彼地に名聲を博せり、歸來理事に榮進し手腕を揮て興業銀行の信用を進ましむ、大正三年東洋拓殖株式會社理事の改選せらるゝや、理事を命せられ現に其職に在り、傍ら理財學會主幹、專修大學講師として後進生の教養に任じつゝあり、令聞をなす子といふ、鈴木兵右衛門氏の令妹にして、一子義彦あり。

塚口 慶三 郎君

△出生地 和歌山縣 東郷山、東郷宮中
△現住所 東京、北、蒲田、二〇三
△生年月 明治七年五月十一日

東京製絨株式會社常務取締役

君は花崎進兵衛氏の二男にして明治七年五月十一日を以て和歌山縣に生れ、幼にして神戸の素封家塚口彦七氏の養嗣子となる、夙に出藍の譽れ高く普通教育修了の後東京高等商業學校に入り二十年業成るに及び日本鐵道株式會社に入り倉庫課に勤務すること二年にして川崎銀行に入り庶務部長となり尋で日本製布株式會社監査役及び東京製絨株式會社監査役を兼務し、現今東京製絨株式會社常務取締役の任に在り、資性濃厚篤實にして能く社會の階級を暗んじ、最も常識に富み事態を咀嚼するの妙趣あり、沈黙寡言にして温健なる風采を具

へ、人に接して懇切到らざるなく自ら長者の風あり、後進の扶掖、配下の指導に至つては特に其長所たるを見る可く、遍く人の推重する所たり。

夫人八重子は數學の大家樺正董氏の長女にして、貞淑の名あり、其間に一彦、乙彦、節子、郁子の四子あり、乙彦氏は樺家の養嗣子たり。

石井 房吉 君

△出生地 東京府 芝、三田四國、五
△現住所 東京、芝、三田四國、五
△生年月 嘉永六年五月十六日

諸機械及諸金具製造販賣商

君は東京の人にして石井鐵五郎氏の嫡男なり、嘉永六年五月十六日に芝區田町六丁目に生まる、初め官に仕へ、明治四年三月職を開拓使に奉じ、同六年小銃彈藥製造所に轉勤し、同七年赤羽製鐵寮に入り、同十年に工作分局鐵工場世話役となる、夫れより明治十六年に海軍兵器製造所員となり、四等工夫長を命せられ、同二十二年一等工夫長に進み、同二十六年第四工場組長を命せらる、同二十九年に日清戰役の功によつて賞與金を賜はり、同年轉じて廣島縣吳海軍造兵廠に鐵工組長たりしが、三十一年に職を辭せり、其の間實に二十有八年の久しき恰も一日の如く、精を勵まし孜々として怠らず以てよく自己の任務を完了したり、此に至つて君獨立して事を就さんと決し、其年三月芝區三田四國町二番地に製造場を設立して、諸機械及び建築用金具類等の製作に従事すること、なりぬ、而して赤羽海軍造兵廠の命を受くるに及んで、君の事業は大に擴張せられ、觸發水雷用鉤鎖及び附屬金具を盛ん

に製出せり、尋で日露戰役に際し命を受けて連發水雷附屬金具及び陸軍用トロック附屬金具等を製作し、品質技術の優等なるを以て稱せられたり、明治四十三年五月業務擴大し、工場狹隘なるを以て芝區本芝入横町五番地に大工場を新築し、専ら諸機械附屬鐵物一式及び建築用金具を製出して之れが販路を擴張し、以て現今に至れり。

高田 正一 君

△出生地 東京府 蒲田、北蒲田、一二
△現住所 東京、蒲田、北蒲田、一四〇
△生年月 明治十二年二月三十日

三國貿易株式會社專務取締役 商業倉庫株式會社 取締役 マスター オブ アーツ

君は故第百銀行頭取高田小次郎氏の三男にして明治十二年一月三十日を以て生る、夙に慶應義塾に學び理財科を卒業して後三十四年米國に渡航しヒキラデルヒア、ペンシルバニヤ大學に入り後コロンビヤ大學に轉じ専ら經濟學を修む、三十七年業を卒へてマスターオブアーツの學位を受けたり、夫より歐洲大陸を漫遊して經濟狀態を研究し、三十九年十月歸朝せり、君同志と謀り三國貿易株式會社を創立し、自ら專務取締役となり現に其經營に任じつゝあり、傍ら東海紙料株式會社取締役となり、商業倉庫株式會社取締役となりて歐米に學修せる智識を傾倒して、乃父の衣鉢を襲ぎ我が事業界の爲めに盡しつゝあり、令聞を勇雄子と呼ぶ、財政學の大家目賀田男爵の四女なり健雄、百合子の二子あり。

顏雲年君

△出生地 臺灣臺北廳基隆街土名新店百五番地ノ九
△現住所 同上
△生年月 明治七年十二月廿六日

臺灣水產株式會社 基隆輕鐵株式會社各取締役



顏雲年君は明治七年十二月臺北廳石碇堡鯨魚坑庄に生る、幼より學を好み、鯨坑庄、錫口街、水返脚街等の書房に入りて漢學を研究し、同三十年二月瑞芳守備隊隊員となる、爾來

瑞芳公學校學務委員、地方稅調查委員、大日本武德會基隆地方委員、臨時臺灣戶口調查通譯等となり、又臺灣水產株式會社取締役、基隆輕便鐵道株式會社專務取締役、臺灣興業株式會社取締役社長、基隆公益社評議員、臺灣鑛業會評議員、基隆商工會副會長等に擧げられ、又其間日本赤十字社の社費を助けて特別社員に列し、守備步兵第一聯隊基隆堡瑞芳庄紀念碑及戰死者墓標建設に付き、費金を投じ其工事を助成し、九紛庄瑞芳間道路修築に當りては多大の勞力物品等を寄附し、又瑞芳支廳九芳橋庄警察官吏派出所屋舎等を寄附し、更に第五回內國勸業博覽會費、基隆廳下早害罹災者救助費、神武天皇御降誕大祭會費、瑞芳公學校建築費、基隆堡燒仔寮庄柑子瀨庄間道路開鑿費、臺中廳下震災窮民救恤費、基隆馬祖宮口

警察官吏派出所新築費、臺灣風水害救民救恤金、臺北廳下土地公坪警察官吏派出所建設地等を寄附して木杯賞狀、徽章、紀念章等を受領すること幾許なるを知らず、君夙に本島の鑛業前途有望なるに着眼し、領臺後炭坑及砂金業に従事す、現に北臺に數箇所の石炭坑及砂金鑛區を有し、尙ほ近頃藤田組所有の瑞芳金山を借有して之を經營し、四脚亭炭坑の採掘權を三井より讓受け、着々成功し巨富を致し、官民の間に盛徳重望あり、地方有數の鉅豪なりとす、君人とな爲り温厚にして一見君子の風あるも卓拔なる君の識才は、夙に全島の經綸に在りて而も亦領臺の大旨義を顯揚するを以て、心竊かに之に任せずんば止まざるの意氣を有す、是れ君が群然たる紳士の間にありて優に一等地を抜く所以にして、特に事業計畫の用意周到にして之を實行するに勇猛なるに至りては全島の紳士中、恐らく君の右に出づる者なかるべき歟。

佐藤敏夫君

△出生地 新潟縣
△現住所 東京芝今入二二三
△生年月 明治八年十月十五日

佐藤耳鼻咽喉科醫院長 ドクトル メヂチーネ

君は明治八年十月十五日を以て新潟縣古志郡柵尾町に生る嚴父を忠四郎氏と稱し君は其の次男たり、家世々農にして同地の名門たり、小學及新潟中學を経て二十五年上京、當時の醫學專門學校濟生學舎に入りて一般醫學を修め、卅年内務省醫術開業試驗に及第して醫師と爲る、次で金杉博士の東京耳鼻咽喉科醫院に入り助手と爲れり、博士君の好學願才を愛し資を給して渡歐せしむ、三十三年九月遠く萬里の波濤を蹴て

獨國に入りローストック大學に於いて一般耳鼻咽喉科學を修む後ち特に斯界の牛耳を以て目せらる、同大學正教授キヨルネル氏に就て外科的耳科を專攻したり、研鑽攻學數年、三十五年十月「初生兒及大人に於ける三半規管の比較的研究」なる論文外二篇を提出して學位を要求し、芽出度及第してドクトルメヂチーネの學位を授けられたり、三十六年四月茲に業績の終了を告げたるを以て更に伯林、維納及びコーペンハーゲン等の諸地に斯道の視察を試み、英國を経て同年五月二十日錦上花を添へて歸朝、直ちに東京耳鼻咽喉科醫院副院長として迎へられ名手腕を揮ひたり、越えて三十八年十一月内幸町に開業、後ち轉じて現處に宏壯なる一醫院を開き以て今日に至り傍ら三十六年來慈惠會醫學專門學校の耳鼻咽喉科學教授たるの外、更に同會醫院耳鼻咽喉科長として公務に執掌しつゝあり、而して業餘「顚顚骨乳嘴部局處解剖」及「日本人の顚顚骨乳嘴部處解剖補遺」なる浩沓の著述を爲し更に最近に至り「耳鼻咽喉氣管病學」を上梓し、忽ちにして其再版を發行するに至れり、精力の絶倫なる單り杏林界の珍たるのみならず、又實に學界稀有の一異才と稱す可き也。

津村重舍君

△出生地 奈良縣
△現住所 東京日本橋、通四ノ七
△生年月 明治四年七月五日

株式會社東亞公司取締役 株式會社東京府農工銀行各監查役 東京市會議員 津村順天堂主

君は奈良の人山田安治郎氏の次男にして明治四年七月五日を以て宇陀郡伊那佐村に生る、後出で、津村氏を繼ぐ、郷里

大正人名辭典 (津村重舍) (川端半兵衛)

川端半兵衛君

△出生地 大阪府
△現住所 大阪、西成、天下茶屋
△生年月 明治十三年二月十三日

資産家

君は大阪府の人川端直廉氏の長男にして明治十三年二月十三日を以て大阪江戸堀に生る、舊名を半之助と呼び明治三十四年四月家督を相續すると共に、先代の名を襲ひ半兵衛と改む、代々大阪市西區江戸堀下通四丁目に住し、薩州黒砂糖の一手販賣に従事せしが後之を廢業し、現今は元の別邸たりし西成郡天下茶屋に移り、大正四年直廉氏の歿してより母堂をい子に至孝の誠を致しつゝあり、君の至孝は驚嘆せざるものなしといふ、今や資産約百五十萬圓に達し、その大部分は不動産なるを以て、敢て名利の爲めに奔命に疲るゝが如き愚を爲すに及ばず、徐に家を治めて悠々たるものあり真に至幸の人といふべし。

白杉政愛君

九州水力電氣株式會社 横濱電氣株式會社 株式會社 日出銀行各取締役 鬼怒川水力電氣株式會社 肥後酒精株式會社各監査役 從六位

△出生地 熊本縣
△現住所 東京北豊島、日暮里、金杉一五三電下、二二三八
△生年月 天保十四年三月二十九日



君は天野管十郎氏の次男也。白杉專九郎氏の養子となり明治二十八年家督を相続す、幼にして藩費に學び、鴻儒木下新太郎氏に就き漢籍を修む、弱冠にして物頭役となり更に藩の

兵隊長となる、維新の後陸軍少佐に任ぜられ、鎮西鎮臺少貳心得に補す、明治七年佐賀の亂に功あり、尋で九龍營所長官に任じ令名ありしが、時運に鑑み斷然軍籍を退き東上し、日本鐵道株式會社の創立に參與し、會社成立に及び幹事理事等の要職に就き、運輸課長等を兼務し始終一貫會社の爲め盡瘁し、三十三年房總鐵道株式會社の財政整理を依頼せられ、良好なる結果を奏して名聲あり、現今前記諸會社の重役を兼ね齡古稀を過ぎ巽鑠として壯者を凌ぐの概あり。

星野友七君

△出生地 千葉縣
△現住所 東京、京橋、南鍛冶、三〇
△生年月 嘉永五年五月十六日

君は長野縣人黒澤利左衛門氏の長男にして嘉永二年十一月二十三日を以て生れ、明治三十七年十一月家督を繼ぐ、夙に實業に志し同地方實業界の重鎮たり。

黒澤鷹次郎君

△出生地 長野縣
△現住所 長野、小縣、上田
△生年月 嘉永二年十一月二十三日

合名會社黒澤銀行 株式會社第十九銀行各頭取 諏訪倉庫株式會社社長 黒澤合資會社代表社員 株式會社東山銀行 株式會社千曲銀行各相談役 上田商業會議所會頭

川添誠一君

△出生地 靜岡縣
△現住所 東京、神田、和泉、一
△生年月 明治四年四月二十三日

東京市立佐久間小學校長 同佐久間商工補習夜學校長 東京市教育研究所評議員



君は舊幕臣川添延氏の長男にして明治四年四月二十三日靜岡縣沼津町に生る夙に育英に志を抱き二十六年三月優等なる成績を以て靜岡縣尋常師範學校を卒業し直ちに附屬小學校

訓導を拜命す、後靜岡市立尋常小學校訓導同縣島田町尋常高等小學校訓導を経、三十年五月二俣高等小學校長に榮轉し在職數年功績大に擧がり、三十五年九月盤田郡視學に任ぜられ關郡の教育界を一新せしめ名望隆々たりき、同卅七年五月東京市立佐久間尋常小學校長となり、三十九年九月同市立佐久間商工補習夜學校長を兼任し、現に其職にありて神田區學務委員に擧げられ東京市教育研究所評議員たり、天資誠實謹嚴にして二十有餘年の久しき一日の缺勤なく、今日佐久間小學校が都下の模範校を以て推重せられ、神田區教員講究會、神田區教員互助會が優秀なる好果を示し居るも、君の力に埃つこと甚だ大なり、洵に斯界有爲の材と稱すべく、東京市の君を得たる至幸といはざるべからず。

大正人名辭典 (川添誠一) (森永太一郎)

森永太一郎君

△出生地 佐賀縣
△現住所 東京、芝、三田、三ノ三四
△生年月 慶應元年六月十七日

森永製菓株式會社社長

君は山崎又左衛門氏の長男にして慶應元年六月を以て肥前國伊萬里に生る、幼にして大志あり、夙に横濱に出で陶磁器貿易に従事し、各種の商品を携へて桑港に渡航せしが不幸にして失敗し、天涯萬里の異域に孤客となり、知友なく戚族なく進退維谷まり悲惨艱苦交々至る、君以爲らく窮して達するは當に此時に在り、男兒須く雄圖なかるべからずと、進んで麵麩製造業者に就き其職工となり、刻苦精勵十年一日の如く菓子製造に研鑽し、秘訣蘊奥を究め技術遙かに儕輩を凌駕し遂に君に匹儔するものなきを自覺し、明治三十二年滿腔の抱負を懷きて歸朝す、志望偉大なるも實力之に伴はず、赤坂溜池附近に家賃僅に三圓を出ざる西洋菓子商店を開始す、爾來堅忍不拔の熱誠を以て其業務に盡瘁し家業稍々其緒に就くを得たりしが、北清事變起りて經濟界の亂搖は銀行の破綻を招き、君悉く其預金を失ふ、君茲に於て更に奮勵し専心恢復を圖り漸次隆進を呈するに至り、三十五年赤坂田町五丁目店舖を移轉す、四十年の夏火を失して家屋家産の全部を灰燼に歸し、其損害謂ふ可らざるものあり、此に至つて大に發奮せざるべからざるの地位となり、直に營業所を芝區田町一丁目に設立し、自ら職工に伍して銳意業務の擴張を期し、各種の西洋菓子を製出し家運勃興以て現時の旺盛を見るに至れり。令聞せき子は小坂仙太郎氏の令妹にして、太平、良助、恒三郎、太四郎、まさ子、まさ子等あり。

一〇四九

平沼騏一郎君

大審院檢事總長 正四位 勳一等 法學博士

君は美作津山藩士平沼晉氏の二男にして慶應三年九月廿八日を以て同地に生る、長兄を淑郎氏と稱し文學士にして有名なる經濟學者、英語學者なり、積年早稻田大學に教鞭を執り噴々の聲名あり、君は明治廿一年東京帝國大學法科を優等の成績を以て卒業し法學士となり、司法省參事官試補となり、二十三年判事補に轉じ芝區治安裁判所に勤務す、次で判事となり東京、千葉、横濱等の各地方裁判所に奉仕し其秀拔なる才學は夙に朝野の間に鳴る、二十八年東京控訴院部長に轉補せられ三十一年同院檢事に任ぜられ、三十三年大審院檢事に補せらる、而して此間に於て或は東京帝國大學及び各私立大學に民法、刑法の講座を擔任し、或は執達吏登用試験委員長判檢事辯護士試験委員、警察監獄學校教師等を兼ねるあり、三十九年司法省民刑局長に任ぜられ、翌年三月司法制度視察の爲め歐米へ差遣せられ、歸朝後法學博士の學位を受け、次で西園寺内閣の時司法次官となり、大正二年山本内閣の成立するに際し檢事總長となりて合開あり以て今日に迫る、人ご爲り豪邁適勁にして剛直一世に鳴る、苟も正義の爲には親疎共に一歩も假さず、然れど又能く人情の機微に通じて同情相憐の至誠を人の腹中に置き、實に法曹界の權威者たり。

小山禎三君

△出生地 長野縣
△現住所 名古屋、東宮、二〇
△生年月 明治三年

となり其家を繼ぐ、明治元年親兵に列し江戸に投じ東北鎮定に及び歸休す、夙に工業を起して國家に資する所あらんとし明治十年舊藩主龜井伯爵の英國遊學に際し、宿望を懇へて隨行を要む、伯之れを容れて資を給す、キングス、コルレージロンドン大學等に入り器械工學及經濟學を修め、傍ら紡績事業を視察し併せて斯業に關する諸般の調査研究を爲し大に得る所あり、更に各地工場の実地を研究し十三年歸朝するや、澁澤、藤田兩氏監督の下に紡績會社の創立を畫策し、十四年大阪三軒家に工場を設置す、現今の大阪紡績株式會社即ち之なり、君會社に入て經營の任に當り、海外棉花の直輸入、新式機械の購入、會社の増資等三十有餘年一日の如く、苦心慘澹夙夜精勵以て現今の旺盛を極むるに至り、其社長となり斯界に名譽隆々たり、三十五年其功績に依り綠綬褒章を賜はる別に大阪燃絲株式會社及紡績用品株式會社監査役、大日本綿絲紡績同業組合委員長、大阪高等工業學校商議員の職に在り、令聞貞子、清亮、君代子の二子を養子とし、妻はせて、龍太郎、壽満子の二兒を擧ぐ。

根岸福彌君

福岡縣立福岡師範學校長 正六位

△出生地 群馬縣
△現住所 福岡、福岡、荒月、二一八
△生年月 明治二年三月廿一日

君は明治二年三月二十一日群馬縣利根郡川田村に生る、幼より學を好み英才の稱あり、郷校を終へて夙に志を教育に立て一生を之に盡くさんとの目的を抱き、二十年四月群馬縣尋常師範學校に入學し、蠶雪の苦を積んで業績優良を以て二十

千代田生命保險相互會社名古屋支部長

君は長野縣人にして明治三年を以て信州に生る、幼時聰慧にして學を好み郷校に在るの時より知識操行群童を抜く、長じて東京に出で慶應義塾に入り理財及政治學を修む、卒業後時事新報記者となり、經濟記事に於て得意の筆力を發揮し、同人間に推重せらる、三十年時事新報社を辭して南洋諸島に周遊し居ること二年、親しく同地の殖産興業状態を視察す、歸朝後再び時事新報に筆を執りて豊富なる新知見を展開し筆華益々精彩を加ふ、明治三十七年四月千代田生命保險株式會社の創設せらるゝや入て社員となり、三寸の毛管に代ふるに才筆を以てし、孜々營々として實務を事とし幾計もなくして業績大に擧る、君の勤勉と君の手腕とは先輩重役の信認する所となり、忽ち擢られて同社名古屋支店長となる、爾來銳意熱心支店の經營に任じ、事業の發展に資する所多し、君識見手腕に於て卓越の資を有するのみならず、賦性謹恪、人格の高尙なる點に於て中京紳士間に推重せらる、保險界亦得易からざるの人材なり、君猶ほ春秋に富む、前途亦刮目すべきものあり。

山邊丈夫君

△出生地 鳴根縣
△現住所 大阪、南天王寺堂、芝五
△生年月 嘉永四年十二月八日

大阪紡績株式會社取締役社長 大連土地家屋株式會社取締役 豊田式織機株式會社監査役

君は舊津和野藩士清水格亮氏の二男にして嘉永四年十二月を以て石見國津和野城下に生れ、後出で、山邊文居氏の嗣子

四年三月同校を卒業し、更に進んで笈を東都に負ふて二十五年三月高等師範學校に入り、同二十八年二月愈々同校を卒業して群馬縣尋常師範學校訓導を拜命し、教育家として嚆望多く在勤中選ばれて高等師範學校助教諭兼舎監訓導を拜命し、功績太だ多かりしが偶々清國に於て自強の國論大に起り、特に南湖總督張之洞氏は大に新學を興し、日新文明の知識を普及し以て國家富強の基礎を定めんとするに熱心し、三十二年二月君は即ち張總督の聘に應じ、湖北省武昌府に赴き、總督の教育顧問となり、専ら清國の教育界に貢獻せんと欲せしが、北京政府は徒らに總督を掣肘して教育事業の振興を困難ならしめし、翌三十三年の春漸く師範學堂開創の計畫成り、校舎の建設に着手せんとするの際、不幸にも義和團の暴動勃發して京師擾亂し、武昌府も亦其影響を受けて不測の危險に遭遇し、同年九月武昌府を出發して歸途に就き、三十四年二月高等師範學校に復歸し舎監を拜命す、三十六年四月三重縣師範學校長の要職に就き、在職後四年の後即ち三十九年六月廣島師範學校長に轉任し大正元年に迫り、同年十月福岡縣立師範學校長に轉任し以て今日に至る、君學校を司宰するや誠心精勵、未だ曾て倦む所を知らず、指導其宜しきに適ひ、職員一致して其職に盡すを喜び、子弟父兄敬仰せざるなし、人となり謹嚴にして恭敬、而かも温情に富み懇切至らざるなく、社會の尊重を受けて令名噴々たるも亦所以ありと謂つべし、要するに君が今日迄の生涯は純然たる教育家の生涯なり、其一身を斯界に献ぐるに至つては、如何に君が崇高の精神に富むやを知るべく、名利の外に淡如たり、實に君の如きは好個の教育家たる以外、人物の師表、紳士の典型と稱すべし。

濱田 精藏 君

△出生地 鹿兒島縣
△現住所 福岡縣 電話一五六六

千代田生命保險相互會社福岡支部長



君は鹿兒島縣加治木町の人なり幼時不幸にして慈親を亡びたりしも阿兄の鞠育する所を爲り、愼くして郷里の小中學校を卒業するや東上して慶應義塾に學び精勵多年、學業大に進

み明治三十八年四月を以て同大學部政治科を卒業せり、是に於て乎直ちに時事新報社に入り専ら經濟方面を擔當して努力衆に抽んずるものあり、爾來四星霜の久しき曾て懈怠の事なく社長及先輩の稱する所を爲り、遂に四十一年十一月を以て同社の特派員として英京に赴き、通信事務を擔當する傍ら同地の大學に於て政治經濟科の聽講生を爲り、熱心研鑽敢て苟くもせず滯留三年にして歸朝するや、依然編輯局の人を爲りて執筆に従事し、讀者をして重きを時事新報に致さしむ、然るに四十四年五月に至り辭し難き事情の身邊を圍繞せるより茲に意を決して筆硯を去り、同社と關係淺からざる千代田生命保險會社に入り、事務を練習すること約年餘にして福岡支部長に昇進し以て今日に迫る、人となり温順にして事に精勵而して他と交るや常に惻誠を敷て曾て圭角を露はさざる所實

に英國紳士と謂ふべし、令兄は鐵工業に従事して年々資産を増殖す。

令閨を花子と喚び、今や三人の男子を擧げ、圓滿なる家庭の下に愛兒の教養に傾倒しつゝあるは家門の慶と謂ふべし。

内田 鎮一 君

△出生地 福岡縣
△現住所 福岡縣 電話二五三三
△生年月 明治六年六月二十八日

支那衛生顧問 滿洲電氣株式會社取締役 營口在 郷軍人會支部長 營口居留民團議員 陸軍三等軍醫正 從六位 勳五等

君は福岡の人にして明治六年六月二十八日の出生たり、明治二十八年二月陸軍三等軍醫に任せられ、爾來四十三年豫備役に編入せらる、迄十有六年軍醫として専心其職に従ひ、上下の敬重する所となれり、君が其間の閱歷の一端を擧げんか明治三十五年十一月一等軍醫に昇進し、三十七年二月日露戰役の起るや、第十二師團第三野戰隊附を命せられ、九連城、榆樹子、大寒坡嶺、遼陽等の戰闘に参加し、同年十月一等症を以て轉送され小倉豫備病院に入院す、同年十一月全治退院後、小倉豫備病院附となり、翌三十八年一月大里俘虜收容所開設委員を命せらる、翌年三月小倉豫備病院附被免、關東都督府附安東縣軍政署勤務及び營口軍政署附を命せらる、同年四月三十七八年戰役の功に依り勳五等双光旭日章及金五百圓を賜はる、同年十二月營口軍政署の撤廢せらるゝに及んで、同月清國營口海關道梁如浩氏の招聘に應じて衛生顧問となり四十三年八月陸軍三等軍醫正に昇進し豫備役に編入せらる。

寺島 誠一 郎 君

△出生地 東京府
△現住所 東京府 平河、六ノ七
△生年月 明治三年九月九日

貴族院議員 八千代生命保險株式會社取締役 株式會社日本製鋼所監査役 從三位 勳六等 伯爵

君は上院議員中にありて實力才幹を具備せる有爲の政治家にして、而も名家の後を襲ぎ聲望同族間に噴々たり、當家は藤原鎌足の裔宗俊の後なり、宗俊より二十數世を経て宗則氏に至る、宗則氏は夙に蘭法醫學を修め後英國に留學し、明治初年出仕して神奈川縣知事兼外國官判事に任せられ後外務大臣となり、爾來顯要の職に補任し勳功に依り華族に列し伯爵を授けらる、君は其長男にして明治三年九月九日を以て東京に生れ、二十六年襲爵を仰付らる、是より先明治二十年君は米國に航し費府ペンシルヴァニア大學に入り、二十八年卒業して理財學士の稱號を得、更に轉じて佛國法科大學に入り三十二年法學士の稱號を得、三十五年巴里政治學院外交科卒業證書を得、英、伊、白、獨、埃、土、希、埃の諸國を漫遊して三十七年歸朝し、同年外務省事務取調の囑托を受け、次で伏見宮御渡米の際隨行仰付けられ、翌年外務大臣秘書官に任せられ三十七八年事件の功に依り勳六等に叙し單光旭日章を授けらる、而して退官後は貴族院議員に推選せらる、爾來實業界に曠足を伸ばし現に八千代生命保險株式會社、株式會社日本製鋼所監査役として重きをなせり、功勞に依り現今從三位勳六等たり、資産七十萬圓を超ゆ。

夫人をきやう子と呼び、三井源右衛門氏の令妹にして、男宗從、女恭子、妻子等あり、清福家庭に滿つ。

大正人名辭典 (寺島誠一郎) (野澤泰次郎)

野澤 泰次 郎 君

△出生地 栃木縣
△現住所 東京日本橋區 三ノ
△生年月 弘化元年十一月三日

西澤金山探鑛株式會社社長 下野新聞株式會社顧問

君は下野の豪家久一郎氏の長男にして弘化元年十一月三日を以て生る、累世米穀問屋を業とし先考の代に至り更に同業を兼營し、業務繁榮家名大に振興せしが多數の貨財を滿載したる所有の船舶、暴風の襲ふ所となり悉く難破し、榮枯忽ち地を易へ家運衰頹せり、君の此間に處する刻苦勤勉は蓋し容易の業にあらざるべし、君不屈不撓の資を以て家運の挽回を圖り拮据匪懈晝夜を別たす、家政漸く緒に就き縣會議員に選舉せられ尋で議長に推選せらる、縣治に貢獻する所多く衆望を萃む、自ら紡績工場を建設して其業を起すや、不幸にして薄資之を持すること難く幾度か倒産に瀕し、嚴冬に際し寒威凜烈衣食給せず、多數の職工凍餒を感ずるも不満を唱ふるものなく、君の爲め俱に斃れんことを誓ひしは、以て德望の熾んなるをトすべし、遂に多年の辛酸を嘗め一陽來復の曙光に近づき幾許ならずして其業を大成するに至れり、精神一到何事か成ざらんとは君に於て之を見る、後下野紡績會社、下野綿布會社、綿布製造所等に贊助を與へて力あり、下野新聞社の株式組織に變更するや君に請ふて顧問たらしめ、西澤金山探鑛株式會社の取締役に任ぜり尋で社長となり、孜孜として經營す、齡古稀にして意氣壯者を凌ぎ人をして其熱誠に感せしむ、一敗地に塗れて起つこと能はざるを嘆するの徒、須らく君の膝下に伏して其流を汲め。

夫人をせい子といふ武之助文藏みち子すみ子よし子等あり

青木榮次郎君

東京市神田區會議員 伊勢屋主



△出生地 東京府 東京、神田、和泉、一
△現住所 東京、下、三、二、二
△生年月 慶應三年五月三日

君は東京の人にして村松善五郎氏の五男を以て慶應三年五月三日に生れ、後青木の姓を冒し家督を相續せり、人ご爲り聰慧にして才氣英發頗る雄志あり、家を繼ぐに及び平素節約を以て財を積むこと愈々豊なり、而して伊勢屋の販賣する毛皮は北海樺太其他の内國産にのみ止まらず廣く各國産を供給す、是を以て日々紳士貴婦人の君の店舗に來りて佳品を需むるもの甚だ多し、君又公其心に厚く平素東京府市の事に奔走すること少からず、殊に神田區に於ける大小問題にして君の關與せざるものは殆んど無しと謂ふべく、區會議員として三回引續き選出せられ現今に及び、又學務委員に擧げられし事二回、目下營業稅審査委員、區内佐久間小學校保護者會長其他の職を帶べり、大正三年六月東京市會議員の改選あるや君候補者として競争場裡に立ちしが、偶々御大葬に會し斷然

一〇五四
初志を聽し以て謹慎の誠忱を表したり、君の平常推して知るを得べし、君亦公共慈善事業に金品を義捐し、賞金賞状を受領せしこと一再ならず、其篤行感するに餘りあり。
令閨をよね子と呼び、令嬢倭子あり、神田高等女學校出身の才媛にして現に家庭にあり。

石原宗平君

甲斐物産合名會社社長 陸軍輜重兵少尉 正八位 勳六等

君は甲州一の宮の人にて明治六年九月を以て生る、郷校を卒へて東京に出て攻玉社に入りて學ぶ、明治二十一年歸郷して山梨養蠶講習所に入り優等を以て業を卒へ、廿二年七月蠶業視察として關西及四國地方を遊歴し大に得る所あり、三十四年四月甲斐物産商會を組織して店主として經營に當り、同縣の國産たる葡萄酒及び水晶品の販賣店を東京本郷に開設し業運大に殷盛となり、三十五年十一月更に仙臺に出張所を設け三十六年二月山梨縣東山梨郡玉宮村竹森水晶礦區を買收し、同年甲府に本社を設け大に斯業の擴張を圖る、同商會の目的の外、印傳袋物、甲斐絹、兩畑硯等の特産品の販路を開拓し業績の顯著なるものあり、四十年十一月商會の組織を變更して合名會社に改むるや、君推されて其社長となる、君曾て兵役に關係を有し、明治二十六年近衛輜重兵大隊に入營し、爾來日清日露の兩大戰役に出征し下士より累進して日露戰爭に際し輜重兵少尉に任せられ正八位勳六等を賜ふ。

土肥修策君

東京帽子株式會社取締役兼支配人



△出生地 新潟縣 新潟、小石川、竹早、九八
△現住所 東京、小石川、一、六、七
△生年月 明治元年二月三日

君は新潟縣人にして明治元年二月三日を以て生れ、嚴君を篠田修亮氏と言ひ醫を以て郷黨に鳴れり君は即ち其二男にして垂髫蚤く既に穎才の稱あり、稍長するに及んで東京に出て高等商業學校に入り、明治十九年を以て卒業するや直ちに實業界に投じて大に其の手腕を試んとし、先づ商業視察の目的を以て瓜哇及新嘉坡に渡航せるは、即ち明治二十一年の交なりき、在留すること一年半に過ぎざるも、君は此間に於て親しく南洋諸島の風物を研究し、烟眼蚤くも南洋に向て本邦製造の雜貨を輸出するは、是れ即ち帝國の一大利益なるを看取す、歸國するや先代やす子の養子と爲り、次で二十三年家督を相續して乃ち今の姓に改む、爾來數年吳服業を營み大に商腕を揮ひたりしも、會々神戸商業學校に招聘せられて餘儀なく之が囑託教員と爲り、職に在ること數閱月にして驍然志を決し再び實業界に入る、幾何ならずして現今の會社に招かれたり、是に於て平全力を傾注して之が經營に任じ、社運の發展に努力して今日の進境を開くに至れり、君の奮闘力も亦

幡田義之助君

滿洲石鹼製造所主

△出生地 山口縣 山口、加賀、二三
△現住所 大連、加賀、二、三
△生年月 慶應三年七月二十一日

其れ旺んならずや。
君は山口縣人にして明治二十年笈を負ひて東京に出て、二十七年日清戰役に際し渡清して柳樹屯及旅順に酒舖を營み、翌二十八年八月臺灣に航し臺南に至りて西洋雜貨商を營み、側ら軍隊及諸官衙の御用達及山林採伐にも從事し、打狗、恒春、鳳山等に支店を設け、香港、厦門等の對岸貿易をなす、三十六年家兄の芝罘に於て船舶業及石炭販賣業の支店を設くるに及び君主任として同地に赴きしも、會々日露戰爭起り所有汽船全部御用船に徵發せられしより已むを得ず、一度内地に歸り直に小蒸汽及日本帆船數艘を率ゐ、朝鮮沿岸より大連及營口に航して全部貨船し、當時營口に於ける軍需品の缺乏を見るや、直に内地へ引返して外國船を雇ひ入れ、木炭、石炭、木材等を結氷前に輸入して巨利を得たり、爾後材木、金物、建築材料、石炭等の販賣等に從事し、四十年哈爾濱材の有望なるを見るや、長春に支店を設けて一時大擴張を計りしも、露商の契約不履行等時機未だ早く遂に利あらずして閉店す、營口も大連の發展と反比例に商況日々に悲境に陥り止むなく閉店するに至る、後居を大連に移し四十四年三月より石鹼製造業に従事す、大正三年來歐洲大戰は外國品の輸入を減少し、北滿南滿地方へも盛に輸出して本年は新たに工場を設け、最新器械を据付け一ヶ年一千噸以上の石鹼を製造すと、君常に工場に在りて熱心努力一々原料製法等を自ら監督す。

西川利藤太君

△出生地 宮崎縣 嘉義北門外
△現住所 嘉義北門外
△生年月 明治四年二月十五日

大正無盡株式會社取締役 嘉義電燈株式會社監查
役 嘉義産業株式會社 臺灣製酒株式會社各顧問
嘉義街防疫組合長 辯護士



内地より渡り僥倖
以て巨萬の富を作り
たる者蓋枚擧に遑あ
らざるべし、只夫れ
誠實以て信用を博し
信用實に世間の敬重
を來して今や其資産
二十萬圓を稱し、優
然として嘉義廳管内

の紳董間に翺翔しつゝある紳士は、宮崎縣西臼杵郡三ヶ折村出身の西川利藤太君其人なりとす、君は明治四年二月十五日の誕生にして篤實温厚の君子なり、夙に郷里にありて中學校を卒業するや上京して法政大學に學ぶ、蓋法曹界に立て社會に貢献する所あらんとは、君が平素の志望目的なるを以て、其學窓に在るや孜々として勉學し汲々として手に書卷を釋かず、研鑽三年卒業するや辯護士試験に及第し法曹界の人と爲る、想らく内地に在りて區々其業に従はんより、寧去て新版籍の人權を擁護するに若かずと、慨然志を決して渡臺せるは明治三十年の交なりとす、爾來幾多の世波を蹴破し訴訟事件を取扱ふて懇篤信切を極む、是に於て乎士民と言はず移民

と言はず其懇篤を徳として門前常に市を傲す、是れより君の收入大に増加し、又當年の窮措大にあらざる也、衣食足りて禮節を知る恒産なくんば豈能く恒心あらんや、而して治臺の政策を善解して以て土地の開発に任するのみならず、心を産業に傾け富源の發展に力む、是れ電燈會社に製酒會社に將た産業會社に顧問と爲り重役たるに至る所以なり、愆くの如くに以て今や富紳を以て嘉義地方に敬信せらる、誰乎君の成功に羨望せざらんや。

安永鐵藏君

△出生地 東京府 小石川戸崎、九六
△現住所 東京、小石川一四〇
△生年月 嘉永三年二月二十九日

東京石輪製油株式會社監查役 石輪製油業 安永
舎主

「安永舎」の名や既に高く東都に聞ゆぬ、是れ有數なる石輪製造業者にして主人を安永鐵藏君と呼び東京の人なり、即ち安永平太夫氏の長男を以て嘉永三年二月二十九日に生まる、夙に石輪製造に就て研究し幾多の苦心と經驗とを重ね、良品を供給して聲望漸く高く、業務の繁榮愈々加はり利を收むること従つて大に、現に直接國稅四百五十餘圓を納むるに至る工場は小石川區戸崎町にあり、宏壯にして許多の機械を据付け多數の職工技手を使用し盛に製出に従事せり。

三條實憲君

△出生地 東京府 麻布、鳥居坂
△現住所 東京、二二九
△生年月 明治卅五年十月二十九日

公爵

三條家は藤原鎌足の裔公季の後にして公季の子實成より十數代を経て先々代實美卿に至る、實美卿は夙に勤王の志を懐き文久三年薩長の士と謀り、攘夷を決行せんごせしも幕府命を奉せず、廟議亦一變して卿は忽ち同志六卿と共に長州に走る、慶應三年宥されて京師に還り大納言左近衛大將となり、維新後右大臣太政大臣内大臣等を歴任し功績最も大にして大勳位公爵を賜はり、維新の元勳を以て稱せらる、明治二十四年薨去するや三日間廢朝仰出され國葬に附さる、人臣の光榮其極に達すといふべし、實美卿の子公美卿を経て實憲君に至れり、而して君は明治三十五年十月二十九日を以て生れ、大正三年一月家督を繼ぎ襲爵仰付らる、目下猶學窓に在りと雖も、他日業成るの日は必ずや祖先の名を顯揚するの事績を擧ぐるなるべし、刮目して其前途を期待すといふ。

五藤正形君

△出生地 高知縣
△現住所 高知、帶屋
△生年月 慶應二年八月一日

高知縣多額納稅者

五藤家は舊山内藩の太夫五藤吉兵衛より出で君は其曾孫に當る、實に五藤正身氏の長男にして慶應二年八月一日を以て生れ、明治八年四月家督を繼ぐ、縣下大地主として直接國稅四千數百圓を納め縣多額納稅者たり、曾て貴族院議員に互選

され、偶々日露戰爭に際し協贊の功により勳四等を授けられたり。

本城重之君

△出生地 新潟縣 本芝入橋、二三
△現住所 東京、二四六九
△生年月 明治三年十一月十五日

機械製造業

君は新潟縣の出身にして本城之晴氏の男なり、明治三年十一月十五日を以て越後國中頸城郡高田市に生まれ、郷里に於て普通學を修めたり、年甫めて十三にして工業を以て世に立たんご決意し、斷然郷關を去つて横濱に來たり、機械製造家たる西村金平氏に就いて機械製造の事を學び、三年にして一般の業を卒へ十八年に横須賀造船所に入り、主として機械部に勤務し廿一年轉じて芝浦製作所に入りて更に技術に就いて練習する所あり、廿六年海軍造船所に入りて直ちに組長を命ぜられ、克く職務に精勵して効績著しく好評噴々たりき、三十一年に至り職を辭して自から工場を起し機械類の製作に従事し、多年練磨したる卓越の披備を揮て孜々として怠らず、其製品の精巧細緻なること漸く世の稱揚する所となる、日露戰役に際し海軍の御用を仰付けられ誠實事に従ひ、爾來多大なる信用を博して現時に至るまで海軍の御命を蒙り、業務益々繁忙を極めて事業の發展著しく、今や成功者として世に目せられ、尙ほ將來に向て大に成すあらんとす、君の温厚謙直なる天性を以て、殊に其精力極めて旺盛にして堅忍不拔の強意志あり、其の大成や遠からずして實現せらるべきこと明かなり。

大正人名辭典 (橋谷政次郎)

阪谷芳郎君

△出生地 岡山縣
△現住所 東京小石川、原、一、二六
△生年月 文久三年一月十六日

貴族院議員 正四位 勳一等 法學博士 男爵



須彌頂上無根草、不受春風花自開、這般の文字は正に寔に阪谷芳郎男の政治的運命を語るものにあらずや、然り阪谷男は春風を受けざるも自から開くの花たり深淵なる學植と温然

たる風半とは紳士の品質を體現すると同時に、錦繡堆裏一種奪ふ可らざる霸氣は、時機の到來するを待て其芳烈を政界に縦まゝにするは、何人も豫想する所ならん歟、而も君は大に手腕を發揮せんとして夫の西園寺内閣に大蔵大臣たりしも、事志と違ふて廟堂を退きたりしは君として捲土重來の決心を堅めしめたるにあらずや、案するに君は備藩の名儒阪谷朗廬翁の四男にして、文久三年一月十六日を以て郷里に生る、明治二十年分家して一家を興す、幼より穎才群を起り秩序的に普通學を修了するや、直に東上して帝國大學法科に入りて政治經濟の諸科を専攻し、聰慧儻輩を壓し以て諸教授の推重する所となる、校門を出づるや法學士の稱號を得て大蔵省に出仕し累進して主計局長と爲り、三十二年には法學博士の學位を授けられ、次で大蔵省總務長官に進み、然る後三十九年一

月の西園寺内閣には大蔵大臣を拜して入閣し、同年更に特旨を以て華族に列し男爵を授けらる、四十年には日露戰役の功を以て勳一等に叙せられ四十一年桂冠して野に下るや、尾崎行雄氏の後を襲ふて東京市長と爲り、爾來市政に貢獻するもの枚擧に遑あらず、現今正四位に叙せられ大正博覽會並びに市の土木工事等を企畫して銳意怠ることなく、貢獻する所大なりしが電燈問題に關し、多數市會議員と意見を異にし斷然職を去れり、曩に貴族院議員に勅選せられたり。夫人琴子は澁澤男爵の愛嬢にして、今や二男五女を擧げて和氣一堂に溢る。

桃谷政次郎君

△出生地 和歌山縣
△現住所 和歌山那賀粉河

化粧品製造販賣商 桃谷順天館主

美顔水の名は中外に喧傳す、凡う製造品にして其名の知らる、者決して尠からず、然れども美顔水の名聲程普く知らるゝは稀なり、實に美顔水は上は貴顯紳士淑女より、下は津々浦々の僕婢女に至る迄之を記憶せざるはなし、是れ蓋し之を周知せしむるの方法其宜しきを得たるに依るべしと雖も、又其品質の優良にして一般の嗜好に適合したるに依らずんばあるべからず、而して此美顔水の製造發賣元は實に桃谷政次郎君とす、而して其製造販賣業は創始以來着々として成功し、今日の君が資産百萬圓を算じ和歌山縣屈指の富豪たり、經營の偉能、進取の氣象超凡の者にあらざれば曷んぞ能く斯くの如くなるを得んや、本館は桃谷順天館と稱す。

太宰文藏君

△出生地 福岡縣
△現住所 東京芝、櫻田本郷、一四
△生年月 明治九年七月十一日

株式會社太宰貯藏銀行頭取 合名會社太宰銀行業務擔當社員 株式會社第百七銀行 共益信託株式會社各取締役 株式會社福島縣農工銀行 大日本軌道株式會社各監査役 千代田生命保險相互會社 評議員 福島縣信用組合聯合會々々

君は福島縣人先代太宰文藏氏の長男にして、明治九年七月十一日を以て、伊達郡保原町に生る、幼にして聰敏を以て聞か、明治三十六年家督を相続するに及び文藏氏を襲名す、代々素封家を以て郷閭に鳴る、君夙に實業界に雄飛せんとする志を有し、曾て郷里保原町に合名組織を以て太宰銀行を起し、更に明治四十五年に至り東京市日本橋區新右衛門町に、太宰貯藏銀行を設け、共に其頭取となりて親ら經營に參畫するの外、第百七銀行、福島縣農工銀行、大日本軌道株式會社、共益信託株式會社等の重役として又千代田生命保險相互會社の評議員、福島縣信用組合聯合會の會長等何れも其樞要の地位に在りて、同地方實業界の重鎮を以て稱せらる、而して今や財を積むこと百萬圓に及び、納税額亦頗る巨額に上るといふ。旺なりといふべし。

夫人を照代子といふ、同縣人安齋茂兵衛氏の二女なり、長女まさ子は明治二十八年の出生にして、栃木の八西川正順氏の五男正伍氏を迎へて婿養子となす、氏は東京高等商業學校出身の秀才にして、現に横濱正金銀行に奉職しつゝあり、其間惇子あり、外に二女とみ子あり。

三木與吉郎君

△出生地 德島縣
△現住所 德島板野、松島
△生年月 明治八年十一月二十七日

德島縣多額納税者 大同藍株式會社專務取締役 藍商 醸造業

三木家は君に至りて十二代連綿たる阿波の素封家にして又縣下屈指の大地主なり、君は實に十一代三木與吉郎氏の長男にして、株式會社阿波商業銀行取締役、三木六三郎氏の養叔父なり、明治八年十一月二十七日を以て生れ幼名を康治といふ、明治三十七年十二月家督を繼ぎ十二代與吉郎の名を襲ふ、代々藍及び清酒醸造を業とす、現今東京市日本橋區本木町二の十七(電話本局六四五番)及び大阪市に支店を有す、又曾て輸入染料販賣の目的を以て大阪市に大同藍株式會社を創立し、自ら專務取締役として現に其經營に執掌しつゝあり、歐洲大亂の激發するや輸入忽ち杜絶して全く内地製品に依らざるを得ざるに至り、内地製品の價格昂騰せざるなし、就中染料の缺乏全く甚だしく需要の供給に數十倍するものありて、斯業者は期せずして皆巨利を收めたり、君亦其選に洩れず一舉して數十萬圓を贏得せりといふ、而して直接國稅約八千圓を納むるを以て縣多額納税者として知らる、曩に衆議院議員に選ばれ大正六年の解散せらるゝ迄其職に在り、君資性頗る恬淡、實業家として將又政治家として前途大に矚目せらるゝ有爲の偉才たり。

夫人をつねか子といふ、同縣人吉田賢太郎氏の令妹なり、温容典雅にして、賢貞を以て聞か、眞治、共治、増子、英子の數子あり。

一木喜徳郎君

△出生地 静岡縣 小石川、林、六七
△現住所 東京、小石川、七七
△生年月 慶應三年四月四日

樞密顧問官 從三位 勳一等 法學博士



君は現代の博識にして官海學海の尤物なり、而も富裕の寵兒として崎嶇曲折の徑路なく、坦々として秩序的に順路を闊歩し、深玄なる學理を當代に應用して燦然たる光華あらしめ

たる成績は、學界の權威として益々光輝あらしむ、君は遠州掛川の人實父は同地方に並びなき大地主岡田良一郎氏なり、君慶應三年四月を以て佐野郡倉真村に呱呱の聲を揚ぐ、舊名を丘平と稱し同郷の資産家一木氏を嗣ぐに及び現今の名に改む、幼にして慧敏能く養父に奉省して謹慎鄭重、親疎を問はず孰れも君の將來に望を屬す、君の青年時は斯く財用足り慈顔門に倚り、温情藹々の裡に過ぎたるを以て毫も成功を急ぐなく秩序的に進境す、明治十六年東京帝國大學豫備門を出づるや、同大學政治理財に入り堅忍自勵、常に群を抜く廿年優等を以て卒業し法學士の稱號を得、直ちに實際に接觸して之れが應用に努めんと決し職を内務省に奉せり、廿三年内務省書記官に累進するや筋かに期する所あり、自費を以て獨逸に留學し主として行政法を討究し、名譽ある學位を受けて廿

六年歸朝す、歸來更に内務省に復職して從七位に叙せらる、翌年十月東京法科大學教授に轉任し内務省書記官を兼ね、次で從五位に累進し、卅一年五月兼官を罷めて内務省參事官となる、此間吾が學海に貢獻すること多大にして斯界獨歩のオトリチーとして世人の畏敬を博し、卅二年三月法學博士の學位を授けらる、同年法典調査會委員に擧げらる、三十三年九月勅選せられて貴族院議員となる、次で兼官を辭し帝室制度調査局の御用掛を命ぜらる、次で奥田義人氏其職を辭するに及び内閣法制局長官と爲る、四十一年内務次官に任せられ後辭して貴族院議員、法科大學講師たりしが大正三年大隈内閣成るや一躍文部大臣に任せらる、後内務大臣に轉じ功績頗る顯著なり、功により勳一等を授けらる、大正五年辭して野に下り六年八月を以て樞密顧問官に拜す、其著す所の行政法行政學等は學界に於て噴々の聲譽あり、人々爲り温良高雅にして頗る學者的風姿の豊かなるものあり、言議態度共に法度にあり、順境を趁へる學者として造詣する所深遠なるを、加ふるに多年官海に人となりたるを以て、實務の才に長じ宰理調節悉く學理に契合して條理徹底す、若し夫れ講筵に立て唇齒徐ろに動き、諄々として幽遠の理を説く所、整然章をなして一絲亂れず、源泉滾々として盡くる所なきは、眞に現代の代表的學者たるに耻ぢざるなり。

小津與右衛門君

△出生地 三重縣 深川、鶴住、二
△現住所 東京、本所、一〇五一、一〇一六
△生年月 明治十九年九月四日

肥料商

君は三重縣人先代小津與右衛門氏の四男にして明治十九年九月四日を以て生る、幼名を良平といふ、三十七年家督を繼ぎて與右衛門を襲名す、抑々小津家は文政年間創立に係り代々肥料を業とし連綿今日に及べる舊家にして、曾て書家丸山應舉を扶助して其能を盡さしめたるを以て、同家に應舉の畫幅數百點を藏すといふ、此一事を以てするも尋常一様の實業家にあらざるを知るべし、今や直接國稅三千九百圓を納むるの盛況に在りて益々發展に向ひつゝあり、令弟孝之助氏は海産物を業とし、現に日本橋區元四日市町九番地(電話本局九五六)に合資會社小津海産商店を設け、盛んに營業しつゝあり、兄弟相共に東都に在りて成功を收む、亦一門の誇となすに足るべし。

夫人をせつ子と呼ぶ、愛知の人山崎文次氏の令妹なり、一子良夫あり、寵撫至らざるなし。

田邊幸七君

△出生地 神奈川縣 横濱、元
△現住所 神奈川縣 横濱、元
△生年月 明治三年七月二十五日

日本アスファルト工業株式會社社長 株式會社横濱實業貯蓄銀行 株式會社カフエーパウリスタ各 監査役 砂糖商

先代田邊幸七氏は天保八年の出生にして横濱に於ける實業界の元老と稱せられ、砂糖油を業とするの外、横濱電氣株式會社、大安生命保險株式會社及神奈川縣農工銀行等に關與する所あり、令名噴々たりしが大正四年不幸にして長逝せしを以て君入りて乃ち家督を繼ぐ、君は明治三年七月二十五日の

大正人名辭典 (田邊幸七) (關戸守彦)

出生にして幼名を豊太郎といひ、先代幸七氏の二男なり、家督を繼ぎて幸七を襲ふ、現今日本アスファルト工業會社の社長として其經營に執掌するの外、横濱實業貯蓄銀行、カフエーパウリスタ等の重役として樞要の地位に居る、而して砂糖麥粉石油穀等の販賣に従事し、資産百萬に垂んなんとして土著の豪家を以て知らる、直接國稅二千餘圓を納むるを以て其盛運を推すべし。

夫人既に歿して一女幸子あり、令弟寛造氏は分家し、令妹あさ子は横濱石川町鶴屋吳服店主、神田今川橋松屋吳服店主として斯界に隆々の盛名を有する古屋徳兵衛氏の長男正太郎氏に嫁せり。

關戸守彦君

△出生地 愛知縣
△現住所 愛知、名古屋、西
△生年月 明治二年八月二日

株式會社關戸銀行 株式會社丸八貯蓄銀行各頭取 株式會社愛知銀行取締役 千年殖産合資會社代表社員

君は明治二年八月二日を以て生れ關戸二郎氏の長男なり、不幸にして君猶稚くして父君の逝去に遇ひ、専ら母堂の教化を享く、明治六年六月を以て家督を繼ぐと雖も、君猶幼少なるを以て一切の事は擧げて母堂の攝理する所、君は専ら學事に務む、業漸く成るや獨力を以て關戸銀行を設立し、行主として經營に任ず、時に君の年僅に二十二歳なりき、爾來諸種の事業を試みたりしも爾今専ら銀行業者として終始せんことを關戸銀行の外丸八貯蓄及愛知の二銀行に重役たり。

九條 道實君

△出生地 京都府
△現住所 東京、赤坂、福吉二
△生年月 電長、新、七四一
明治二年十二月十五日

貴族院議員 掌典長 正三位 勳三等 公爵



君は舊公卿の出にして故公衛道孝卿の長男、明治二年十二月十五日を以て生る三十九年一月家督を相續して襲爵仰付らる、夙に宮内省に出仕し、正四位に叙せられ掌典兼式部官、掌典次長、侍從職御用掛等を歴任して、方今掌典長正三位勳三等たり。

御臺を恵子夫人と呼び大谷光瑩伯の第二女にして、其間に道秀、兼子、豐子、光子、敏子、敏子の一男五女あり、令妹節子姫は現に國母陛下に渡らせ給ひて、同故節子姫は故山階宮妃殿下にならせられ、同故壽子姫は大谷光瑞伯に、同蓬子姫は澁谷隆教男に、同縦子姫は大谷光明師に、長女兼子姫は佐竹侯の夫人たり。

君の家門は世人の熟知せるが如く藤原家の正裔にして、實に藤原鎌足より出づ。其子不比等より六世を経て師輔に至り第を九條に構へ、九條の右相府と稱せられ、代々攝政關白たり。師輔の子道長より三十四代道孝卿に至る。國母陛下の御生家たるに至りては、真に無上の光榮と云はざるべからず。

片岡 宇太郎君

△出生地 高知縣
△現住所 高知、香川、大崎
△生年月 安政四年六月十七日

高知縣多額納稅者 土佐電氣鐵道株式會社取締役 株式會社土佐銀行相談役 合名會社片岡紙店代表社員 酒造業

君は高知縣人片岡竹次郎氏の長男にして、安政四年六月十七日を以て生る、明治十二年十二月家督を相續す、地方の素封家を以て聞ゆ、直接國稅三千圓以上を納入するを以て、縣多額納稅者として盛名を有す、代々酒造を業とせしが、君に至りて傍ら片岡紙店を開き、合名組織となし、盛製紙販賣販に従事しつゝあり、而も君の精力絶倫なるや如上の事業を経營するの外、猶土佐電氣鐵道株式會社取締役及土佐銀行相談役として現に其經營に執掌しつゝあり、蓋し高知人に特有なる剛直にして熱誠なるを以て、曾て事に當りて挫折する所なく、歩一步進んで已まざるの努力を盡すを以て、益々盛運に向ひつゝあり。

守道 半四郎君

△出生地 奈良縣
△現住所 奈良、北葛城、陵西

皮革商

奈良縣北葛城郡の皮革商として其名を知る者守道半四郎君とす、君の事業の盛大なるは實に驚くべきものあり其取引高の多大なるも亦勿論なり、資産は増加の一方にして現在の資産總額は五十萬圓を算し、地方屈指の富豪なり。

中澤 彦七君

△出生地 東京府
△現住所 東京、東橋、松川、九
△生年月 電京、五、九四、九五
嘉永二年十二月八日

酒類問屋 奴利屋總本店主

飲用酒量の多寡を以て國家の盛衰を論じ、釀界の良不良を以て社會の進不進を議するは別問題として、既に帝國の如き神代の時より酒釀あり、而も飲酒を以て儀禮の一大要素とする風俗習慣の邦國にありては、必ずや其品質の良好と價格の低廉なるを、併せて旨味の芳香醇住なる酒類を擇ばざる可らず、然るに近時我國に於ては需用の激増に伴ひ、酒釀造の疎惡濫雜に流るゝの弊あるは、釀造界の爲に悲しむと共に、國民保健の上より觀察して藐視すべからざる問題なりとす、此時に方り「奴利屋」總本店の如き酒類問屋の在るありて、之が改良に熱心し美酒に次に芳醇を以てして、世間の需用者を快喜せしめつゝあるは、寧ろ國家の爲に祝福せざる可らず。

中澤彦七君は總本店の當主にして、嘉永二年十二月八日を以て現住所に生れたる生ッ粹の江戸ッ兒なり、資性潤澤宕爽にして極めて事理に通じ、最も信誼を重んじて家業の爲に奮勵し、自から斯業の模範者、酒界の指導者として任じつゝあり、蓋し「奴利屋」は今を距る二百餘年前即ち享保の初年を以て、創始せられたる酒問屋なり、初代は攝津有馬郡屏風村の産にして活潑機敏頗ぶる商才に富み、是を以て一度江戸に移りて問屋を開くや「星の井」を招牌として銘酒を販售し、忽ち世間に高評を博したるは尙記録に明らかなる所なり、恁て連綿として名聲益々揚り、店連年と共に旺んに今や同業者中の白眉として推稱せらるゝに至れり、特に其現住所は昔時の傳

大正人名辭典 (中澤彦七) (中島重平)

中島 重平君

△出生地 栃木縣
△現住所 栃木、下都賀、栃木
△生年月 天保十四年四月十五日

栃木商業會議所議員 株式會社栃木銀行頭取

君は地方銀行家中の盛名家にして栃木縣に於ける素封家なり、明治二十五年栃木町に栃木銀行の設立せらるゝや其創業の事に與つて力あり後頭取となる、三十二年株式會社栃木商業銀行の設けらるゝに當りて君また之を援け、現に其常務取締役を帶べり、君は同縣平民五十畑六右衛門の四男にして、天保十四年四月十五日の出生なり、後中島家の養子となりて家を繼ぎ、大に家道を振興し殷富を増し、明治十六年二月を以て家を長男重吉君に譲りて隱居し、更に實業界に精力を揮ふに至れり、現に栃木商業會議所議員たり。

令室をヨネ子と呼び、栃木縣平民竹澤五十八氏の二女にして、三男一女を生む。長男重吉氏は、長江定助氏の令妹マン子を娶り、別に男重次郎、平重郎あり、四女ゆう子は櫻井源次郎氏に嫁せり。

鈴木常助君

東京株式取引所仲買人 金仲商店主

△出生地 愛知縣
△現住所 東京、日本橋、兜、三
△生年月 明治九年一月



君は名古屋の人父を鈴木仲右衛門氏と稱し明治九年一月を以て同郷に生る、夙に實業に志して東上し、而して船具商大村五左衛門氏の店員となり精勵を以て開

て株式市場に身を委ね、財界を洞察して永く自己の經驗に資し機の熟するを待てり、既にして爪牙羽翼の成るに及んで躍然兜町に店舗を構へ、直取引仲買を開始し、而も着實なる營業方針を以て信用を博し、業務漸く盛なるに及び、政府より直取引禁止の命あり、於是乎普通仲買人となり、爾來益奮勵して業に努めしかば店運愈發展して、今や金仲商店の名は斯界に高し。

笹田傳左衛門君

愛知縣多額納稅者 酢醸造業 九劫商店主

△出生地 愛知縣
△現住所 愛知、名古屋、西
△生年月 明治十三年十月三日

令閨を繁子と呼び、正道、貞子、嘉代子、志津子の一男三女あり。

高澤金兵衛君

千葉縣多額納稅者 株式會社馬來田銀行取締役
株式會社木更津銀行監査役

△出生地 千葉縣
△現住所 千葉、君津、久留里
△生年月 嘉永五年一月三日

君は千葉縣人高澤吉兵衛氏の長男にして、嘉永五年一月三日を以て生る。明治十二年五月、家督を繼ぐ。縣多額納稅者として、直接國稅約六千圓を納むるの盛況を呈しつゝあり。現今馬來田銀行及び木更津銀行の重役として、經營に參與するの外、金融を業とす。君も貧賤に育ち、勤儉力行して、漸く地歩を得て、性來蓄財の道に長せるを以て一代にして今日の富を作れり。

高梨兵左衛門君

千葉縣多額納稅者 株式會社野田商誘銀行取締役
野田町會議員 醤油醸造業

△出生地 千葉縣
△現住所 千葉、東葛飾、野田
△生年月 明治十一年三月十六日

君は千葉縣人先代高梨兵右衛門氏の長男にして、明治十一年三月十六日を以て生れ、同十五年七月家督を繼ぐ。代々醤油醸造を業とし、君に至りて既に數代に及ぶ。抑々内地に於ける醤油の消費額は、殆んど一定不變にして増減極めて少く一人一年の消費は、略々一定額あり。即ち醤油は他の酒精飲料の如く、世上の景氣の振不振によりて増減し、又は文化の進むに従ひて増加するが如き關係あるものにあらず、而も之れ國內に於ける状態なりと雖も、若夫れ醤油の海外に輸出せ

君は千葉縣下野田町の醤油醸造業者として著名なる茂木七左衛門氏の令弟に當り幼名を要之助といふ、明治十三年十月三日の出生なり、三十八年三月笹田家の養子となり、養父傳左衛門氏の二女はな子の入夫となる、家督を繼ぐに及び傳左衛門氏を襲名す、君猶春秋に富む、豪家より出で、豪家を繼ぎ、父祖の遺業を經營して誤たず、益々製造高を増すのみならず、品位の優良にして價格の低廉を以て稱する、に至れるは、君の經營の宜しきを得たるが爲ならずんばあらず、父存生の間、よく事ふるのみならず、一生の間行を慎みて身を辱めず、父母の名を汚さざるは至孝といふべき也。

古賀善兵衛君

株式會社古賀銀行頭取 肥前漁業株式會社 株式會社佐賀貯蓄銀行各取締役 佐賀セメント株式會社 社監査役 九州火山灰合資會社代表社員

△出生地 佐賀縣
△現住所 佐賀、蓮池、七九
△生年月 明治十四年四月十三日

君は先代古賀善兵衛氏の長男にして、明治十四年四月十三日を以て生る、幼名を善太郎といふ、其郷校に在るや、常に成績の拔群を以て聞え、長じて益々爛智なり、明治四十年十月家督を繼ぎ善兵衛を襲名す、而して父祖の業を繼ぎ、古賀銀行の頭取として、肥前漁業株式會社、佐賀貯蓄銀行の取締役として、又佐賀セメント株式會社、九州火山灰合資會社の代表社員として、何れも經營の衝に當り益々發展しつゝあり、君猶春秋に富む、巨富を擁して佐賀財界に潤歩す、將來の發達や蓋し刮目して俟つべし。

らるゝ額に至りては、逐年激増するの統計を示し、在外邦人の數に比較する時は、消費率の内地に數倍するものあるを示す。蓋し是れ漸次外國人の需要を得るに至れるが故ならんか高梨君の炯眼なる早く此傾向に着目する所あり、益々海外に販路を求めんと努力しつゝあり、而して着々開發の氣運に向ひつゝありといふ。君今や直接國稅約八千圓を納むるを以て縣多額納稅者の第二位に在り。

夫人をうた子と呼ぶ、明治十六年の出生にして、同業者野田町茂木七右衛門氏の令妹なり、長男小一郎、三男賢三郎、四男武四郎の外、二男茂二郎氏は同業者東京市日本橋區小網町三の二九高梨仁三郎氏の養子となれり。

田中新藏君

長野縣多額納稅者 東行合資會社業務執行社員
信濃電氣株式會社取締役 生糸商

△出生地 長野縣
△現住所 長野、上高井、須坂
△生年月 弘化三年八月二十三日

君は長野縣人田中多十郎氏の二男にして、弘化三年八月二十三日を以て生れ、文久二年七月家督を相續す。君も酒造種油製造等に從事せしが、後之を廢し、製糸業に従事し、明治三十八年東行合資會社を創立し、自ら其社長となり、經營につとむ。製糸業者としての君の名聲は、益々加はり現在君の經營する製糸數は、分工場を加して、一千一百七十五の多數に上り、年製出額は二千五百圓を超ゆるに至れりといふ。縣多額納稅者として、現に約二千圓の直接國稅を納め資産百萬に及ぶといふ。

尾崎伊兵衛君

△出生地 靜岡縣 靜岡市
△現住所 靜岡縣 安西、三ノ五八
△生年月 弘化四年八月十五日

靜岡商業會議所會頭 株式會社三十五銀行頭取
靜岡輕便鐵道株式會社社長 株式會社靜岡縣農工
銀行 東陽製茶株式會社 日本耐火製板株式會社
各取締役 株式會社靜岡米穀株式會社 日本樂
器製造株式會社各監査役 合名會社尾崎國產會社
富士合資會社 保德合資會社各代表社員



君は篤實敦厚の君子にして地方實業界の耆宿なり、齊家盡忠の信條の下に多年地方にあつて公私萬般の事業に係はり百鍊不磨の熱血を瀧ぎ百戰百捷の所事功を收め、而も其跡を顧みて一毫非點すべきものなく、其努力實現悉く一世の範となり、此の生々潑々の血脈を子孫に傳へて以て君國の重器となす、蓋し君の如きは眞に國民の本務を體する者と謂ふべし、靜岡の人弘化四年八月十五日現住所に於て生る、父君を尾崎助夫氏と稱し君は其長男なり、幼にして穎悟常に父祖の遺業を辱かしめざらんことを念とし勉勵尤も勵む、明治十五年家督を相續するや自ら閑地にありて活躍せん事を期し、翌十六年家政を現戸主たる長男元次郎氏に譲り、次で合名會社

尾崎國產會社を創立して其代表社員となる、次で富士合資會社保德合資會社等の各代表社員となる、後靜岡縣農工銀行頭取、靜岡電氣株式會社の取締役、株式會社米穀株式會社、日本樂器製造株式會社等の各監査役を兼ね、亦同地方の主要なる物産たる製茶業の爲に大に畫策する所あり、推されて製茶富士合資會社社長となり、中央茶業組合會評議員に擧げられ、靜岡縣茶業聯合會議所會頭、市茶業組合會組長を兼攝す是れより先き君地方政界に於て蔚然たる勢力をなし、本邦自治制を實施せらるゝに及び、當初より市會議員に推され議長となり、爾來數回市參事會員として市の樞機を握ること多年此間市政の爲めに遺績の抹す可らざる者多く、目下尙靜岡商業會議所會頭及三十五銀行頭取として、專念實業界にの無限の精力を傾倒す、趣好極めて單調にして唯嚆々たる一家團練の下に、少量の淺酌に積鬱を散するを以て無上の至樂となす、眞に福徳長者の典型と謂ふ可きなり。

令室をかつ子と呼び此間九人を産む、不幸四人夭折して五人あり、長兄元次郎氏は現代議士なり、次男六郎君目今騎兵隊にあり、長女花子は母堂の實家に嫁ぎ、次女うめ子は江尻町の長坂家に嫁ぐ、末女ゆき子は現に靜岡精華女學校の學窓にあり。

藤井善作君

△出生地 福岡縣
△現住所 福岡、嘉穂、飯塚
△生年月 天保十三年三月十五日

藤井合名會社社長
君は福岡の人、藤井善五郎氏の次男として、天保十三年三

月十五日を以て生る。現今藤井合名會社の社長たり。養子善七君亦同社の代表社員として、其經營に當る。同社の營業は吳服類の販賣にして、同地に於ける唯一の大店舖たり。蓋し福岡は炭礦を以て著名なるのみならず、織物に於て又一頭地を拔く、博多織小倉織久留米絨等あり、炭礦の需要、近時益々多くなりゆを以て、縣下一般に好景氣となり、次第に生活向上せしより吳服類の一日と盛大に赴くは、時運の然らしむる所なりと雖も、亦君が經營の宜しきを得るによらずんばあらず、而して善七氏の之を援くるに全力を傾倒す、家運永しへに榮わん。多幸なりといふべし。

夫人をちか子と呼ぶ。田中氏の長男善七氏を迎へて、養子とし、有吉氏の女まつの子と娶はす。善次、つぎ子、さち子の數孫あり。外に養子あい子あり、同縣の士族石田富次郎氏に嫁せり。

美馬儀一郎君

△出生地 德島縣
△現住所 德島、佐吉
△生年月 慶應三年三月三日

德島縣多額納稅者 株式會社阿波商業銀行頭取
阿波染織業同業組合長 製織業

君は德島縣神原五郎右衛門君の二男にして同五郎三郎氏の令弟なり、慶應三年三月三日を以て生る、少時三木與吉郎氏方に奉公し居たるが、天性伶俐賢明、與吉郎氏の拔擢する所となり、更に同氏の斡旋にて明治十八年先代美馬儀一郎氏の養子となり、明治三十一年三月家督を相續し、舊名龜吉を改めて今の名とす、現に阿波商業銀行頭取たり、其明晰の頭腦

大正人名辭典 (美馬儀一郎) (永田藤兵衛)

統理の才は益々同行をして健實なる發展を遂げしめ、社運益々堅きを加へつゝあり、又阿波染織同業組合長となりて阿波織物業の爲めに多大の盡力を爲し、信望甚だ厚し、曩に貴族院議員に擧げらるゝ、又實業界に貢獻せるの功に依り、勳六等に叙せられ、藍綬章を下賜せらるゝ、榮譽君の如きは蓋し稀なりとす、資産百萬圓以上を算じ、多額納稅者として直接國稅八千數百圓を納む。

永田藤兵衛君

△出生地 奈良縣
△現住所 奈良、吉野、下市
△生年月 明治四年一月十五日

下市町會議員 大和山林會幹事 株式會社吉野銀行頭取 洞川電氣索道株式會社社長 株式會社吉野材木銀行 吉野鐵道株式會社各取締役 林業

君は奈良の人永田藤平氏の長男にして、明治四年一月十五日を以て生る、幼名を泰藏といふ、明治十五年九月家督を相續して、三十四年三月藤兵衛と改名す、山林を經營するの外吉野銀行の頭取、洞川電氣索道、吉野柏木二社の社長として其經營を統べ、又吉野材木銀行、吉野鐵道、大和電氣等の株式會社の取締役たり。而して材木同業組合の議長、大和山林會の幹事として牛耳を占む、君の春秋に富み、精力絶倫なるや、如上數銀行數會社の經營に關與して、綽々として餘裕あり、大正四年大峰山神童子山製板事業を開始し、毎月平均二萬圓以上の製造に従事しつゝあり。而して毎年盛に杉檜の殖林に力めつゝあり、嗚呼君を以て大和事業界の權威といはずんば將た誰をか擧げんや。

林 愛 作 君

株式會社帝國ホテル常務取締役兼支配人

△出生地 群馬縣 群馬縣 群馬縣
△現住所 東京市本坂、新坂、六七
△生年月 電話五〇〇八
明治六年十月十二日



君は群馬縣山田郡下小林村の人にして明治六年十月十二日を以て生る。幼時不幸にも嚴君は或事業に失敗して家産を破りしより、天資非凡なる君は夙に家運を挽回せんご期し、年

甫で十三歳にして東京に出て苦學力行すること多年、而して明治二十五年に至り更に奮起して米國に航し、諸種の勞働に服して以て學資を作り、始めて桑港なるローエル學校に學びて卒業するや、マサチエセット州なるマウントハアモン校に入り文學、經濟社會學等を修めて造詣する所あり、此間復た幾多の實務に服して深く米國の事情に通ずるや即ち明治卅三年を以て合名會社山中商店の紐育支店に入り、直ちに副支配人と爲りて刻苦精勵の結果、大に店務を擧げ敏才の稱を博せり、居ること十年にして、四十二年歐洲各地を漫遊し、更に支那各地を視察し歸朝するや、益田大倉及村井等の諸紳に勸められ、且濶澤男より切なる所望ありて、帝國ホテル經營の事を以てせしも、由來情誼を重んずる君は、山中商會を辭して直ちに諸先輩の勸誘に應ずること能はず、頗る當惑の色ありしが、君を措て他に適材なかりしより、藤田傳三郎及松本重太郎兩氏より直ちに山中商會に交渉して、遂にホテル經營を餘儀なくせしめたるは、寧君の名譽と謂ふべからずや。令室は神奈川縣長濱佐一郎氏の三女にして高子と呼ぶ、家族は克雄、慶二郎、小三郎の數子あり、猶令妹福子、登志子及米子等あり、尙嚴父千代吉氏慈母絲子の健在して、和氣一堂に滿然たるは、眞に悦ぶべきにあらずや。

芝 嘉 久 太 君

德島商業會議所特別議員 株式會社阿波農工銀行 取締役 油販賣業

△出生地 德島縣 德島縣
△現住所 德島、名東、赤津
△生年月 應應二年二月十二日

君は德島縣芝彦三郎氏の長男にして應應二年二月十二日を以て生れ、後家督を相續す、幼より學を好み、俊才の名あり長じて慶應義塾に入り、親しく福澤先生の薰陶を受く、歸來家業に力めて益々其盛大を致し、現に德島商業會議所特別議員に推薦せられ、又阿波農工銀行監査役、德島紙株式會社取締役として其樞機に參じつあり、家産は八十萬圓以上を算じ多額納税者として直接國稅三千五百餘圓を納めつ、あり、君は實に學究的人にして一切邊幅を飾らず、常に書房に在りて書に親む、其讀破する所の多きと其蘊蓄の深きは殆んど測るべからず、然れども公會の席等にありては口を噤みて輕々に意見を吐露せず、君子として重きを成す所以なり。令聞ちる子は德島縣安藝芳郎氏の二女、男彦一、龜吉の兩氏、女あや子あり。

北 村 十 三 君

株式會社東京信用銀行 東三電氣株式會社各取締役 アセチリン瓦斯發生機並カーバイト商 東京 旭商會主 勳六等

△出生地 愛知縣 愛知縣
△現住所 東京、京橋、北橋川岸、一七號、電話、四二五
△生年月 萬延元年九月六日

聞く君がアセチリン瓦斯製造販賣當時は一個年纔に八千ポンド前後に過ぎざりしが、一度亞瓦斯を漁業燈として君の發明して以來需要頓に増加し今年々三千四百萬ポンドの販賣高を計上するに至りて、尙今後の需要測るべからざるものありと、何ぞ其發明の國家的にして而も必需的なるや、吾人は此見地に於て君の貢獻を我工業界及漁業界に多とせざる可らず、君は三河國渥美郡豐岡町の舊藩士北村勘五郎氏の長男として、萬延元年九月六日を以て其郷に生る、幼名を重藏と云ふ、資性活潑機敏にして群童と等しからざるものあり、嚴父は維新變亂の影響を受け逆境に沈淪せしも武士的精神は之が爲め毫も喪はず、嚴峻を以て君を訓育し君亦能く家庭を守りて螢雪の勞苦を積み、長して日本郵船會社に勤務したるは明治十八年の時なりき、爾來内に在りては東京及北海道に往還し、外に在りては支那、濠洲、布哇、西印度及び米國、歐洲等に遠航し、眼界殆んど世界に普く其都度發明するもの尠なからざりき、曾て白耳義に滯留するや機敏なる君は、疾くも亞セチリン瓦斯の有望なるに着眼し、輸入して以て國益に資する所あらんと期せり、幾許ならずして日清戰役の起るやアセチリン瓦斯を軍事に應用し殊功を樹てたるより、論功行賞の際一時賜金並に従軍記章を賜り、又北清事變の起るに會

水 谷 清 三 良 君

合資會社水谷商會代表社員 材木商

△出生地 大阪府 大阪府、横瀬、七ノ六八
△現住所 大阪府、南、二〇三六
△生年月 明治十一年三月九日

君は大阪府水谷清兵衛氏の長男にして明治十一年三月九日を以て生る、前に合名會社水谷商店を設立し、爾來其代表社員として各種材木及板類販賣並金貸附業に従事し、頭腦明晰、經理に長じ商才に秀で業務益々隆昌なり、今日の資産百萬圓を算す、社會の信望最も厚し。

古川與四吉君

△出生地 東京府
△現住所 福岡大工、八七
△生年月 明治三十九年六月
△生年月 明治九年十二月

九州電燈鐵道株式會社技師長 陸軍歩兵少尉 正 八位 勳六等



君は明治九年十二月を以て東京に生る故君古川源太郎氏は鍋島家々令、三十銀行頭取にして君は即ち故君の四男なり、頭腦の明敏なる君は小中學校等の豫備教育を受け優良の成績

を挙げ、志を工學に立て東京帝國大學工科に入り、電氣科を研究し造詣する所深く、篤學の功空しからず所定の年限を経て明治三十五年同科を卒業し工學士の榮稱を擔ひ、直に電氣學會正會員となり、又日本電氣協會々員となり一層其研究を重ね、同年招聘せられて栃木縣宇都宮電燈會社主任技師となり、栃木縣汽機汽罐検査員を兼任し、且つ宇都宮郵便局囑託教師となる、如何に君が材能の有用なるやを證するに足る、偶々明治三十六年一年志願兵役に就き、三十八年陸軍歩兵少尉に任せられて大阪砲兵工廠附を命せらる、爾來電氣工事に従事して功勞太だ多し、三十八年十月に至り兵役を解除され豫備少尉となる、戦役の功に依り正八位勳六等に叙せらる、退役後横須賀電燈會社の創立せらるゝに當るや、君は招かれ

て主任技師となり、専門の智識技倆を發揮して其工事を完全に成功し以て當事者に満足を與へ、四十年八月に至り同社を辭して更に富士水電株式會社の創立に當り、主任技師に聘せられ拮据工事を經營し、其苦心努力は正に効果を現して四十二年の春工事を完成し、四十三年九月九州電氣株式會社創立せらるゝや、同社技師長として之に赴任し、大正二年同社を合併して九州電燈鐵道株式會社の大組織成るや、更に其技師長に任せられ最も會社に重要せられ、恪勤精勵、其職責に盡瘁して顯著の功績を挙げ以て今日に及ぶ、學者として實際家として名聲噴々斯界の重鎮たるのみならず、其人格高潔にして統御の才に長じ、温情能く衆を容れ一般に信頼せられ、社會の尊重を受けて其景仰する所たり、君は多能多趣にして柔道、相撲、ボート、圍碁、玉突等嗜好せざるはなきも、平生の多忙は君をして之に専ならしむるを得ずといふ。
令閨文枝子は小西功氏の長女にして才氣淑德兼備ふ、一女三男あり、家庭清肅にして圓滿なり。

矢野友吉君

△出生地 福岡縣
△現住所 福岡、浮羽、吉井
△生年月 天保十四年六月十五日

矢野合名會社々長 筑後軌道株式會社取締役

君は福岡の人矢野嘉衛門氏の次男にして天保十四年六月十五日を以て生る、明治二十一年八月家督を相續す、現今矢野合名會社の社長として統督の任に當り、又筑後軌道株式會社の取締役として其經營に參與す、地方財界の元老を以て稱せらる。

内田信也君

△出生地 茨城縣
△現住所 兵庫、神戶、中山手通、七
△生年月 明治十三年

内田汽船株式會社々長

歐洲の戦亂に依り海運業に成功せる者少しとせず、然れども是等成功者の中において嶄然頭角を顯はし、赫々たる成功人目を眩せしむるが如き者を内田信也君とす、是れ蓋し經驗智識に富み、頭腦明晰、機を見るに敏に、剛膽にして自信堅きこと君の如き人物にあらずんば能はざる所なり、君は明治十三年茨城縣麻生町に生る、夙に志を實業に立て東京高等商業學校に入り、同校卒業後三井物産船舶部に入り、恪勤勵精、居ること十年の久しきに及び、大正二年七月三井を辭し海運業の經營に着手し、歐洲戦亂勃發後風雲に乗じて一躍巨萬の富を成し、現に内田汽船會社を起して其社長たり、所有船六隻二萬五千噸を算し、資産實に六百萬圓を超ゆ、人格高邁、而かも進取の氣象に富み、教育事業其他公益の爲めには資を投じて惜しむ所なし、君の如きは稀有の一大成功家たると共に傑出せる紳士として敬稱するに足る。

小西萬四郎君

△出生地 愛媛縣
△現住所 愛媛、北宇和、岩松
△生年月 明治十四年三月二十六日

愛媛縣多額納稅者 株式會社御莊銀行取締役

君は山本勘平氏の長男にして幼名を喜平といふ、明治十四年三月二十六日の出生也、明治三十五年十二月先代萬四郎氏の養子となり、同四十二年一月家督を繼ぎ、翌四十三年八月

に至り先代の名を襲ふ、縣多額納稅者として直接國稅三千五百圓を納むるの盛況を示しつゝあり、代々農を業とし君に至りて諸事業に關與する所ありしが、現今は株式會社御莊銀行取締役たり。

夫人をみつ子といふ、明治十八年七月の生誕にして、同縣人二宮作一郎氏の三女なり、萬兵衛、一壽の二子あり、叔母かつ子は安政二年六月の出生を以て、其良人と共に分家せり養母なを子は天保十一年出生の老齡を以て猶孿孿たりといふ

肥塚與八郎君

△出生地 長崎縣
△現住所 長崎、長崎、浦之島
△生年月 弘化二年九月十八日

長崎縣多額納稅者 玉榮合資會社代表社員 酒造業

君は長崎縣人先代肥塚與八郎氏の長男にして弘化二年九月十八日を以て生る、明治三十一年九月家督を繼ぐ、代々酒造を業とし現今縣下第一の酒造業者にして、直接國稅約二千圓を納むるを以て縣多額納稅者たり、君家業の傍ら玉榮合資會社の經營に執筆し、又土地の賃貸及び貸金をも營む、經驗に富み信用厚きを以て其業務益々發展し、愈々成績の顯著なるものあるは吾人の欣羨して已まざる所なりとす、斯の如きは曾に肥塚氏一家の幸福のみにあらざれば也。

夫人をりう子といふ、同縣人川端茂作氏の長女なり、令嗣源次郎氏、亡二男和一郎未亡人まさ子と、亡三男忠次郎未亡人たね子とは共に寡居し、三男慶之助、其夫人きぬね子との間に、亮一、雅二、富子等あり。

大正人名辭典

(上田金兵衛) 田中新七 (仲田傳之助)

一〇七二

上田金兵衛君

和歌山縣多額納稅者 林業

△出生地 和歌山縣
△現住所 和歌山、日高、御坊
△生年月 明治元年十一月十三日

和歌山縣に森林の繁茂せるは天候氣温の自然に適せしが故なりといへ、其保護及び殖林に心をを用ゆること厚からざれば、到底今日の盛況を見難きなるべし、森林が雨量及び洪水に大關係を有するを覺り、極力其涵養に力めたる紀伊侯の卓識は、永く縣民の牢記すべき恩恵なりといふべし、上田君の茲に見るあり、斯業に従ふこと多年、今や縣下有數の地主にして直接國稅二千餘圓を納むる多額納稅者たり、明治元年十一月十三日を以て生る、先代金兵衛氏の長男なり、幼名を安太郎といふ、明治三十五年八月家督を繼ぎ金兵衛と改名す、地方財界の大立物として德望あり、一言一行亦縣下の實業界に波動を生起すといふ。

夫人をろね子と呼ぶ、貞淑の稱あり、基太郎、芳次郎、俊子、節代、倍枝、貞子の數子あり、三男順吉氏は湯森桑太郎の養子となる、一家繁榮を極め和氣洋洋として團樂に樂しむ

田中新七君

合名會社田中商店代表社員 京都電氣鐵道株式會社 南海鐵道株式會社 愛知電氣鐵道株式會社 日本瓦斯株式會社 名古屋電燈株式會社各取締役 生糸商

△出生地 愛知縣
△現住所 神奈川、廣濱、本
△生年月 弘化元年十一月一日

君は神奈川縣人亡田中久兵衛氏の二男にして弘化元年十一

上杉茂憲君

錦鷄間祇候 米澤教育會理事長 正二位 勳三等 伯爵

△出生地 山形縣
△現住所 東京、本郷、元、一ノ七
△生年月 弘化元年二月二十八日



君は不識院上杉謙信の後裔なり、遠祖は大織冠藤原鎌足の孫良門に出づ、良門の後十一世を経て征夷大將軍重房に至り始めて上杉と稱す、夫れより十三世にして憲政あり、其子は

即ち謙信にして前後七年に亘り、武田信玄と川中島に龍驤虎搏の激戦を爲したることは史上著明の戦争にして世に知れる所なり、謙信の義子景勝に至り豊臣秀吉に事へて功あり、會津に封せられしが、關ヶ原の役、石田三成に與したるを以て米澤に移封せられ、後十世を経て齊憲氏に至る、是れ君の嚴君にして從三位に叙せられ、藩高十六萬八千八百餘石を領せり、君は其嫡嗣を以て弘化元年二月二十八日に生まる、乃ち子爵松平忠敬氏の令兄にして子爵吉井信實氏の叔父に當る、幼名を龍千代また喜平次と呼び憲章と稱せり、其茂憲と改めたるは萬延元年元服の際將軍家茂より偏諱を賜ひしによれり此時又侍從兼式部大輔に任じ從四位下に叙せられ、慶應二年正月京師南門警備を命ぜられ功によつて御劍一口を下賜せら

大正人名辭典 (上杉茂憲)

月一日愛知縣葉栗郡に生る、幼にして穎智聰明、長じて益々英敏なり、嘉永七年八月家督を相續す、代々生糸を業とし所得稅數百圓を納むといふ、現今田中商店を經營するの傍、京都電氣鐵道、南海鐵道、愛知電氣鐵道、日本瓦斯、名古屋電燈等の各株式會社に重役たるを以て、同地實業界の重鎮たり夫人をみゑ子と呼ぶ、同縣人鈴木清右衛門氏の長女なり、京都人田中兵七氏の長男國太郎氏を養子とし、子爵六郷政賢氏の令妹賀子を娶る、國和、國雅、照子、三雪子の二男二女は皆國太郎氏の子なり、外に二女政香、養子泰次郎、養女すみゑ子等あり。

仲田傳之助君

株式會社松山貯蓄銀行頭取 合名會社仲田銀行代表社員 株式會社愛媛縣農工銀行 松山紡績株式會社各取締役

△出生地 愛媛縣
△現住所 愛媛、松山、府中
△生年月 明治四年一月三十日

君は愛媛縣人先代仲田傳之助氏の長男にして明治四年一月三十日に生る、代々地方の素封家を以て聞ゆ、明治四十二年十月家督を相續するや、其巨資を擁し同地の金融機關の調節者を以て任す、松山貯蓄銀行、仲田銀行等、君の現に經營に執掌しつゝある所なるのみならず、農工銀行の取締役に於て又松山紡績株式會社の取締役たり、實に同地方財界の代表的人物となすべし。夫人をさこ子といふ、木村幾次郎氏の令妹なり、包寛、包忠、包武、梅代子、佐代子等の數子あり。

る、後天下の形勢愈々非にして遂に倒幕の軍起り、官軍に抗し會津藩主松平容保等と同盟して奮闘し官位を削らる、然れども後更に深く思ふ所ありて王師に降を請ひ、明治元年上書して殘賊を討じ舊罪を償はんとし、奥羽總督の命を奉じ兵を出して庄内を征す、幾干もなく同地方悉く平定して敢てまた叛徒を見ざるに至り、此年再び襲封を許され翌年上表して版籍を奉還し米澤藩知事に任せられ、從四位下式部大輔に復す四年東京府に貫屬し知事を免せられ、五年一月英國に漫遊して大に見聞を廣め翌年歸朝す、九年華族第二部長を命ぜられ第四部長に轉じ、十年宮内省御用掛を兼務し十四年沖繩縣令兼判事に任せり、十五年兼官を免せられ檢事を兼任し、十六年元老院議員に任じ十七年伯爵を授けらる、二十年正四位に叙し二十二年憲法發布記念章を受領し、二十三年勳三等瑞寶章を賜ひ、此年貴族院議員に選出せられ、また錦鷄間祇候を命ぜらる、二十五年從三位に叙し、三十年再び貴族院議員に當選し尋で從二位に叙し、大正六年七月十日正二位に昇叙せらる、君また教育に意を注ぎ、殊に舊藩後進子弟の誘掖指導に努め、現に米澤教育會理事長として貢獻する所頗る大なるを以て、信德愈々旺なり。夫人を兼子と呼び、東京府士族伊藤清久氏の長女なり、三男正五位憲章君は公府應司熙通氏の長女房子を娶り、大正二年十二月從四位に陞叙せらる、二女覺子は男爵池田勝吉氏に嫁し、三女重子は子爵高辻脩長氏二男宜廣氏に、四女琉子は子爵故松平直靜氏の男直幹氏に、五女久子は伯爵龜井茲常氏に六女直子は左右田喜一郎氏に嫁し、五男朝憲、七女大子は家に在り。

一〇七三

藤山 雷太君

△出生地 佐賀縣 白金今里 一四
△現住所 東京 芝 一五四五
△生年月 文久三年八月一日

東京商業會議所會頭 大日本製糖株式會社取締役
社長 朝鮮製糖株式會社社長 株式會社東京株式
取引所理事 東京瓦斯株式會社 堺セルロイド株
式會社 株式會社帝國商業銀行 明治製煉株式會
社 日本火災保險株式會社 東京印刷株式會社各
取締役

藤山雷太君は我國に於ける錚々たる實業家なり、君は士族藤山覺左衛門氏の四男にして、文久三年八月一日を以て生れ、明治二十四年十二月分れて一家を創立す、幼より舊俊豪邁、少壯長崎縣師範學校を卒業して之が教師と爲り、又笈を負ひて東京三田福澤先生の門に遊ぶ、卒業するや幾許ならずして縣會議員に選まれ次で議長に推さる、時に年齢僅かに二十五歳なり、而して同地居留地拂下問題起るや、君選まれて政府と折衝の任に當り、圓滿の解決を告ぐるや、同市より五萬圓を贈り以て其勞に酬ゆ、君は是より奮然志を決して實業界に投せんと欲し再び上京す、恰も財界の奇傑故中上川彦次郎氏が三井銀行に入り、有爲の材を招きて改革に従へる際なりしを以て、君亦中上川氏に識られ直ちに三井銀行抵當係長と爲り忽ち其手腕を發揮して、先輩同僚の識認する所となれり、尋て芝浦製作所長、王子製紙株式會社事務取締役と爲り、之が經營に傾倒し著大の功績を顯はせり、又東京市街鐵道株式會社合同の計畫あるや、君其間に斡旋努力し以て之が成立を告げ、同時に事務取締役に擧げられたりしも、同重役兩宮敬次

細川 利文君

△出生地 京都府 豊多摩 内藤新宿
△現住所 京都府 豊多摩 内藤新宿
△生年月 慶應元年七月廿六日

正四位 子爵

君は伯爵園基祥君の次男にして慶應元年七月二十六日を以て京都舊皇居に生る、其祖は源經基の後裔細川光尙の二男利重に出づ、利重父光尙の所領三萬五千石を分與せられ、高瀬城主となる、夫より九代利永氏に至る、明治二十二年八月細川利永君の養子となる、君學を好み、學習院東京專門學校等に入り専心研學せり、明治三十四年襲爵被仰付、後宮中に奉仕して常宮、周宮兩殿下御用掛たりしが、兩殿下御慶事と共に自然廢官となり、目下閑地に在りて歌を詠み刀劍盆栽等を樂むと云ふ。

夫人を同子といふ、養父利永氏の長女にして琴曲插花等の遊藝に堪能なり、二男あり、長男利壽君は法學士にして、次男護孝君は子爵長岡護美君の死跡を繼ぎたり。

矢澤 小兵衛君

△出生地 東京府 麹町、山元、二ノ三
△現住所 東京府 麹町、山元、二ノ三
△生年月 嘉永二年七月九日

合名會社矢澤銀行頭取

矢澤銀行は地味なる經營振に於て世間に信用を博すと同時に、預金及積立金等に於て確實なるを以て、最近に至り行運俄かに隆盛を來して、同業者中に推重せられつゝあり、而して之が主腦と爲りて經營の衝に當るは、言迄もなく頭取矢澤小兵衛君其人なり、君は矢澤小左衛門氏の長男にして、嘉

大正人名辭典 (細川利文) (矢澤小兵衛) (菊地辨藏)

郎等と賃金區分制の利害得失に關し意見を異にして辭職せり、愆くして明治四十二年夫の日糖會社破綻の悲境に陥らんとす、或、財界の惶惶一と方ならず、進みて之が難局に當り以て會社を整理救済せんとする者あるなし、當時同社の相談役男爵澁澤榮一氏は、世上を物色して這般難關を一蹴して以て根本的整理を能くする者、君を措て他に適任者なしと信じ、愆止まざるに於、君は常務取締役高山長幸、伊澤良立氏等の諸氏を率ゐて入社し、案難殆んど收拾す可からざる會社に向ひ、快刀亂麻を斷つが如く着々として整理を完ふして社運を挽回し、以て今日の隆運を開拓するに至れり、是に於てか君の聲名大に揚り大正六年七月推されて東京商業會議所會頭に就任し、實業界の泰山北斗たるに至れり、君は知命を驗ゆること僅かに五歳前途尙ほ春秋に富む、世人が君の將來に期待するもの亦故あるかな。

家庭は夫人峯子との間に五男二女あり、長女美譽子は内閣書記官下條康廣氏に嫁せり。

渡井 八郎治君

△出生地 靜岡縣 靜岡縣
△現住所 靜岡、富士、今泉
△生年月 天保十年十二月六日

靜岡縣多額納稅者

君は靜岡の人渡井儀平氏の長男にして天保十年十二月六日を以て生れ、元治元年四月家督を相續す、君幼にして聰明英敏を以て聞は、長じて益々俊秀なり、而も君は富貴功名を竟めず榮達を希はず、唯祖先傳來の業に専心するのみ、然れども求めざるに福徳自ら來るは、君が積善の餘慶に非らずや。

永二年七月九日を以て麴町の現住所に生れ、明治二十二年五月家督を相續せり、家は代々質商にして「堺屋」は其家號なり、父祖より其營業は穩健着實を旨として、顧客に對し利便を計るを以て方針と做し來りたるを以て、堺屋の信用は世間の喧傳する所と爲り、業務年と共に振擡するに至れり、而して君の相續するに及び時勢の推移と、金融狀態とに考察する所ありて、累代蓄積せる豊富の資本を以て、矢澤銀行なる合名組織の銀行を創立し今日に迫る、明治三十三年實業を廢し銀行經營に全力を盡す、現今山の手方面に於て行運の隆々たる同業者を枚擧し來れば、矢澤銀行の如き未だ必ずしも二位は下るものに非ず、君の金融的手腕も亦偉ならずや。

令聞さだ子は東京府平民牧原吉兵衛氏の三女にして、男銀次郎、徳次郎、女みや子あり、長男銀次郎氏は東京府平民針ヶ谷長吉氏令妹あか子を娶り、四女兒を儲け、二女みや子は養子喜太郎氏に配し、其子を伴ひて分家せり。

菊地 辨藏君

△出生地 宮城縣 宮城縣
△現住所 宮城、遠田、田尻
△生年月 明治十一年十二月一日

宮城縣多額納稅者

宮城縣の富豪として有名なる者を菊池辨藏君とす、君は先代菊池辨藏氏の長男にして明治十一年十二月一日を以て生れ、前名を龜造と呼び明治四十二年家督を相續し、先代の名を襲ぐ、金貨業を營みて地方金融流通の便を圖り、農業養蠶等に熱心にして其改善發展に努力す、又地方公共事業に最も力を致し、資を投じて惜しむ所なし、社會の信望最も厚し。

志村源太郎君

株式会社日本勸業銀行總裁 東京商業會議所特別議員 從四位 勳三等



△出生地 山梨縣
△現住所 東京小石川、金富、四〇
△生年月 慶應三年三月一日

君は山梨縣志村宇平氏の長男にして慶應三年三月一日を以て生る、幼にして剛毅將に大に爲すあらんとするの素質を有し、郷徒亦た大に囑望するものあり、明治十七年出で、帝國

大學に入るや、君は獨り他を顧みず、孜々として勉學に日も猶ほ足らざるものありき、是を以て明治二十二年七月同校卒業の際は、成績優秀にして首席を占むるの榮譽を膺へり、翌二十三年二月氏が甫めて農商務省參事官として官海の一椅子を占むるや、温厚を以て下僚を督し、熱誠を以て事務を處理せしかば、省内に於ける聲望は頗る高かりき、二十五年後藤伯農相となるに迫んで其秘書官たりしが、其學識豊富にして資性温良事に當りて頗る摯實なるものありしを以て、大に伯の爲めに愛せられ自ら媒介の勞を取り配するに其女婿たる岩崎男の令嬢を以てせり、伯退職後も引續きて農商務省に出仕し、書記官兼特許局審判官となり、更に記録課長を兼ね、二十六年再び參事官に轉じ二十八年法制局參事官を兼任す、此

時に當り我が農商務省は大に支那貿易發展を圖らんとし、先づ君をして其實情を調査せしめんせり、是に於て君は屬官を伴ひ、行きて支那新開地を踏査し大に得る所ありて歸朝し對支貿易の基礎を確立せり、翌三十年工務局長に轉任せり、是より先松方侯の立案に由り、地方農工業者の金融を圓滿ならしめ、斯業の發達進歩を圖らんとし、日本勸業銀行を設立せらるゝや、關西地方に於ける各紡績會社は、競ふて資金の供給を仰がんとするに至りしかば、時の農相井上侯は君の手腕に信する處あり、行きて是を處理すべきことを勸說せしかば、君は三十一年官職を辭し、勸業銀行相談役となり、大阪に下りて各會社を調査し、資金貸付を了して歸りしは人其敏腕に敬服せりといふ、而して同行に於ては創立當初より重役間に軋轢あり、常に暗闘甚しかりしを以て、君は之を傍觀するに忍びず、翌年二月職を辭して橫濱正金銀行の招きに應じ重役検査役となり、海外各支店檢閱の爲め歐米各國を巡遊し勞々銀行事務を調査し、三十四年一月歸朝して本店外國課長となりしが、後三十五年一月再び勸業銀行副總裁に擧げられ更に其後總裁山本達雄氏の大藏大臣たるに及び衆望の期する所遂に總裁に推舉せられ、現に其職に在り。

令聞は直子、北海道渡邊義郎氏の長男精一氏を養子とせり

保坂潤治君

新潟縣多額納稅者 直江津商業銀行頭取

△出生地 新潟縣
△現住所 新潟、中頸城、津市
△生年月 明治八年六月十一日

天時を知りて時き、地利を諳んじて耕す小農夫が、一粒千

辛を籠め、半穗萬苦を経る收穫物の、大地主たる君が庭前に堆積せらるゝ時、げに稔豊にして民聲謳歌し、國富み人鼓腹歡呼するの快を感じざらんや、聞く四境一望千里殆ど君が所領地にして菜花滿ち稻穂溢るといふ、人爵に眩惑して醜態たる生活を爲す、都人士の到底解すべからざる境致なり、君は明治八年六月十一日を以て生れ、保坂保吉氏の長男なり、明治二十七年五月家督を繼ぎ、此尤大なる土地の所有者となる、而して其財力と信用とを擧げて直江津商業銀行の頭取として經營に當り、一族たる保坂正治氏をして參與せしむ、同地金融界唯一の機關たり、現今直接國稅二萬數千圓を納むるを以て、縣多額納稅者の首位に在り、曾て縣多額納稅者の互選により貴族院議員たりき、又明治三十四年早稻田大學より其名譽校友に推薦せらる、徳望の遍き此一事に徴して窺知すべき也。

展の一方あるのみ、資産は六十萬圓以上を算し所得稅二千圓を納む、養子重二氏は養子きんに配し、孫吉右衛門氏あり家庭圓滿なり。

伊藤忠三君

伊藤忠合名會社業務執行社員 山陽紡績株式會社 共保生命保險株式會社各取締役 株式會社近江銀行 行監査役

△出生地 滋賀縣
△現住所 滋賀、犬上、豐郷
△生年月 明治四年一月十五日

君は滋賀の人山本富藏氏の令弟にして明治四年一月十五日を以て縣下神崎郡八幡村神郷に生れ、明治二十七年三月先代伊藤忠兵衛氏の養子となり、其二女こう子の入夫となる、明治三十七年二月、分家して一家を成す、吳服太物を業とし、綿絲、綿布、羅紗、雜貨、織物商を兼ね、現今東京、大阪、神戸及び京城、上海、漢口、馬尼刺等の各地に支店を有し、盛に活躍しつゝあり、信用あり、資産あり、手腕あり、教養ある紳士として、少壯實業家として名を噴々たり、現今餘業を以て山陽紡績株式會社、共保生命保險株式會社、株式會社近江銀行等の重役として、其樞機に與る、行くとして可ならざるなき君が才腕は、隨所に發揮せられて真に前途の洋々たるを思はしむ。

夫人こう子は京都第一高等女學校出身の才媛にして、前掲養父忠兵衛氏の二女なり、長男謙三氏は目下滋賀縣立膳所中學校に通學中にして、長女須磨子は既に大阪相愛高等女學校を了へ家庭に在つて自習中なりといふ。

夫人をつま子といふ、市島徳次郎氏の三女なり、富之輔、徳之輔、郷三郎、富貴子、貴美子等の數子あり。

喜多吉兵衛君

材木商 前田屋主

△出生地 千葉縣
△現住所 東京、深川、數矢、二
△生年月 明治三年十二月二日

喜多吉兵衛君は千葉縣石井太郎兵衛氏の二男にして明治三年十二月二日を以て生れ、前名を鐵太郎と謂ひ明治二十八年四月先代喜多みわ子の入夫となり、同二十九年二月家督を相續し今の名に改む、屋號を前田屋と稱し其名遠近に高く材木商を營む、君着實にして商才に富み業務に熱心にして家運發

(中井新右門) 矢吹友右衛門(原田勝右衛門)

中井新右門君

△出生地 東京府
△現住所 東京、麹町、一番町、五五
△生年月 電話二八〇二一八七
元治元年十二月十五日

東京府多額納稅者 合名會社中井銀行代表社員
勳四等

舊幕以來の名家として其聲名を江湖に馳するもの其數少なからずとせす、而かも中井家の如く株守牢強、歲月と共に光彩を發するものは世實に尠なし、君は中井家の總家長にして元治元年十二月十五日を以て東京日本橋區金吹町の本邸に生る、先代新右門氏の長男たり、祖先より以來各藩主御用達新川酒大問屋を經營し、今に至る迄數代連綿、代を替へ世を経るに從て繁榮を加へ、其確實歳と與に加はる、君は如斯舊家名門に生育したるを以て或は其生活の自由より一片輕浮の亞流に墜る可き機會を作ること多々たるに拘らず、人格の先天的優秀なる資質は、斷じて如斯惡風潮に浸染せず致々として家産を擁護し、家聲を失墜せざるに是れ苦心す、即ち明治十六年、同家一門を蒐めて中井銀行を設立し以て之が經營の任に當り、後ち三十年七月合名會社組織と爲し、資本金を一百萬圓に更め、益々向上的計畫を企圖せり、君が三十餘年間の着實敏捷なる經營狀態は、獨り斯界に於ける牛耳を採るに至りしのみならず、又實に廣く社會に向つて中井銀行の牢強不拔なるを認識せしめたり、其の誠實なる努力勵精眞に敬服に値ひす、三十七八年戰役に際し財界に寄與するの功を以て勳五等に叙せらる、又異數といふ可し、君は中井家家長、中井銀行頭取として聲名を馳するのみならず、又實に都下多額納稅者中の上位を占む、是亦以て君が一身の榮譽たると同時に

中井家の甚大なる聲譽たり。
夫人かね子との間に喜三郎、銓次郎、貞三、幸子、鏡子の二男三女あり、懇睦和親、模範的家庭なりといふ。

矢吹友右衛門君

△出生地 福島縣
△現住所 福島、信夫、島川
△生年月 明治九年十月十二日

福島縣多額納稅者

福島縣下唯一の大地主たる矢吹友右衛門氏は、矢吹友藏氏の長男にして明治九年十月十二日を以て生る、幼名を友吉といふ、三十三年九月家督を相續して友右衛門と改名す、縣下屈指の資産家にして、土地のみを以てしても五十萬圓の價格を有し、動産を加ふれば百萬に近からんといふ、方今直接國稅三千數百圓を納むるを以て縣多額納稅者の首位に在り

原田勝右衛門君

△出生地 神奈川縣
△現住所 神奈川、中平塚
△生年月 安政元年九月二十二日

株式會社平塚銀行頭取

町長たる事前後四回に及び、又曾て縣會議員たりし事ありたる平塚町の徳望家原田勝右衛門君は、實に神奈川縣人原田申之君の長男にして、安政元年九月二十二日を以て生れ、明治十四年六月家督を繼ぐ、君平塚銀行の創立に關與し、爾來今日に及ぶ迄其專務取締役頭取の重職に在り、其他中郡會議員、所得稅相續稅各調査委員等の任に當り、地方自治の爲めに貢獻せし所枚舉に遑あらず。

成瀬正恭君

△出生地 香川縣
△現住所 東京、芝、白金三光、四七
△生年月 明治元年六月七日

株式會社丁西銀行頭取 株式會社十五銀行取締役
副頭取 千代田火災保險株式會社取締役 帝國會
庫株式會社監査役

學術の素要なくして漫然其職に居り、専門の修養なくして徒らに要路に立つ、縦し幸ひに事無きを待たりとするも、斯の如きは甚だ危險なるものと謂はざる可らず、況んや銀行界の如き直接國家の金融界に接觸すると同時に、國運の進歩と密切の關係ある業務に於てをや、専門の學理に精通して更に大勢を洞破し、而して緩急其宜しきを得るに非んば、焉んぞ能く行務を振興して財界の鞏固を期待し得べけんや、此意味に於て吾人は成瀬正恭君の我銀行界に在りて、其手腕を業務に推揮しつゝあるを多とせざる可らず、然り成瀬君は經濟の學理に精通して常に大勢を洞破し、曾て違ふことなき識見家なり、丁西銀行の彼が如く隆盛にして十五銀行の年と共に財界に雄飛するもの洵に故なきに非ず、君は香川縣人にして成瀬岩太郎氏の三男なり、明治元年六月七日を以て郷里に生れ年甫めて十五歳にして慶應義塾に學び益々多年、優良の成績を以て卒業するや、明治十九年を以て米國に渡航し、市俄古府のブライアント、アンド、ストラットン商業學校に入り經濟學を修め、其翌年卒業するや更に紐育府のホルネル大學法學部に入り研鑽怠らず、二十二年を以て業を卒へバチエラーオブ、ローの稱號を受け進で大學院に入り、二十三年マスタア、オブ、ローの學位を得て歸朝せり、恁て其翌年横濱正金

銀行に入り後日本貿易銀行に聘せられて支配人に就席し、三十一年更に十五銀行に轉じて支配人と爲り幾許なくして副頭取に擧げられ、専ら同行の經營に任じ傍ら帝國會庫株式會社の監査役として敏腕を揮ひ、尋で丁西銀行の頭取に擧げられ又千代田火災保險株式會社の取締役に上任せり、人と爲り謙遜にして厚誼を重んじ、而も學植深淵なるも曾て自から街ふことなく、而も其事を處するや周到にして曾て違算なきを以て、行務着々として擧り、關繫會社の功果若かりに好成绩を見しつゝあるは敢て絮説を俟たざる也、君の如きは洵に財界の巨星にして兼て事業界の偉材として敬せざる可らず。
夫人を孝子と喚び正一、正二、俊介、岩雄、龍子、清子等の數子あり、孰れも秀才穎智を以て世間より美望されつゝありと云ふ。

淺野治郎兵衛君

△出生地 大阪府
△現住所 大阪、南、北炭屋、一六九
△生年月 明治六年六月十三日

資産家

淺野治郎兵衛君は大坂府下の一大素封家なり、君は先代淺野治助氏の長男にして、明治六年六月十三日を以て生れ、同三十四年十一月家督を相續す、其人温厚篤實にして眞に素封家の主人たるに耻ぢず、資産は不動産、有價證券等を併せて百萬圓を算じ、前途の増進測るべからず、直接國稅約五千圓を納む、社會の信望最も厚し。
家族としては母堂くら子、令閨ゑつ子、令息檜治郎氏、令嬢檜枝子あり、一家圓滿にして清福に富む。

國澤新兵衛君

南滿洲鐵道株式會社理事長 正四位 勳二等 工學博士



朝鮮鐵道と南滿鐵道とは其成立の年所を異にし其性質組織亦自から同じからざるが故に、由來相互獨立して鮮滿交通機關たりしが、鴨綠江鐵橋の竣工と安奉線改築工事の落成とは鮮滿兩鐵道を聯絡して歐亞大陸の交通路たらしむると同時に其業務を統一するの必要を認むるに至れり、於是乎朝鮮鐵道の經營を南滿洲鐵道株式會社に委託し、車輪の構造鐵路の建設運輸の方法等を歸一ならしめ、經濟上最も不利益なる弊因を除去し、運輸交通の機能を敏活ならしめんとは、首相としての寺内伯の宿論なりき、乃ち大正六年七月卅一日滿鮮統一に關する諸法令を發布し、其結果として滿鐵の總裁及副總裁を廢し新任理事長を置き、以て前副總裁たる君をして理事長たらしむ、君たる者豈榮光ならずとせんや、君は高知縣人にして山内侯の藩士たる國澤四郎右衛門氏の三男なり、元治元年十一月二十三日を以て生る、幼にして敏慧一を聞て十を知るの聰明あり、常に曰ふ、我生れて男兒たり豈碌々として

醉生夢死すべけんや、而も名を當世に成さんとす、焉んぞ海南の一小土に安んずべけんやと、長じて小中學及高等中學を経て東京帝國大學に入り、二十二年同大學工科大學を卒業して工學士と爲り、直ちに九州鐵道株式會社に聘せられ入りて其手腕を揮ふ、二十五年七月更に帝國鐵道廳に職を轉じ、更に翌二十六年十一月逡信省鐵道技師に任ぜらる、三十五年二月逡信省技師に轉任更に鐵道技師を兼ね、三十九年十一月南滿洲鐵道株式會社理事と爲り、尋で同社副總裁に擧げられ、大正二年十二月滿期退職せしが、後任野村、伊藤正副總裁の故を以て退任するに當り、君復た中村總裁の下に副總裁と爲れり、大正四年二月九日工學博士と爲り尋で大正六年七月に至り、前記正副總裁の廢止と同時に理事長として現に其職に在り、人と爲り個體にして果斷決行に富み、且襟度磊塊にして人を容れ最も統御の術に長ず、是れ此榮任を帯びる所以なる歟、而も君を理事長として滿鮮交通の統一を善謀せんとするに其人を得たりと謂つべし。
夫人清子との間に新太郎、滿次郎、陸郎、富美子、貴美子の三男二女を擧げ、圓滿なる家庭の内に和樂しつゝあり。

菅野傳右衛門君

株式會社高岡貯金銀行 株式會社高岡銀行各頭取
高岡電燈株式會社社長 高岡紡績合名會社代表社員
中越運輸株式會社 北陸土木株式會社 高岡打綿株式會社各取締役 肥料セメント商

君は先代傳右衛門氏の長男にして明治十三年十二月二十八日を以て生れ、前名を傳十郎と呼び同三十三年十月家督を相續し同時に先代の名を繼ぐ、識見卓絶、才幹秀拔、經路經理に長じ、至誠衆の推服する所となる、其關係する所の事業頗る多く、前記銀行の頭取會社の社長若くは代表者として益々社運を隆盛ならしめつゝあり、君の如き超凡の人傑にあらずんば安んぞ斯くの如くなるを得んや、君は又中越運輸、北陸土木、高岡打綿等諸會社の取締役に擧げられて重きを成し、自家の肥料セメント業亦愈々發展しつゝあり、資産は九十萬圓を超ゆ、亦盛んなるといふべし。

山本源兵衛君

夜具商 大源店主

君は大阪の人山本吉兵衛氏の二男にして嘉永六年十一月十五日を以て生れ、明治五年五月先代亡利助氏の養子となり家督を繼ぐ、屋號を大源と號し夜具類の販賣を業とし、現今直接國稅約八百圓を納むるの盛況に在り、資産五十萬圓を超へ信用厚く且つ取引の廣大なる實に驚くべきものありといふ。

野尻精一君

奈良女子高等師範學校長 從四位 勳三等

君は姫路藩士野尻直氏の嫡男を以て萬延元年三月十三日に

大正人名辭典 (山本源兵衛) (野尻精一)

生まる、業くより嚴格なる家庭に鞠育せられ、七歳にして藩營に入り漢學英學を修め、明治五年磨飾縣小學校掛を拜命し十四歳の少年を以てして百數十名の生徒を教授す、翌年小學校教員となり、八年に磨飾縣教員傳習所に入り小學校師範科を卒業し、准十一等訓導に任ぜらる、九年職を辭し笈を負うて東京に出で、私立共憤義塾に英學を修め、尋いで東京師範學校に入學し、十五年中學師範學科を卒業し、直に文部省御用掛となり、爾後諸職を歴任せしが、十九年職を辭し、師範學科取調の爲め獨逸國へ留學を命ぜられ、普國官立のイテュルレ師範學校に師範各科を研鑽し、翌年柏林大學に轉じ哲學教育學科を修學し、廿一年ライプチヒス大學に入つて更に同上學科を究め造詣する處深く、廿二年六月歸朝す、次いで高等師範學校教諭に任ぜられ、又、文科大學に於て教育學講義を託せられ、幾何もなく教授に進み、廿五年東京府尋常師範學校長に轉じ、三十年從六位に陞り、此年十二月文部省視學官に任じ卅一年高等教育會議員を兼ね、三十二年六月普通學務局第一課長を命ぜられ、文部省視學官兼圖書課圖書審查官たり、後普通學務局長事務取扱を命ぜられ、更に奈良女子高等師範學校長に任ぜられ、現に其職に在つて從四位勳三等たり君容姿端麗にして風采閑雅、頗る崔微の美あり、居常客に接するに從容として迫らず、苟も大言壯語せず、よく人を容るゝ雅量に富めり。
夫人なか子は渥美透氏の長女なり、亡弟山形氏の遺兒雄梅子、繁子を鞠育しつゝあり、令姉たみ子は兵庫縣人町田猛郎君に婚嫁せり。

桂 恕 佑 君

△出生地 新潟縣
△現住所 新潟、中浦原、新津
△生年月 明治八年一月七日

大地主

世間も知るが如く新津は石油噴出の礦地として天下に有名なるのみならず、其産額の巨大なることを柏崎方面に比較し、毫も遜色あるなし、況や新津は岩越線の交叉點にして而も近き將來に於て敷設を了せんと羽越沿岸線も亦、此交叉に集合するをや、新津の將來は其發達殷賑を來す程度に於て、殆んど測知すべからざる好運命を有する寶帑と謂はざる可らず、誰乎寶帑の鍵鑰を握りて町民否寧ろ中浦原郡に向て號令しつゝある乎、問ずして桂恕佑君其人なるを知るべし、君は其名の自詮する如く寛厚にして人を待つに仁恕を以てし而して自から居るに天佑あり、資産の月と共に増殖して富力の年と共に倍加するものあるは洵に故なきにあらず、嗚呼君の如きは眞に天佑地福を雙肩に擔ふ巨豪と謂ふべし、嚴父を桂譽恩氏と言ひ君は其次男として明治八年一月七日を以て生れ、而して同三十七年十二月を以て家督を相續す、世々資産家として有名なり、特に父祖より仁慈を施して町民に接觸せるより、抜く可らざる徳望は君の家礎と成り、今や直接國稅一萬餘圓を納め優然として縣下の富界に居り、不動産のみにて一百餘萬圓と注せらる、以て其富の大なるを知るべし。
夫人もせ子は同縣人高澤爲五郎氏の長女にして貞淑を以て知らるゝのみならず、慈善家として近郷の敬慕する所たり、今や長男譽達、サト子の愛兒を鞠育し、尙亡兄の令閨幾子、叔母とい子(亡祖父愼吾氏の五女)等あり、而して令弟宗佑氏

は内政カチ子及其子を伴ひて分家し、同恕憲氏及其内政キミ子も亦分家して獨立し、家門の榮ふるは是れ亦郷人の欽稱する所なり。

長谷川 越 夫 君

△出生地 新潟縣
△現住所 東京牛込、東五軒、四八
△生年月 明治十九年十月

貴族院書記官

長谷川越夫君は新潟縣三島郡塚山村の人なり、明治十九年十月を以て生れ幼より俊敏、郷校を終へて後第一高等學校に入りて同校を卒業し、大正二年六月成績優秀にて東京帝國大學政治科を卒業し、同年文官高等試験に合格し、目下貴族院書記官として同院事務局に奉職す、其人品性高尚、頭腦明晰、學殖豊富にして手腕あり、而かも謹厚にして恪勤勵精す、實に有爲の材器たり、將來の大成期待すべきのみ。

名 島 嘉 吉 郎 君

△出生地 鳥取縣
△現住所 鳥取、西伯、米子
△生年月 明治十年七月十三日

鳥取縣多額納稅者 砂糖商

鳥取の豪家名島家の當主名島嘉吉郎氏は幾名を庄三郎といひ、明治十年七月十三日の出生にして同四十二年六月家督を繼ぎ、八月嘉吉郎と改名す、代々砂糖を業とし現今直接國稅五千圓以上を納むるの盛況に在りて、縣多額納稅者の首位にありといふ、君未だ不惑に達せず而も巨萬の富を擁して縣實業界の爲めに盡瘁す。

今 淵 恒 壽 君

△出生地 青森縣
△現住所 福岡、福岡、春吉、袋
△生年月 明治五年十月十四日

九州帝國大學醫科大學教授 正五位 醫學博士

君は舊南部藩士にして明治五年十月十四日を以て青森縣三戸郡八戸町宇島谷部に生る、賦性溫良にして學を好み夙に秀才を以て頭角を露はす、郷里に於て小中學校を卒業し後上京して第一高等學校に入學したるは同二十五年七月なり、勉勵意らず學術優良を以て二十九年七月卒業するや、直ちに東京帝國大學醫科大學に入り三十三年十一月を以て其業を畢るや、越て其三十五年九月十一日を以て千葉縣醫學專門學校の教授を拜命し、同十月一日縣立千葉病院院長と爲る、三十九年十一月十三日千葉病院を辭職して金百五十圓を賞與せられ、此月轉じて福岡縣醫科大學の講師と爲る、明治四十一年一月二十五日婦人科及産科科學研究の爲め滿二ヶ年獨逸へ留學を命ぜられ、且留學中は年俸四百圓を賜はる、期滿ちて四十三年四月二十六日歸朝し、翌五月二十六日京都大學福岡醫科大學教授と爲り、講座及職務俸級等は故の如し、幾許ならずして京都帝大福岡大學は九州大學と改稱せらるゝに至るも、君依然其職に在り而して此年七月二十四日調査の官命を帯びて朝鮮京城に出張せり、愼て明治四十五年三月十八日大學總長の推薦を以て醫學博士の學位を授けられ、今や位階は正五位高等官二等に昇進し、名聲を我が杏林界に驚せつゝあり、惟ふに君の學術に精通して更に其専門に深達なるは、敢て叙説するの要なく夙に世間の周知する所なり、但其人と爲りや寛厚篤實にして恭謙己を持するのみならず、學術を以て曾て驕色

平 野 溫 之 助 君

△出生地 秋田縣
△現住所 秋田、秋田、本町、四ノ二
△生年月 明治廿一年十二月十五日

秋田縣多額納稅者 農業

其人資産に富むと雖も而かも私利あるを知つて公利あるを知らざる者比々として然り、君は全く是等の徒輩と異り地方の富豪を以て知らるゝも毫も之に誇らず、専ら公益の爲めに其力を盡くし、社會の信敬する所となり、明治二十一年十二月十五日を以て生る、平野三郎兵衛氏の長男なり、大正二年八月家督を相續す、夙に社會事業に志し農事の改良を獎勵し又郷土の改良を圖る爲め、名士を聘して講話會を開催し、以て人智の開發に努め、或は學資を給して人材を養成する等、大小の美事善行舉げて數ふべからず、又曩には國粹館を建設して柔道稽古の便に備へ士氣の鼓吹を圖り現に同館長たり、實に君の如き富豪中稀に見るの特志者にして敬稱すべき紳士素封家の模範たり、資産は不動産貸金等を併せて七十萬圓を超ゆ、家族としては嚴父三郎兵衛氏、母堂えい子、令閨わゑ子、男光雄氏、同光次氏あり、家庭圓滿なり。

原口要君

△出生地 長崎縣
△現住所 東京芝公園五號地
△生年月 嘉永五年一月九日
東海紙料株式會社取締役 從四位 勳一等 工學博士



多年鐵道事業に一身を委ね、鞠躬盡瘁する所に功績を擧げ斯界に於ける重鎮として目せられ、最近製紙界の要地において聲名噴たる者を原口博士要君とす。君は長崎縣の出身にして、嘉永五年一月九日を以て生れ、後叔父君に當たれる舊肥前國島原藩士原口謙介氏の養嗣子となり其家を嗣ぐ、初め長崎に遊びて英語を修め、明治三年笈を負うて東都に上り、安井息軒、川田甕江兩先生の門に入りて學ぶ、學術優秀なるを以て、藩の貢進生に擧げられ大學南校に入り、尋いで開成學校に學びて工學を修め、同八年海外留學を命せられて米國に渡り、レンセレル工學校に雪の功を積み、三星霜にして全科を卒へ土木工學士の稱號を受け、其後彼地に滞留して研鑽に耽り、同十二年紐育デラウエール橋梁會社に聘せられ主として橋梁の事に當り遂に一の鐵橋架設工事を發明して其名大に揚がり、頗る米人の賞讃を博せり、ペンシルバニア州の鐵道會社は君の技倆を認了し、君を聘して其卓越せる手腕

一〇八四
を揮はしめたり、然れども君意を歸朝に決し、十三年歐洲各地を巡覽して歸り直ちに東京府に聘せられ、同年十一月東京府技師長に擧げられ、且つ官設鐵道工部技師長を兼ね、而して其後東京市區改正の設計、高橋、吾妻橋等の架設を始めとして北陸鐵道、日本鐵道、東海道線、甲武線等の工事の設計及監督は一として君に埃たざるは無く、君は實に大工事に對する邦人技師の設計の嚆矢なり、かくて二十一年に工學博士の學位を授けられ、二十六年鐵道技師に任じ、専ら奥羽、中央山陰諸線の設計に關する業務及び營業線一般の工務を監督することとなり、日清戰役に際しては大本營附を命せられて、臨時鐵道隊を編成し作業者全部の指揮監督の任務に當れり、同三十年職を辭して臺灣鐵道の顧問となり、次いで大阪鐵道の顧問となり、三十八年更に逓信省鐵道顧問に任せらる、君また清國政府の鐵道顧問となり、彼國交通機關の創設に大に力を盡し、後帝國鐵道院顧問、帝國鐵道會理事となり、東亞鐵道研究會理事の職を帯びて、鐵道業界に貢獻する所あり、最近に於ては東海紙料株式會社に取締役として之れが經營の任に膺たり、熱心其の發展を劃しつゝあり、工業界の傑傑と稱すべし。
夫人をはる子と呼び、五男三女あり。

高田久右衛門君

△出生地 大阪府
△現住所 大阪東區道修、二ノ一五
△生年月 明治九年十一月二日
唐紅花商

君は大阪の人高田久太郎氏の長男にして明治九年十一月二日を以て大阪に生る、幼名を久三郎といふ、明治二十五年四

月亡祖父久右衛門氏の後を享けて家督を相續し、久右衛門と改む代々唐紅花商を以て著名なる老舗にして、方今直接國稅二千數百圓を納むる盛況に在り。
夫人をます子といふ、豪商伊藤萬助氏の令妹なり、長男久三郎、二男祐、三男衛等の數子あり。

曾我祐準君

△出生地 福岡縣
△現住所 東京神田、駿河臺、鈴木
△生年月 天保十四年十二月廿五日

樞密顧問官 陸軍中將 正二位 勳一等 子爵
海軍の先輩として又陸軍兵制の改革者として日本鐵道の功勞者として偉名一世に高き曾我子は柳河藩士族なり、君は祐興氏の二男にして天保十四年を以て生れ別に分家して一家を創む、明治元年海軍御用掛となり、海軍參謀として蝦夷地に轉任し勳功を樹て三年兵部大丞に任せられ、陸軍大佐、大阪鎮臺大貳心得、陸軍兵學校頭等を歴、六年二月陸軍少將に進み教導團長となり、七年十月士官學校長に任せられ、更に陸軍參謀局御用掛となる、十年西南の役起るや征討第四旅團司令長官兼別働第五旅團司令長官として舊薩線の各地に轉戦し殊勳を樹て勳二等に叙せらる、十五年二月參謀本部次長、熊本大阪鎮臺司令官、監軍部長となり陸軍中將に進み、仙臺鎮臺司令長官に補せられ、爾後再び參謀本部次長に補せらる、明宮御養育主任、東宮大夫に歷任し、宮中顧問官となり、維新以來の勳功に依つて特に華族に列せられ子爵を授けらる、二十四年十二月貴族院議員となり、爾來議席を上院に有して終始侃諤の論議を主張し高節一代の範たりき、大正四年樞密

院顧問官に任せられ現に其任にあり。

夫人是子は男爵華園眞淳氏の伯母に當り、長男祐祐氏は從四位勳四等豫備陸軍大尉にして、夫人を冕子と呼び、祐文、準和、準定、清子、盛子、友子等あり。

大鐘あぐり子君

△出生地 東京府
△現住所 東京日本橋區、一ノ九
△生年月 明治十二年十二月

大鐘あぐり子は先代善藏氏の長女にして明治十二年十二月を以て生れ、明治四十三年八月家督を相續す、屋號を勝田屋と稱し傘商を業とす、君婦人の身なれども家政を統整し、家業を經營するの才幹は男子も之に及ぶ能はず、業務益々發展し取引盛大、家運益々隆々たり、資産は八十萬圓を超へ、日本橋の富家を以て知らる。

木下盛三郎君

△出生地 鳥取縣
△現住所 鳥取、日野、阿良津
△生年月 明治九年三月一日

鳥取縣の一大富家を以て有名なるを木下盛三郎君とす、君は先代木下彦四郎氏の長男にして明治九年一月を以て生れ同三十七年十二月家督を相續す、最も鑛業の智識經驗に富み其經營する所成功せざるはなく、亦金錢貸附を業として地方金融の便を圖る、資産日に増加し今日は百萬圓を超ゆ、信望太だ多し、母堂作子、令閨せん子、男太郎氏、女無荷子、同美喜子、同奈津子あり、家庭圓滿にして洋々たり。

西脇濟三郎君

△出生地 新潟縣
△現住所 東京小石川、開口、一
△現住所 電話二〇四〇
△生年月 明治十三年二月二十三日

新潟縣多額納稅者 株式會社西脇銀行 株式會社
小千谷銀行各頭取 太陽生命保險株式會社 銀山
拓殖株式會社社長 株式會社新潟農工銀行取締役
役 北越水力電氣株式會社監査役

君は新潟の素封家、西脇國三郎氏の長男にして明治十三年十二月二十三日を以て郷里小千谷町に生る、西脇家は世々縣下屈指の大地主にして徳望高く、君の家によりて生計を立つる者甚だ多しといふ、明治廿九年三月嚴君永眠せしを以て家督を繼げり、夙に上京し學習院に入學せしが感ずる所ありて中途退學し、三十六年英國に留學し、ケンブリッヂ大學に入り在學すること五年、苦學勉勵大に得る所あり、四十一年業を卒へて歸朝す、而して先代以來の關係ある新潟農工銀行、小千谷銀行等の取締役となり其經營に參畫せり、外に四十一年縣下の有志と計り北越水力株式會社を起し其監査役となり後又西脇銀行を創設して自ら取締役社長となる、四十四年太陽生命保險株式會社の社長となり、現に其職に在りて熱心經營中なり、君の敏腕は着々社運の發展に向ひつゝあり、資産五百萬圓以上を算す、君に逸すべからざるは能く後進を誘導して社會に立たしむるに在り、現に各學校在學中の青年のうち有爲の士を選び之に資を給し、安じて攻學の目的を遂げしむ、君の庇護により其業を了へ進んで社會に出で成功せる者少からず。
母堂年子、令閨を壽子と呼ぶ、男孝三郎氏あり。

井上勝純君

△出生地 東京府
△現住所 東京、赤坂、榎坂、一
△現住所 電話、一五五
△生年月 明治十七年七月一日

海軍大尉 正五位 子爵

當家の先代井上勝氏は舊山口藩士にして明治元年以來職を官界に奉じ、特に鐵道事業の經營に參畫し、斯界の先達として有名なり、明治二十二年華族に列し子爵を授けらる、明治四十三年鐵道視察の爲め歐米巡視の途に上り、偶々病を得て倫敦に薨す、君は即ち此勝氏の養嗣子にして明治十七年七月一日東京に生る、伯爵松浦厚氏の令弟たり、勝氏薨去せしより同四十三年襲爵仰付られ正五位に叙せられ、現今海軍大尉の任に在り、頭腦明晰、才幹秀拔、斯界有爲の材器を以て目せらる、井上家好繼承者なりと謂ふべきなり。
令閨千八重子、令女正子あり、養姉うめ子は男爵森村市左衛門氏長男開作氏に、養妹辰子は侯爵松方正義氏九男義輔氏に嫁せり。

酒井宗太郎君

△出生地 東京府
△現住所 東京、北豊島、南千住、千
△現住所 住、南三、五
△生年月 明治十二年五月十四日

南千住郵便局長

君は東京府先代酒井宗太郎氏の長男にして、明治十二年五月四日を以て生る、幼名を庄太郎と謂ひ同十七年十一月家督を相續し、且先代の名を襲ぐ、質商を業とし懇切鄭重特に下級者の金融を疏通するを以て任となし、業務益々隆昌、家運繁盛にして今や資産二百萬以上を擁し、而して君は斯業の外南千住郵便局長として其職務に鞅掌しつゝあり。

白岩龍平君

△出生地 岡山縣
△現住所 東京、豊平河、五ノ八
△現住所 電話、四六四四
△生年月 明治三年七月九日

日清汽船株式會社專務取締役 東亞興業株式會社
取締役



君は對支實業界の先覺者にして成功者なり、明治三年七月九日を以て作州英田郡讚甘村に生る、白岩折衛氏の三男なり、同四十年二月令兄式古武氏の家より分れて一家を創立す、始

め播州三日月藩儒岸光輝氏の門に遊び學を修む、明治二十三年荒尾精氏の日清貿易研究所生徒となりて渡清し、二十六年業を卒る、二十七年日清國交斷絶干戈を動かすに際し、君徴されて通譯官となり、平和克復の後再び清國に遊び親交ある清人と資を合せ力を結び、上海蘇州杭州間の航海業を開始し地方官憲の迫害と北京政府の抗争と戦ひ遂に所志を貫徹す、是を大東汽船會社となす、明治三十二年清國內地の水路中漢口より湖南省の首府長沙より湘潭に至る、洞庭湖航路の最も有望なるを察し、死地に入入して之を探查し、明治三十六年湖南汽船會社を創設す、而して當時支那内地の航海業に従ふもの、大東湖南の兩會社の外、日本郵船會社、大阪商船會社の航路あり、君是等の統一を謀り、百方其利害を説き、明治四

十年遂に四社を合同し、日清汽船會社を創設するに至り、君推されて專務取締役に任ぜらる、同年日清起業調査會を起し、四十二年之を擴張して東亞興業株式會社を創立し、現に其取締役として事業の發展に力を致しつゝあり、君亦同志と謀り近衛公等と共に東亞同文會を創立し、爾來多年幹事として會の施設を翼賛し、明治三十四年實業團員となり、近藤廉平氏等と共に支那各地の觀光を爲す等日支國際社交及教育等に盡瘁する所少からず。
夫人艶子、西穀一氏の次女貞淑にして内助の功あり、佐々木信綱氏の門に入り歌學を修め、歌集「采風」及「白楊」の著あり、共に支那の風物を詠じ世に行はる。

濱崎健吉君

△出生地 大阪府
△現住所 大阪、北、曾根崎中、一
△現住所 一〇、電話、三三〇六
△生年月 明治六年二月十三日

攝津土地株式會社 瓦斯マンツル製造株式會社各
取締役 豊國火災保險株式會社 大阪株式取引所
帝國土地株式會社各監査役

君は大阪株式取引所相談役たり、大阪晒粉株式會社取締役社長たる濱崎永三郎氏の長男にして、明治六年二月十三日を以て大阪に生る、夙に學に志し東京芝三田慶應義塾に入り、螢雪の苦を重ねる事多年、成績優等を以て卒業するや、直ちに歸郷して先づ株式仲買人となり、豊富なる學識を傾倒して實地に試み着々成果を收め、後攝津土地株式會社、瓦斯マンツル製造株式會社等の取締役及び豊國火災保險、大阪株式取引所、帝國土地株式會社等の監査役として實業界に知らる。

松平直之君

貴族院議員 從四位 伯爵

△出生地 福岡縣
△現住所 東京、麹、下二番
△生年月 文久元年七月二十七日

舊上州前橋藩主松平直之氏は徳川家康の次男、秀康の四男松平直基の後裔なり、直基より十三世にして先代伯爵基則に至る、君は松平直克氏の長男にして文久元年七月二十七日の出生たり、明治四十年七月先代基則氏家督を繼ぎ、八月襲爵仰付らる、四十四年貴族院議員に互選され現に其職に在り。夫人を八重子と呼ぶ、先代基則氏の令婦に當る、長嗣子直富氏は正五位にして、夫人は子爵池田仲誠氏の令妹たり、長女鶴子は男爵安藤直雄氏の夫人たり、女次米子は公爵徳大寺實則氏孫實厚氏夫人たり、先々代直方長女秀子は子爵小笠原長生氏の夫人にして、同妙子は子爵池田仲誠氏の夫人たり、而して夫人令姉久子は公爵徳大寺實則氏男公弘氏の夫人たり一門の繁榮慶福に耐へず。

原文平君

大地主

△出生地 大阪府
△現住所 大阪、泉南、熊取
△生年月 明治十五年

君は年齒未だ不惑に達せずして春秋甚だ富める豪商なり、是を以て閥閥として語るべき多くの資料なしと雖も、天賦雋穎聰明にして氣鋒當る可らざるものあり、其令叔たる中西辰之助氏は曾て大阪府より選出せられて衆議院議員と爲り、議政壇上に立て常に公平の意見を吐き穩健なる議論を以て協

賛の責務を全うしたるは世人の知る所、君夙に叔父に私淑して政界に抱負を有するや多年なり、是を以て時機一度到らば猛然として起ち、毅然として馬を政界に進むべきは郷黨の齊しく認むる所なり、況や君の家は泉南の大地主として亦地方の舊家として、其勢力聲望共に隆然たるものあるをや、特に其一族親縁は悉く地方屈指の富者なるに於て、君の運命は將來益々多望なるものあり、資産は田畑のみにて一百餘町歩にして、其他宅地及山林を合算すれば不動産のみにても百萬圓に達しつゝ、更に諸公債等の動産を加へん乎、蓋し驚くべきの数字を現出するならむ歟、爾來君は此廣大なる土地を整理し、尙植林等に從事して殆んど寧日なきもの、如し、是れ未だ他の事業に關聯せざる所なりと云ふ、古人曰ふ蛟龍水く池中の物に非ずと、移して以て君が現境を評隲するの語と做すべし。

水ノ江浩君

大分縣多額納稅者 農業

△出生地 大分縣
△現住所 大分、宇佐、封戸
△生年月 弘化二年五月二十五日

水ノ江浩君は大分縣佐藤樂山氏の五男にして弘化二年五月二十五日を以て生れ、安政三年五月先代久衛氏の養子となり明治四年七月家督を相續す、代々農を業とす、君勤儉力行富んで驕らず、而かも公共の爲めに盡くす所甚だ多く、地方の一大富豪として社會の信敬最も厚し、資産は増進の一方にして資産は不動産六十萬圓、有價證券二十萬圓其他を併せて百萬圓を算じ、多額納稅者として直接國稅五千餘圓を納さむ。

加藤正惠君

愛媛縣多額納稅者 正八位 勳四等

△出生地 愛媛縣
△現住所 愛媛、新居、多喜濱
△生年月 安政四年五月二十二日

愛媛縣は豊後水道に依りて九州と相對峙する地理的關繫より、人文夙に開け風俗活潑にして近年に到り其進歩の著しきものあり、而して君の居村たる新居郡多喜濱は縣の南方に位置する村落に過ぎざるも、近く大島を眼前に控へて漁介の利夥だしく、殷富を以て縣南に有名なり、君は此村落に在りて一郷の富豪なるのみならず、實に南郡財界の覇者たり、而も其人たるや重厚典雅にして内、峻爽の氣を蘊み快濶にして然諾を重んじ、平常園村の公利を擧ぐるを以て處世の大方針とす是を於て徳望全縣に高く曾て互選せられて貴族院議員たりしことあり、功を以て正八位勳四等に叙せらる、豈又光榮ならすとせんや。

加藤清吉氏の長男にして安政四年五月二十二日を以て生れ後家督を繼ぎ爾來家道を修めて怠たらず、銳意居村の自治を企劃して衆と喜憂を同うす、名聲の揚るもの故なきにあらず代々大地主として今や直接國稅三千數百圓を納め、雄然として縣内の重鎮たり。

夫人を政恵子と呼ぶ、同縣士族神原靖氏の四女にして夙に賢貞の譽あり、令嗣閔延氏は明治十四年六月の出生なり、今や福岡縣人小松利忠氏の姪ヒサ子を娶り正輝、重義等の愛兒を擧げ、又令嬢ハツ子には同縣人井手儀平氏の三男勝三郎氏を養子として正義、スエ子等の令兒あり、而して閔延氏の長女百合子には同縣人進藤正吉に、同正臣氏は東京府の人神原

るわ子に各養子と爲り一族の繁榮は人の羨望する所なり。

西垣清八君

材木商

△出生地 岐阜縣
△現住所 京都、下京、新、佛光寺北
△生年月 嘉永二年十月十六日

君は岐阜の人、牧野治助氏の令弟にして、嘉永二年十月十六日を以て生る、明治四年八月先代清八氏の養子となり、二十年六月家督を繼ぐ、西垣家は代々材木商を營み、目今所得税のみにても、約八百圓を納むるの盛大なるを致し、資産百萬に近からんとするを以て、同業者間の敬重する所となることいふ。

田中幸吉君

製革商

△出生地 東京府
△現住所 東京、荏原、平塚戸越
△生年月 安政六年九月二十三日

君は東京の人田中大吉氏の令兄にして、安政六年九月二十三日を以て生る、明治二十一年三月分家して一家を創め、製革を業とし直接國稅千三四百圓を納むるの盛大を致し、斯界に重せらる、蓋し製革は其需要益々激増すべき傾向を有し、殊に歐洲戰爭の突發せるによりて、輸入全く杜絶せしを以て内地製革業者の困惑する所頗る大なりき、而も平生如斯の變態に處するの用意を怠らざりし君は、儼然として狼狽する所なく、却て此間に處して巨利を收め、他の同業者をして驚愕せしめたり、以て君が人物を窺知すべきなり。

鈴木馬左也君

△出生地 宮崎縣 兵庫、武庫、御影、郡家、六
△現住所 九電、御影、三〇〇
△生年月 文久元年二月二十四日

株式會社住友銀行 株式會社住友鑄鋼所 大阪俱
樂部株式會社各取締役



君は舊高鍋藩士秋月種節氏の四男にして文久元年二月を以て日向國に生れ、明治二年先代鈴木來助氏の後を相續す、君は其令兄秋月左都夫氏と共に、郷閭の俊秀を以て稱せらる、

明治二十年七月帝國大學法科大學政治科を卒業し法學士の稱號を得、内田康哉、早川千吉郎、一木喜徳郎、林權助、林田龜太郎等の諸氏は君と同期の卒業たり、二十二年五月愛媛縣書記官に任せられ、大阪府書記官、大阪府參事官、岐阜縣書記官、農商務參事官兼特許局審判官兼法制局參事官等に歴任し、官海の偉傑を以て名あり、二十九年五月官を辭して住友家に入り、同年九月歐米巡遊の途に就き各國商工業の實況を視察す、三十一年六月歸朝して別子鑛山に従事すること三年三十七年總本店に轉じ其支配人を兼ね又其後總理事に擧るる君住友家に入て殆んど二十二年に垂んとし、銀行事業に獨得の快腕を發揮し、其功績の顯著なるは敢て暇々するを要せず資性謹嚴にして磊落、禪機の妙趣を解し、往年大學卒業後鎌倉

倉に抵りて今北洪川禪師に參して禪機を悟る、爾來官吏となるに及び、山城國八幡圓福寺の伽山禪師に參じ、住友家に入りて後天龍寺の峨山和尚、大徳寺廣州和尚、駿州清見寺の眞淨和尚を招きて參禪し益修養に力む、第三回内國勸業博覽會事務に盡力の故を以て藍綬褒章を賜はる、住友銀行、住友鑄鋼所、大阪俱樂部取締役の職に在り、君は關西實業界に在て風骨自ら他に卓越するものあり、斯界の推敬する所たり。
夫人やす子、貞淑の譽高く、長男惣太郎、二男百二、三男乾三、四男小四郎、五男維房、外に由幾子、貞子、素子の三女あり、長女千穂子は長谷靖氏の三男正男氏に嫁す。

寺田利吉君

△出生地 大阪府
△現住所 大阪、泉南、岸和田
△生年月 安政四年九月三日

株式會社寺田銀行頭取 株式會社和泉貯蓄銀行
和泉水力電氣株式會社 株式會社寺田紡績工廠各
取締役

寺田利吉君は大阪府亡寺田甚與茂氏の四男にして安政四年九月三日を以て生れ、明治十三年分家して一家を創立す、寺田兄弟の末弟なれども、大膽にして自信力に富み些々たる小成に甘んぜず、之に加ふるに頭腦明晰、手腕靈犀なるものあり、自ら株式會社寺田銀行を創立して頭取となり、經營最も宜しきに適ひ、社運の發展隆々たるものあり、又株式會社和泉貯蓄銀行、和泉水力電氣株式會社の各取締役として參畫の功多し、又寺田紡績工廠の取締役兼社長となり、勢力名望共に盛んなり、實に君の如きは財界傑出の人物なりと謂つべし資産は株券四十萬圓、土地家屋公債を併せて百萬圓を超ゆ。

徳川義恕君

△出生地 東京府 東京、牛込、市ヶ谷河田、
△現住所 七電、五五九
△生年月 明治十一年十一月一日

侍從 陸軍歩兵少尉 從四位 勳六等 男爵

君は故從一位勳二等徳川慶勝侯の第十一子にして、明治十一年十一月一日を以て生れ、二十一年六月慶勝侯の遺志を繼ぎて分家し、七月特旨を以て華族に列し男爵を授けられ、三十一年十一月從五位に叙せらる、夙に學に志し後一年志願兵として入營し、日露戰爭に際しては陸軍歩兵少尉を以て出征し功あり勳六等を賜はる、除隊せられて宮中に出仕し侍從に任せられ、現に其職に在りて從四位たり、當家は乃ち名古屋藩の支藩にして資産百萬圓を超ゆといふ。
夫人寛子は伯爵津輕承昭氏の令嬢にして、義寛、藤孝、義忠、富士江子等の數子あり。

濱口恒十郎君

△出生地 高知縣
△現住所 高知、高岡、佐川
△生年月 慶應二年二月二十一日

土佐電氣鐵道株式會社 神通電力株式會社各取締役
土佐製氷株式會社監査役

土佐の政界實業界に人物を出せしこと枚擧に遑あらず、而かも多くは紹介にして人を容れず、短氣にして人と争ひ多年蓄積する處の名聲を一朝にして破棄する者あり、濱口君に至りては外柔内剛穩健にして己れを持するの節あり、以て土佐の國士となすに足るものあり、君は濱口彦右衛門氏の二男として慶應二年一月二十一日に生れ、三十一年六月先代恒十郎

大正人名辭典 (徳川義恕) (濱口恒十郎) (石橋彦三郎)

氏の養子となり後家督を繼ぐや、父祖の遺産を守るに道を失はず、現今土佐電氣株式會社及土佐製氷株式會社神通電力株式會社等の重役として、熱心經營に従ひ著々成績を擧げて今や百萬の長者と稱せらるゝに至れり。實に土佐實業界の權威者といふべし。
夫人徳子は上田峯馬氏の令妹にして、長男を馬三郎といひ其夫人鶴江子は廣末常六郎氏の二女なり、其間金一郎の一子あり、二男虎五郎氏、三男熊之助氏、長女治恵子等ありて蕭然たる家庭を營む。

石橋彦三郎君

△出生地 滋賀縣
△現住所 北海道、小樽、奥津
△生年月 安政二年五月五日

株式會社第百三十三銀行監査役 醬油醸造業

君は滋賀縣人先代石橋彦三郎氏の養子にして安政二年五月五日を以て生る、幼名を捨治郎といふ、明治二十一年四月家督を繼ぎて彦三郎を襲名す、石橋家は代々醬油醸造を業とし君の之を繼承するや先づ専念努力して以て愈々盛大に赴かしむ、今や俄然として積富五十萬を超ゆるに至れり、能く父祖の業を繼ぎて之を子孫に遺すに全力を加ふ、實に敬重すべき事に屬す、而して餘業株式會社第百三十三銀行の重役として令名ありといふ。

夫人を元子といふ、小堀與一郎氏の令姉にして安政二年正月の出生たり、長男彦一郎、女順子は松本彌太郎氏の令弟繁藏氏を入夫養子となす、其間知恵子あり、長女千代子は其夫泰一氏及其子女と共に分家せり。

木村久太郎君

△出生地 鳥取縣
△現住所 臺北基隆街
△生年月 慶應三年九月

木村鑛業株式會社 臺灣水産株式會社 基隆輕鐵株式會社各社長 臺灣土地建物會社取締役 臺北魚市株式會社監查役 財團法人基隆公益社社長 基隆防疫組合長

凡う事業を経営する者は進取活動、不屈不撓、手腕を縦横に發揮し、渾身の勇氣を奮ひ、其目的を貫徹するに努むること同時に、一方に其籌策を精密にし細大の事に關せず、甚深不測の注意を怠らず、以て其事業の遂行に遠算なからしめ、且つ其人最も信用を重じ確實を主旨となし、能く他の信頼を受け人を用ゆるに當りては、統御其宜しきを得、喜んで其力を盡くさしめざるべからず、是れ蓋し成功上必要の事なりとす斯の如くにして今日其成功を遂げ、而も臺灣に於ける成功者中一の第一位に列する者を木村久太郎君とす、君は鳥取縣境町の人慶應三年九月を以て生る、年甫めて單身神戸に流寓し、土木業に身を投じ努力三年始めて同業者間に認めらるゝに至り二十九年渡臺したり、君の精力は實に強大にして才智能力、人に異りて勝れ其關係せる所の事業は甚だ廣く、而も一々之を掌理して一絲の紊るゝ所なく、善く其業績を擧げ、従つて幾多の會社も亦君の信用才腕を重じ、君を擧げて重役となし、基隆の實業界に於て勢力名望隆々たるものあり、是より先き君の渡臺するや、會々基隆臺北間の鐵道敷設せらるゝに當り、基隆、八猪、七猪間の工事請負其他總ゆる工事を完成し、三十二年請負業を脱すと同時に、専心鑛山業に従

西川平藏君

△出生地 神奈川縣
△現住所 神奈川、鎌倉

神奈川縣鎌倉の富豪に指を屈すれば先づ西川平藏氏を推さるを得ず、君が家業は質商にして懇切鄭重以て特種金融機關の職能を完し、致富八十萬圓を以て稱せらるゝ、温厚篤實にして郷民に敬重せられ、家郷大小の事ある毎に君は其の援助を惜む事なく公益の爲めに盡くす所多大なるものあり。

今岡義一郎君

△出生地 嶋根縣
△現住所 東京、芝、白金今里、七七
△生年月 明治六年三月十一日

實業家



君は島根縣の人今岡文太郎君の次男にして明治六年三月を以て藤川郡神西村に生る、幼時より聰明にして學才群に秀で郷關の矚目する所となる、小學を卒へて松江中學に入りしが

在學中松江日報に時々寄稿して流暢の筆を揮ふ、後東京に出で應應義塾に入り、螢雪雜股、法制經濟の學を修む、其中學時代より義塾卒業までの長年月間曾て學資を郷里に求めず、或は他人に寄食し或は寄宿舎の世話役となり、非常なる苦學をなせり、而して業成るの後松江日報に入り主筆となり、圓轉滑脱跌宕雄偉の文藻を以て、其雄大なる識見を披瀝し名聲一時に揚る、居ること二年、筆を棄て牙籌の人となり東京に出で、王子製紙會社に入りて其の快腕を揮ひ、更に轉じて村井商會に入る、偶煙草業の官營となりて同商會が村井銀行を創立するに當り之に參與して畫策する處機宜に適し、行主の信頼頗る厚く成立の後同行にありて縦横の奇才を揮ひ成績頗る擧る、四十年之を辭して酒井商會に入り其の代表社員となり、滿韓各地の商況を視察し歸來畫策する所極めて多し、明

大正人名辭典 (今岡義一郎) (戸田彌七)

戸田彌七君

△出生地 京都府
△現住所 大阪、東、伏見、三
△生年月 慶應三年九月一日

株式會社大阪美術俱樂部取締役 茶道具商 谷松屋主

遠く明和年間の創業に係り大阪市中稀有の老舗たる谷松屋は骨董就中茶道具商として、斯界唯一の鑑識家にして又貯藏する逸品の豊富なる點に於ても著名なり、君は戸田貞八氏の二男にして慶應三年九月一日に生る、幼名を市次郎といふ、明治十二年五月先代戸田彌七氏の養子となり、卅八年家督を繼ぎ彌七を襲名す、天性の英敏に加ふるに養父が薰陶を受けしかば、弱冠にして既に鑑識眼の侮るべからざるものあり、屢々先輩故老を驚かしたりといふ、君家を繼ぐや益々修養を重ねしを以て今や斯界を潤歩して遙らざるの地位を有するに至れり、曩に推されて大阪美術俱樂部の經營に關與し現に其取締役たり、茶道は東洋特有の典禮に屬し、永久に傳來して亡ぶべからざるもの、此道に従ふ者は君が盡瘁する所の少々にあらざるを知らざるなし、今や直接國稅約三千四百圓を納むるの盛大を致せりといふ。

袴田喜四郎君

△出生地 東京府 東京本所、長崎、六
△現住所 東京本所、二一五
△生年月 安政六年十二月十日

政治と實業との二方面に活躍して錚々たる盛名を有する高橋直治氏は、新潟縣平民高橋惣八氏の長男にして安政三年一月二十八日を以て生る、明治八年志を立て北海道に渡り諸種の事業に従ひ、後米穀海産物委託販賣業を営み、尋で味噌、醬油、石油、白米及回漕業に従ふ、後すべて之を廢し専ら農産物販賣業を営む、而して現今小樽商業會議所の會頭たるの名譽を荷ふ、君曾て小樽區會議員、小樽取引所理事等に擧げられ、又小樽實業協會なる政社を組織して其幹事となり、三十四年立憲政友會に入り札幌支部の幹事となり、三十五年小樽區より選出せられて衆議院議員となり累選せらる、事三回に及べり、而して小樽米穀取引所の理事長たり、以て君が重

君は東京の人佐野義孝君の令弟にして、安政六年十二月十日を以て府下南足立郡東淵江村に生る、始め下谷池の端の金田紙店に入り商業を見習せしが、明治十四年懇請せられて袴田喜右衛門君の養嗣子となり、其家業たる質商に従事す、祖先より傳來する巨萬の資あり、君が重厚なる資性を以て誠實懇切に店務に従事せしかば、忽ち江東屈指の大舖となり、三十一年東京瓦斯株式會社に入り取締役となり、三十四年中村清藏、岩崎宗吉等の諸氏と謀り倉庫銀行を創立し、君推されて取締役となり、東京製炭の取締役を兼ね又富國銀行の頭取たり、而して前には東洋海上保險會社の取締役なりしが今は之を罷む、近年東京商業會議所議員に選出せられて重きをなせり、嗚呼一農夫の子たりし君が一たび發憤するや忽にして江東屈指の大商業家となる、君が精力旺盛にして堅忍の意

力に富み、勤儉力行の徳に富めるを知るべきなり。夫人をはま子といふ、一男三女あり。

高橋直治君

△出生地 新潟縣 新潟縣
△現住所 北海道、小樽、花園
△生年月 安政三年一月二十八日

君は高知の人間吉藏氏の二男にして安政五年六月二日を以て生る、明治九年三月分家して一家を創立す、現今請負を業とし資産百萬を有し、直接國稅約三千圓を納め、縣下多額納稅者の上位に在り、君至誠勤直、事に當り苟も不正不義を行はず、不信を爲さざるを以て社會の信用厚く、君に託する者皆安んじて全部を委ぬといふ、世間往々反徳漢あり、外觀のみを糊塗して瞞過せんとするあり、故を以て從來請負工事者なる者の輕視せらる、故なきにあらざる也、偶間君あり以て此缺を補ふ、當に君の爲めに祝福すべきにあらざる也。

間猛馬君

△出生地 高知縣
△現住所 山口、下關、外濱
△生年月 安政五年六月二日

山口縣多額納稅者

戸田氏共君

△出生地 岐阜縣 岐阜縣
△現住所 東京、神田、駿河臺、南甲
△生年月 安政元年六月廿九日



凡う華紳貴族の家に生れたる人もすれば華奢安逸に耽溺し、君國に負ふ所の重責に辜負する者多し、是れ皇室の藩屏として將た社會風教の爲に遺憾とする所なり、君は多事多難

なる維新の時代に方り能く其出處進退を謬まらず、毅然として國家の要職に立ち、弱冠既に大兵を擁して純忠無二の至誠を致し、延て家門の聲譽を繋ぎ且時運の大勢を遠觀し卒先して遠く海外に智見を究め、而も高邁なる識見と英俊なる膽略とは、遠祖鎌足公の末葉に負かざる也、然り君は名門の出にして舊大垣藩主たり、其家系を按ずるに鎌足公の裔正親町三條公治の長男實興卿に出づ、爾來六代を経て采女正一西に至りて徳川家康に仕て武州鯨井五千石を領し、後近江國膳所城を賜ひ三萬石を食む、次で嫡子氏鐵家を嗣ぐ、元和三年攝津尼ヶ崎に移り五萬石に増祿せらる、寛永十二年美濃國大垣に移され十萬石を食めり、而して九代氏彬を経て君に至る、君は先々代氏正の五男にして先代氏彬の實弟なり、慶應元年七月兄氏彬の養子と爲り、襲封して從五位下采女正に任せらる

鍋島直虎君

△出生地 佐賀縣 牛久保市
△現住所 東京市牛久保区
△生年月 原三 電話一五九九
安政三年二月九日

貴族院議員 正三位 勳三等 子爵

子爵鍋島直虎君は佐賀藩主鍋島直大侯爵の令弟同苗直次氏の次男にして安政三年丙辰二月九日を以て藩邸に生れ、後文久元年九月小城藩主なる、同苗直亮氏の養子と爲る、生れながらにして勇武豁達兼ぬるに穎智を以てす、幾許もなくして戊辰の變亂起るや乃ち藩兵を提げ懸軍千里、羽州に奮戦して偉勳を建て役了るや翌年京都に於て紀伊守に任せられ、從五位下に任せられ後累進して正三位に陞る、此年羽州出兵の功に依り賞金を賜はり尋で小城藩知事に拜命す、明治四年七月廢藩の令に會して知事を罷め、超わて六年八月東京を發して英國に留學す、研鑽六年學植を大成して十一年四月歸朝するや、翌十二年外務省奏任御用掛を仰付られ、十四年布哇國皇帝來朝の故を以て接伴掛と爲り、同國より「ナイトコンマドル」の勳章を受領す、十七年子爵を授けられ十八年八月を以て外務省の職を解かれ、廿三年初期議會の開設せられんとするや其七月子爵の互選に依り貴族院議員と爲り、爾來三回の當選を得て現に其議員たり、是れより先二十七年第七回臨時議會を廣島に召集せらるゝや出席して軍國の爲に献贊し、後三十年二月英照皇太后陛下の大葬を京都に於て執行せらるゝや貴族院議員として參列し、此年十二月日本赤十字社終身社員と爲る、超わて三十九年四月明治卅七年八年戰役の功に依り勳四等旭日小綬章を拜受す、大正三年六月第一回帝國議會以來議員の職に在りて其功勳なからざるに依り勳三等瑞寶章を

賜はる、尋で四年十一月京都に於て御大典の節貴族院議員として參列し大典紀念章を授與せられ、五年四月大正三四年事件の功に依り旭日中綬章を授け賜はりたり、惟ふに子爵は貴族院に在りて今や先輩を以て全院に臨みつゝあるのみならず其穩健なる意見と忠良なる臣節とは貴族院議員として出色なると同時に、皇家藩屏として洵に尊敬すべき偉材なり、是れ同一族の光榮のみならず、國民は國家の爲め子爵の人格と政見とを多とし慶とせざる可らず。

夫人貴子は明治四年九月の誕生にして伯爵南部利淳氏の令叔なり、男直庸氏は正五位にして令聞は侯爵松平康莊氏の令妹なり、尙好子、慶子の令嬢あり秀才として譽れ高し。

田中伊助君

△出生地 京都府 京都市
△現住所 京都府 京都市
△生年月 電話四〇七
安政三年二月十日

材木商

君は京都府の人先代田中伊助氏の長男にして安政三年二月十日を以て生れ幼名を伊三郎といふ、明治十六年六月先代の名跡を継ぎ伊助を襲名す、代々材木商を營み勤儉力行以て其發展に努力せしかば、業績日に揚り月に進み今や直接國稅三千數百圓を納むるの盛況に達せり。

夫人をきみ子といふ、同郷人榮藤茂助氏の二女なり、長男伊三郎氏、其夫人しな子は加茂定次郎氏の令妹にして、其間良雄の一子あり、長女きぬ子は明治十五年の出生を以て分家して一家を成せり、而して六女はな子は猶幼にして君の傍に在り。

小鹽八郎右衛門君

△出生地 神奈川縣 神奈川市
△現住所 神奈川市、相川
△生年月 慶應元年十一月十日

衆議院議員 神奈川縣農會副會長 産業組合中央會 神奈川支會副會長 農業

小鹽八郎右衛門氏は神奈川縣人にして亡小鹽寬藏氏の長男なり、慶應元年十一月十日を以て生れ明治十六年十月を以て家督を相續す、幼より俊敏にして學を好み夙に江陽義塾に學び、經史、百家の書を閲し最も實學に力を致して知見を擴め卓然として衆と異なるものあり、就中其人格識量は共に閭郷に秀づるものあるより、曾て縣會議員として縣の議政に參與し有力者として目せらるゝ、而も君は縣下の素封家にして郡部に於ける唯一の多額納稅者たり、祖先來農を業とし且地方に勸説して農事の改良に努めしめ、又自から卒先して之が模範を見ずを以て靡然として君の風に化せられ、爾來農業の發達を促進せるは世間の夙に認むる所なり、是を以て同縣農會副會長及産業組合中央會支會副會長として會務に執掌す、大正六年四月總選舉の事あるや中立を標榜して逐鹿場裏に出馬し殆ど無敵を以て中、愛甲兩郡の投票を獲得して第三位として當選したり、以て君が平素の徳望如何を推測し得べきにあらずや、家運は發展の一方のみにして今や廣大なる山林、田畑幾多の有價證券及公債を有し、又巨多の貸金ありて總資産は百二十萬圓を超ゆ、家族として母堂きい子、令聞りく子、令息寬氏、令女せい子、同系い子、令息堅二氏、令女きみ子、同こう子あり、家庭洋々たり、令女ろく子は神奈川縣永野毅氏に、令妹さき子は同縣川邊正之助氏に、同ます子は同縣熊

坂辨藏氏、同すみ子は同縣甘利林平氏に、同じく子は同縣川邊儀三郎氏に、同まさ子は同縣大貫太三郎氏に嫁し、令女八年子は同縣落合太一郎氏の養子となり、令弟元保氏は分家せり、而して一門悉く繁榮を極む。

伊東要藏君

△出生地 静岡縣 静岡市
△現住所 静岡、引佐中川
△生年月 元治元年三月十七日

静岡縣多額納稅者 濱松輕便鐵道株式會社 濱松瓦斯株式會社 濱松委託株式會社各社長 株式會社 社豐田銀行 株式會社静岡縣農工銀行各取締役 富士瓦斯紡績株式會社監查役

君は静岡の人山田喜平氏の令弟にして元治元年三月十七日を以て生れ、明治十六年四月先代伊東磯平治氏の養子となり家督を繼ぐ、夙に學に志し東上して慶應義塾に入り、其優等を以て卒業するや同義塾及大阪商業講習所等の教頭となり、商工子弟の教養に勉む、後之を辭して實業界に入り三十五銀行、濱松信用銀行等の頭取に擧げられ、現今濱松輕便、濱松瓦斯、濱松委託の三大株式會社に社長として、又豐田、静岡縣農工銀行の取締役として富士瓦斯紡績株式會社の監查役として、何れも經營の衝に當りつゝあり、君又地方自治に盡瘁する所頗る多く、郡會議員、静岡縣會議員等に選ばれ又曾て衆議院議員に當選すること二回に及び、中央議政壇上錚々たる名聲を有す、代々地方素封家を以て聞け、縣多額納稅者として直接國稅數千圓を納むといふ、出で、は他の師表となり入りては家庭の善良なる主公たるは君が萬人に瞻仰せらるゝ、所以ならんか。

西尾 昌伯 君

醫師 ドクトル メヂチーネ



△出生地 東京府
△現住所 東京府小石川、竹早、一
△生年月 東京府小石川、八九五
元治元年十月二十五日

君は東京の人にして、嚴君西尾良伯氏も亦醫を業とせり、君其嫡男を以て元治元年十月二十五日に小石川に生まる、夙に普通學を修め長じて醫學を好み、嚴君と共に斯業に従事して

大に造詣する所あり、明治二十年米國に渡航して、オペリンカレッジに學び、尋でジョージ、タウン大學に進み醫學を修め、同二十七年業を卒へてドクトルメヂチーネの學位を得、後實地の研究に従事し、ワシントン府立中央施療病院の醫員となり、彼地に在つて令名漸く布けり、二十八年歸朝開業して一般の診療に任じ、其の間久我東京府知事の囑によつて東京府醫となり、在職三年誠實事に従ひ、また東京府女子師範學校々醫の職を帯び公私ともに令聞あり。

石森 清兵衛 君

醬油醸造業

△出生地 東京府
△現住所 東京府豊多摩、中野本郷
△生年月 東京府豊多摩、中野本郷
明治七年十二月九日

中野の豪家とし言は、何人も皆直に石森家を指稱せざるな

八木 與三郎 君

△出生地 京都府
△現住所 京都府天王、南河堀
△生年月 京都府天王、南河堀
慶應元年一月七日
愛媛紡績株式會社 社長 浪速紡績株式會社 專務取締役
東成社土地建物株式會社 大阪城東土地株式會社 各取締役 株式會社藤本ビルプロカーター 監査役

君は紡績界の手腕家として噴々たる聲譽を揚げつゝあるのみならず、經濟界の有力者として浪速實業場裡に飛躍しつゝある紳商なり、慶應元年一月七日を以て八木重助氏の三男として京都に生れ、稍々長するに及び大阪なる親戚先代八木文之丞助氏の養子と爲り、而して後明治十七年其家を相續せり人と爲り用意周到にして謙遜已を持するも固は是れ商魂商才に長け最も趨勢を洞察するに敏なるを以て夙に綿絲布の前途に考ふる所あり、爾來餘事を顧みず綿絲を専門として當面に活躍せしかば、考察違はず明治三十年前後より綿絲の需用頓に加はり、隨て紡績事業は大阪を中心として近畿及四國中國に勃興するに至れり、機敏なる君は此好機を逸せずして左經右營寸時も怠らず當時に活躍せしかば、數年ならずして多大の利益を擄得し、爾來前記の紡績會社に社長と爲り又專務取締と爲りて、大阪及愛媛の兩地に亘りて指揮統率し以て好成績を實現しつゝあり、而して今や一面に於ては土地建物の兩株式會社に重役たるのみならず、藤本ビルプロカーターに監査役として關係し、以て異常の社運を發展せしめつゝあり財界に手腕を有し且時勢を洞察して正鵠を得るの識力なくんば、夫豈斯の如き順境に到達せしむるを望むべけんや、資産

阿部 市太郎 君

大阪府多額納稅者 洋傘洋反物商

△出生地 滋賀縣
△現住所 大阪府南久太郎、二ノ
△生年月 大阪府南久太郎、二ノ
明治十五年六月二十一日

阿部市太郎君は滋賀縣阿部一樹氏の長男にして明治十五年六月二十一日を以て生れ、四十四年家督を相續し前名吉太郎を今の名に改む、洋傘、洋反物商を營み其取引の廣汎なる、業務の盛大なる同業者中嶄然として頭角を現はし、特に其店舗の基礎の鞏固なるは比儔稀なりとす、而して先代は阿部市郎兵衛氏の令弟にして麻布商に従事し、巨利を博して富有の基を開く、當主市太郎君は往年渡米してコロンビヤ大學に學び、商機を見るに敏に事に臨みて果斷、學植豊富にして關西實業界稀觀の人傑なり、資産は實に二百五十萬圓を算す、多額納稅者として直接國稅二千餘圓を納さむ、家族としては嚴父一樹氏の外母堂てい子、令閨みち子、令息俊介氏、女きよ子あり、家庭圓滿なり。

數百萬圓にして財界一方の重鎮たるは世間の同評する所なり、夫人をふさ子と呼ぶ、島澤榮太郎氏の令姉に當り、賢貞の譽高く幸吉、泰吉、貞吉、信子等の數子あり、而して長子よし子は杉相次郎氏の長男道助氏に嫁せり。

田島 吉兵衛 君

株式會社小石川貯藏銀行專務取締役

△出生地 富山縣
△現住所 東京府小石川、柳、二九
△生年月 東京府小石川、柳、二九
天保五年一月十五日

君は富山縣の人山本權兵衛氏の五男にして天保五年一月十五日を以て生る、後田島家の養子となり其姓を冒し、明治十三年分家戸主となる、實業界に其手腕を揮ひ經驗する所深し、雄を中央財界に争はんと期し上京して諸種の事業に關與し、今や小石川貯藏銀行專務取締役として令名あり、夫人をたつ子と呼び此間一女はる子あり。

平井 仁兵衛 君

京都商業會議所議員 西陣織物商

△出生地 滋賀縣
△現住所 京都府下京、嵯峨野、島丸
△生年月 京都府下京、嵯峨野、島丸
萬延元年十二月十六日

平井仁兵衛君は京都府の富豪なり、君は滋賀縣犬上郡四十九院村、村上敬義氏の長男にして萬延元年十二月十六日を以て生れ、明治十一年十一月先代かの子の養子となり、同十二年三月家督を相續し、舊名十平を今の名に改む、勤儉力行頗る理財の才に長ず、屈指の西陣織物商として其名遠近に高く、取引甚だ廣汎業務益々盛大なり。

山本權兵衛君

△出生地 鹿兒島縣
△現住所 東京芝八三
△生年月 嘉永五年十月十五日

海軍大將 正二位 勳一等 功一級 伯爵

君は鹿兒島藩士山本五百助氏の三男にして嘉永五年十月十五日を以て生る、應應三年藩主島津久光公に扈從して京都に守衛す、戊辰の役流、鳥羽、奥羽に轉戦す、明治二年東京留學を命せられ昌平齋開成所等に學ぶ、三年海軍兵學寮に入り征臺の役筑波艦乗組等尋で海軍少尉と爲る、後再び兵學寮に入り米布諸國に渡航す、尋で獨逸軍艦に乘組み世界を一周して歸朝するや間もなく中尉と爲る、爾來諸艦に轉乘して更に兵學校教官を兼ね、十四年大尉に任じ大砲操式編輯を掌る、翌年砲術練習所教員と爲り淺間艦長に補せられ、海軍操砲程式改正案取調委員、士官教育法取調委員等を命せらる、十八年浪速艦回航事務員として英國に派遣せらる、次で少佐に進み大陸を巡回し軍事を視察して歸朝し、直に兵器會議々員將校及び生徒教育法取調委員と爲り、幾もなく天城艦長に補し廿年海軍大臣傳令使と爲る、此年樺山海軍次官に隨ひ歐米に派遣せられ勳六等單光旭日章を賜ふ、翌年歸朝して二十二年大演習審判官陪從を命せられ、尋で大佐に昇り高雄艦長と爲り爾來高千穂艦長、海軍大臣官房主事、海軍省主事等に歷補し二十七八年の役大本營海軍大臣副官仰付らる、廿八年海軍少將に陞り海軍省軍務局長兼將官會議々員と爲り、又海軍々令部御用取扱を兼務し、大本營海軍參謀官と爲り後功四級金鷄勳章を賜はる、次で海軍中將に進み三十一年海軍大臣に任ぜられ、更に明治三十七年に及んで海軍大將に陞進し、四十

年日露戦争の殊勳に依り伯爵を賜はり華族となる、是より先海軍大臣の印綬を解くに當り軍事參議官に任せられ且つ前官の禮遇を賜ふ、君斯くの如き甚深なる眷寵を荷ひ常に斃巳の至誠を盡さんと期し、閑職にありて尙且つ國歩の大勢を洞察し、終に大正の初頭桂内閣の倒壊するに當り、内閣を組織して總理大臣と爲れり、愆くして財政行政の兩政を整理し大正三年四月連袂辭職して以て今日に至る。
夫人をとき子と呼び、令嗣正五位清氏及長女いね子、二女すゑ子は山路一善氏に、三女みね子は山本盛正氏に、四女なみ子は上村從義氏に、五女登美子は松方乙彦氏に、何れも歸嫁せり。

濱口吉右衛門君

△出生地 東京府
△現住所 東京日本橋小網、四ノ
△生年月 明治十六年七月二十三日

東京府多額納税者 帝國鑛泉株式會社社長 濱口
合名會社代表社員

衆議院議員たりし事三回、貴族院議員たりし事一回、而して豐國銀行頭取たりし先代濱口吉右衛門氏は、政治と實業の二方面に權勢を有せし偉人なりき、君は其長男として明治十六年七月二十三日に生れ、幼名を乾太郎といへり、實に法學士遠山市郎兵衛氏は君が叔父に當るといふ、夙に學に志し東京高等商業學校を了へ、後濱口合名會社代表社員として醬油の醸造販賣に従事し、餘力を以て帝國鑛泉株式會社の社長たり、君猶不惑に達せず乃父の衣鉢を襲ぎて政界實業界に活躍するの日、懸て到來して驚天動地の大業を成就するなるべし

小西儀助君

△出生地 滋賀縣
△現住所 大阪東區道修、二ノ四
△生年月 安政四年五月二十五日

浪速火災保險株式會社取締役 大阪市會議員 大
阪市參事會員 藥種商

小西儀助君は温良恭謙の紳董なり、然ども無爲にして自ら安んじ、現狀を保守して曾て其他を顧みざるが如き退嬰主義に腐心する市紳に非ざる也、是を以て恭謙己を持すると言ふと雖も、大事に臨めば勇猛精進、一步も譲るなく斷々乎として所信を果決し、以て初一念を貫徹せずんば敢て休むものに非ず、蓋し君は温良の天資を以てして、正理常道を踏み毫も顧慮する所莫き果斷家なり、特に地方自治の發達健全を期待して市政を研究し、數次企畫し献策するものありしを以て市民は君の誠意熱心を徳とし今や市會議員の公職に擧げられ尙參事會員として努力しつゝあり、市民は其人を得たりと謂ふべし、君は滋賀縣人にして北村三次郎氏の長男なり、安政四年五月二十五日を以て其郷彦根城下に生る、家は世々藥種商なるを以て、垂髫の交より家業を見習し且其業に携はれり幼より發才多智なるも性温順にして急噪ならず、年齢二十歳にして大阪に出て明治十四年十一月を以て先代義數氏の養子と爲り、同二十一年に至り其家を襲ぐ、小西家亦藥種商の舊家として浪速に知られ、且資産家として世間の敬重する所となる、恁て君の家督を相續するや家業に努力し、店務に精勵して維日足らざるものあり、於是乎信望年と共に加はり店運隨て隆昌す、後大株主として浪速火災保險會社の取締役に擧げられ、又市會議員に選舉せらる、愈々其信望の大なるが爲

めなり、資産は營業資金並びに邸宅等にて六十餘萬圓と註せらる。
夫人を君子と言ひ、而して令息儀三郎氏には實枝子を配し尙敏夫氏、菊子、泰造、純造、孝之、政治等の數子あり、長女梅子は其夫三四郎氏(兵庫の井上彌助二男)に配して今は其子女と共に分家し、又三女愛子は同市北村長三氏甥傳次郎氏に嫁し、一族共に繁榮しつゝあるは慶すべし。

井上豊太郎君

△出生地 東京府
△現住所 東京豊島區田、三ノ二四
△生年月 文久二年五月二十八日

東京眼科病院長 ドクトル メヂチーネ

君は舊幕臣井上柳菴氏の三男にして文久二年五月二十八日を以て生る、家代々醫を業とす、君亦幼より醫を志し英漢數學を専攻する事多年、明治十三年五月松江醫學校に入り十七年卒業す、君の學才に富むや一事の證すべきものあり、即ち君は猶學窓に在りし時、既に内務省の醫術開業試験に應じ合格し居たりし也、半白の老顔に及んでも猶且つ難しとせられし開業試験を易々として通過す、尋常の人にあらざるを見るべし、卒業後暫く萩市半井病院醫局長たりしが、二十年之を辭して東京に來り、東京大學眼科教授井上達也氏の助手となり眼科を専攻す、二十四年六月志を立て、獨逸に航し、イエナエルランゲン等の大學に入り、更にミュンヘン大學に於て内外科一般殊に眼科を學び、眼水晶體の發達史を提出して、ドクトルメヂチーネの學位を受く、夫よりヴンナ、パリ等の大學に遊び眼科を實習して歸朝し、現所に眼科病院を開けり

山下龜三郎君

△出生地 愛媛縣 高嶺南、四七
△現住所 東京、芝、二二四
△生年月 慶應三年四月九日

山下合名會社 山下汽船株式會社各社長 山下石炭株式會社 福島炭礦株式會社 奔別炭礦株式會社各取締役社長

現代成功者傳中の傑出せるものを覓むれば何人も先づ山下君に指を屈せざるはなかるべし、君今や致富一千萬圓を以て稱せらる、而も此の巨富は二十年に充たざる僅少の歲月に贏得せられしものなるを思へば、誰か君の巨腕に愕かざらむや君は愛媛の人、山下源治郎氏の三男にして慶應三年四月九日を以て伊豫國北宇和郡喜佐方村に生る、幼にして個體大志あり苟も人に屈することを喜ばず、年僅に十六、十五金を懐にし郷里を出で、飄然京都に到り、苦學力行すること前後三年十九年東京に出で明治法律學校に入りて理財學を修む、卒業して後暫く大倉孫兵衛氏の商店に勤務し商業の實地を見習ふ二十七年横濱に流寓し具に艱苦を嘗む、斯くして僅少の資本を得て三十年横濱元濱町に石炭販賣店を開き、横濱石炭商會と稱す、是れ實に山下汽船株式會社の濫觴となす、君の業務に當るや損益を眼中に措かず、唯一意専心業務の發展を期す日露の風雲將に急ならんとするや、機を見るに敏なる君は千歳の好機逸すべからずと念し、資金を悉く投じて汽船二隻を購ふ、君が商算や誤たざりき、日露開戦となるや船價俄に昂騰し、海運界は無比の好況を呈し君は巨利を收めて頓に名聲を揚げたり、然れども君の大志を就すや、元より斯の成功に満足して已むべきにあらず、更に同商會を擴張して四十四年

山下汽船合名會社を創立し、本店を東京に置き横濱、神戸、門司の各地に支店を設け、深川東大工町に山下倉庫を建て、石炭を貯藏し、益々海運界に雄飛すべき根柢を培ひたり、歐州戰爭の突發せし大正三年には君の所有汽船十隻、四萬二千餘噸なりしが大正四年に至り、日本商船及び日の出汽船の所有船六隻、二萬餘噸を買収して愈々盛大に赴き、大正五年末には十萬噸以上に達せり、又曩に奔別炭礦株式會社を買収し且つ福島炭礦株式會社を創立し、自ら社長として之を統裁す而して山下汽船株式會社は新に本店を神戸に移し、支店を東京に置き更に事業の發展を期し、其の第一歩として外國保險會社の代理業をも併せ營みつゝあるが、最近一ヶ年の契約高は一千八百萬圓を越ゆといふ、山下君の理想は今や半ば實現せられて世界的活躍の時代に入れり、君、年知命を越ゆる僅かに一歳、是より漸く實際的に圓熟せる手腕の發動揮躍を見るを得べき也、君性素と豪宕不羈にして世の紛々たる褒貶は其の意とする處にあらず、唯自己の信する所に從ひて直往邁進するのみ、其の人格と其の經綸の偉大なる、洵に彼の豊太閤に髣髴たる所なくんばあらず、君を以て之に擬す未だ必ずしも不倫となすべからず。

夫人をかめ子と言ひ、朝倉鐵錫氏の養女たり、夫君の間に數子を擧ぐ、名を太郎、三郎、波郎、象子、登美子と云ふ。

和木勘七君

△出生地 東京府 東本所、松代、一ノ九
△現住所 東京、本所、二四三
△生年月 嘉永六年十二月二十日

砂糖小麥粉米穀商 松勘店主

君は先代和木勘七氏の長男にして嘉永六年十二月二十日を以て生る、明治十年家督を繼ぐ代々松勘と稱し、砂糖小麥粉米穀等を販賣し、方今直接國稅千數百圓を納むるを以て、益々盛大を極めつゝあり。
夫人を千代子といふ、慶應三年十一月の出生にして、鈴木安兵衛氏の令妹なり、伊東與三郎氏の二男潤三郎氏を養子とし、海老原兼助氏の二女うた子を娶る、未だ子女を得ず、鈴木新右衛門氏の二女伊豫子を養女となし満々たる家庭を作る

石谷傳四郎君

△出生地 鳥取縣 鳥取、八頭、智頭
△現住所 鳥取、八頭、智頭
△生年月 慶應二年四月二十九日

鳥取縣多額納稅者 合資會社鳥取銀行頭取 株式會社鳥取縣農工銀行取締役

君は鳥取縣人石谷傳九郎氏の長男にして慶應二年四月二十九日を以て生る、明治二十二年六月父傳九郎氏の隱居せしを以て家督を相續す、家代々農を營み現今直接國稅約四千四百圓を納むるを以て縣多額納稅者の首位に在り、而して同地金融機關の缺如するを憂ひ、卒先して鳥取銀行の設立に奔走する所あり、其成立するに及んで頭取となり、現に其職に在り、又鳥取縣農工銀行取締役として其經營に關與し、貢獻する處頗る大なり。

平山浪三郎君

△出生地 青森縣 青森、北津輕、五所川原
△現住所 青森、北津輕、五所川原
△生年月 文久二年十月二十八日

青森縣多額納稅者 株式會社五所川原銀行 株式會社

大正人名辭典 (石谷傳四郎) (平山浪三郎) (森久兵衛)

會社青森銀行各取締役 農業

平山浪三郎君は平山助六氏の長男にして文久二年十月二十八日を以て生れ、明治三十六年九月家督を相續す、津輕地方の一大地主にして多額納稅者たり、資産は田地四百町歩、山林二百町歩、株金、貸金、現金等を併せて百萬圓を越ゆ、富豪の名遠近に高く家運の發展隆々たるものあり、株式會社五所川原銀行、株式會社青森銀行各取締役に擧げらる、地方大小の事皆君の助力を待たざるはなく社會に敬重せらる。

森久兵衛君

△出生地 大阪府 大阪、南、巖谷、東之、一
△現住所 大阪、南、巖谷、東之、一
△生年月 嘉永六年三月十日

關西水力電氣株式會社 千早川水力電氣株式會社 各社長 和歌山紡績株式會社取締役 大阪電氣軌道株式會社 高野登山鐵道株式會社各監查役 壘表商

大阪府の富豪にして諸會社の重役を兼ね、財界に有力の地位を占むる者を森久兵衛君とす、君は三木伊助氏の二男にして嘉永六年三月十日を以て生れ、後先代久右衛門氏の養子となり、明治十九年二月家督を相續す、屋號を「泉久」と稱し、壘表商として取引頗る盛大なり、關西水力電氣株式會社及び千早川水力電氣株式會社の社長として責任を負ひ社業益々發展す、如何に君が經營の才に長するやを知るに足るべく、信望頗る高く、和歌山紡績會社の取締役、大阪電氣軌道株式會社、高野登山鐵道株式會社の各監查役として重きを成せり、資産は有價證券土地等を併せて二百萬圓を算す。

高梨哲四郎君

辯護士 勳四等

△出生地 東京府、有樂町、三ノ三
△現住所 東京、新三六〇五
△生年月 安政三年二月二日



君は安政三年二月二日を以て君は江戸市ヶ谷八幡側の邸に生る、明治初年尺振八氏を師として英學を修め、又法律を長兄守一氏に就き研究して代言人と爲りたるは明治九年十月なり

りき、恣して或は立憲改進黨の創立者と爲り又井上侯を佐けて自治黨を樹立し、而して二十三年以來數回淺草區より選出せられて代議士と爲り、大同俱樂部の領袖として聲望を博したりしが、一旦政見を異にするや同俱樂部を脱し、所屬關東代議士を率る政友會に投じ以て今日に至る。

寺田元吉君

△出生地 大阪府
△現住所 大阪、泉南、岸和田、北
△生年月 安政二年三月二十四日

株式會社五十一銀行頭取 和泉水力電氣株式會社
長 大阪木津川セメント株式會社 岸和田紡績株式會社 岸和田煉瓦株式會社 神戸電氣株式會社 社各取締役 泉州織物株式會社監査役

田邊元三郎君

藥種商

△出生地 大阪府
△現住所 東京日本橋、本四七
△生年月 明治十二年八月十七日

歐洲大戰亂の勃發するや從來獨國より我國へ輸入せる藥種は、端なく杜絶して爰に忽ち一大打撃を被むり悲境に沈淪せる者あると共に、又之が爲め却て意外の順境を開拓して其富を増殖せる同業者あり、然れども是れ成な商魂商才に老けたる人にして、凡腕不靈の徒ならんには這般順境を開拓すること得て期すべからず、田邊元三郎君は活潑々地の商才を有して商機を見るに敏なり、況んや資力之に伴ふをや、戦亂の結果多大の利益を占斷して、日に月に隆然たる境域に進み、今や斯界の飛將を以て敬稱せらるゝもの豈偶然ならんや、君は明治十二年八月を以て大阪に生れ、實に田邊五兵衛氏の二男なり、賦性敏慧にして商才凡ならず、出で先代元三郎氏の養子となり後家督と爲りて今の名に改む、爾來才氣年と共に發達して手腕愈々活振を加ふ、君を識る者其先天的機略に服せざるはなし、最近に於て納むる所の國稅は約七百餘圓を算すと云ふ、君に於て未だ成功の域に達せりと云ふ可らざるも此勢を以て將來を測る、所謂洋たること夫れ猶春海の如き乎特に春秋甚だ富めるに於て一層の囑目に値ひす、君が首途も亦豈雅ならずや。

夫人とみ子は株式仲買業者として有名なる木村源兵衛氏の長女にして明治二十三年五月の誕生なり、伉儷緝々、今やふさる子、たね子の兩嬢と愛兒榮一郎を擧げて圓滿なる家庭に和樂すといふ。

大正人名辭典 (田邊元三郎) (石川茂兵衛)

寺田元吉君は寺田甚與茂氏の令弟にして寺田利吉氏の令兄なり、安政二年三月二十四日を以て生れ明治七年五月分れて一家を創立す、資性潤達にして頭腦明晰、機敏の才智を有して財界に驅逐し、其縦横の手腕は眞に人をして敬服せしむるに足る、現に株式會社五十一銀行頭取、和泉水力電氣株式會社の社長として經營の衝に當り、其成績顯著にして業務益々盛大なり、資産信望共に第一流に列し其關係する所の方面頗る多く、大阪木津川セメント會社、岸和田紡績株式會社、岸和田煉瓦株式會社、神戸電氣株式會社の各取締役、泉州織物株式會社の監査役たり、資産二百萬圓を超ゆ。

森田壽次郎君

△出生地 群馬縣
△現住所 群馬、群馬、明治
△生年月 文久三年十二月二十二日

群馬縣多額納稅者 群馬郡農會副會長 同郡地主
會役員 地主 農業並酒造業
群馬縣の富豪を以て知らるゝ者を森田壽次郎君とす、君は亡森田四郎氏の長男にして、文久三年十二月廿二日を以て生れ、明治十六年十二月家督を相続す、縣下の大地主にして農業を營み傍ら酒造業を兼ね、業務日に發展して家運益々隆昌、如何に君が經理の才超凡なるやを知るべきなり、信望最も厚く現に群馬郡農會副會長として農事の改良發展に盡くす所少からず、又同郡地主會役員として重きを成せり、資産八十萬圓を算す、多額納稅者として直接國稅三千圓を納む。母堂なを子、令閨いろ子、令息清氏、同賢氏、令嬢まさ子同ふさ子あり、同とよ子は群馬縣長谷川常吉氏に、令妹つや子は同縣柴田量平氏に嫁せり。

石川茂兵衛君

△出生地 兵庫縣
△現住所 兵庫、神戸、江川
△生年月 明治十九年八月二十四日

株式會社東亞書院專務取締役 大正汽船株式會社
日本製油株式會社各取締役 日本毛糸紡績株式會社 株式會社日本商業銀行各監査役 米穀肥料商

君は先代石川茂兵衛氏の四男にして明治十九年八月二十四日を以て生れ幼名を英一といふ、明治四十三年家督を繼ぎ茂兵衛と改名す、夙に神戸高等商業學校に入りて理財の學を修め、商業の術を習ひ明治四十一年卒業するや父君の傍にありて家業を見習ふ、僅に二年にして忽然其長逝するに會ひ、弱少の身を以て、巨萬の遺産を享け運用するの重責を擔ふ、而も天性慧智鋭敏にして剛毅なるを以て、奮勵一番よく苦難に耐へ、萬障排除し去つて却て曩日の盛況に幾倍するの状を呈するに至れり、蓋し學識に富み資本に饒なる君が祖先傳來の業務に従ふは寔に易々たる事なるべし、されば今や直接國稅三千圓を納むるの盛況を呈するに至れり、現今君は餘力を以て日本毛糸紡績會社、日本商業銀行、東亞堂院、大正汽船株式會社、日本製油會社等の重役として經營に關與す、前途測るべからざる敏達の實業家といふべし。

夫人をてい子と呼ぶ、兵庫縣人奥田古右衛門氏の二女也、長女君子、二女いと子、三女慶子等あり、令弟茂氏は大阪の豪商にして猪名川水力電氣、千早川水力電氣、日本石等の株式會社の重役として盛名ある加納由兵衛氏の長女壽美子を娶りて令閨となす、母堂みよ子猶健在にして養兒豐吉氏は分家して一家を成せり。

林 權 助 君

△出生地 桐鳴縣
△現住所 東京、下二番、三一
△生年月 萬延元年三月二日

在支那特命全權大使 正三位 勳一等 男爵



君は元會津藩士先代林權助氏の長男にして、萬延元年三月二日を以て生る、幼にして學に志し和漢洋の學を修む、父君の遺傳を受けて秀才多能且膽略あり、戊辰の役會津藩の隊長

として京師を守護す、能く武術に長じ而も武器の製造に熟練なり、是を以て會津藩が洋式戰術及び洋學校等を創設したるは、君の建議の採用せられたるに基く、長じて東京大學法學部に入り政治經濟學を研究し、次で法科大學に轉じ明治二十年政治科を卒業し法學士の稱號を與へらる、君と同期生中には法學博士一木喜徳郎、子爵内田康哉、早川千吉郎、鈴木左馬也の諸名士あり、何れも君と名聲を等くす、君は大學を出で、より外交官たらんとする志あり、先づ領事に任せられ芝罘、仁川、上海、倫敦等に駐劄し勳一等書記官に榮進し、英國清國に駐在したるが後本省に入りて通商局長となり、大に外交的手腕を示し端なく豪傑林の綽名を聞く、偶々韓國の形勢は險惡を極めて不穩の事頻發せしかば、君は特命を受けて韓國に出張し、特命全權公使として日韓修交の輯睦を圖り

同國の開明を扶掖すること十年一日の如く、遂に同國をして日本保護國たることを承認せしめ、次で伊藤統監の赴任を見たるを以て君は乃ち歸朝せり、斯く易々として重大事の處決せられたるは、日露戰捷の結果に由ると言ふ雖も、韓國皇帝其の臣民に甘んじて保護國たるを肯せしむるに至りたるは、林君の斡旋努力によるや論を待たざる處也、勳功により華族に列し男爵を授けられたり、後清國公使となり現今は特命全權大使として支那に駐劄す、未だ赫々の功績聞ゆるなし、雖も、將來の外相たるべきは萬人の疑はざる所、嗚呼大人權助氏は器材を抱いて空し、會津の孤城に倒れしも、幸に二代目權助君は壯にして既に大名を擧ぐることに斯の如し、父君にして知るあらば正に以て地下に瞑すべき歎。
夫人を小多計子といふ、淑徳の稱あり、三男一女あり、何れも健全なり。

廣瀨清兵衛君

△出生地 東京府
△現住所 東京、本湊、二二
△生年月 明治二年六月六日

金銭貸附業

廣瀨清兵衛君は先代清兵衛氏の長男にして、明治二年六月を以て生れ、同二十五年九月家督を相續し、先代の名を襲ぐ金銭貸附を業として最も金融の便を圖るに努む、資産は増進の一方にして現在九十萬圓を超ゆ、信望共に厚し。
家族は繼母なかり、令聞きよ子、男信太郎氏、女あき子、きく子あり、同せき子は其夫富田助三氏と共に、同千代子は其夫川口清氏と共に各分家せり。

大塚岩次郎君

△出生地 千葉縣
△現住所 東京、芝、露月、二四
△生年月 安政六年二月四日

靴靴商 大塚商店主

大塚商店は製靴界を濶歩する巨舖にして、店主大塚岩次郎君は都下屈指の富豪たり、君はもと舊佐倉藩士大塚隊之丞氏の次男にして、安政六年二月四日を以て生る、嚴君隊之丞氏は活眼達識の士なるを以て、明治維新に際し我國の將來に考察して深く感ずる所あり、斷然家祿を奉還して居る東京に移し製靴業を開始せり、當時斯業は全く創始時代なるを以て、設備不整頓を極め又技術幼稚にして到底外國製品に比較すべからず、而も不撓不屈の精神に富むや、刻苦精勵研究を積み経験を重ねて、漸次良品の製出を爲すに至り、世間の信用從つて加はり大塚商店の名斯界の先驅者として尊重せらるゝに至れり、君嚴君の傍に在りて教養せられ製靴業の精髓を極め克く嚴君の志を體し専心家業の發展に努力せしかば取引愈々廣大に赴き、社會の信用益々重厚を加ふ、曩に宮内省及陸海軍の用途を命せられ、方今殆ど一手を以て之が納品を爲しつゝありといふ、此一事以て大塚商店の眞價を推知すべき也、近者歐洲戰爭の影響を受け、我國工業界の聲價著しく揚り、就中製靴業の如き今や彼國を凌駕するの盛況を呈し、大塚商店亦外國よりの注文殺到して、業務一層繁忙を極め其供給する所佛國露國南洋各方面に及ぶといふ、店連の隆盛思ふべき也、今や資産百數十萬圓を以て算し、直接國稅一萬圓以上を納むといふ、其成功や洵に驚嘆に値す。
夫人をむめ子といふ、淑徳の令譽あり、内助の功頗る大也

嗣子菊雄氏は現に陸軍中尉にして、職を佐倉五十七聯隊に奉じつゝありといふ。

深川喜次郎君

△出生地 佐賀縣
△現住所 佐賀、道祖元、
△生年月 明治五年五月十五日

地所株式會社專務取締役 株式會社佐賀縣農工銀行
株式會社佐賀貯蓄銀行 肥前漁業株式會社各
取締役 船舶業

歐洲戰爭の影響はあらゆる方面に波及せり、雖も、就中船舶の不足に基く船價の暴騰は、幾多の船主をして一躍して豪富たらしめ、所謂船成金の語は、時人羨望の的となるに至れり、然れども君を目して成金となすは未だ君が致富の徑路を知らざるの徒輩が妬語のみ、若夫れ審かに研究し來らば君が其大を爲すの根底深く、且堅くして到底投機者流の成功者と同視すべからざるを知らん、君は佐賀の人深川文十氏の次男にして深川勝一氏の甥、同米一郎氏の從兄也、明治五年五月十五日を以て生る、夙に實業界に入り諸種の業務を経歴する所あり、明治四十一年家督を繼ぐや即ち全力を擧げて船舶業を營むの傍、地所株式會社、佐賀貯蓄銀行、佐賀農工銀行、肥前漁業會社等の諸事業に關與し、何れも相當の成績を收めつゝあり、君亦公共事業に盡力すること甚だ多く、之れが爲めに投せし所巨額に上るといふ、素封家に生れて益々財を積み而して能く散すること怠らず、眞に富者の軌鑑とすべし、夫人をむめ子と呼ぶ、佐賀の豪族伊丹彌太郎氏の長女也、嗣子、悦郎、フキ子、タニ子、ツマ子の數子あり。

大森 國平君

△出生地 山梨縣 山梨市
△現住所 山梨市
△生年月 明治八年十一月十一日

山梨縣金融界の有力者として知らる、者を大森國平君とす、君は山梨縣大森嘉四郎氏の二男にして大森慶次郎氏の令弟なり、明治八年十一月十一日を以て生れ同三十七年三月分れて一家を創立す、甲府市に於て名望勢力隆々たるものあり大森銀行を設立して其理事兼支配人を兼ね、經營の衝に當りて樞機を握り、行務の發展顯著にして業績優秀、基礎益々堅實なり、靈腕を有するにあらずんば安んぞ斯くの如くなるを得んや、現に甲府市會議員、甲府商業會議所議員たり。

令閨飛さよ子、令息俊一郎氏あり。

山崎 喜右衛門君

△出生地 東京府 東京市
△現住所 東京市西多摩郡青梅
△生年月 萬延元年三月十日

君は青梅町唯一の資産家として著名なるのみならず、同町有志者の設立に係る多摩銀行の頭取として、其經營に任じ信用の鞏固なるを以て近郷人の信頼を受け、將來益々有望なりとの定評を爲さしむるに至り、愈々君の聲望を擧ぐるに至れり、君は萬延元年三月十日を以て生れ、山崎喜右衛門氏の長男なり、明治八年四月家督を相續す、君度量宏大、能く人を容れ、而も自ら持する所謹嚴なるを以て衆望期せずして一身

に集まりつゝあり。

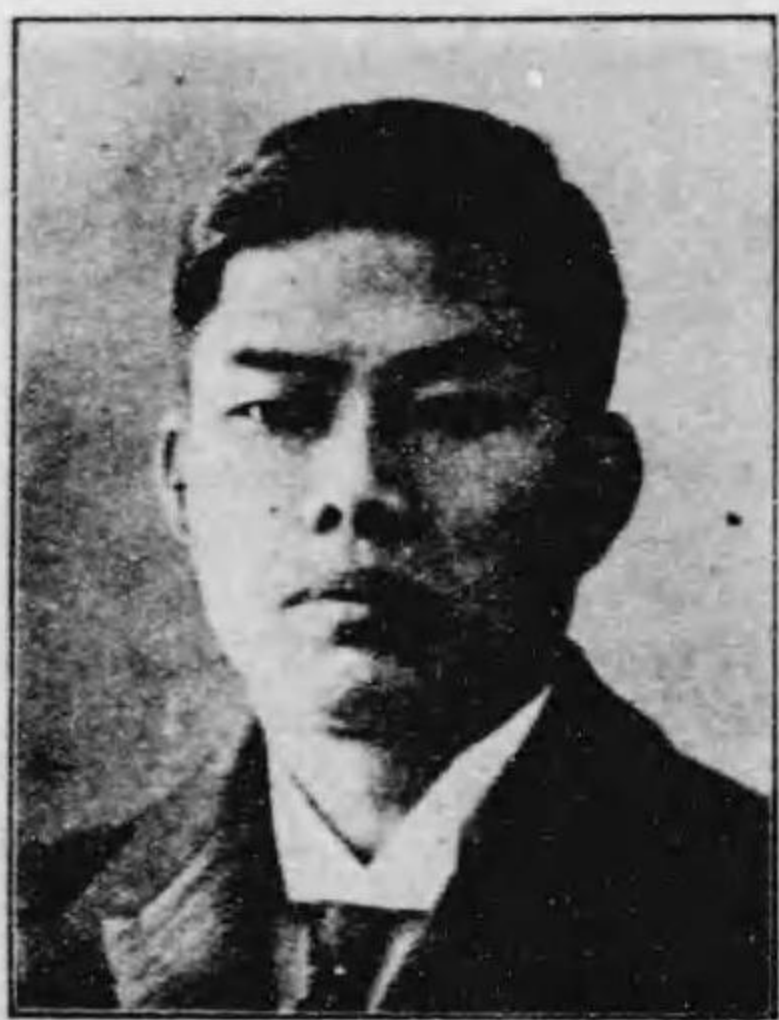
戸塚 文雄君

△出生地 東京府 東京市
△現住所 東京市
△生年月 明治十一年十二月八日

君の家は代々醫家を以て世に知らる、君の嚴君は故從三位勳二等最初の海軍々醫總監なり、名を戸塚文海氏と稱す、祖父を静海氏と云ふ、静海氏は夙に西洋醫術に志し、シーボルト氏に師事して醫學を修め最も外科學に長じ、竹内、伊東の兩氏と計りて牛痘接種法を初めて輸入し、天然痘の救濟者として當時其名を天下に馳せし人なり、又父君文海氏は備中の人中桐喜右衛門氏の子にして、其の才學静海氏の認むる所となり、遂に戸塚家の人となる、長崎に留學してポドインに親灸する事數年、遂に西洋醫學の蘊奥を窮め、明治五年始めて海軍に奉職す、爾來累進して軍醫總監となる、其就職期十五年間なり、文海氏退隱して令兄悦太郎氏其の家を相續す、即ち宗家はなり、他に一家を立て君は其後繼者たり、君は東都に生れ東都に小中學の教育を受け僅かに十七才、即ち明治二十八年四月獨逸に留學、獨逸醫學を研鑽する事十有餘年、業成り「ドクトル、デル、メヂチーネ」の學位を得て、明治四十一年歸朝し、翌年三月醫學を開き以て今日に至れり、君今尙は年齒壯にして春秋に富む、加ふるに醫學の淵藪たる獨逸に於て研學せしを以て、家業の餘暇致々學究的の志を忘れず研究を無二の樂とす、醫業たるや誠實を以て其業務を盡す、家庭亦圓滿と謂ふべし。

市來 乙彦君

△出生地 鹿兒島縣 鹿兒島市
△現住所 東京市
△生年月 明治五年四月十三日



方面を物色して頭腦明晰、計數に精通する人物を網羅するは由來大藏省の吏僚撰擇方針なり、是を以て職を大藏省に奉ずる吏僚は、其口辯に於て其霸氣に於て稍々乏しきを見るも

着實慎重、一事を苟くもせざる點に於て、之が特色を認めずんばならず、市來乙彦君の如き亦一人なる歟、君は鹿兒島藩士市來平太氏の三男にして、明治五年四月十三日を以て藩邸に生る、幼にして俊秀の譽あり、長じて其郷黨を出るや東上して帝國大學に入り、明治二十九年を以て法科大學を卒業し、直ちに高等文官試験を受け優等を以て及第す、時に齡僅かに二十五歳、人以て其學才の拔群なるに敬服せざるは莫かりき、同年大藏省に出仕して司稅官となり、又沖繩土地整理事務局の事務官を拜命し、次で那覇稅務管理局長、稅關事務官、專賣局書記官より大藏書記官、大藏省參事官等を歴任して、進んで主計局長となり誠實其職に勤め、大正六年寺内内閣の成るや大藏次官に榮進せり、省内の信望頗る厚し、此より先日露戰爭の際、全幅を傾倒して戰時財政に努力し、其功

高木 七五郎君

△出生地 神奈川県 神奈川縣
△現住所 東京市
△生年月 明治十八年三月二十一日

明治四年嚴父高木七五郎氏の横濱に於て八幡屋回漕店を設け、海漕業を始めたり、時運必ずしも好からず、屢々困窮に陥り審に辛酸を嘗めき、偶々西南の亂起り海運業者は俄かに復活の機運に向ふ、君亦此機會を巧に利用し、漸くにして成業の基礎を作り得たり、是より順風に棹さすが如く爲すとして可ならざるなく、行くとして行はれざるなかりき、君は其長男を以て明治十八年三月二十一日に生れ幼名を八郎といへり同二十七年四月家督を繼ぐに及び先代の名を襲ふ、君天性闊達宏量にして能く人を容る、而して先代の遺業を繼ぐや奮闘努力其發展に盡瘁し、今や汽船三邦丸を有し大阪商船、三陸汽船の代理店たるの外、日本郵船の内外汽船貨物の取扱輸出入通關手續を兼ね、而して餘業安全石油株式會社、横濱實業銀行等の重役として經營に當りつゝあり、今や回漕店八幡屋の名は斯界に錚々たるに至れり、君は早稻田實業學校の出身なりといふ。

夫人を延子といふ、東京の人森田宇平氏の五女なり。

稻畑勝太郎君

△出生地 京都府 大阪、南、順慶、二
△現住所 大阪、南、三、六、二、二八〇六
△生年月 文久二年十月三十日

大阪染色同業組合長 大阪商業會議所副會頭 瓦
斯マントル製造株式會社專務取締役 毛斯綸紡績
株式會社取締役社長 合資會社稻畑染工場業務執
行社員 大正貿易合名會社業務執行社員 染料業
品商

君は京都府の人稻畑利助氏の長男にして文久二年十月三十日
日を以て生れ、明治三十六年一月分家して一家を創立す、君
夙に學に志し十年京都府立師範學校を卒業するや、同年京都
府より選ばれて佛國に留學を命ぜられ、里昂工藝學校及里昂
大學に學び化學士の稱號を受く、其間化學博士マルナーヌ氏
の染色工場に入り染色法を研究す、又和蘭アムステルダム府
に萬國博覽會の開設せらるゝや、君は京都府出品總代として
出張し傍ら同國の染織工業を視察し、歸途英獨伊白瑞等の諸
國の工場を視察して得る所頗る大なり、十七年歸朝京都府御
用掛を命ぜられ、十九年京都染織講習所を開設して自ら教授
の任に當り、二十一年京都織物株式會社の技師長となる。廿
九年英佛獨國より嶄新染色及仕揚機械を購入し稻畑染工場を
設立す、蓋し我國に於ける染色工業に機械を應用したる嚆矢
なり。爾來本工場の業務益々緒に就き染色及仕揚に關し其功
を奏し外品の輸入を防遏したるもの寡らず、就中カーキー色
染法を創め軍隊被服染料として用ゐらるゝに及び、斯業者中
唯一の完備せる工場を以て目せらるゝ、其貢獻する所の多大な
るを以て賞勳局總裁より褒狀を賜はる、現今掲諸事業諸會

社に關係するの外、大阪商業會議所の副會頭たり、二十九年
安南國王より星龍四級勳章を贈られ、三十三年佛國巴里萬國
大博覽會に審査員たりし功により、オフィシエドランストリ
ユクシヨン、ビュブリック記章を贈らる、其他賞狀賞品を受
けたる事擧げて數ふべからず、而して居住地に本店を有する
の外、東京支那天津に支店を有す。夫人をこみ子といふ、太
郎、喜久子、鞠子、芳子等の數子あり。

米谷半平君

△出生地 石川縣
△現住所 石川、能美、安宅
△生年月 嘉永四年十二月十二日

石川縣多額納稅者 株式會社石川縣農工銀行 北
陸興業株式會社各取締役 米谷銀行主 勳四等

曾て貴族院議員として中央議政府に立ち、諤々たる政見を
論説して、幾多先輩政客を墮若たらしめたる米谷半平氏は、
實に北陸の産にして嘉永四年十二月十二日を以て生れ、令兄
先代半平氏の後を繼ぎ其名を襲ふ、代々農を業とし方今直接
國稅約五千圓を納め縣多額納稅者の首位に在り、而して石川
縣農工銀行、北陸興業株式會社の重役にして、又自己獨力を
以て經營しつゝ、ある米谷銀行の行主たり、君亦公共事業に力
を盡し屢々公私の要職に就く、第五回關西聯合府縣共進會特
別委員、日本赤十字社特別委員等に擧げられ有功章を贈られ
又帝國義勇艦隊建設費を寄附し、又は愛國婦人會に盡瘁する
處あり、其他賞狀を受けたること摺指するに耐へず、明治三
十七年縣多額納稅者の互選により貴族院議員に擧げらる、偶
々日露戰役起り遠征の功により勳四等旭日小綬章を授けらる

井上友一君

△出生地 石川縣
△現住所 東京、豊内、新橋、北、裏
△生年月 明治四年四月十日

東京府知事 從四位 勳三等 法學博士



君は實に加陽の俊
秀にして將來ある有
爲の行政官たり、特
に地方行政に精通し
て自治の方策及び社
會政策を論議提唱す
る所、緻密精細を見
るのみならず、之を
帝國の現在未來に照

らして君の政策に聴かざる可からざるもの多々あるは、今更
絮説するを俟たず、而も問者の爲めに所見所説を叮嚀反覆し
て、曾て倦まざるを見聞しては、誰乎君の學理を宣明するに
熱心なるか、將た行政其者に忠誠なるかに感せずんばあらず
君は石川縣金澤の出身にして即ち前田家の藩士井上盛重氏の
長男、明治四年四月十日を以て其家に生れ、明治二十六年笈
を東京に負ふや直ちに帝國大學法科に入り、優等を以て卒業
し間もなく内務省に出仕して書記官、參事官に歴任し爾來漸
を以て昇進し、神社局長として勅任參事官を兼ねるに至り、
曩に東京府知事に任せられ、現に其職に在りて府政に貢獻す
る處大なり、君は學界に功勞あるを以て法學博士を授けられ
君の學説をして益々權威を有するに至らしめたるは、學界の
爲めに祝すべし、君の家は眞に秀蘭の擧高く、兄弟悉く現代

大正人名辭典 (井上友一) (角田林兵衛) (渡邊多四郎)

角田林兵衛君

△出生地 福嶋縣
△現住所 福嶋、伊達、桑折
△生年月 安政二年一月二十一日

に成功しつゝ、あるは寔に欽仰に堪へざる也、令弟井上一次氏
は歩兵中佐として才名を博し、末弟甚兵衛氏は京都の實業家
川島氏を襲ぎて、年少實業家として好評あり。
内室鼎子は君の同郷人にして今や三井合名會社の專務理事
として隆々たる聲譽ある早川千吉郎氏の令妹なり、今や鼎盛
童子、輝子の一男二女を擧げて和氣満々たり。

福嶋縣多額納稅者

君は福嶋の人先代角田林兵衛氏の長男にして安政二年一月
二十一日を以て生る、家代々農を業とし縣下屈指の大地主を
以て聞け、縣多額納稅者の一人たり、而して資産を積むこと
二百萬圓に近く、君屢々公共事業に投資して之を助くるを以
て博愛仁慈の長者として、遍く縣民の瞻仰する所となる。

渡邊多四郎君

△出生地 新潟縣
△現住所 新潟、長岡、長
△生年月 文久二年十二月十三日

長岡米穀取引所理事 長岡商業會議所議員

君は新潟縣人渡邊良八氏の長男にして文久二年十二月十三
日を以て生れ、明治三十一年十二月家督を相續す、現今長岡
商業會議所議員にして又長岡米穀取引所の理事たるを以て、
同地方實業界に噴々たる名聲を有す。夫人は田中平治氏の二
女つね子にして明治二年十月の出生也。

山本重藏君

棉花商

△出生地 兵庫縣
△現住所 大阪、西、立賣堀南通
△生年月 明治七年六月十三日

棉花業者中に在りても智識あり、經驗に富むを以て信用厚き山本重藏君は、播州の産、明治七年の出生たり、大鵬の志を抱いて大阪に出で棉花事業を見習す、齡僅かに二十九にして、既に備中國笠岡町に創設せられたる笠岡紡績株式會社の取締役に擧げられ其經營に従ひ、異常の功績を示して同郷人を驚殺せしことあり、數年前、獨力を以て繰綿工場を設け、朝鮮に其分工場を新設して目下紡績機四千餘を設備して、個人經營の紡績業を營みつゝあり、一身をあげて斯業の爲めに盡す、君の志や偉なりといふべし、現今營業資本のみにも五十萬圓を有すといふ、亦立志成功の一人となすに足るべし

堀越幸君

印刷業

△出生地 大阪府
△現住所 大阪、西、阿波座二番
△生年月 明治四年五月八日

君は大阪の人堀越歸一郎氏の二男にして明治四年五月八日を以て生る、明治三十年十月分家して一家を創立す、君は印刷業の有望にして有利なるに著眼し、獨力を以て之を創む。而して全力を擧げて經營せしかば、忽ちにして業績擧り今や同地方に於て錚々たるものとなれり、蓋し印刷業の有利有望なる事業たるは、人皆之れを知るに雖其經營の困難なるに至つては、他の如何なる事業にも比すべからず、顧客の鑑別を

林健君

王子製紙株式會社取締役 東神倉庫株式會社常務取締役 株式會社三井銀行 三井物産株式會社各
監査役

△出生地 福岡縣
△現住所 東京、豊、富士見、一ノ二
△生年月 文久三年十月二十二日



君は舊豊前中津藩士林大八氏の長男にして文久三年十月を以て生る、幼名を仙次郎といふ、幼にして學に志し、早く東京に上らんごせしも家貧にして學費の給するなく、獨學自習

僅に普通學科を學修する事を得たり、君の志ある碌々として地方に屈伏すべからず、自活自給、學業を成さんと志し、決然郷關を出で東京に來れり、始め慶應義塾に入りしが後轉じて東京法科大学に入る、君が學才の俊秀にして品行方正なるを以て、特に拔擢せられて舊藩の給費生となるを得たり、明治二十二年卒業して法學士の稱號を受くるや、直ちに九州唯一の有力新聞たる鎮西日報の主筆に聘せられ、其任にある事二年、遂に之が社長と爲れり、後神戸なる關西商業新聞社に入り主筆となりしが、在任二ヶ月にして中上川彦次郎氏の爲めに其才腕を認められ、旋て三井に招聴せられ茲に君が多年の宿志たる實業界に入るを得たり、時に明治二十九年の交

誤まれば忽ち貸倒の多額に上ることあるべく、職工の選定を輕卒にすれば必ず職務上の失態を醸さん、而して資金の運用圓滑を缺かば、乃ち業務の滯滞を來さん、印刷業者たる亦難い哉、君經驗に乏しき此業に従ひ、今や直接國稅約一千圓以上を納むるに至るが如き成績を示す偉なりといふべし。

林半助君

△出生地 廣島縣
△現住所 廣島、沼隈、橋
△生年月 安政六年十月二十四日

廣島縣多額納稅者 輻輳便鐵道株式會社 株式會社 輻輳銀行 株式會社 輻輳蓄銀行各社長 株式會社 福山銀行取締役

君は廣島縣人徳永祖右衛門氏の三男にして安政六年十月二十四日を以て生る、幼名を鶴三郎といふ、明治二十二年三月先代半助氏の懇請する所となり養子となり、三十四年家督を繼ぎ半助氏を襲名す、林家は世々醬油味噌等の醸造を業とし數代連綿たる舊家にして今や直接國稅約五千圓を納むるを以て、廣島縣多額納稅者の第一人たりといふ、而して輻輳便鐵道株式會社、輻輳銀行輻輳蓄銀行等の社長に擧げられ、又福山銀行の取締役として其地實業界の重鎮たり、君の徳望に富むや曩に同町の名譽町長に擧げられ現に其職に在り、町政の全責任は皆君の荷ふ所なりといふ。
夫人をつね子といふ、亡養父半助氏の長女なり、長男を一美氏といひ、其夫人を睦子といふ、大塚平右衛門氏の二女なり、二女みつこに木村由松氏の三男專之助氏を養子となし、弘勝、正男の二男あり、外に二女である、三男公三郎あり。

なりき、爾來馬關、門司、京都等の支店長となり、後早川千吉郎氏の中上川氏歿後其後を襲ふや、君は本店詰となり遂に榮進して調査部長にあげられたり、四十年、歌米各國を巡遊して銀行事業の視察を爲し翌年歸朝、三井家の組織變更と共に東神倉庫株式會社常務取締役及三井物産株式會社監査役に擧げられたり。

令閨をエヒ子といふ、龍、操、穰、いこ子、すみ子、協、疆、絹子等あり、家庭常に藹々たり。

福永熊太郎君

△出生地 兵庫縣
△現住所 兵庫、神崎、一、船津
△生年月 慶應二年一月二日

株式會社田原銀行取締役 株式會社加西銀行監査役 植林業

兵庫縣神崎郡の素封家を以て知らる、者を福永熊太郎君となす、君は兵庫縣福永安郎氏の長男にして慶應二年一月二日を以て生れ、明治十六年十二月家督を相續す、同家は先代より既に資産家として地方に噴々たるものありしが、君に至つて家運益々發展して繁榮を極むるに至れり、是れ蓋君の勤儉力行超凡なるに依らずんばあるべからず、現に株式會社田原銀行の取締役、株式會社加西銀行の監査役として重きをなし參畫の功少からず、君の如きは實に地方的紳士の典型なり、資産は山林六百町、耕地八十町、株券二十萬圓等約六十萬圓を算す、令閨やの子は同縣森本瀧太郎氏の令姉、男は神之助氏、女はるゑ子は同縣福永安然氏の跡を相續し、まさるゑ子は家に入り、弟善次氏は其内室たき子及び子女を伴ひて分家し妹やす子は同縣梶原隆造氏弟兵吉氏に嫁せり。

大塚 惟明君

△出生地 熊本縣
△現住所 大阪、東、道修、四ノ一〇
△生年月 元治元年四月十二日

阪堺軌道株式會社專務取締役 千日土地建物株式會社取締役

君は熊本縣士族大塚磨氏の嫡男にして元治元年四月十二日を以て阿蘇郡小國の郷に生る、幼より穎才敏捷、夙に郷黨に學び年甫めて十五笈を負ふて東上し、府立第一中學校を畢業するや大學豫備門に入り在學三年にして後大阪に轉じ、英和學舎、三一神學校等に學び卒業するや深く國勢の進運に考察する所あり、實業界に投じ身を立てんと決心し、山陽鐵道會社に入り漸次昇進して運輸課貨物掛長に任せられ、精勤六年多大の經驗を積みて明治三十一年一月を以て讃岐鐵道會社に轉じ、運輸主事と爲り後總支配人に進み又專務取締役に擧げられ、多年の手腕を揮ふて株主の信任する所となり、然るに明治二十七年十月同社は山陽鐵道會社の買收する所となりたるより同年十二月を以て大阪に歸還し、其翌年三月を以て南海鐵道會社に聘せられ專務取締役に上任せり、而して四十四年に至り田中社長の後を襲ふて社長の要職に就けり、愨て大正四年四月に至り阪堺軌道會社を合併するや、社長の椅子を片岡直輝氏に譲り、新たに專務取締役に今日に至る、君壯時三一神學校を卒業するや自から大阪ヨハネ教會を起して牧師と爲り傳道に勤めたる事あり、惟ふに人格の基礎は宗教にして而して濼濁たる手腕を有するが故に、君の出所進退は公明にして毫も晦蒙の迹なきは世間の認むる所、而も多年鐵道事業に執筆し事務に精通するを以て、爾來阪堺鐵道の好

成績を擧ぐるもの寔に故なきに非ず、君又千日土地建物株式會社取締役として令名あり。
夫人を津彌子(立石包正氏長女)と云ふ、嚴父磨氏繼母セツ子(淺井友太郎養女)健在にして長男兵吾、次男文藏、三男喜輔(砲兵大尉)及令嬢琴子の外尙家族八名にして、孰れも家事に勤勉しつゝありと云ふ。

田村半十郎君

△出生地 東京府
△現住所 東京、西多摩、福生
△生年月 明治六年五月四日

青梅鐵道株式會社取締役 株式會社青梅銀行監查役 酒造業

君は東京の人先代田村半十郎氏の長男にして明治六年五月四日を以て生る、明治四十五年四月家督を相續す、代々酒造を業とし直接國稅數千圓を納むる豪家たり、現今餘業を以て青梅鐵道株式會社及青梅銀行の重役として其經營に與る、何れも好成绩を擧げつゝあるは、一に君の努力に待つ所大なるによらずんばあらず。

樋口元周君

△出生地 新潟縣
△現住所 新潟、中蒲原、松村
△生年月 弘化三年十月二十七日

松岡商業株式會社重役

新潟縣の富豪を以て知らるゝ者を樋口元周君とす、君は先代樋口順三郎氏の長男にして、弘化三年十月二十七日を以て生れ後家督を相續す、其人謹嚴重厚にして衆望に富む。

馬場 三郎君

△出生地 佐賀縣
△現住所 東京、赤坂、青山、北、六ノ四六一號 電話三三八
△生年月 安政二年八月二十二日

内匠頭 伏見宮家別當 通常會計分任官 宮内官
考查委員 正四位 勳二等



官に任せば執金吾たるべしとは漢代の語なれども今日に於て雲上に奉仕し、九門禁闕に入入するを以て、誰か光榮を感ぜざるものあらむ、馬場三郎君は皇族附職員中の鏘々たる士

にして令名風に内外に高し、君の閥歴、全く此榮譽に包まれる宮内官にして、夙より出で、仕へ格勤の勞を積み、精勵職に勉め謹嚴事に處し、次第に昇進して勅任官たる別當に補せられ、其信望世の欽仰する所となる、また當代得易からざる材と稱すべし、君は佐賀の人にして同縣士族馬場清氏の二男なり、安政二年八月二十二日を以て生れ、明治十五年十月家督を相續す、人と爲り慧敏にして剛直なり、現今内匠頭伏見宮家別當、また宮内官考查委員の職を帯び、正四位勳二等たり。

夫人をフク子と呼び、長崎縣士族佐藤貞男氏の令妹にして温良貞淑の徳に富む、長女菊子は學習院女學部出身の才媛にして、林學士野津賀訓氏を養子に迎へ伉儷相和し、次女朗子

幼にして和氣霽々たる家庭を營む。

中笠 又左衛門君

△出生地 愛知縣
△現住所 愛知、知多、中田
△生年月 元治元年八月十八日

愛知縣多額納稅者 株式會社中笠貯蓄銀行頭取
合名會社中笠銀行理事 半田倉庫株式會社監查役
酢釀造業

中笠家は愛知縣下半田町の豪族にして半六、半左衛門、良吉の三氏と君を以て中笠の四家一族とす、何れも百萬以上の資産を有し常に相提携して實業界を雄飛しつゝあり、半田地方の事業界より中笠一家の勢力を除かば、殆んど殘る處なき程なりといふ、以て如何に尊重せらるゝかを推すべし、君は半六氏の養叔父にして元治元年八月十八日を以て生る、幼名を政助といふ、明治二十六年先代半六氏の長女なみ子の養子となり、三十八年家督を相續して其名を襲ふ。縣下第二位の多額納稅者たり、世々酢の釀造を業とす、山梨縣甲府市魚町に支店を有し、和洋酒の販賣に従事しつゝあり、而して君の精力絶倫なるや家務の傍一族の經營する中笠銀行中笠貯蓄銀行及半田倉庫株式會社の重役として經營の衝に當りつゝあり、實に愛知縣下財界の偉器といふべし。
夫人をさう子といふ、盛田富三郎氏の長女なり、男幸造、三造、紀登子の數子あり、盛田太助氏の五男良吉氏は先代又左衛門氏の養子となりしが、明治三十年八月分家して一家を創立せり、現に中笠銀行其他諸會社の樞要地位に在りて令名噴然たりといふ。

西川孫兵衛君

金物商

△出生地 大阪府
△現住所 大阪、北天神橋
△生年月 電一八二、四三九
明治四年六月九日

西川家は大阪市に在りて屈指の金物商なり、否獨り大阪
と言はず攝津の國に於て最も舊き金物商として名聲隆々たる
金物商店なり、君の商史を案するに其創業は遠く正徳元年に
して實に其六月を以て開始せり、爾來連綿君に至りて十有二
代の歴史を算ふ、是を以て店運の隆昌にして商基の鞏固なる
敢て叙説するの要なかるべし、案するに君は明治四年六月九
日を以て長男として其家に生れ、嚴君を孫一郎氏と言ひ「西
孫」は即ち其家號なり、孫一郎氏は精勵にし氣力あり、販路
を四方に擴張して曾て休止することなく、愆くして明治十六
年五月を以て君其業務を繼承するや、天稟の敏活は忽ち茲に
煥發して異彩を放つのみならず、夙に時代の進運を看破し來
りて歐米の金物を直輸入し、最も主力を鐵道鑛山用の器具機
械に注ぎ、兼て珧耶燒食器の製造並に内外建築用金物類を販
賣取引するを以て、業務暴かに發展して今や旭日の盛觀を開
くに至れり、特に歐洲の大戦亂に會するや、君の貯藏品は山
積當ならざりしより一擧にして莫大の利益を占めたり、眞に
好運の人と謂ふべし、納むる所の國稅は他府縣に互る所のも
のを合して今や二千七百餘圓の多額なるに徴して其資産の大
なるを推知すべし。

令室なを子は同市山田利兵衛氏の次女にして、令息宇之助
氏を長男に定二郎及延子あり、又令妹まさ子は豪商瀧尾喜兵
衛氏の養弟喜次郎氏に嫁し、同よ子は同市東區横堀町水谷

泰造氏に嫁ぎて孰れも賢妻を以て稱せられつゝあり。

高橋福次郎君

諸鳥鶏卵問屋 鳥福主

△出生地 東京府
△現住所 東京、南足立、千住、中組
八四五、電特長、下一五二
△生年月 嘉永五年五月二日

君は先代高橋仲右衛門氏の次男にして嘉永五年五月二日を
以て千住に生る、明治九年二月仲右衛門氏の隠居せしを以て
家督を相續す、屋號を「鳥福」と稱し鶏肉の販賣を業とす、先
代奮闘努力を以て業を起し君は勤儉力行を以て之を繼承す、
而して今や直接國稅約三千圓を納むるの盛況に達せりといふ
令閨里代子は安政六年六月の出生にして、遠藤三七十氏の
令妹なり、正直、福太郎、しぎ子の數子あるの外、三女むん
子は古川繁治氏に、七女小登利子は吉田兎雄氏に嫁して何れ
も琴瑟相和すといふ。

水田長次郎君

漆商

△出生地 大阪府
△現住所 大阪、東、博愛、二ノ一
△生年月 明治八年十月十七日

水田長次郎君は大阪府松澤金助氏の孫にして明治八年十月
十七日を以て生る、人と爲り着實にして勤儉力行業務に熱心
なり、明治三十八年十一月水田うめ子の入夫となる、同家は
世々漆商を營み斯業者間に知られ、君に至つて益々業務を擴
張し取引盛大にして家運隆昌を極む、是れ實に君が超凡の人
物たるに因る、資産は有價證券、土地家屋等を併せて百二十
萬圓以上を算す。

原富太郎君

△出生地 岐阜縣
△現住所 横濱、辨天通、三ノ五〇
△生年月 電五六、五三九
明治元年八月

株式會社第二銀行頭取 横濱火災運送海上信用保
險株式會社 横濱電氣株式會社各取締役 横濱生
命保險株式會社監査役 原合名會社代表社員



君は岐阜の人青木
久衛氏の長男にして
明治元年八月を以て
生る、明治二十五年
横濱の豪商原善三郎
氏に懇請せられ入り
て養嗣子となる、三
十二年善三郎氏の逝
去せしより家督を繼

ぎ勤儉力行以て財を積む、致富の方法多しと雖之を大別すれ
ば投機、高利貸、事業の三となる、而して投機と高利貸とは
唯單に利せんが爲めに、手段方法を選ばざるものにして社會
公共に何等交渉する所なし、唯事業によりて利を殖まさんと
するは、正に理想的致富法にして殖産工業の發達を圖り、國
を富まして自ら亦富まんとするもの歸する所は金錢に在り
と雖、其動機は異なれり、原君の致富法を檢するに全く事業
本位也、一例あり、三井家が其所有する富岡製絲場の經營に
苦しみ、之を放棄せんとの議あるや、明治三十年君は獨力を
以て之を購入し、巨費を投じて之れが擴張に任じ遂に今日の
盛大を致せり、其他横濱火災運送海上信用保險株式會社の取

大正人名辭典 (原富太郎) (手塚平三郎)

締役となり、小野光景、土子金四郎等と共に横濱生命保險會
社を創立して、自ら取締役となり後轉じて監査役となる、而
も此等の事業は君が本業にあらず、君は主として原合名會社
の代表社員として經營に任じ、第二銀行頭取、横濱電氣株式
會社の取締役たり、實に君の如きは富豪の典型なりと謂つべ
し、君資性豁達淡如、所謂横濱商人の精髓を得たもの、一舉
手一投足も猶輕忽にせず、而して人を鑑別するの明ありて、
適材を適所に擧用して手腕を發揮せしむ、實に横濱實業界に
於ける第一人なり。

手塚平三郎君

藍販賣業者

△出生地 德島縣
△現住所 德島、阿波、情嶋
△生年月 文久三年五月三日

藍販賣を業とし多額納稅者を以て德島縣下に知らる、者を
手塚平三郎君とす、氏は手塚平兵衛氏の長男にして文久三
年五月三日を以て生る、明治三十八年一月家督を相續し前名
仲三郎を今の名に改む、縣下屈指の實業家にして勤勉着實、
専ら力を其家業に盡くしつゝあり、資産は土地有價證券を併
せて五十餘萬圓を算す、社會の信頼甚だ厚し、母ちよう子は
同縣武市信太郎氏の姉、令閨やす子は同縣島田武十郎氏の次
女令息歌之介氏は早稻田大學商科の出身なり、此他の令息に
愛次郎、武之助、彌之助、小一郎、安助、平助の諸氏、令嬢
に幸松子、須賀子あり、令妹らん子は同縣中川喜三郎氏二男
徳平氏に嫁せり。

安田善四郎君

△出生地 東京府
△現住所 八重、濱二四二〇
△生年月 明治十年六月十八日

株式會社第三銀行取締役頭取 株式會社安田銀行
株式會社明治商業銀行 株式會社京都銀行 共濟
生命保險株式會社 株式會社金城貯蓄銀行 安田
商事合名會社各取締役

先代善四郎氏は安田家の重臣なり、吾善翁を輔佐して功勞ありしは吾人の所説を俟たざるべし、而して現代善四郎君は名を善吉と呼び、明治十年六月十八日を以て生れ、長するに及びて、善翁の次女峯子と婚し、三十年十月先代を相續して今の名に改む、人となり慎重沈毅にして、事に臨み果斷の勇に富む、是れ第三銀行に頭取たると同時に、爾餘の安田家直轄會社に重役たる所以なる歟、惟ふに第三銀行は日本橋小舟町に所在して、安田銀行と伯仲の間にある大銀行なり、資本金五百萬圓、而して巨大なる積立金と預金を包擁しつゝ、ある現狀に鑑みて、其然るを推知し得べし、善三郎氏之が監督の任に當り頭取たる君にして非凡の手腕あるに非んば、豈今日の隆境に到達するを得んや、家族は長男楠雄を筆頭に次男秀次郎、三男新、四男樗雄、五男良樹、六男祿郎等ありて、秀才の名同族中に旺んるは君の爲めに慶すべし。

山田辰治君

△出生地 新潟縣
△現住所 新潟、中頸城、大瀧
△生年月 明治元年一月二十三日

新潟縣多額納稅者
君は新潟の人山田又治氏の長男にして明治元年一月二十三

西澤武助君

△出生地 滋賀縣
△現住所 大阪、東、南久太郎、三ノ
△生年月 八九、電二八八、二二
安政元年八月八日
△現住所 大阪、東、南久太郎、三ノ
△生年月 八九、電二八八、二二
安政元年八月八日



細心にして剛膽、而して忍耐力に富み以て功を全局に收むるは、由來滋賀縣人の特色なり、疑はゞ西澤君の成功に見よ君は江州の人にして先代西澤武助氏の次男なり、安政元年八月八日を以て、愛知郡八木莊村字野々目に生れ、明治十年七月十三日其家を相續す、先代は曾て長崎に出で太物商を営まんと期待せしも、君不可なりとして諫めて曰く、苟くも商業を以て家を興さんごす、大阪に若く可らず、長崎は外船來往の埠頭なりと雖も、地は西端に偏して商業區域は大ならずと先君豁然として悟る所あり、乃ち君の説に従ひ家を擧げて大阪に移り、萬難を排して業に當る、剛膽にして忍耐力に旺んならずんば、嚴父をして此の舉に出でしむること能はず、爾來奮闘に次に刻苦を以てし、而して遂に明治二十四年に到り綿ネル店を開始せり、是れより明治十八年私立銀行を創立し後第七十九銀行を買収して、之れが頭取と爲り、以て得意の敏腕を振揮し毫も遺憾あるなし、於是乎君の聲名は端なく阪

大正人名辭典 (西澤武助) (菅井豊藏)

日に生る、同十三年十一月嚴父の病歿するに會ひ、君家督を繼ぐ、代々農を業とし縣下屈指の大地主を以て聞え、方今直接國稅一萬千數百圓を納むるを以て、縣多額納稅者の首位にあり、君亦育英事業に深き趣味を有し、郷閭の子弟に學費を給して研學を扶けしこと十年以上に及び、君の恩恵に浴して成業し既に樞要の地位を占め居る者甚だ多しといふ、富者其富を用ゆるの道を得たりといふべし、君未だ春秋に富む、前途の洋々たるを見る。

山中紀三郎君

△出生地 廣島縣
△現住所 廣島、吳、和庄
△生年月 明治八年十月二十八日

株式會社澤原銀行頭取 吳製氷株式會社取締役
吳共立株式會社監査役

君は廣島の人門田保太郎氏の三男にして明治八年十月二十八日を以て生る、明治三十年十一月先代山中忠利氏の養子となり家督を繼ぐ、幼より實業界の人たらんとする志望を有し夙に修養を重ね曾て澤原銀行專務取締役、吳製氷株式會社取締役、吳共立株式會社監査役等に擧げらる、方今澤原銀行頭取たり、君資性誠直、事に當りて熱心なるを以て、君の關與せし事業は何れも皆隆々たる盛運を示さるるなりといふ、今や資産百萬圓に近く、不動産のみにても五十萬を算すといふ夫人をふさの子といふ、亡養父忠利氏の長女なり、忠一郎孝、英三、壽子、田鶴子、紀子、喜美枝、八重子等あり。

府に噴然たり、明治廿八年商勢の前途に考察する所ありて、綿ネル卸賣商同業組合を創立し之が組長に擧げられ、尋で吳服、木綿、洋反物及び綿ネルの各卸賣商の組合を通じて大合同を首唱し、熱心勸説に努めて遂に其目的を達し、明治四十年認可を得て之が副組長に擧げらる、恁て大正五年八月に到り太平護謨株式會社(資本五十萬圓)を設立して社長に就任し今や當面に銳意しつゝあり、而も君此間に在りて市政の發達自治の鞏固に腐心し、公共事業に盡瘁するもの頗ぶる多し、爲に大正二年六月市會議員の改選あるや東區一級より擧げられ、又區會議員として商業會議所議員として當選して今日に至る、何ぞ其德望の旺んにして市政及商務に貢獻するの熱誠なるや、人と爲り公平にして情誼に敦く、而も謙謙にして物に忠實なるに至りて君の如き洵に世間に稀なり、今や百萬の資産を有し直接國稅一千數百圓を納め、世間の尊敬を受けつゝあるは欽すべし。

菅井豊藏君

△出生地 大阪府
△現住所 大阪、東、高麗橋詰、七九
△生年月 安政二年十二月二十六日

大阪藥種商の老舗として將た一大資産家として有名なるを菅井豊藏君となす、君は先代菅井三十郎氏の長男にして安政二年十二月二十六日出生、明治三十八年三月家督を相續す、維新前より引續き藥種商を家業とし、取引盛大にして其名遠近に知らる、資産百萬圓を超ゆ。

宅 德 平 君

△出生地 大阪府
△現住所 大阪、堺、九間、西、一ノ五
△生年月 嘉永元年七月十九日

大日本鹽業株式會社 宅合名會社各社長 堺瓦斯株式會社 大日本麥酒株式會社各取締役 南海鐵道株式會社 東邦火災保險株式會社 株式會社大阪貯蓄銀行各監査役 堺市參事會員

關西實業界の重鎮たる宅德平君は先代宅德平氏の長男にして嘉永元年七月十九日を以て泉州堺の現住所に生る、明治二年四月先代を襲名して家督を相續す、累代の舊家にして素封家を以て稱せられ、清酒醸造を業とす、父祖の遺業を繼承し益其擴張を圖りつゝあり、曾て大阪麥酒株式會社、日本教育生命保險株式會社、株式會社堺貯蓄銀行、堺酒造會社等の重役なりしも之を辭し、前記諸會社の重役を兼ね、尙堺市參事員の公職を帶ぶ、君優雅風韻を愛し最も俳諧を好み斯界に名聲あり、釀春軒九堂の號あり。

長男萬治郎氏、其令聞はな子は名古屋知名の實業家奥田正香氏の二女なり、其間に昌一氏、孝二氏、久子、德治氏、喜子、博夫の諸子あり、長女みよ子は分家し、養女とめ子は他に嫁し、孫増子は宅さく子の家督を相續したり。

井 上 正 言 君

△出生地 茨城縣
△現住所 東京、本所、新小梅、一〇
△生年月 明治九年五月三十日

井上家は清和天皇の後裔たる六孫王經基四代の孫、從四位

久 保 田 政 周 君

△出生地 北海道
△現住所 東京、牛込、仲、二
△生年月 明治五年五月二日



君は北海道平民久保田政學氏の長男にして明治四年五月二日を以て生れ、二十七年十一月家督を相續せり、幼より學に志し竊かに期する所あり、然り、北溟の小龍化して大鵬と成

り、一搏、垂天、圖南の雄飛を實現せんとして、一飛東京に出で錐股繁頸、匪勉怠らずして學業大に進み、乃ち明治二十五年東京帝國大學法科に入り、二十八年卒業して法學士の稱號を得たり、始めより官界に投じて驥足を伸さんご期待せるを以て、一度官途に就くや精勵以て其事務に當り、寸暇を以て修養に餘念なく、快腕大に長上に識られて、各般の事務官となり、能吏才吏の名は到る處に籍甚す、後累進して栃木縣知事に任せられ、三十九年南滿洲鐵道株式會社の創設するや乃ち之が總裁後藤新平氏に拔擢せられて、在官の儘同社理事に擧げられ、爾來之が發展に腐心し、且總裁を助けて企畫する所頗る多し、然るに中央政界の政變は巫峽の雲雨と一般、旦夕を測るべからずして、昨は園公内閣を迎へて、今は桂公の首相たるに及び、其都度官僚の東依西托する者、頻々たる

大正人名辭典 (久保田政周) (小野清吉)

下頼季より出たる筑後守正重の後なり、正重、德川氏に從ひ總目付となり、寛永十七年上總國に於て一萬石を領せり、是れ君が近き祖先たり、後數代を経て下總國高岡藩主となる、君の大人正順氏は、明治元年宮内少輔となり二年、高岡藩知事に九年警視廳に出仕し十七年七月子爵を授けらる、君は正順氏の長男にして、明治九年五月三十日を以て生る、三十七年一月父君の薨去せらるゝや、襲爵して正五位に叙せられ、累進して從四位に陞る。

夫人を敬子といふ、子爵池田清就氏の令姉にして、長男正方氏、二女綾子あり、家門清福に充つ。

田 邊 貫 一 君

△出生地 富山縣
△現住所 富山、富山、星井
△生年月 明治十二年三月一日

大阪點燈株式會社 富山電氣株式會社 株式會社十二銀行各取締役 朝鮮皮革株式會社相談役

君は富山縣人田邊甚三郎氏の長男にして明治十二年三月一日を以て生れ、明治四十年二月家督を繼ぐ、亡父甚三郎氏は大阪に在任して商業に従事せしが其歿するに臨み、君に遺言して郷里富山に歸住して永く同地の爲めに盡瘁すべき事を命ず、君の至孝なるや遺命を遵奉して異はざらんごし、直に富山市に移り嚴君時代より關係ありたる大阪點燈株式會社をはじめ、富山電氣株式會社、第十二銀行、朝鮮皮革株式會社等に關係を有し何れも重要な地位にありて經營に努力しつゝあり。君未だ不惑に達せず、而して此名望閱歷を有す、前途の活躍期して待つべし。

るに拘はらず、幸に君は波瀾の震撼を免かれ、理事として奮闘すること多年、後内務省に轉じ土木局長となり、更に轉じて東京府知事たるに至れり、官魂吏腕共に群を抽んずるもの有るに非んば、豈猝かに這般の運命に接觸するを得べけんや大隈内閣の末造内務次官に拔擢せられしが、寺内内閣の成立するに及んで職を辭せり、而も君の如き手腕力量共に兼備する人士は、政變ある毎に必ずや進境を來して、竟に閣班の人たるに到らんは、期して俟つべき也。

夫人藤子は北海道高等女學校出身の才媛にして、令姉さく子は學界に噴々たる男爵濱尾新氏の夫人にして、同仲子は故工學博士長谷川芳之助氏の未亡人、同しん子は工學博士曾彌達藏氏の令聞として才媛の名あり。

小 野 清 吉 君

△出生地 岡山縣
△現住所 大阪、西、中口、一
△生年月 弘化三年十二月三十日

機械船舶製造業

君は備中の人、小野鶴造氏の長男にして、弘化三年十二月三十日を以て生る。明治元年、大阪に來り、外人の經營せし所の造船所に入りて、造船術の實地を習得す。明治十一年辭して自ら鍛冶職を營み、爾來十有七年間、曾て他事を顧みずして、専ら其職に盡す。努力の効空しからず、二十八年西口沖江町に工場を新設して、船舶の建造に従事するを得るに至れり。殊に歐洲戰爭の起りてより船腹の不足甚だしきを以て造船を業とする者、皆巨利を占めざるなし、君此機運に乗じて敏活に行動せしを以て、忽ち百萬長者となれり。

太田 清藏君

△出生地 福岡縣 東京、豊多摩、千駄ヶ谷
 △現住所 田原山一六四、電話、芝、二六四〇
 △生年月 文久三年八月十九日

株式會社福岡銀行頭取 蓬萊生命保險相互會社々
 長 徴兵保險株式會社專務取締役 株式會社十七
 銀行 日本鋼管株式會社 大村灣真珠株式會社
 鶴見埋築株式會社 博多灣鐵道株式會社 筑前參
 宮鐵道株式會社 電氣製鐵株式會社各取締役 臺
 灣鹽業株式會社 大野瓦斯マントル株式會社各監
 査役 博多汽船漁業株式會社相談役



徴兵保險株式會社
 の創立は明治三十年
 七月なり、爾來十有
 九年の久しき事業に
 張弛あり社運に盛衰
 ありと雖も、之が經
 過を通觀して成績を
 檢閲し來れば、社業
 は着々として進歩し
 發展しつゝあるは世間の環瞻する所なり、而も太田清藏君の
 專務取締役に就任するに及んで、從來幾多の弊資を刷新し、
 茲に新發展の運命を啓くと同時に、一面には東京銀座の中央
 に本社新築の大工事を興して、今や輪奐なる大建物を仰視す
 るに至れり、以て君の手腕の絶倫にして經營的才能の拔群な
 るを知るべし、君は筑前福岡市の人にして文久三年八月十九
 日を以て生れ、襁褓中蚤くも先代清藏氏に養はれ、明治十三

を鞏固にし、同時に社内の組織に一大改革を斷行して、更に
 積極的方針を採り斯界に邁進せる以來其日尚太だ淺きに拘ら
 ず、社會の信用忽ち一變して他の先輩會社と雁行して日に旺
 盛を見るに至れり、嗚呼何ぞ其手腕の靈且敏にして統帥の識
 量に卓越なるや、世間驚嘆し曰ふ、太田君は鬼才縱横にして
 實業界の偉物なりと、然り前來叙述し來りたる事歴を見れば、
 思半ばに過ぐるものあらむ。

令閨品子は養父清藏氏の長女なり、而して家族は長男新吉
 養子圭助、女島子、貞子、男辨次郎、凱夫、清之助及令孫數
 人ありて、一家の繁昌亦世間の知る所なり。

齋藤 喜十郎君

△出生地 新潟縣 新潟、東蒲前通七
 △現住所 新潟、新潟、東蒲前通七
 △生年月 元治元年七月三日

新潟縣多額納稅者 越佐汽船株式會社々長 株式
 會社新潟商業銀行專務取締役 新潟硫酸株式會社
 株式會社新潟貯蓄銀行各取締役 株式會社新潟鐵
 工所 新潟水力電氣株式會社 越後鐵道株式會社
 各監査役 新潟商業會議所議員

新潟縣の一大富豪として事業界に重鎮たる齋藤喜十郎君
 となす、君は亡齋藤庫次郎氏の長男にして元治元年七月三日
 を以て生れ、明治三十二年十月先代喜十郎氏の養子となり、
 同三十七年三月家督を相續し、前名庫吉を今の名に改む、越
 佐汽船株式會社々長、株式會社新潟商業銀行專務取締役とし
 て責任の衝に立ち、業務益々盛大なり、其の經營の才幹尋常
 にあらざるを知るべし、信望勢力大にして實業界の各方面殆

大正人名辭典 (齋藤喜十郎(赤松與兵衛)(瀨川芳男)

年二月家督を相續す、代々酒造及肥料業を營み是を以て君亦
 父祖を佐けて家業に奮勵せり、愆して二十一年市町村制の實
 施となるや福岡市に於ける初頭の市會議員に舉げられ、爾來
 改選毎に當選して市政に貢獻するもの多大なり、此間所得稅
 調査委員に舉げらるゝもの亦前後兩度なり、而して廿二年以
 來筑前銀行頭取、福岡貯蓄銀行頭取、博多財産取調委員、
 區會議員同委員、學區會議員、徴兵參事會員等に選舉せられ
 公職の下に地方自治に努力せる其功や枚擧に遑まらず、而
 して廿四年に至り田川採炭株式會社の監査役と爲り、又博多
 商業會議所常議員、同副會頭等に舉げられ、殊に商業會議所
 副會頭として其任に居ること十餘年の久しきに亘り、多大の
 功勞を以て銀盃を受け、後再選せられて遂に會頭と爲り兼て
 市參事會員として博多灣改築並びに築船場株式會社の創立委
 員に選まる、又創業せし會社は廿九年博多絹織株式會社
 にして之が成立の後社長と爲り、又廿七年には九州製油株式
 會社の取締役に爲り、廿八年には博多電燈株式會社の社長に
 上任し、三十三年鐘ヶ淵紡績株式會社の監査役、三十四年岡
 山紡績株式會社取締役に爲り、愆て三十五年九州鐵道株式會
 社の監査役として同鐵道の國有當時迄就任し聲望全縣下に隆
 々然たり、於是乎四十一年の總選舉には無競争を以て衆議院
 議員に當選して、其政治的潛勢力の偉大なるを立證せり、今
 や専ら前掲諸會社の重役として獨得の敏腕を揮ひ、豫期以上
 の成績を挙げつゝあるは、敢て多辯を要せざる所也、但附言
 すべき一事は蓬萊生命保險の近況是なり、君の社長たらざり
 し以前は遺憾ながら微々として振はざりしも、大正五年君の
 社長として就任するや從來缺損せる全部を補填して茲に社礎

んど君の關係なきはなく、右の外新潟硫酸株式會社、株式會
 社新潟貯蓄銀行各取締役、株式會社新潟鐵工所、新潟水力電
 氣株式會社、越後鐵道株式會社各監査役として重きを爲し、
 又新潟商業會議所議員として鏘々たるものなり、大正四年三
 月衆望を負ひ代議士に當選し、國士の面目を發揮せり、資産
 は百三十萬圓を算し、直接國稅一萬圓を納さむ。

赤松 與兵衛君

△出生地 大阪府
 △現住所 大阪、東、備後、二ノ二
 △生年月 文久三年十二月二十四日

君は亡赤松與兵衛氏の長男にして文久三年十二月二十四日
 を以て生れ、明治十七年一月家督を相續す、同二十二年七月
 前名松次郎を改めて與兵衛の名を襲ぐ。大阪市屈指の吳服商
 にして信用最も厚く、取引四方に廣く、業務益々盛大なり、
 君が商才の超凡なるにあらずんば曷んぞ斯くの如くなるを得
 んや、資産は六十萬圓を超へ直接國稅約七百圓を納む。

瀨川 芳男君

△出生地 廣島縣
 △現住所 廣島、西地方
 △生年月 明治四十三年三月

倉庫業

仲仕より身を起し、勤儉力行、一代にして八十萬圓の富を
 積める先代岩造氏は、實に立志傳中の入たり。大正五年二月
 不幸病歿せしを以て、君乃ち其家督を繼げり。君は明治四十
 三年三月の出生にして、出藍の譽高し。

佐藤進君

△出生地 千葉縣
△現住所 東京北區西橋本三丁目
△生年月 弘化二年十一月廿五日

順天堂病院長 陸軍々醫總監 正四位 勳二等
醫學博士 男爵



君は刀圭界の霸王にして、當代稀觀の國手たり、而も一大病院たる順天堂病院の經營者として、其名中外に喧傳せらるる而して君天職に忠實なるのみならず、曠世の氣略あり、曾て

日清媾和談判に際し清朝の傑物李鴻章の廣島に來りし時、兇漢の爲めに負傷するの不幸を生ずるや、君特に主治醫を命ぜられ、妙手を揮つて忽ち快癒せしむ。君の名聲之より支那四百餘州に籍甚たり。千葉縣の人、弘化二年十一月二十五日を以て生る、初め舊佐倉藩醫佐藤尙中氏に就き醫學を修め其才學は深く信認せらる、所となり終に其後を襲ふて其の姓に改む、戊辰の役從軍し傷兵の爲め迅速應急の治術を爲し聲名あり、後陸軍大學病院頭取となる、明治二年伯林大學に入り業を卒へて奧國に遊ぶ、八年順天堂病院の成るに及び父君と共に診療に従ひ、十年陸軍々醫監に昇進し、十五年順天堂病院院長となり、二十一年醫學博士の學位を授けられ、後陸軍々醫總監に陞任し、正四位勳二等に叙せられ、四十年華族に列

し男爵を授けらる。君軍籍にあり醫術を以て獻替せると共に業餘東京本郷茗溪橋畔に宏莊なる建築と最新式の設備を凝らせる順天堂病院を開始し院長として一般の診療に應じ、其他幾多の貴顯紳士に起死回生の神祕を施し今や斯界の元勳として一世の推尊を受け、一七の妙技を以て皇室の藩屏に列し位勳赫々たるもの斯の如きは豈單り學界の光榮のみならんや。夫人を静子と呼ぶ。賢良の稱あり、獨力女子美術學校を經營して、女流美術家の養成につとむといふ。養子達次郎氏は醫學博士にして、現に順天堂病院に在りて事實病院長の職務を執りつゝあり。

黒崎眞也君

△出生地 山形縣
△現住所 旅順新市街大道町九官舎
△生年月 明治十一年五月五日

關東都督府事務官 庶務課長 正六位

君は明治十一年五月五日山形縣米澤市花澤信濃町に生る、幼より學に志し、郷黨皆君の俊才に敬服す、郷里の中學を卒業し、第二高等學校を経て東京帝國大學法科大學政治科に入り、穎才衆を歴して明治三十八年七月、卒業し、學士の稱を得て研鑽止まず、翌年十一月文官高等試験に及第し、四十年八月香川縣事務官補を拜命す、次で四十一年四月奈良縣事務官に榮轉し、敏腕を揮ひて治績大に擧る、四十三年七月に大分縣事務官警察部長に轉じて令名あり。大正二年擢んでられ關東都督府事務官民政部庶務課長に任せられて今日に至る、有爲の士として上司の信認益々厚く、僚友に敬重せらる、前途益々洋々たり。

高山道純君

△出生地 長野縣
△現住所 東京、芝八丁目
△生年月 明治十二年七月二十八日

富士製紙株式會社常務取締役

信州は我國に於けるアルプス系の山嶽國なり、而してアルプス山系の特色を發揮して其風光を天下に擅まゝにするものを南方信州の諏訪郡を以て第一とす、然り瑠璃一碧、湛として鏡面の如き諏訪湖は、流れて漾々たる天龍川の水源地と爲り而して兀たる唐澤山は倒に湖水に映じて、富嶽亦波間に搖曳するを見れば、誰乎又山水の秀美に嘆賞せざらんや。

君は明治十二年七月を以て、詩的山水秀美の諏訪町に生まる、幼にして學に志し、一旦學業を卒業するや東京に入り、第一高等學校に入學し、次で帝國大學法科に學ぶ、研鑽意らず學績大に進み、三十七年を以て卒業するや、日本郵船會社の招く所と爲りて文書課に入り、忽ち重役の信任敬愛する所と爲りて後仁川支店に轉勤す、但君は見る所ありて永く航海運輸の業を欲せず、是に於て乎四十一年東海紙料株式會社の創立するや、君は郵船會社を辭任して紙料會社の常務取締役と擧げらる、其翌年富士製紙株式會社に轉じて會計課長と爲り、後倉庫課長を兼勤し、大正元年十二月竟に常務取締役と推され以て今日に及ぶ。

君算數に精しく又事務的手腕に敏なり、然れども、資性剛直にして苟も人に下らず、而も意に満たざれば、重役と言はず社長と言はず所見を取りて以て動かす、然り惻巧辨聰は君の先天的賦與する所にして、是非黑白を明らかにして擔當事務を處理するに憚らざるは、君の短所にして而も長所なり、

然り君が此事を荷もせず、侃諤として理非を明にし、以て會社の事務に執掌するが故に、同僚、君を目するに彈正大綱を以てするもの偶然に非ざる也。

令政正代子は男爵目賀田種太郎氏の次女にして明治十九年六月三十日を以て生れ、御茶の水高等女學校を卒業して才媛の譽れ高し、伉儷の美にして優なるは同僚の羨望する所なり願ふに君は春秋に富み前途の運命亦洋々たるものあり、今後倍々實業界の經驗を積み更に其手腕の老熟するに至らば、一方の雄鎮として斯界に畏敬せらる、や必然たり。

芝田大吉君

△出生地 兵庫縣
△現住所 大阪、南本町二ノ四
△生年月 嘉永五年四月十六日

株式會社大阪株式取引所監査役 大阪商業會議所 議員 大阪株式取引所仲買人

芝田大吉君は兵庫縣芝田雲市氏の二男にして嘉永五年四月十六日を以て生れ、明治九年六月分家して一家を創立す、明治二十六年株式仲買業を創始して今日に至る、現時大阪株式取引所仲買人中の最古老にして同業者の敬重する所となる、其人頭腦緻密、手腕老達、信用最も高く、終始一貫業務の發展を圖り、今日の成功あるを見る、而して君は株式會社大阪株式取引所監査役の重任にある外、大阪商業會議所議員に擧げらる、君が傑出の人たるを知るべきなり、資産は有價證券土地、家屋等を併せて百萬圓以上を算し、直接國稅三千餘圓を納むといふ。

令聞を子、令息榮一氏あり、一家圓滿なり。

上松 泰造 君

△出生地 岐阜縣
△現住所 岐阜、稲葉、鏡島
△生年月 明治元年九月十七日

貴族院議員 岐阜縣多額納稅者 株式會社濃飛農工銀行 株式會社岐阜貯蓄銀行 株式會社十六銀行 株式會社鏡島銀行各取締役 岐阜縣農會副會長 勳四等



君は株式會社本田銀行の取締役たる關谷醇三氏の弟にして關谷與藤治氏の二男を以て、明治元年九月十七日に生る。後先代治郎一氏の養子となり、其長女よね子と婚して明治三十一年一月家督を繼ぐ。上松家は代々農を業とし、同地方の地主を以て稱せられ、直接國稅五千數百圓を納むるを以て縣多額納稅者の首位に在り、現に其互選により貴族院議員に擧げられ、其職に在り。曩に日露戰役の功により勳四等を授けらる、猶濃飛農工銀行、岐阜貯蓄銀行、十六銀行、鏡島銀行等の取締役として、經營の衝に當りつゝあるの外、岐阜縣農會の副會長たり。

夫人は前掲よね子にして、明治十年四月の出生たり。貞節を以て聞け、内助の功頗る大なり。俊之助、榮子、茂子、絹子、峯子等の數子あり。

中野 太右衛門 君

△出生地 大阪府
△現住所 大阪、南天王寺、堂ヶ芝
△生年月 安政四年四月二十六日

内外綿株式會社取締役社長

君は大阪の人中野嘉太郎氏の二男にして安政四年四月二十六日を以て大阪に生れ、明治八年十二月家督を相續す。代々棉花を業とし、資産百萬を有する名望家にして、精力絶倫、機略縦横なる事業家を以て稱せらる。明治二十年、内外綿株式會社の創立に奔走し、其成立するに及んで、推されて取締役社長となり、現に其經營に當りつゝあり。

中原 萬二郎 君

△出生地 大阪府
△現住所 大阪、東備後、四
△生年月 明治三十二年三月二日

洋織物商

君は大阪の人、中原萬助氏の二男にして、明治三十二年三月二日に生る。未だ十歳に達せず、不幸にして嚴君の溘然として逝去するに會ひ、君は早うして家督を相續するに至れり實に明治四十二年六月なりとす。中原氏は代々質商として著名なるのみならず先代より洋織物商を兼營し、方今直接國稅約二千圓を納むるの盛況に達せりといふ、是れ蓋し君の幼少を助けて、大成せしむる補佐其人を得たるが故ならずんばあらず。

君未だ妻らず、令妹きみ子あり、母堂こう子は君を補佐して家政を攝理しつゝあり。外に令姉この子は京都の人景山下治氏に嫁して、琴瑟和樂すといふ。

綿貫 英隆 君

△出生地 山口縣
△現住所 東京、下谷、中根岸、三三
△生年月 元治元年十月十二日

合資會社日興社代表社員 岩槻電氣軌道株式會社 高濱電氣株式會社各專務取締役 銚田電氣株式會社 東電電氣株式會社 水海道電氣株式會社 行方電氣株式會社 佐原電燈株式會社各取締役

君は電氣事業界の權化にして常總及東北地方に亘りたる斯界の覇者なり、而も現狀を以て甘んずべきに非ず、尙進むで電燈を東北各地に點じ、夜を變じて晝と成し、暗を化して明煌々たる天地を割割せずんば、斷じて熄まざるの概あり、此意味に於て君は關繫地方の恩人と謂はざる可らず、元治元年十月十二日を以て山口縣熊毛郡室積町に生る、即ち故松村吉兵衛氏の次男なり、後出で、綿貫來太郎氏の養子と爲り、少壯にして室積町の戸長役場に奉職し、就職四年を経て山口縣廳の收稅部に奉職し居ること三年精勤を以て稱せらる、但君は天資豪邁にして永く折腰の胥吏たるに甘んずる者にあらず是を以て後辭職して三井鑛山に入りたるも、時機未だ會せず中途にして藤田組に入り、臺灣瑞芳鑛山監督を命ぜられ、専ら鑛夫を督勵して殊功を樹て、居ること四年多大の事績を擧げて明治三十四年に辭し、乃ち大阪九條町に獨立して、綿貫鐵工場を創設し、多年の抱負を實行せんと期待し、専ら關西方面の鐵道用具及び各會社の鐵器を製造し、盛んに事業に努力せしも深く思ふ所ありて同工場を他人に譲り、大連に渡りて鹽田事業を經營せんと企畫する所ありしも、關東都督府は個人に對し許可せざる方針なるより、已むなく倉庫事業に移り

乙宗 源次郎 君

△出生地 大阪府
△現住所 大阪、南、順慶、通、三ノ一
△生年月 明治十九年五月十二日

小間物商 乙宗商店主

乙宗源次郎君は大阪市南區屈指の一大富豪なり、君は先代乙宗とく子の男にして明治十九年五月十二日を以て生れ、同二十三年六月家督を相續す、乙宗商店主として小間物商を營み、業務最も盛んにして其取引廣且つ大、店名四方に聞ゆ、資産二百萬圓を算じ、直接國稅約六千圓を納さむ。

成清信愛君

馬上金山主



△出生地 福岡縣 大分、遠見、日出、二六六
△現住所 同上
△生年月 明治十九年一月二日

君は明治十九年一月二日福岡縣山門郡瀨高町大字小川に生る。父を博愛と云ひ有名なる馬上金山の創業者也、母は以恵子と云ひ、夫君の事業を成功せしめたるの人也。君、生れて

資性濃厚、自ら長者の風あり。思想健實にして華美を喜ばず父母に事へて孝養至らざる所なし、弟一人あり、勝介と稱す友愛殊に深かりき。不幸にして、昨大正五年十一月七日病を以て逝く。君、昨年一月父を喪ひ、五月母を喪ひ、十一月弟を喪へり。君哭して曰く。

一 哭嚴君遺骸。二 哭慈母不堪傷。今歲於我噫何歲。三 哭阿弟真斷腸。欲訴心事何處所。悲風慘雨仰彼蒼。

かく哀傷の感に堪へざりしと雖、よく父の遺業を繼承し、拮据經營怠らず、大に事業を發展せしめたりき。馬上金山の今日ある、固より父君の力に頼るに雖、君の經營よろしきを得ずんば、今日の盛大を成し能はざりし也。

君の家は、もと庄屋にして、一郷の名望家なりき。家亦頗る富有なりしが、父君の事業に於ける企業心と家國に對する

政治運動とは、瞬く間に一家の資産を蕩盡し、二十餘年の後馬上金山を得て、漸く家政を回復することを得たり。君の家計が如何に困難なりしかは、父君の山氏が成功の後、人に示したる左の一絶を以て之を知るべき也。

夢遺債鬼

百鬼縱橫攻撃頻。覺來欲問夢耶真。誰知二十餘年事。漸作破顏長笑人。

君弱年にして、かゝる間に生長し、備に一家頽廢の苦痛を嘗め、熟々人情と世態を味ひ、天然の美質を玉成すること少なからず。筑後柳河の儒家横地尙綱氏を聘して、日々修養怠らず。左の一絶は、以て君の意の在る所を察するに足るものあり。

丙辰歲晚書感

欲酬君父未成勳。而立今年也此曠。忙裏猶存修養術。朝々玩味孟柯文。

君、今や事業を擴張して、大分市に鐵工所を起し、また鹿兒島縣に於て金山經營に着手し、馬上金山と共に大に社會に貢獻する所あらんと欲す。君常に語るらく、今少し餘力を得ば、南洋と支那とに手をつけて見たし。以て君の抱負の在る所を知るべき也。

久須美秀三郎君

△出生地 新潟縣 新潟、三島、嶋田
△現住所 新潟、三島、嶋田
△生年月 嘉永三年三月十五日

越後鐵道株式會社社長 株式會社社長岡銀行取締役

君は新潟縣平民久須美毅堂氏の長男として生れ、明治九年一月亡叔父三郎氏の後を受けて家督を相續す。家に巨萬の富

大橋平右衛門君

△出生地 岡山縣 岡山、都窪、倉敷
△現住所 岡山、都窪、倉敷
△生年月 嘉永二年八月十五日

岡山縣多額納稅者 農業

岡山縣下の大地主にして且つ富豪を以て有名なるを大橋平右衛門君となす。君は岡山縣先代大橋平藏氏の長男にして嘉永二年八月十五日を以て生れ、後家督を相續す。素封家の當主として人格高く、信望頗る多く、其小作人を愛撫するや至誠温情を以てし、皆悦服せざるはなし、資産は土地を主として百五十萬圓を算し、直接國稅約九千圓を納さむ。

令閨佐和子は岡山縣士族龜山九一郎氏の二女にして賢貞なり、令息剛吉氏、令女悦子あり、令姉壽美子は其夫緒形五郎氏と共に分家し、令息康之甫氏、同祥介氏も亦分家し、姪ごう子は岡山縣山口源次郎氏に、令女睦子は廣島縣林一美氏に嫁せり。

稻葉彌吉君

△出生地 京都府 京都府
△現住所 京都府、相樂、本津

京都府多額納稅者 土木請負業

公債の土用手を爲すを以て、名聲四境に噴々たる稻葉彌吉君は、土木請負を專業とし、社會の信用厚く、部下の信頼を受くること深きを以て、殊に大工事を要する場合は、必ず君の手を俟たざるなしといふ。宜なり、資産二百萬圓に近く京都府下多額納稅者の一人として、名聲の隆々たるや、君猶春秋に富む、力めて已まざれば、必ずや府下第一人者たるに至るべき也。

を積む縣下屈指の豪農にして且つ名望家を以て知られ、現在

動産不動産を合し約百萬圓の資産を有す。君曩に小學教員として縣下の小學校に教鞭を執りし事ありしが、後擧げられて副大區長或は戸長となり、次で縣會議員となり尙ほ衆議院議員として日比谷原頭に其勇姿を現はし堂々國政の爲めに縣事業の爲めに多大の力を盡したる所ありきと云ふ。曾て地方新聞中の先驅として知らるゝ越佐新聞社長たりし事あり、日本石油株式會社に重役たりし事あり、尙ほ彼の北越鐵道株式會社の創立に際しては特に功勞ありの經營に參劃して亦甚だ益する所大なりき。現在前記諸會社に重役として樞要の地位を占むるのみならず其過去の閱歷と過去の功勞とは燦然として君の身邊に光輝を放ち縣人皆君を徳とせざるなしといふ。

關甚吉君

△出生地 奈良縣 奈良、眼戶
△現住所 奈良、眼戶
△生年月 明治三年八月

株式會社六十八銀行取締役 奈良市學務委員 太物商

君は萩田元三郎氏の三男にして、明治三年八月を以て、奈良縣添上郡横井村に生る。幼名を由太郎といふ、明治二十七年二月關氏の養子となり、亡養父甚吉氏の死跡を繼ぎ、甚吉を襲名す。世々吳服太物を業とし、資産六十萬圓に達し、屈指の豪商たり。而して君公共に貢獻する所甚だ大にして、市會議員たりし事二回に及び、曩に市小學校増築委員に擧げられ、現今市學務委員として市の教育に盡瘁しつゝあり。而して又六十八銀行取締役として其經營に參與し令名噴々たり。

柴田 榮吉君

△出生地 東京府 南多摩、八王子、神
△現住所 東京、南多摩、八王子、神
△生年月 安政三年六月十五日

八王子市長 八王子商業會議所特別議員 八王子
瓦斯株式會社取締役 八王子燃絲業組合顧問 勳
七等



君は武藏の人竹松
善右衛門氏の四男に
して安政三年六月十
五日北多摩郡小川村
に生る、幼時商業見
習の爲め燃絲業柴田
家に店丁となる、爾
來精勵敏活能く主人
に使へて信用を博し

其長女と配せられて養子となる、時に年二十歳なり、爾來益
家業の發展に努め、各地博覽會共進會等に際し出品協會長又
は理事に擧られ且製品を出して受賞すること十數回に及ぶ、
明治二十六年株式會社燃絲取引所を起して理事たること八年
同二十九年、燃絲業組合を組織して同組合長となり、又郡會
議員、郡參事會員、八王子助役に選ばれ、尋で日露役の功に
依り勳七等に叙せらる、爾來町會議員を経て、八王子町長と
なり、同地商業會議所特別議員を兼ね、大正二年八王子瓦斯
株式會社を設立し監査役となり、現時同取締役に擧げられ、
八王子燃絲業組合顧問其他幾多の公職を帯びて聲望愈高し、
前に市制事務執行を命ぜられ、市制の準備を爲し其市制實施

と同時に、八王子市長に擧げらる、即ち君は八王子町に於け
る最終の町長にして又八王子市に於ける最初の市長たり、其
靈腕善治を擧げ來るに非ずんば何ぞ斯くの如くなるを得んや
内室をキヌ子と呼び、此間六男あり。

村上隆太郎君

△出生地 廣島縣
△現住所 廣島、佐伯、御前
△生年月 弘化四年一月三十日

合名會社村上銀行頭取

君は廣島縣佐伯郡の名望家村上家の先代、傳三郎氏の長男
にして、明治十九年家督を相續す。君の家は代々庄屋を勤め
來りしを以て、その關係上維新當時少長用掛を勤め、明治二
十年より同三十一年迄は、居村地御前村の村會議員となり、
終始村治の爲めに盡す所ありたり。夙に農村金融の必要を感
じ、明治三十一年合名會社村上銀行を起し、現に同行の頭取
として、附近の信望を一身に集む。現在資産約百萬圓を有す

村田長兵衛君

△出生地 大阪府
△現住所 大阪、南、三ノ三
△生年月 嘉永六年七月十四日

吳服商

君の家は代々大阪市東區南本町に於て吳服業を營み、然も
大阪百萬長者の一人として知らる。君は先代長兵衛氏の長男
にして明治八年家督を相續し、幼少より實地に經驗したる祖
業を襲ぐ。君資性温厚にして篤實、所謂大阪式商人の長所を
具備し、謙讓能く近隣に其德望を保てり。方今資産約百二十
萬圓、三千圓に垂々とする直接國稅を納む。

齋藤 義一君

△出生地 栃木縣
△現住所 東京、小石川、久野、六九
△生年月 明治八年九月二十九日

東京精米株式會社支配人

東京精米株式會社は明治二十九年三月の創立にして資本金
五十萬圓の大會社なり、然るに先年大暴風雨に加ふるに海嘯
の襲ふ所と爲りて、京橋區月島に所在せる會社は意外の損害
を被り、解散の悲觀説さへ起りたる當時君は一部の株主よ
り推薦せられ、支配人として就任するに至れり、於是乎君は
一方に於て資本を收縮すると同時に、他方に於ては内部の整
理改革を斷行し、銳意熱心、其業務に努力せるより、着々
して事業の進捗を告げ、今や全く創痍を癒すに至れり、以て
君の手腕の尋常に非ざるを知るべし、栃木縣鹽谷郡喜連川町
字鷺引の豪農村上覺治氏の三男なり、明治八年九月廿九日を
以て生れ幼より穎才の譽あり、夙に縣立中學校を卒業して三
十年笈を東都に負ひ早稻田大學政治科を専攻せり、爾來研鑽
殆んど寢食を忘るゝものあり、是に於て乎三十四年優等の成
績を以て卒業するや、尙齋與を極めんとして經濟專攻科に入
り、後出て日本鐵道株式會社の聘する所となりて、活潑なる
職務振を發揮し重役の信認を博す、居ること二年清國郵傳部
よりの聘用に餘儀なくせられ、赴任して浙江鐵道學校の講師
と爲り大に盡瘁する所あり、在清約三年にして任滿ち歸朝し
起業界に従事せんと期待しつゝある時に際し、精米會社の被
害問題は動機と爲り乃ち茲に決心して支配人として上任する
に至れり、君今や不惑を超えて手腕亦老熟せり、而も學理に
精通して見聞に博し、且人に接して快澗に物に處して果斷な

り、會社は適材を得たと同時に、君亦發展の好地位を得た
りと謂ふべき歟、君曩に齋藤氏の養子と爲りたるを以て其姓
を冒すに至る。
母堂を輪子と言ふ。而して夫人喜志子は貞淑なり、今や四
男四女を擧げ和氣家庭に霽然たり。

井上 重藏君

△出生地 大阪府
△現住所 大阪、南、天王寺、稚高
△生年月 明治十九年九月

燐寸製造業

燐寸製造業の有望にして、國產獎勵の主要事業たるは今更
説明を要せざる所、而も先代井上貞治郎氏が斯業を創始した
る頃は、未だ微々たるものありき。唯堅忍不拔の努力に依り
て、着々として盛大に赴き、嚴君の晩年には既に同業者の牛
耳を占めるの盛業に達しき。君の此業を繼ぐや、乃ち奮闘努力
を以て、倍々其大を加へ、今や百萬の資産を擁す。

柴谷伊之助君

△出生地 大阪府
△現住所 大阪、東成、天子寺
△生年月 文久元年五月三十日

阪南土地株式會社取締役

大阪府下の富豪として知らる、者を柴谷伊之助君となす、
君は大阪府綿谷庄七氏の二男にして、文久元年五月三十日を
以て生れ、明治十三年八月先代とく子の養子となる、其人謹
厚にして勤勉、富んで驕らず、孜孜として家運の發展に力む
現に阪南土地株式會社の取締役として參畫の功多し。

中村 清藏君

△出生地 東京府 東京市、佃、五
△現住所 東京市、佃、五
△生年月 萬延元年十二月二十四日

株式會社倉庫銀行頭取、株式會社中加貯蓄銀行、日本護謨株式會社各取締役會長、株式會社金城貯蓄銀行、株式會社明治商業銀行各取締役、帝國海上運送火災保險株式會社監查役、上清商店主、勳五等



上清と稱せられ米穀界の驍將として雄名を轟かしたるものを中村清藏氏と爲す君は東京の人にして萬延元年十二月廿四日を以て深川區に生る、幼名を半次郎と云ひ、明治二十九年

先代養叔父清右衛門氏の後を相繼す、資性温厚にして人と争はず、店員其他の使用人に對しても最も寛大にして懇切を極め、毫も難きを求めず、是を以て人皆悦服して盡す所あらん事を期す、君頗る商略に富み、大勢を察するに巧なり、米穀味噌問屋を營み、尙ほ倉庫業を兼營せり、明治三十七八年に當り、日露兩國々交破裂し、我國滿洲の野に進軍するや、君は我が同胞の最も嗜好物たる味噌を供給せんとせしに、従前のまゝにては滿洲の寒地に輸送するも、氷結して何の用をも爲さざるを察し、之を乾燥して粉末味噌を製造するの法を考

へ、之れを糧秣廠に贈りて試験を爲せしに、大に賞讃を得、倏ちにして數萬樽の御用を命せられたり、酒精すら尙ほ且つ氷結せる滿洲に於て、我が出征軍人が味噌汁を味はひて、大に其勇氣を回復し得たるは、一に君の苦心の結果に由れるものにて、戦終りて政府其功を賞し勳五等を授けらる、君は又頗る店員を愛撫し、之れを遇すること家族と異ならず、同區古市場町に居住せしむべき家を建設し、衣食住に就きて安心の道と爲るが如き、殆ど他に類例を見る能はざる所なり、斯くの如く君は米穀問屋及倉庫の業を營み、繁劇なる味噌醸造の業を兼營しながら、明治三十四年加藤金之助氏等と共に、株式會社中加貯蓄銀行を組織し、之れが頭取たり、翌三十五年又株式會社倉庫銀行を創立し、選ばれて頭取となり今日に及べり、而して尙ほ明治商業銀行、金城貯蓄銀行、帝國海上保險會社其他の重地にあり、又深川區會議員として重きをなせり。

夫人せい子亦た能く内政を整理し、君をして毫も内顧の憂なからしめたりと云ふ、長女貞子は養子郁次郎氏に配し、男清平、女てる子、同八重子、同じづ子、同るつ子等あり。

大崎 代吉君

△出生地 大阪府 大坂市、安土、四ノ四二
△現住所 大阪府、安土、四ノ四二
△生年月 明治二十八年三月一日

大崎組商會主 雜貨商

君は大阪府先代大崎代吉氏の四男にして幼名を友二と稱し同四十一年十一月家督を相繼し、幼名を改めて先代の名を襲ぐ、家産は營業資本、不動産等を併せて六十萬圓を算す。

久保 要藏君

△出生地 群馬縣 群馬縣、兒玉、五
△現住所 群馬縣、兒玉、五
△生年月 明治八年九月二十八日

南滿洲鐵道株式會社總務部事務局庶務課長 總務部交渉第一課長 同第二課長 大連汽船株式會社 取締役 從五位 勳四等

君は群馬縣佐波郡三郷村の人にして酒井下總守忠一子の家臣久保猪之助氏の長男なり、明治八年九月二十八日を以て生れ、十七年十二月家督を相繼せり、案するに三郷村は伊勢崎町との隣接地にして機業を以て天下に有名なる地方なり、君此土に生れて活潑秀雋、自から群童と異なるものあり、夙に地方教養に學びて後東上し、研學多年穎氣益々煥發して、三十九年十月を以て高等文官試験に合格し、翌年二月大藏省に出仕し、茲に天才を發揮し其手腕力量は上長の認むる所あり出で秋田縣稅務監督局長に拜命す、居ること久しからずして在官の儘一躍南滿鐵道會社に入りたるは四十年三月の事なりき、是れより君當面に精勤し功績顯著なるものあり、四十五年官命を帯び歐米各國の鐵道事業を視察し、其智見を擴めて大正二年一月歸社するや、直ちに總務部事務局庶務課長に擧げらる、尋で總務部交渉局第一課長と爲り、尙ほ第二課長及び大連汽船株式會社の取締役を兼ねるに至りて、君の事務的手腕の超凡絶倫なるを知らずや。願ふに南滿鐵道は帝國として支那及歐洲大陸に通ずる大動脈なると同時に、國力の發展上一大重要線なるは、多言を要せざる所なり、是を以て政府は大正六年八月を以て滿鮮鐵道の統一を實現し、而も朝鮮鐵道の全部を擧げて以て滿鐵會社の經營に移したり、

知るべし君が管掌の事務は、更に是れより一層の繁劇を加ふることを、然れども機才縱横にして多々益々辨する君の手腕は劇務の故を以て澁滞するものに非ず必ずや左斷右施して以て遺憾なく之が成績を現示すべきを、眞に秀才と謂つべし。母堂かね子と言ひ、夫人を秀子と言ふ、今や長男威夫氏、次男達雄氏、三男正雄氏、四男忠雄氏の數兒を擧げ共に秀拔にして家庭亦圓滿を以て聞ゆ。

松代 安太郎君

△出生地 大阪府 大坂市、北、堂崎濱、一ノ
△現住所 大阪府、北、堂崎濱、一ノ
△生年月 明治十七年十一月十三日

質 商

君は大阪の人、松代常七氏の長男にして、明治十七年十一月十三日を以て大阪に生る。四十三年二月、嚴君病歿せしを以て、家督を繼ぐ。代々質商を業とし、直接國稅二千數百圓を納むるを以て、同業者中著名の大家、屈指の資産家たり。

大友 赤松君

△出生地 東京府 東京市、四谷、谷、一ノ十四
△現住所 東京府、四谷、谷、一ノ十四
△生年月 明治元年十一月四日

質 商 九屋主

君は東京府渡邊子之助氏の長男にして明治元年十一月四日を以て生れ、同十七年九月先代大友せん子の入夫となり、家を相繼す、其人謹厚にして勤儉力行を旨とし、屋號を九屋主と稱して質商を營み、業務を取扱ふこと懇切鄭重、家運益々發展し、資産六十萬圓以上を超へ直接國稅千餘圓を納さむ。

山本悌二郎君

△出生地 新潟縣
△現住所 東京三田三ノ二
△生年月 明治三年一月十日

衆議院議員 臺灣製糖株式會社專務取締役 臺灣倉庫株式會社取締役 正七位 勳四等 ドクトル オブ ヒイロンヒキ



豐富なる財力の基礎の上に立ち、該博なる學識を抱き、天賦の才器を政界及實業界に縱横無碍に傾盡するは、君の獨特の武者振りにして、未だ敗を知らざる順境の寵兒なり。潮風北海を嘯みて滄波漢々此に充然たる一孤島あり、佐渡と云ふ日蓮曾て此に獨創の自觀を説けり、而して佐渡は無盡の金鑛を藏し、聖代の餘澤は普く卒土の濱に及び、中央議政壇上の勇將たる此君を出す、是れ孤島に於ける一の奇蹟たるを失はざるなり。

君は新潟縣の人山本桂氏の二男にして明治三年一月十日を以て佐渡國佐渡郡真野村に生る、夙に東都に出て獨逸協會學校に入り獨逸語學を專攻す、十九年奮然獨逸に航しハルレー大學及ライプチヒ大學に入り經濟並に農學を修む、留學八年業成りてドクトル、ヒイロンヒキの學位を受け歸來宮内省御用掛を命ぜられしが幾何も無く第二高等學校教授に轉じ、三

十四年四月官を辭して實業界に投じ、日本銀行監査役となる尋で臺灣製糖株式會社を起して其常務取締役に擧げられ、尙臺南製糖株式會社常務取締役に兼ね、後兩社合併せられ臺灣製糖會社成るや其專務取締役にとなりて今日に至る、先是郷里佐渡より擧げられて、衆議院議員となりて、明治四十一年以來累選せられて今日に至り、政友會所屬代議士として其絶倫なる才幹を振ひつゝあり、曾て在官中正七位に叙せられ又日露戰爭の功に依り勳四等に叙せられ旭日章を授けられたり。夫人をよね子と呼ぶ。

梅谷庄吉君

△出生地 長崎縣
△現住所 東京豊多摩、大久保百人
△生年月 明治元年十一月

エム、カシー商會主

頭腦緻密にして颯爽たる手腕を有し、我活動寫真界の牛耳を採る者を梅谷庄吉君とす、君は梅谷吉五郎氏の長男にして明治元年十一月を以て長崎に生る、夙に海外に遊學し、泰西の新智識を吸収し來りて實業界に入る君が炯眼は早く活動寫真の將來有望なるを看取し、合名會社エム、パチー商會を起し、フィルムを製造販賣し、兼て幾多の活動寫真館を經營して成功の緒に就き、四十四年株式組織として益々發展を試む、當時活動寫真界は群雄割據、同業者相搏つて其發達を妨ぐるを見るに忍びず、即ち合同の必要を認め、大正元年九月大日本フィルム機械製造株式會社の設立を圖り、君其取締役に擧げられ、後日本活動寫真株式會社と改稱し、益々營業の發展に努力したりしが辭してエムカシー商會を起し斯界に雄飛しつゝあり。

野澤一郎君

△出生地 栃木縣
△現住所 東京赤坂溜池、二
△生年月 明治二十一年五月十六日

諸機械設計製作並工業材料商店主 巴組工業所長

養蠶卵紙製造業者として栃木縣下に其名を擅にする野澤龜吉氏の長男を以て、明治二十一年五月十六日に栃木縣河内郡本江村に生れたるは、後年工業界に翱翔して幾多先輩の學士博士をして驚愕措く能はざらしめたる野澤一郎君とす。枿業芳を傳へて出藍の譽高く、明治三十九年真岡中學校を卒業するや、東上して東京高等工業學校に入り、機械科を專修すること三年、四十三年業成りて優秀の成績を以て校門を出づるや、秀才の名早く既に傳はりて君を聘せんとする者、三四にあらざる也。遂に東京瓦斯株式會社に入り、敏腕を振ひ、四十四年八王子瓦斯株式會社に轉じ、主任技師として貢獻する所頗る大なり、後辭して株式會社保阪鐵工所に入り、幹部社員として同社經營の苦難を救済し、幾難關を排除し得て、整理緒に就き、業務漸く繁昌せしは、全く君が不世出の才幹手腕に歸せざるべからず、偶歐洲の天地戰雲動きて有史以來未曾有の大戰爭の開幕せらるゝや、君機乘すべしとなし、遂に獨立獨行、化學工業用諸機械製作所を月島東仲通に開業し、植田技師を監督とし、製作に従事しつゝあり。而して巴組工業所を赤坂溜池に設け、工業に關する設計に應じつゝありといふ。而も君が才幹手腕の超凡精力の絶倫なるや、他に企畫中に屬する者、二三にして止まらずといふ。大正六年八月大阪市の有志は大阪化學精油株式會社を資本金百萬圓を以て創立したるが、是れ實に君が工學士内山彌左衛門氏と協力發明

せし所の米糠より石鹼及蠟燭の原料となすべき油の製造及び糠油出装置機を金五萬圓を以て譲受けて斯會社の設立を見るに至りたるものなりといふ。君漸く而立に達したるのみ、既に此大成功を齎せり。嗟前途畏るべき天才なる哉。夫人を喜美惣子といふ。令嬢澄子あり、嚴君龜吉氏、北堂よし子猶堂に在り。

松田精一君

△出生地 長崎縣
△現住所 東京、東橋、明石三三
△生年月 明治八年八月三日

株式會社東京築地活版製造所 株式會社十八銀行 名取締役 株式會社長崎貯蓄銀行監査役

君は長崎の人、松田源一郎氏の長男にして、明治八年八月三日を以て生れ、明治十五年九月、先代母堂よね子の後を相續したり。君夙に實業界に身を投じ、屢々流轉浮沈變轉なかりしが、後東京築地活版製造所の取締役に及ぶ、漸にして實業界に地歩を占むるに至れり。家に百萬の遺産あり、君の努力を以て之に大を加へたるより、今や百數十萬圓の富を成すに至れり、餘業を以て十八銀行取締役に、長崎貯蓄銀行監査役たりと。

夫人を静枝子といふ、廣瀬頼毅氏の三女にして賢貞の譽高く、長男一郎、次男次郎、三男三郎、長女よし子、二女ます子、三女喜多子等の數子あり。令妹さだ子は加福力太郎氏の令弟豊次氏に、同たね子は馬場喜久松氏の令弟誠氏に嫁せりといふ。

大森 成重 君

△出生地 茨城縣
△現住所 東京市橋本區新船松二
△生年月 萬延元年八月

石綿製品 機關塗料 石綿保溫劑製造販賣所 大森商會主



君は舊笠松藩士にして萬延元年八月を以て常陸國西茨城郡笠間町に生る、夙に東京に出で明治十八年石灰販賣業を開始し、尋で二十四年に至り業務の發展と共に之を合資組織と爲

し、爾來保溫劑販賣を專業とし以て今日の隆盛に到らしめたる工業界の成功者なり、生家は代々笠間藩士にして武藝に達したる名流なるを以て、君亦幼時より文武兩道に勵み、國事を以て東西に奔走し専ら勤王を鼓吹したりき、後明治維新となり廢藩置縣の世運と爲るや、炯眼なる君は蚤くも國勢の推移に觀察し、斷然志を轉じて實業に従事し、以て國家に貢獻する所あらんことを、乃ち前記の如く明治十八年始めて石綿を東京に於て販賣せり、爾來信用を重んじ、各方面への取引を擴張し業務の發展を期し、尋で保溫劑の販賣に熱心せり。今や君の主宰する大森商會の專賣とする保溫劑は、主として蒸汽機罐の蒸汽發散を防ぐ汽罐塗料の資料たる保溫劑にして、之が名稱を石綿保溫劑と稱し君が明治十八年以來獨力研

究に係りたる一大發明品なり、爾來帝國は工業の勃興時代に入り、各種の大小工場に於ては原動力用として蒸汽機罐の設備は、年と共に多々益々増加するに隨ひ、石綿の需用も亦甚だ夥きを加ふるに至れり、今需用の重なる個所を舉んず、陸軍部内にありては砲兵工廠にして、海軍部内は即ち各軍艦は勿論日本郵船會社、外國汽船、淀橋浄水場、各地炭礦場等是れなり、而も時局は我工業をして無限の發達を遂げしめんとするものあるを以て、君が商會の今後に於ける發展は更に刮目すべきものあるは勿論なり、人ご爲り眞摯直情にして恭謙に、人に交りて曾て城府を設けざるは、君の聲望の倍々隆然たる所以なり。夫人を房子と言ひ長男美廣氏を擧げ、掌中の珠玉として鐘愛しつゝありと云ふ。

島内 武秀 君

△出生地 高知縣
△現住所 高知市香美三島
△生年月 明治十三年三月二十二日

高知縣多額納稅者 大地主

君は高知縣士族島内武重氏の長男にして明治十三年三月二十二日を以て生れ、二十六年三月家督を相續す、其人謹厚にして氣品高く、識才共に秀で、郷間に尊敬せらる、廣大なる地所を所有し其資産六十萬圓を超へ、直接國稅二千五百圓餘を納む、母虎世子は同縣士族入交義門氏の長女、令閨政子は入交廣親氏の二女、令息武男氏、令女幸子あり、令弟武忠氏は分家し、令姉政衛子は同縣山本義孝氏の養子となり、令妹喜勇子は同縣山本陽氏に、同貞壽子は岡林隆彦氏に嫁せり。

栗屋 七郎 君

△出生地 山口縣
△現住所 東京市芝区三軒七郎
△生年月 慶應三年十二月六日

日本郵船株式會社營業部副長 勳六等

温良篤實なりと雖も自信堅固にして、事に臨み一步も譲らず、謙遜自から持して人を待つ寛なるも、曾て阿諛諂佞を以て迎合することなく、而も勤むる所に忠實にして些事も尙且等閑に付せざるに至りて、栗屋七郎君の如きは世間罕觀の紳士なり、案するに君は山口縣玖珂郡岩國町栗屋狂藏氏の長男として慶應三年十二月六日を以て生る、夙に岩國小學校を卒業するや、大阪に出で大阪英語學校に學び修學三年にして更に同志社に入學し、研鑽怠りなく學境大に進みたりしも、君不幸にして幼時嚴父を喪ひ、家計を擔當せざる可らざる境遇に在りしを以て、中途同志社を退き歸郷して岩國小學校、廣島中學校及廣島高等女學校等に教鞭を執り、以て家計を維持したりしも、時機一たび到らば飛躍を試みんとする思念は、造次顛沛も念頭を去らざるを以て、寸暇を偷み勉學に従事せり、曾々日清戰役起り尋で日本郵船會社は事業の擴張を謀らんとするの舉あるより、好機逸すべからずと傲し入社して營業部外國航路係に就任す、爾來六年の久しき精勤一日の如く而して明治三十二年に至り長江航路視察として出張し、同三十九年には北米合衆國に於ける海陸視察を命ぜられて、仔細に該方面を視察し、是れより重役諸氏の信用益々加はり、大正二年拔擢せられて營業部長に擧げられ、尋で大正三年濠洲航路の視察の命を帶び、精細なる調査を遂げ航路上に資益せること著大なり、是より先日露戰役の功に依り、勳六等に叙

大正人名辭典 (栗屋七郎) (吉村玉吉)

せられ、瑞寶章を授けらる、光榮ならすことせんや、君語學に精しく又頗ぶる海運事業に曉らかなり、且其人格高潔にして事務に忠實なり、君の郵船會社に勤むるは洵に其所を得たりと謂ふべし、今に到りて往年の事歴を回顧し來らば、必らずや感慨の油然たるものあらむ歟。夫人を愛子と言ふ、廣島縣人にして曾て同縣高等女學校附屬幼稚園の教師を勤めたる才媛なり、長男忠夫氏は大正四年早稻田大學理工科出身の顯才にして實に君として從弟なるも養ふて嗣子となせる人なり、養父母に仕へて孝順にして、今や東京京橋區月島小田電機工場主任技師として篤銳精腕の譽れ高し。

吉村 玉吉 君

△出生地 愛知縣
△現住所 大阪、西長堀通一ノ六
△生年月 明治二年一月二十日

鋼鐵商

君は愛知の人にして、亡石原平左衛門氏の五男として、明治二年一月二十日に生る、幼にして聰明、英邁を以て稱せらる。夙に實業界に入りて、名を成さんとするの志あり、修養を積み、經驗を重ね、著々として成業の途に進む。偶々吉村氏、君の敏捷にして堅實なる商才に感じ、迎へて養子となす實に明治二十九年六月なり、君の吉村家に入るや、乃ち蘊蓄する所のものを傾倒して、以て先代創業せし所の鋼鐵商を營む。忽ちにして日露戰争起り、君に成功の機會を與へ、更に歐洲の大亂生じて、君は思ふが儘に活躍して、巨利を贏得するを得て、今や動産だけにても、五十萬圓を有するに至れり亦盛なりといふべし。

安藤 謙介君

△出生地 高知縣
△現住所 東京、住原、大崎、下大崎
八九電芝三三九七
△生年月 安政元年正月一日

横濱市長 正四位 勳三等



君は舊高知藩士安藤恒之助氏の長男にして安政元年正月を以て土佐國安藝郡羽根村に生る。幼名を仁太郎といひ、穎敏學を好み快辯以て人を驚異せしむ、明治五年東京に出で露國

宣教師の經營せるニコライ塾に入り露語を研鑽し、七年九月東京外國語學校貸費生となる天稟の材能忽ち全校生徒の牛耳を執り、八年七月教授と衝突して退學し中江篤介氏の佛學塾に入り佛語を修む、一日勝安芳伯を訪ひ時事を談論し、伯は君の才幹を認識して時の外務少輔森有禮氏に紹介し外務省に出仕せしむ、九年四月露國コルサコフ領事官一等書記見習となり、十一年二月聖彼得堡公使館在勤を命せられ十二月外務省三等書記生となり十四年其職を辭し同國に滯留し十六年八月再び外務省書記生となり、餘暇を以て大學に入り行政學を修め十八年二月辭して歸朝す、十九年三たび外務省に出仕し二十年七月名古屋控訴院檢事に任せられ二十三年岐阜地方裁判所檢事正に拔擢せらる。爾來前橋熊本横濱各地方裁判所檢事正に歴任し、二十八年十月朝鮮王妃殺害事件の爲め特に同

地に差遣を命せられ、廣島疑獄の起るに及び能く其職責を竭して名聲あり。二十九年四月富山縣知事に任せらる。由來其地河川無數治水に苦む、君治水工事を完成して令名あり、三十年四月非職となりしも、翌三十一年再び千葉縣知事に任せられ、同年八月板隈内閣成るに及び非職となり、成田火災保險株式會社專務取締役社長、植田無煙炭礦株式會社社長に推薦せられ、三十六年三月富山縣高岡市より衆議院議員に當選し、三十七年愛媛縣知事となる、四十二年休職となり、四十二年韓海漁業株式會社を創立して其社長となる、君我對清貿易は海産物を以て主要品たるに留意し韓海漁業の有望なるや其遺利を收め清國に輸出せんことに努め社運頗る見るべきものありしが、四十四年八月西園寺内閣成るに及び、長崎縣知事に任せられ、大正元年十二月休職となり、大正二年三月新潟縣知事に任せられ、三年四月大隈内閣成りて退官し七月横濱市長に就職し、現に其職に在り、君の各地方に令尹たるや毀譽褒貶交至り政友會及其一派は吐哺握髮以て君を歡迎し非政友派は專横の處置ありとして之を攻撃す、君其間に處し泰然として動かさず、果敢敢行以て治績を擧ぐ、横濱市の人士は市長の缺員に際し其候補者を求むるに或は甲を擬し、或は乙を擬し、其適任なきに苦みしが、君の閑地に就きしを見て、衆議一決市會に於て全會一致以て君を迎へたるは、以て君の榮譽とすべし、君自愛加餐以て市の爲めに功績を奏するに勵むる所あり。

夫人きく子は粕谷有鄰氏の長女にして、慶應三年三月の出生たり。松岡銀之助氏の長男謙治氏、粕谷陣三郎氏の長女富美子の二子を養ふて子となす。

齋藤 嘉兵衛君

△出生地 大阪府
△現住所 大阪、本町二ノ九
電長本局一七四
△生年月 文久二年八月十日

漆器商 桔梗屋主

大阪市の漆器商桔梗屋は取引最も廣くして業務盛大、市内屈指の大商舖なり、信用極めて高く、其名を四方に知らる、而して齋藤嘉兵衛氏は桔梗屋の當主にして家に巨産を藏し、有力なる實業家たり、齋藤嘉平次氏の長男にして文久二年八月十日を以て生れ、明治十六年四月家督を相續す、業務に勵精にして商才に富み、家運益々隆昌なり。

中村 再造君

△出生地 福岡縣
△現住所 京城、本、二
△生年月 安政二年十月五日

株式會社京城銀行 日之丸水産株式會社 滿洲殖産株式會社各取締役 京城商業會議所特別議員 京城十友合資會社理事

君は福岡縣の人、中村清五郎氏の二男にして、安政二年十月五日を以て生れ、明治三十八年八月、分れて一家を創立せり。君夙に實業界に身を投じ、種々計畫する所ありしが、明治十七年、大阪丸三銀行釜山支店員として渡鮮せしに、偶々十七年の變亂に遭遇し、同支店を閉鎖するの餘儀なきに至る君其殘務整理の任に當り、一時歸阪したるも十九年九月、同行を辭し、再び渡鮮し、京城に於て雜貨商を營む。漸次發展を遂げ、後質店を兼營するに至り、愈々盛大に赴く。殊に日清戰爭に際し、土地の買占を行ひたるに、目論見悉く圖に當

り、巨利を博せり。爾來陸軍御用達、貿易商等に從事し、次第に産を加へ、遂に百萬長者と稱せらるゝに至れり。而して方今京城銀行、日之丸水産及滿洲殖産會社の各取締役たるを以て聲望益々加はり、曩に京城商業會議所特別議員に擧げられ、現に其任にあり。

紀藤 閑之助君

△出生地 山口縣
△現住所 山口、厚狭、字部
△生年月 明治二十一年十一月七日

山口縣多額納稅者

君は同縣士族紀藤宗介氏の長男にして、明治二十一年七月日を以て生れ、同二十二年三月家督を相續す、其人品格高く重厚にして信望厚く、曾つて村會議員、縣會議員として其面目を發揮したることあり、現今村農會長として農事の改善發展に盡力し、又信用購買組合長として確實に機關を運用し、便益を與へつゝあり、實に有用の材器として社會の信敬する所たり。

坂本 茂三衛門君

△出生地 茨城縣
△現住所 茨城、稻敷、古渡
△生年月 嘉永六年十二月八日

茨城縣多額納稅者 大地主

茨城縣稻敷郡の富豪として知らるゝ者を坂本茂三衛門君となす、君は先代茂三衛門氏の長男にして、嘉永六年十二月八日を以て生れ、明治三十八年八月家督を相續し、前名市次郎を今の名に改む、世々地方の大地主にして勢力信望隆々たるものあり。

津田勝五郎君

鐵鋼販賣業 大阪製鐵株式會社取締役社長

△出生地 愛媛縣 津田勝五郎
△現住所 大阪西區立濱町北通六ノ二八 電話自九〇五至九〇九
△生年月 安政二年正月二十二日



君は愛媛縣の人村上喜市氏の六男にして、安政二年正月を以て伊豫國松山市松屋町に生る。明治十二年京都市津田美知子と婚を結び其家名を襲ぐ。十三年上京し、川崎正藏氏の經

營せる西洋船具店及築地造船所に入り、勤続六年の後神戸に到り川崎造船所に入り、倉庫課長となる、二十一年辭して英人イ、エツチ、リネール氏と共同出資して、鐵及船具類の輸入販賣業を開始し、二十二年獨立して神戸榮町に店舗を構へ鐵船具及海軍用達業を創め、精勵其業務に従事すること六年漸次發展して、營業所を大阪西區立賣堀北通に移し、神戸、吳、佐世保其他樞要の地に支店を設立し、三十年用達業を廢業して各地支店を閉鎖し、鋼鐵販賣のみを營業とし、益隆運を呈し、以て現時に至り關西に於ける斯界に名聲を知られ、方今直接國稅三萬二千餘圓を納め、餘業大阪製鐵株式會社取締役社長たり。

令閨美知子、長男與一氏、長女喜久子の二子あり、與一氏は小玉彦市氏の二女つるよ子を娶り、勝之助、隆造、慶子の

神田乃武君

貴族院議員 東京高等商業學校名譽教授 從三位勳二等 男爵

△出生地 東京府 豊多摩中野、三三二
△現住所 東京府 豊多摩中野、一一一
△生年月 安政四年二月十五日

謂迄もなく英語は世界的通用語にして、之が普及發達は我國刻下の急務なり、然ども其發音の困難なるのみならず、文法の變化は獨佛のソレに比して多種多様なり、然るに我高等商業學校出身者の英語が重きを實業社會に做すは萬人の認むる所誰か之れが教鞭を執りつゝある乎、男爵神田乃武君即ち其人にあらずや、然り神田君は我英語界のオソソツチにして即ち正に斯界の泰斗たり、案ずるに君は幕臣松井永世氏の次男にして、安政四年二月十五日を以て築地小田原町に生る幼にして慧悟敏活、出で、正三位勳二等男爵元老院議官神田孝平氏の爲めに養はれ、而して明治四年森有禮子の海外に漫遊するや、從て米國に航し、留まりてアマスト中學に入り、盤雪の勞を積むこと三歳、業卒へて直ちに同大學に入り、明治十二年拔群の成績を以て卒業しバチユラー、オヅ、アーツの學位を得たるも大成を將來に期する君は尙以て足れりせず、更に進むでウエスト、フヒード師範學校に於て一學期間教育學を修め、同年十月を以て歸朝せり、恰かも好し當時大學豫備門雇教師某氏の歸國に會せるより、君其後任として大學に聘せられ、英語を以て地質學を授け、後文科大學講師に兼任を命ぜられ、専ら羅典語の教授に當れり、爾來大學の教鞭を執りつゝありしが、明治二十年アマスト大學よりマスター、オヅ、アーツの學位を贈られ、二十五年には高等商業

中野平彌君

新潟水電株式會社專務取締役

△出生地 新潟縣
△現住所 新潟、西蒲原、中野小屋
△生年月 嘉永二年二月二日

三子を挙げ、喜久子は入夫養子正厚氏と共に分家せり。
新潟縣下中野小屋村の草分の舊家にして、百萬長者を以て稱せらるゝ中野平彌氏は、嘉永二年二月二日の出生にして、中野安衛門氏の長男なり。曾て精米所、鐵工所、製絲所等を經營したることあり。君の聲望と信用と、而して事に當りて誠直にして熱心なるを以て皆相當の成績を挙げ得たるも後之を廢して、明治四十年に至り、新潟水電株式會社を創立し、君自ら專務取締役として、經營の全權を統べ、業績倍々盛なりといふ。

中島仙助君

群馬縣多額納稅者 生絲商

△出生地 群馬縣
△現住所 高崎、中紺屋
△生年月 明治五年八月十二日

往年高崎市會參事會員として、市政の革新に努力し、令名噴々たるものありし中島仙助氏は、群馬の人にして、亡中島仙助氏の二男なり。幼名を十次郎といひ、聰明英敏を以て聞ゆ。二十七年十二月、家督を繼ぐに及び、仙助を襲名す。代々生糸商を業とし、方今直接國稅約二千圓を納むるを以て縣多額納稅者の第一人たり。其地方實業界の權威者として、遍く郷黨の敬重する所となる。而して積富百萬を起ゆ。

學校教授に任せられたり、是に於て多年志望せる理想の一部を英語教授法に實現し得るに至りたるが、次で外國語學校の設けらるゝや舉られて其校長を兼ね、三十三年思ふ處ありて英獨兩國に航して視しく語學教授の方法を視察し、歸來元職に復するや間もなく學習院教授を兼攝し、銳意以て今日に到れり、嗚呼前後四十有餘年間、英語及外國語に貢獻すること誰乎又神田君の右に出づるあらんや、國家は斯界の泰斗を以て多大の尊敬を拂ふもの寔に故なきに非ざる也、君今や居を城西中野町に卜し、靜閑幽邃の地に在りて英語界の爲に大いに企畫する所あらんとす。

夫人を熊千代子といふ、男金樹、同八尺、同十拳、同盾夫の四氏、令女英芝子、百合子、孝子、文子の諸氏あり、英芝子は法學博士河津暹氏に、百合子は男爵高木兼寛氏次男醫學博士高木兼二氏に嫁せり、二男八尺氏は高木秀臣氏長男亡甚平氏の夫人きみ子の養子となれり、而して其家庭圓滿にして和氣一堂に溢るは豈翅君一家の幸慶のみならんや。

遠江源兵衛君

質 商

△出生地 大阪府 高津、四番
△現住所 大阪府 高津、一〇五九
△生年月 明治三年七月二十五日

君は大阪の人、先代近江源兵衛氏の長男にして、明治三年七月二十五日を以て生れ、十六年九月、家督を繼ぎ、同時に襲名せり、代々質商を營み、市内屈指の資産家にして、直接國稅約四千圓を納むるの盛業を極めつゝあり。君資性濃厚篤實にして、公共公益を重んじ貢獻する所頗大なるを以て、遍く信望を有すといふ。

(藤井善繼(泉孫三郎)大矢幸八)

藤井善繼君

藤井商會主

△出生地 東京府
△現住所 東京、芝原、蒲田
△事務所 芝原、本芝、一ノ三
△生年月 電話、一八四三
明治二十年五月



賞勳局書記官とし

て盛名噴然たる藤井善言氏は、君の嚴君にして明治二十年五月を以て芝原田町に生る。幼少にして獨立の志厚く、側僮大志あり。明治三十七年麻布中學校を卒業し、進んで東京外國語學校佛語科に入り、四十三年優等の成績を以て卒業するや、偶横濱山下町フツブルブランド商會の招聘する所となり、敏腕を振ふて店務に従ひ、次第に信用を加へて、大正元年東京麹町有樂町に同支店を設けらるゝや、其支店長に拔擢せられ益々快腕を揮へり、而も君が志や遠大にして、他の願使に甘せず、獨立特行せんとするの切望を有するや久し。遂に大正二年斷然職を抛ちて、深川佐賀町に於て獨力機械油の卸賣を開業せり。既に學植豊富にして信用濃厚なるあり、加ふるに經驗深大なるを以て、忽ちにして店舖狹隘を感ずるの盛大を致し、大正五年に至り現住所に轉住して、益々發展を示しつゝあり。曩に化學應用の油を製造せしに、時好に適し賣行佳良なりといふ。大正五年十二月砲金眞鍮鑄物製造工場を、府下南品川末廣町に設け、令弟藤井善友

小笠原三九郎君

株式會社臺灣銀行廣東支店長

△出生地 愛知縣
△現住所 支那、廣東、臺灣銀行廣東支店長宅
△生年月 明治十八年四月五日

君は愛知縣の人にして明治十八年四月五日を以て三河國幡豆郡花明村に生る。家地方の素封家を以て聞ゆ。君幼にして鵬志あり、小中學校の科程を郷里に於て履修するや、更に進んで東京帝國大學に學び、明治四十四年に至り、同法科大學法律學科を卒業し、法學士の稱號を受けたり、同窓多くは官場の人たらんことを欲し、或は判檢事となり、行政官となりしと雖も、君の志の超凡なるや、徒らに權勢に阿りて官祿を食むを欲せず、遂に實業界に志し、同年を以て臺灣銀行東京支店に奉職せり、君の事に當りて誠直誠心、熱誠を傾倒して一身の利害を顧慮せざるを以て、多くの銀行員の如く輕佻浮華の態なく、而も小心翼翼として繩墨を脱せざるが故に、盛評行の内外に高く、重役の信任忽ちにして一身に集まる。大正二年十月遂に東京支店支配人代理の顯職に就けり、時に君僅に三十に過ぎず、同窓の舊友愕目して君の成功の迅速なるに驚嘆せり。元より君の志の遠大なるや、區々たる眼前の小榮位の如きは、深く顧みる所なしと雖も、重役の拔擢に會ふては誰乎感奮せざらんや、益々熱心業を執り、其職に従へり、茲に於て乎信用倍々厚く經驗愈々深くして、大正五年九月を以て一躍廣東支店長兼支配人の重任を命せられたり。夫れ信用の鞏固なる銀行員として、外國人を對象とする支店の經營に當る、責務の重大なるや元より其所なり、而も君の手腕才幹は、一難を経、一難を加ふるに當り、益々才氣激湧

(小笠原三九郎)小出收(相馬伊右衛門)

氏をして監督せしめ、輸出品其他會社等の委託品の製造に當り。又成績良好なり。夫人かめ子貞淑の稱あり。嚴父善言氏、母堂藤子猶健全にして、一家春風爛々たり。

泉孫三郎君

△出生地 神奈川縣
△現住所 神奈川、足柄下、小田原

醬油醸造業

嚴君彦兵衛氏は足袋の製造販賣を業とし、母堂之を扶けて即ち夫妻協力して克苦精勵、以て貨殖に努め、漸にして、巨萬の富を成せり。君の遺産を繼承せるは、明治初年の事に屬し足袋製造を廢して、醬油醸造業を創め、粒々辛苦を重ね、嚴親が血涙の結晶とも見るべき遺産をして、益々増大せしめんことを計る。至孝といはざるべからず、嚴親の立志傳中の人たるは勿論、君の苦心經營の努力に至りては、正に輕薄なる時代人心に、好刺戟を與ゆるの資料たらずんばあらず。

大矢幸八君

△出生地 大阪府
△現住所 大阪、西、江戸橋北通二ノ
△生年月 二一、電話、土佐堀一、九〇六
明治十四年二月二十四日

共立物産株式會社監査役

大矢幸八君は大坂の富豪なり、君は大坂府先代大矢幸八氏の長男にして明治十四年二月二十四日を以て生れ、同三十八年十一月家督を相続す、大坂西煙草合名會社社員にして煙草商を以て知らる、方今共立物産株式會社の監査役となり、同社の内外に重きをなせり。

たるや論なき也。嗚呼君の前途や多幸多福なる哉。

小出收君

△出生地 島根縣
△現住所 〇、電話、小石川、一九九六
△生年月 慶應元年十一月廿六日

株式會社内國貯金銀行專務取締役 日本徵兵生存

君は岡山縣の人小出昇氏の四男にして慶應元年十一月二十六日を以て島根縣石見國濱田町に生る、後岡山縣久米郡に移る明治二十二年優等を以て慶應義塾を卒業し、出で、山陽新報主筆に招致せられ後更に信濃毎日新聞主筆に聘せられ、明治二十八年甫めて三井銀行に入りたるが、爾來各會社を歴て同卅九年東京信託株式會社の創立に力を致し成立の後同社の主事に擧げられ、後に同社の分身たる内國貯金銀行を擔當し今日に及ぶ。

夫人琴子との間四子あり。

相馬伊右衛門君

△出生地 大坂府
△現住所 大阪、東、上福屋
△生年月 慶應元年七月

資産家

大坂市の質商にして富豪を以て知らるゝ者を相馬伊右衛門君とす、君は先代相馬伊右衛門氏の二男にして慶應元年七月大坂に生れ、明治十七年家督を相続す、其人堅實にして業務に熱心懇切を極む、店舗最も繁昌し、資産は増加の一方にして家連日に月に隆昌なり、經營の才幹超凡にあらずんば安んぞ能く斯くの如くなるを得んや、資産は百五十萬圓を算し社會上有力の位置を占め、又財界に勢力あり。